明治三十三年三月五日

女鑑

第二百號

臨時發刊

女鑑第二百號發刊に際して

回顧すれど、十年餘りのむかし、世に、歐化主義などいへる奇異しきことぞも、專行はれて、六十餘州、殆、風靡せざるは、なきばかりなりき。當時の人の心には、すがた妙なる富士の高嶺も、にほひゆかしき吉野の花も、うるはしからずなりもてゆき、よろづに、西洋風をのみ喜びて、都人士の間には、此所の夜會、彼所の舞踏會など、彌、盛に行はれ、女學生といはるゝ人どもは、女權擴張の爲とて、しば〳〵女子演說會といふものを、所々にもよほし、女權と名くる雜誌をさへも發行するに至りき。我が女鑑は、かゝるさまなる時世に生まれ出でゝ、我が國には、天地分かれし初より、麗しく秀でたる女の道の、自、備りにたれば、ます〳〵、研き修めて、ますみの鏡いよゝ明ならしめ、世界の文明に、特殊の光をこそ添ふべけれど、只管に、論ひたりき。されば、世に、女鑑は、女大學主義の雜誌よといひなされぬ。女大學主義と

て、強に、すつべきまはあらぬを、只、頑なりとのみあさけられ、なほ、さま〴〵の非難も、いと繁くおこりしかど、一筋に、この主旨を貫徹せむものをと、朝夕に、たゆみなくふむけみきつるに、幸に、同意の人々、日に月に多くなり、雪中の梅、春を待ち得て、ふく朝東風に匂ふこのころ、第二百號を發刊するに至りぬ。

今や、我が國、内外の趨勢は、百物、趣を異にして、殆、昔日のさまを止めずなりぬ。女鑑の主旨を唱導する必要も、愈、益、多くなりぬ。本來女鑑の主旨は、この國家の、神聖なる歷史の精神に基づき、特殊なる國民の資性と相終始するを期するが故に、國運、愈、發達すれば、この主旨も、亦從ひて、愈、明ならざるべからざればなり。

況や、近來、社會の道義心は、甚く頽廢し、國民の元氣は、益衰耗せり。この人心を矯正し、世道を挽回せんは、先、各人の家庭を正しくするより始ざ

るべからず。次代相續者の養成より始めざるべからず。その家庭和樂の源泉たり、幼兒敎育の主任たるものゝ智德奬勵の要務は、實に、昔日に倍蓰せり。女鑑のつとめ、重く、且、大なり。冀くは、大方諸媛の協力により、爾後、一層の力を盡して、所期を盡すことを得む。いさゝか今昔の感を記し、併せて、本誌の任務とする所を述べて、この册の端書とするになむ。

明治三十三年三月

編者識

女鑑第二百號臨時發刊

目錄

箕曲瀬の義女



如何にして女子の品位を高むべきか

緒言

近時、女子敎育に關する注意は、世人一般に漸くその厚さを加へ、隨ひて、家庭の改良といひ、女子の交際といひ、集會の矯風といふが如き、頗る緊要なる諸問題の攻究せらるゝに至りたるは、甚、慶ぶべきことなり。而して、此等諸問題に相環聯して、常に歸結を同うする一點あり。そは、如何にして我が女子の品位を高むべきかといふことなり。是、まことに根本的の問題にして、女子敎育を云爲するものゝ、須らく先づ明らかにし置くべきことたり。吾人、聊、こゝに鄙見を陳じて大方に質す所あらむとす。

男女の尊卑といふことにつきて

根本の相異

我が國從來、女子問題に關する議論は、千種萬別なれども、其の根本に於いて、差別の生ずる所を詮ずれば、専ら男尊女卑を主張するものと、男女同權、若くば、女尊男卑を主張するものとの二者に歸す。即ち、この根本の相違によりて、諸多なる枝葉の議論は紛出せるものなり。而して、この問題は、單に學者論客の議論として、著書、或は新聞雜誌等に於いて、社會の表面に喧しきのみに止まらず、深く各人の思想の奥底に潜みて、未判斷するに至らざる者、甚、鮮少ならざるが如し。されば、一切の女子問題を論ずるにわたりて、先づ決すべきことは、男尊女卑か、將、同權かといふの點にあるべきなり。

既定の議論

男尊女卑といひ、男女同權といふことを、男女の體力、及、智力の差異より斷定せむとする議論は、世上已に甚乏しからず。吾人は寧ろ之を既定の議論として、

こゝには、試に尊卑といふことの意義を究めむと欲するなり。

尊卑の意義

世の男尊女卑を云々する者の言を聞くに、男子は、一概に女子を壓制し、女子は、また、非理無法に男子に屈從すといふことの意義に用ゐらるゝものの如し。この意よりいふときは、尊者とは、人道に背き、物の理非をも辨へず、單に他を壓伏制抑する者の謂にして、卑者とは、人間としての完全なる資格を備へず、專、他人の意のまゝに屈從する者の謂なるが如し。是、果して、眞正に尊卑の意義を盡せるものなるか。

強者と弱者

西洋諸國に於いては、中古以來、貴族は平民を虐げて、跋扈専横至らざる所なくその國王といふものも、萬人を以つて一人に奉ずるといふ成立にして、遂に、幾回の革命戰亂を重ねて、今日に至りたる程なれば、その社會に於ける貴賤上下尊卑といふ語は、自ら、強者と弱者との意義を含有して、尊貴なる者といへば、他を壓制する者、卑賤なる者といへば、他に屈從するものといふが如き感想あ

らしむるは、歴史上自然の習慣なれば、尊卑の意義、自ら、斯く解せらるゝものなるべし。

長者幼者

我が國にては、天地開闢以來、君上は天神の宏徳を體し、天神に代りて、萬民を撫育せさせたまひ、累世皇家一統の尊族は、君上の御仁政を輔けまつりて、萬民を撫育したまふことは、慈母の赤子に於けるが如く、君上は蒼生を以つて大御寶と稱したまひ、萬民は君上を仰ぎて大御親と稱へまつれり。されば、我が國民の尊者に對する感情は、甚、他國人に異なりて、尊者とは、卑者を導き賤者を撫育するもの、卑者とは、尊者の示導に順ひて、その分を盡すべきものと思惟せられたるなり。その間、毫も强者弱者といふが如き、殘忍なる意義を含むことなくして、寧、長者と幼者との意義に近きもののあるなり。

武士と情

中世以降、武門、權勢を專にする時代に至りても、武士道の本旨とする所は、「まことの武士は情を知る」といふ義を存して、尊者は、常に慈悲を主とすべき風習あ

りしなり。

國体上の解釋

かくの如く見來れば、尊卑の意義に、厭ふべきところなきのみならず、その間、自ら、親愛の意を含めるものあり。是れ、實に我が國體上より解釋せる尊卑の義にして、吾人は、この義に於いて、我が男尊女卑の風習を維持することを喜ぶものなり。

多數の實際

今日の我が社會に於いて、世人の唱導するが如き意味の男尊女卑の弊風は、間々之なきに非ずと雖も、その多數の實際に於いては、女子の地位は、同權論者の唱ふるが如き、卑屈悲むべき境遇にのみ在るものとも思はれず。男女同權の國、若くは、女尊男卑の國に於いても、その内面の實際に於いては、却つて、最厭忌すべき意味なる男尊女卑の風を現出せるものも、亦、少しとせず。要するに、夫婦の間は、和親を主として、權利を主とするものに非ず。事々しく同權云々を主張するは、家庭に温情なきを表白するを覺ゆるなり。

先天的秩序

太古、諾冊の二尊、磤馭盧嶋を國の御柱として、右より左より旋り會ひたまひし時に、陰神先づ唱へて、喜哉可美少男とのたまへり。陽神悦ばずして、のたまはく、吾は、是男子なり、理、當に先づ唱ふべし。いかにぞ婦人のかへりて言先つか。事すでに祥なし。宜しく以て改め旋るべしと。こゝに、二神却りて更にめぐり遇ひたまひぬ。

この事蹟の如きは、我が日本人種の太初に於ける男女間の順序を窺ふに足るものなり。以來、幾百年を重ねて、この太初の思想を繼承せる我が女子の思想は、殆先天的に、夫唱婦隨の義を尙べるものなり。然るに、今日に於いて、急遽に之を打破して、同權思想を移植せむと欲するは、その効果如何なるべきか。假令、男女同權論が、議論上に於いて全勝を得るとすとも、果して、現今の我が日本女子は、その論旨の通り實行し得るものなりや否や、甚、疑はしきことなり。

夫唱婦隨

夫唱へて婦隨ふといふことは、日本丈夫の剛健と敷島乙女の順良とを備へて、何

れの方面より觀るも　櫻花國人兩性間の純美を表示せるものなり。我が古典なる遺範には、前掲諸冊二尊の御事蹟はあれども、他に、男尊女卑などいへる文字、背つて有ることなし。若し、强ひて、この尊卑の文字をあてはめむとならば、その本旨は、即ち夫唱婦隨と同一に歸すべし。若し、此の位地を變更せむとならむ、婦唱夫隨となるか、或はまた、夫婦同唱となるの外なかるべし。一切萬事、夫婦同唱、いかにして家庭の秩序を整ふるを得むや。

名義上の空論

要するに、男尊女卑といひ、或は男女同權といふ問題は、現在の女子の品位を高むる上に就きては、世人の論ずるが如く、緊急なる根本問題にあらずして、寧、名義上のみの空論に過ぎざるべきなり。

女權論

女子の對抗

當世風に女子問題を論ずるものは、概、皆、女權のことを喞々せざるものなきが

如し。その言ふ所の要旨は、我が國古來の風俗は、男子獨り權威を弄し、放縱自恣、毫も撿束する所なきにも拘らず、女子に對しては、壓制拘束、至らざる所なく、殆、人間として遇せざるに至れる者あるは、人類社會上、不道理を極むるものなれば、今日の女子たるものは、奮つて此の弊風を改めむがために、男子に對抗せざるべからずといふに在り。この論旨の纏まりたる著書として見るべきものは、福澤諭吉氏の女大學評論及新女大學なりとす。

新女大學

同書の論議を通讀すれば、徹頭徹尾、我が國の男子の不德惡行を指摘し、女子を挑發して、我が從來の女子敎育は、偏頗非道にして、結局、男子の惡德を奬揚する外、其の間、一の正義を認むることなしと云ひて、女子自ら勇往猛進して、女權の擴張に從事せむことを勸告せるものなり。その論旨、一應の理なきに非ずと雖も、我が國現今の男子は、福澤氏の說の如く、一切不義非道の人のみにして、我が國の家庭は、悉く敗德不美の者のみなるべきか。偶、都府の中流以上なる男子の擧措と、家庭の狀態とに、甚しき欠陷あるを捉へ來りて、如此危激の言辭を

以つて、年少女子を激發するは、世道上、甚、危險のことゝいはざるべからず。吾人は、當今の二三都府の風俗と、紳士の家庭とを以つて、直に地方質撲なる良家の家庭をも、皆斯の如しと推斷して、立論することの、甚、早計なることを信ずるものなり。

片落

且、夫れ、女大學評論の文字は、終始舊女大學の文字が女子を訓誨することにのみ嚴にして、男子の不行狀を戒むることなく、甚、片落なることを痛言せりと雖も、是れ女大學とは、其の名の示す如く、單に、女子を訓誨せむが爲めに、貝原翁の編述せられたるものにして、男女兩性に讀ましむべき社會敎育の論說にあらず。その訓言の、自ら片落なるは、當然のことなり、女子を訓誨せむ爲めの訓言なれど、女子に嚴なるは勿論のことなるに、頻りに男子の不心得を罵倒せるのみにては、女子の敎訓となるべき謂れ無し。吾人は、福澤氏一流の論者の、此の見易き道理をも判別せずして、叨りに古人の書を罵倒せるは、甚、首肯し得ざる所なり。

家庭の實狀

抑〻、我が國今日の家庭に於ける女子の地位は、實際、甚、強大なる勢力を具有して、男子の威壓の下にのみ跼蹐せるものに非ず。實際の事情を云はゝ、婦は夫に支配されながら、また、夫を支配せるは、大かたの家庭に於ける實況なりとす。されど、偶、小數の惡德男子ありと雖も、今日に於いて、特更に女子の權利を云々して、平地に波瀾を生ぜしむるが如きは、寧、無用のことなりとす。

女權振暢の順序

當時多數の男子に撿束なく、動もすれば、家庭の汚瀆を表白するが如きことあるは、事實なり。この事實を憂へて、矯正せむとならば、宜く男子をして、自ら之を反省せしむることを勸奬すべきなり。特更に、女子を挑發して、家庭内に權利問題を提起して、不和を增さしむるが如きは、事の宜を得たるものにあらず。吾人は、女權擴張の順路は、社會上、男子の品行を奬勵するを先とすべくして、女子を煽動するは、其の正徑にあらざることを信ずるものなり。

教訓としての立言

東西倫理の特色

西洋學者の東洋倫理を難ずるものは、概皆、上者に付するに無限の權力を以つてし、下者に向ひては、絶對にその權利を奪へる不都合を鳴らさゞるなし。然れども、是れ皮相の見解なり。そも〳〵、東洋倫理の特色は、兩者の一方に對して、各別に教訓を與ふる所にあるなり。たとへば、嫁と姑とを説諭せむには、嫁は嫁、姑は姑と坐敷を別にし、又、時間をも差へて、物靜かに膝を交へて、懇に説得することを旨とせるなり。されば、嫁に對しては、飽くまでも、姑の敬ふべく親むべきことを教へ、姑に對しては、嫁を愛し慈みて、温なる人情を以つて接すれば、他人も吾が子と同樣になるべしと勸むるものなり。事情、かくの如くなれば、その間、自ら、一方に對して、片落とも見ゆべき沙汰あるも、亦、當然のことなるべし。然るに、西洋の倫理説は、嫁と姑とを一所に呼び出して、道理上より雙方を對決せしむるが如き看あり。此の場合にては、專ら、道理によりて判決するも

のなれば、片落の沙汰もなく、甚、立派なる體裁を備ふるなり。去りながら、大かたの人間は、表面の談示よりも、むしろ別間の熟談の方に効顯あるものにして、特に、感情に動かされ易きは、我が國人の常情なり。今世の倫理學說は、其の體裁の完美なるにも拘らず、その効顯は、動もすれば、片落なる在來の敎訓に及はざるところあるも、是が爲ならむ。

東洋思想の妙處

雖君不君、臣以不可レ不レ臣といふは、壓制の極なりとて、西洋學者の常に呶々する所なれども、その一方に於いては、天立レ君者爲レ民也といひ、或は、聞レ誅二一夫紂一未レ聞レ弑レ君といふが如き痛利の言を以つて、王者を戒むるものあり。すべての敎訓は、概皆、双方別々に設けらる。是皆、別室說諭の主意に出づるものにして、畢竟、東洋倫理思想の妙處は、兩者の界目を劃然と限らずして、双方對坐の間に相當の餘地を存して、一種の妙味を具ふる邊に在ることなり。

敎訓と法文

女權論を唱ふる者、多くは、舊時の女訓は今日の民法に抵觸することを呶々せざ

るなし。然れども、是れ教訓の文字を死讀するが故なり。そもそも、法令の文字は、その意義の範圍性質を、最、明瞭に限定して、少しの融通を許さず。時に應じ、處に依りて、變造改定するを要するものなり。教訓の文字は人性の自然に基き、時と處とに論なく、自在に活讀應用すべきものにして、兩者の性質、自ら同じからず。さるを、我が舊時の女訓の文意、民法に抵觸すといふは、教訓の立言を死讀するものなり。苟も、活用といふことを知らざれば、釋迦の言も、孔子の言も、耶蘇の言も、古來の賢哲の言も、皆時世に適せざる反古たるべし。

情と義

世人、動もすれども、教訓の立言は、人情を本とすべし、人情に從はざる教訓は、人に虚僞を强ふるものなりといへり。是れ、一應の理あることなれども、その人情といふことは、最、潜心を要することなり。人間萬事、情にのみ從ふときは、人道の立たざること多し。情は本來私になり易き性質あれども、之に對しては、常に、義の制裁を重ずる念慮なかるべからず。嫁と姑とは、本來他人の集合なれども、之に教ふるに、實の親子の如く仕へよ慈めよといふは、人情に反すとの論を爲すも

のありといへども、吾人は、嫁姑の間を、單に人情にのみ從ひて、隣人の如く交際せよといふは、義に於いて、甚、欠くる所あるを覺ゆるなり。他の民主主義合衆主義の思想より云へど、さることあらむも、君民同祖の家族主義、本として立てる我が國の家庭に於いては、決して適用すべからざることなり。

人情の微妙

且、夫れ、世人は、眞實の親子ならざる姑嫁に、親子の如くせよといふは、徒に虛僞を強ふるものにして、その結果は、兩者の間、內寒外溫の狀を呈して、遂に家庭の和合を破るといふと雖も、是れ恐くは、人情の微妙を察せざる言ならむ。小數劣惡なる家庭には、間々如此ものありとするも、嫁姑の一方が、眞正にその道を盡したるときは、實親實子と、殆、異らざるまでに美しき嫁姑も、敢て乏しとせざるなり。

敎訓

そも〳〵敎訓の言は、必、其の人を待ちて後に立てらるべきものにして、法律規則の如く、何人にても、政事上の權力を帶ぶる者の隨時に造成し得べきか如きも

のに非ず。教訓としては、古來有徳者の言を尋ねて、隨時隨處に、之が活用を主とすべきものなり。叨りに時勢にのみ阿附して、奇言を立てむと欲するは、世道の上に於いて、たゞに益なきに止らず、又、大なる害ありといふべし。

女子教育の基礎

教育の基礎

今日我が國の教育に於いては、修身の科目を以つて、諸般學科の基礎となし、全體の教科を統合して、皆、廿三年十月下させ賜へりし聖勅の御主旨に歸せしめむことは、男子と女子とに差別なく、同一なるべきは勿論のことなり。

國史

さて、其の外に、ことに重きを置くべきは、國史なり。他年幼兒を養育して將來の國民とすべき大任を負へる女子の教育に、我が國史を疎略にするは、即ち今日の通弊にして、是恰國民精神の本源を涸渇せしむるものなり。萬國比隣、交通愈頻繁となるに隨つて、我が國民の歴史思想は、愈深厚ならざるべからず。國民に

して、その歴史思想を失へば、その國家の衰亡は、忽ちにして至るべきは、古今東西の歴史に明示せる所なり。今日我が國の人心甚頽廢し、風俗益淫靡に赴くものあるは其の原因多多なれども、國民全般に、國史上の思想の甚欠乏せるは、其の有力なる原因なり。而して、その國民の國史思想の欠けたるは、國民の母たる者の教育に、從來國史を教ふることを忽にしたる爲なりと謂ふべし。

新女大學の所謂女子教育の基礎

從來女子教育の基礎を論じたる者多からざりしが、近時福澤氏の新女大學に、左の言あり。

扨學問の教育に至りては、女子も男子も相違あることなし。第一、物理學を土臺にして、夫より諸科專門の研究に及ぶべし。之を喩へば、日本の食物は、米飯を本にし、西洋諸國はパンを本にして、然る後に、副食物あるが如く、學問の大本は、物理學なりと心得、先、其の大概を合點して後に、銘々の好む所に從ひ、勉むべきを勉むべし。云々。

殊に我輩が、日本女子に限りて、是非とも、其の智識を開發せんと欲する所は

社會上の經濟思想と法律思想と此二者に在り。女子に經濟法律とは、甚だ異なるが如くなれども、其の思想の皆無なることそ女子社會の無力なる原因中の一大原因なれば、何は扨置き、普通の學識を得たる上は、同時に經濟法律の大意を知らしむること、最も必要なる可し。之を形容すれば、文明女子の懷劍と云ふも可なり。

女子教育の基礎を物理學とし之に加ふるに、經濟法律の二學を以つてせんといふ。この立論の主旨に準據して教育したる將來の日本女子の頭腦は、左の如くなるべし。

女子教育｛物理・經濟・法律｝日本婦人の精神

日本今後の社會は、果して此の種の頭腦を有せる女子を必要とするか。將來の夫たるべき人々は、果して、此の種の頭腦と懷劍とを有せる妻を迎へむとするか。我が國今日の家庭は、果してこの種の頭腦と武器とを有せる婦人を煩はすべき要あるか。敢て、讀者の判斷を俟つものなり。

結論

以上陳ぶる所は、専ら當今の女子問題に關せる世論を概評し、併せて、如何にして女子の品位を高むべきかにつきて、吾人の信する所を表明せむことを期せるものなり。

特殊の性情

夫れ、各國人種は、歷史上、地理上、各、特殊の事情によりて、各、特殊の性情を享有したるものにして、我が日本女子本來の性情は、偶然にして養成せられたるものにあらず。遠く幾千年の古より、累世の涵養と遺傳とを經たるものなれば、今日に於いて、急遽に異族の精神を注入して、その思想感情を變更せむと欲するとも、一朝にして能ふべきことにあらず。若夫れ、強ひて之をなさむと欲せば、偶、一種異様なる滅金となるに過ぎざるべし。されば、我が邦の女德の本旨は、敢へて之を他に求むるを要せずして、幾千年間の國史上に煥耀せる自然の美徳を根基とし、益、之を涵養し、愈、之を琢磨して、唯その短處と弊處とを裨補するを

以つて足れりとす。何ぞ特更に、梅花の清高をすて丶、他の薔薇花の艶麗を羨み、日本女子の天職を忘れて、　皇天の寄托に負くべけむや。

女権論の失敗

さて、女子自ら女権論を主張するが如きは、議論は兎もあれ、實際女子の品性を高むる上に於いて、決して効力あるべきものにあらず。却つて、女子教育の爲めに少からざる阻礙を生ずるものなることは、既往の實例に於いて照々たり。

女子今日の務

若夫れ、今日の我が邦の男子の不檢束なる行爲の如きは、男子自ら反省する時期の到着せむこと、決して遠きにあらざるべし。此の際に於いて、女子たるもの、切に男子の矯風に呶呶するよりも、須く先づ只管自家の才徳を研磨して、古今未曾有の大任を負荷せる日本女子の本分を全うするに勉められむこそ望ましけれ。女子の精神こ丶に在らば、その品位の自ら高尚なるに至らむことは、なか／＼に女子自ら女権擴張を號呼するよりも速なるべし。

地位と人

今や、我が國の社會が、女子に對して要望する所のもの、一二三四にして止まらず。而して、この社會の要望に對して、その職分を盡し得べき女子は甚乏しくして、多くは、その地位あれども、之に適うべき女子なきを憾とせる狀況に在り。かゝる事情の下に在る女子に對して、誠意自ら修むべきことを奬むるに非ずして、叨に女權云々を慫慂せむとするは、決して、今日の女子の爲に謀りて忠なる所以にあらざるべきなり。





學者之妻

宮島中夫

地球の上に、人と云ふもの丶、顯はれ初めしより、幾千萬の年をかへ經たる、人の間に、男と女との區別、起りてより、幾百世代を重ねたる、東洋といはず、西洋といはず、文明開化の國にも、野蠻蒙昧の土地にも、人と云ふものを、見ざる隈なく、かりにも、人の影あらむ處には、男と女の區別ありて、男は婦を迎へ、女は夫に事ふるの俗あること、殆んど一軌に出つるが如し、或は一夫にして、多妻なるあり、一婦にして、數夫に見ゆるあり、妻の尊むる丶あり、婦の賤まる丶あり、夫妻の關係こそ、時の古今と、地の東西とによりて、差異はあれ、夫たり、妻たるの事は、世界を通して、一なりといふ可し。

人と生れて、男女何れかの性をうくれば、必らず、性を異にせるものと、相結合せざる可からざるか、女子は妻と呼ばれ、男子は夫と唱へられざるべからざるか、か丶る種類の疑ひは、大に講究するの價値あることなりと雖ども、今の世の人は、概ね之を、自ら明かなるの事がらとして、敢て、また舌頭に、上さむともせず。われ等、いまだ、世故に慣れず、經歷も少なし、いかでか嘴を、その間に容れて、その是非を言ひ、得失を語らむとせむや。たゞこの夫妻間の關係について、わが講察したる一部を公にして、世間の示教を請はむと、希ふにあるのみ。

一般に人類の間の、夫妻の關係を、研究せむことは、已等微力にして、非才なるもの、、容易く企つべき事にあらず。下の十數行に於いて、聊か辯を費やさむとする所は、學者の結婚に關する部分なり。學者が夫妻の關係は如何に、學者は如何なる妻を擇ぶべきか、學者の妻たらむと欲するものは、如何なる心得を要するか。これ等の問題を釋きて、悉く、その肯綮にあたれりとは、斷言し難けれども、少くも、一方の觀察として、世に資けとなるを得ば、わが望も、亦足れり。

學者は結婚すべからずといふものあり。こは、古來著名なる人物の、寡居して、その事業を大成せしもの、多きを見て、立てたるの說なり。確かに參考とすべきの論なるは、疑ひなしと雖ども、更に眼を他方に轉ずれば、內助の力によりて、大に研究の結果好良なりしもの、亦尠しとはなし難し。

寡居にして、成功したる學者、若し、之に加ふるに、內助の力を以てしたらむには、ありしにも優りて、美はしき功績なかりしとも、斷し難かる可く、內より助けられて、功を奏せし學者、却りて寡居したらむには、倍層の研究に、その歩を進めざりしとも、決めかたかる可し。實にこれ等、容易くは、定められざるの疑問ならむ。わが見る所にては、到底決し得られざるの問題なり。妻子を以つて、たゞに世俗の係累者、といふより見るか、家庭に於ける、慰藉の泉源と認むるか、何れか一つの見かたによりて、この問題は生ずべし。人は結婚せざるべからざるか否かの問題を、未定に付して、歩を進めたるわれは、再びこゝに、學者は結婚すべからざるか、否かの論をも、判定せずして、說かざるべからず。

學者とても人間以外のものにはあらず。均しくこ

れ、横目にして、縦異なる族類なり。或る時は、慾の制し難きともあらむ。或る時は、理非の辨別に迷ふこともあらむ。天運の循環する所、或は理想に描きて、實顯に求め難きの、婦を夢むことあり、或は心に適せざるの妻を迎ふることあり。爲めに、或は娶らず、或は娶りて、琴瑟の和合を得ず。家庭に快からず、蹶然として起ち、却りて後世の譽を博するに至れるものあり。妻のために勵まされて、大に名を擧ぐるに至れるものあり。明治維新の前驅者ともいふ可き、頼山陽が、斷然父母の膝下を辭し、藩を脱したるの擧は、後日、その名を成すに至りし、所以にして、その主因は初配御園氏と共に、家庭の和樂を、うくること能はざりしにあり。近世叢話に曰く、加茂眞淵、遠江人、少壯鞠ニ於濱松驛逆旅一梅屋氏、以ニ其女一爲レ妻、晨夕潛ニ心書籍一、不レ治ニ家事一、爲ニ義父所一レ憎、其妻謂ニ眞淵一曰、妾觀ニ子之才一、豈爲ニ逆旅主人一者乎、妾幸産ニ一男一、撫字成立、足ニ以嗣一レ家也、請子決ニ修身之策一、揚ニ名天下一、眞淵因出ニ奔京師一、從ニ荷田春滿一學、爾後妻堅守レ節治レ家事數十年、眞淵、亦竟以ニ國學一聞と、一に學者といふと雖ども、その境遇の差異によりて、遭逢する所の命運に別ある、此の如し。

佳人才子と遇ふこと奇なり。才媛必ずしも、碩學と室を共にせず、學者往々にして、無學の妻を迎ふ。碩學の室、才媛なればとて、必らずしも、碩學の名を高むるにはあらず。無學の妻、學者の夫に伴ひ之を扶けて、大に講學に猛進せしむるものもあり。學者と否らざるとに論はなく、暖かき家庭は、凡べての活動の泉源にして、この家庭の靜けく、暖かく充分なる慰藉を與へ、新たなる活動の泉源をなすに至らむためには、先づ、夫妻の間

の關係が、協和を完うせむことを、至要とす。而かも、この夫妻の間の協和は、何によりて、起され、如何なる手だてを以て、維持せらるべきか。これ等の點、即ち、普通の生活を、營む人々と、學者を以て、自ら居らむとする人々との、夫妻の關係の差異を生ずべき所なり。

若き男女は謂へらく、學者といはず、非學者といいはず、夫妻の間の、和らぎは、戀愛の情によりて起され、戀愛の情にて、能く長く、この和らぎを、維ぐに足るべしと。これ戀愛を以て、夫妻の間の、關係の凡べてを、括約すべきの辭、となすものあり。不幸にして、われ等は、この說に首肯すること能はず。別言すれど、われ等は、戀愛の永久性を認めざるものなり。われ等が說にして、正しからむには、戀愛は、量に於いて、無限たり難きが如く、時に於いても、亦、限あるものなり

萬人に向ひて、注がれたる戀愛は、一人にのみ向いて、注がれたる戀愛の、萬分の一つゝを、一個人に供するに至らざるを得ざるが如き、量の制限あると共に、夫妻間の戀愛も、時を經るに從ひては、自ら戀移すべきものならむを信ず。若き男女が、その初め、戀愛によりて相近づき、戀愛のみに、これよりて結婚したる後、家庭の平和は、概ね霎時にして、攪亂し了られたるを、見ずや。

われ等と雖ども、戀愛の尊さを、知らざるにはあらず。確かに、夫と妻との結合を、起さしむべき、一大要素は、この戀愛といふにあるを認めむ。されど、戀愛が、これ等の關係の、唯一の要素なりとまでは、言ふを憚かる、普通の生活を營むべき人、概しては、理想のあまり、高からざるの人人にありても、戀愛のみをもとゝして、夫妻の關係をつくらむは、非なり。況んや、理想高遠にし

て、學者を以て、自ら居らむとするもの、いかでか、戀愛の情のみによりて、夫妻の間の和らぎを生せむや。

夫は外にありて、事を營み、業に從ひ、妻は内にとゞまりて、家を齊へ、兒子を育つ。これ夫妻職分の、大體を、辨別したる言なり。ロングフヘロウが描き出しゝ、一日の事業を了へたる後、温かき家庭に、爐を圍みて、一家團欒のたのしさは、外にありし、夫の苦みを忘れしめ、内にとゞまりたる、妻の憂を散せしむ。夫の思ふ所、妻の希ふ所と合し、妻の考ふる所、夫の計る所と、相同しきを得たらむには、家庭の春は長へに喜はる、一ならむ。寶物世界に、慾望を充たさむとする人の妻に、心を精神界の事にのみ、とゞむるものあらむは、良き家庭を起しがたきが如く、學者の心を精神界にうつす人の家庭に、寶物世界の、慾望に心を奪はるゝ妻を、見ることあらば、その運命は、實に悲みても、餘りあらむ。贅言を須ゐる迄もなく、學者の夫妻の關係は、處を精神界にとりて、妻の足らざるは、夫之を補ひ、夫の秀でたるは、妻之を仰ぎ、夫の求むる所は、妻の力の及ばむかぎり、之を給し、妻の希ふ所は、夫の力の許さむかぎり、之を充さむにあり。一言にして、之を言へば、高尚なる趣味の一致なり。

戀愛のみならず、高尚なる趣味に於いても、夫妻相一致せむか。家庭の暖風は、不斷に薫りて、止まざるべし。身苟くも學者を以て、世に處せむと欲するもの、その妻を撰ぶにあたりては、その趣味に察し、その爲人に觀るべし。かくの如き人の、撰にあたりたる女子は、若し一生をこの人に托し、永く學者の妻として、身を了へむとせば、須らく、心を盡し、意を用ゐて、夫の趣味に合致し、己の

趣味を高め、家庭の生活が、夫の心をはげまして益々、學海に猛進せしむるに、至らむことを、期待すべく、區々たる、實物界の慾望の如きは、之を念頭に逐ふべく、實世界の經營の如きは、自ら之を處理して、敢て、夫の思慮を煩はさゝらむを勉むべし。

あゝ、わが讀者諸媛、果して、如何の心を以て、その郎君を待てる。はた、如何の考慮を勞して、その未來を托すべきの人を求むる。

都會の女學生を監督する法方に就きて

柴田靜榮

古語に、柔よく剛にかつといへり。これ、實に、自然のしからしむる所ならむ。そも男子の性は、剛

健にして、女子の性は柔軟なり。然れども、その柔軟なる、或は、よく男子の剛なるを、凌ぐを得。しかのみならず、却つて、人を感動せしむるの力は、男子の遠く及ばざる處、是男子は有形の智力に富み、女子は、無形の能力に富む所以にして、人を感化するの力は、陰然男子にたちまされりといふも、敢て過言にはあらざるべし。恐るべきは女子に、この力を有することとなり。思へよや世間東西をとはず、今古をいはず、人を善化せしものいくばくかある、人をして、惡行せしめしもの、いくばくかある。これ今日妾等女子たるものゝ、沈思戒愼すべきことにこそ。いま爰に僅かなる例を擧ぐれば、彼の陪臣北條時政の女、平政子が、源氏の一族に於けるが如し。長孫氏の、唐の太宗に於ける、馬氏の、明の太祖に於けるが如く、また彼のナインチーンゲールが、歐州各國の士をし

て、義勇心を、振興せしめしが如きは、共に女徳を全うせしものと否とにあり。果斷勇決なる則天武后の如きは、よく天下を顛覆せしめたり。是等皆善惡異なりと雖ども、所謂感化の力をして、男子の剛なるを、迷亂せしめたるを、證するに足れり。おそる可きは、女子の性なり。愼で男子を善に導くべし。惡に進むること勿れ。顧みて、我國現今の狀態を見るに、維新以後さらに、我が政體の上に、一大變動を來ししより、其の他教育に工藝、商業に、一躍して、能く文明の域に達し、新條約も、亦、已に締結せられたり。然れども、見よ內部如何を、妾は今こゝに、一々これを指點するの力を有せざるも、獨り女子教育の上に於ては、實に忍ぶこと能はざらしむ。師一日妾に諭し給はく、我國の如き急速なる文明の域に達したる國の女子教育は、亦、急速なる進步にとゞまり、敢て階級を、踏まざるとを顧みるなきのみか、泰西の教育を、あながちに、我國の女子に、注入せしめんと、欲するものゝ多く、而して、その結果や、あやまりのみ。されば、近來これが、反動の結果あくまでも、古風主義を、唱ふるもありて、まことに千差萬別錯雜混亂せることの、甚だしく、これを往昔の家庭教育に比ぶるに、却つて萎靡退步の感なきを得ずと。眞に然り。願ふに、維新以後の女子教育は、全く、そが秩序を、あやまりたるものにして、そか結果や遺憾ながらも、世の識者をして、絕望せしむるに至れり。彼等之を三嘆して、今日の教育を受けし女子は、却つて一家を整理すべき道をわすれ、輕卒生意氣なりと曰ひ、女子にはなるべく、高尚なる學問を授けぬこそよろしけれと云ふに至れり。されど是等は、決して學問の惡しきにあらず、亦修學せしものゝ罪にもあ

らずして、全く、其の教育の、方法をあやまりたるに歸すべきなり。もしそれ今より、善良なる策を講じ、以て學問と實踐と、相遠ざからしめざる樣に至らしめなば、その結果や、必らずかゝる至嘆の語の、いつまでか行はるべき。今日の狀勢を見よ。諸事百般悉く進步しつゝ行くにあらずや。さるに此の時に當つて、女子のみひとり之に反して退步せんか。あはれ國家と云ふものは、半ば萎靡衰頽せしものと、いはざるべからず。爰に至れば必らず、今日の女子の上には、あくまでも進步的方針を、とらざる可からず。回顧すれば、我が國維新の大業は、一朝にして得たるものにあらず彼の三百年の長久を維持し、以て人心を、よく順歸せしめし武家の特專を、破滅し、以て王政復古を、成しゝも、是また偶然に得たるものにあらず時勢の自からそが燒點に達せしものとはいへ、時の英傑また以て、これに點火せずは、いかでか我等今日の國民が、泰西の文明國に、對遇するを得たりとせんや。我等女子社會の進運や、今日にあり。世の有爲公道を重じ給ふ諸士よ、諸士が粉身協力以て國恩の萬分の一を報じ、以て國威を、海外萬里に輝かすべき時は、實に目睫の間に迫るにあらずや。然り而して前に陳るの如く混亂を極めたる、今日の女子社會にありては、彼我互に、信ずるところを異にし、所謂南北兩端に、達したる說のみ、多く行はれ、到底これを、たゞちに適用し難きの今日、亦いづれの點より、着手改進して可ならむ。人をしてうたゝ、茫然たらしむ。これ恰も怒濤極りなき蒼海に、一小船のたゞよへるが如き感あり。されどまた余の信ずる所は、たとひ彼我說くところ、同じからずとも、たとへ南北兩端に走りたる說たりとも、亦各我が國に希望する

ところは、是れ一つのみ、されど北端にある人も、南端にある人も、互に一歩は一歩より、一日は一日に進み給はんには、遂に能く中央の一點に、會するを得む。かくてこそ、現今の教育法に於ても、亦不完全極まりなきものとはいへ、將來諸姉が、熱心と精勵とを以て、勉めて止まずんば、此に泰西各國に、卓絶すべき、女子教育法の標準を、見とめんこと必せり。古人云へり、千里の路も一歩よりと。爰に於てか、おはけなくも妾は、こゝに至近至難なる點より、着々歩を進めんとす。されど妾の如きは、學は淺く、徳は薄く、力はた微なるが故に、自ら行はんと欲するも爲す能はず。之を公然と訴へんとするも、いふ能はず。たゞに盲啞の苦みに、なやむのみ。あはれ、願くば、世の至誠至仁なる、愛國者諸士諸女の、同感同情をたれて、以て、よろしく目下の急務に當り給はんことぞ。

そも〳〵妾が、急務といへるは、都下一般に、女學生の風儀慣習など善良ならしむべきことなり。これ何人も、常に希望する所にして、且つこれを嘆ずる人も尠からねど、そはたゞに口論にのみとゞまりて、敢て此の風習を、改正すべき方法を、實行し給ふ人々のなきは、妾が、常に、憂慮する所なり。すべて、社會上の德義の紊亂せるや、原因する所ありて、その結果のあらはるゝものなりされば、そが結果の如何を論ぜんには、必らず起因する點までに立ちもどらざる可からず。見よや都下の狀勢を、東西の人相あつまり、南北の人相離散し、朝に陸奧の人を、迎へ、夕には筑紫のはしに、之を送るが如く、諸事百般すべて、頻繁を極め、從つて人情の浮薄なるは、やむをえざることにてぞ。嘗て西哲いへり。一國の醜行奸惡は

却つて都下に在りて、嚴肅威風は、鄙土に存せりと。果してしかりとせど、宜しく、そが制裁なかるべからず。されど我國は、昔より、特に、優美絶麗なる風紀に、富めるを以つて、其の醜行未だ、彼れが如くには、あらざるも、上に云へる如き、欠點は、亦以つて免かれがたしとす。然るに女子の性たるや、神經の活動極めて鋭敏なり。迅速なり。故に又萬事に感染しやすきものなり。あはれ都下幾萬の姉妹よ。妾は、明治の世の、今日に遭遇して、幸にも、猶、修學しつゝあり。學生諸姉は、今や、二十世紀の潮流に於て、多事多難なる、我國の重任を、負擔し得べきの、英傑を輩出せしむるの母たるものなるを信んず。よろしく過去にとひ、將來を慮り、以つて現在の女子の地位、及、境遇を顧みよ。誰か今日の狀勢を見て、感慨憤發、一滴の血涙なきものあらん。妾は、爰に至つて止むを得ず、都下今日の女性の、狀態を云はざる可からず、そも文明開進の世には、いかなる邊土村落に至るも、多少女子にも教育なかる可からざるを見とめたるものゝ如く、女學校の設立あらざる所なし。されど、これら皆、名のみにとゞまり、そが實習する所は、往昔の寺小屋に類似するもの多く、しからざれば、我が國の女子には、迂遠極まりたるの科程を以つて、外國婦人の手になりしものにて、いづれも完全なるものにあらず。故に心ある人は、その女子をして、各都會にいでゝ、修學せしむるまでに及びたり。就中東京の如きは、東西より來り、南北より集まり、或は中等教育を得んが爲、或は專門教育を受けんが爲、或は手藝工業を修めんが爲め、此の地に來るもの、近來、甚だ多し。しかのみならず、猶、將來も、此の狀勢を以て、進歩しゆかば、いよ〱

そが多きを加ふるに至らむ。彼等は修學する目的をもて、出京遊學す。是まだよし。されど彼等は、必らずしも、父兄若くは、そが監理すべきの責任を、有するもの丶伴ひ來りて、こ丶に移住するのみに限らず。されば妾が最もおそる丶處は、少年少女が單身、この地に來りて學ぶの徒にあり彼等は知己もなし、亦監理すべき親族もなし、止を得ず彼の浮浪極りなきの旅宿、または男女合併なる下宿屋に、たよるの外なし。妾は敢て旅宿、そのものを、とがむる者にあらざれども、彼等妙齡なる少女をして、かくも冷々たる間に、住ましむるを以つて、策の可なるものと云ふべからず。女子は境遇に制せられやすきものなる故に、時にや丶もすれど、汚行醜聞は、これより起り、甚だしきはおのが最初の目的をさへうちわすれ、且、曰へらく、あはれ身は旅館にあり。おのれを束縛するの親族なく、自から欲する時は學び、欲せざる時は男女の交際を能くす。眠らむか晝猶ねふり外出せんか夜行をもはゞからず。かくても終にば、女學校卒業の證は得らるべしなど廣言するに至る。か丶る輩の一度郷里に歸省せんか、必らずしも、そが兩親知己に至るまで、その愛女愛友の心事を、とがめずして、直に、そが敎育の如何をば非難すべし。されど是等は、猶假りに宥るすべきも、終には爲めに女德を破るの輩あらむには、いかでか是を放任し得べき。其の將來おもひやるべきなり。されば今茲に於いて、大に、是等を善くせざれば、たとひ世の幾萬の敎育者が、斐語評論わくが中に、苦熱の勞を惜しざるも、か丶る點よりして、女德の廢せらる丶に至りなど、いかで水泡の感なきことを得ん。今や都下官立女學校いづれも、寄宿舍の設けあらず、通學するの徒のみ

而して是等は、皆悉く市下に、確實なる保證人を有するものに限られたり。されどこれすら、陽に、そが則にしたがふべくも、陰に以旅宿にあるものすら、往々ありとかや。まして幾百の私立女學校などに、通學するの徒に於いては、其の危險知るべきなり。試に、これを探究するに、目下都下の女生の、三分の一以上は、地方より遊學するものにして、亦下宿するの徒、またその三分の二以上を下らず。あはれそが父兄たらん人々よ。かくも危險極りなきの地位に立たせおきて、いたづらに教育の如何を評するよりも、何ぞ起つて眼前の救策を企てざる。そも女子の教育は智育體育よりも、徳育を以つて專務とす。おそるべし先蹤の一失は、許多の後蹤に妨害を與ふることを。爰に於いてか、妾は自己の不敏を省るの暇なく、をこがましくも、大に世に同情同感を有し給ふ諸士に訴へ、以て、爰に嚴然たる塾舍を設け、遊學の爲め都下にある幾百の女生を監督するの義務を有し、以て、春日おもむろなる軟風に、百花の薫香を競ふが如き和氣靄々たる、一家庭の如き眞正なる愛と、純然なる信義を以つて教訓せしめ、優美絶麗なる女性をして、いよ〳〵高尚ならしめ、各自の目的とする學校にも通學せしめんことを欲す妾は、たとひ不徳極りなき女性の假りに、之を厭ふて避くとも、彼等が心裏には、必ちず純粹潔白を慕ふの情は離れざるを信ず。彼等は知らずしらず、そが習慣に妨害せられつゝあるものなり。されどまたこれをもて、そが習慣を斷滅せしむることも難きにあらざるを信ず。而して、よく之を全うせば、單に現今の女生等をして、その可憐危險なる境遇より、眞理正道に進ましむるのみにとどまらず、爾來子女が都會にいでゝ、奮起勉勵す

るに、最も安全幸福なる時期をも與ふるを得んか是、大にしては、國家の體面を莊嚴にし、小にしては、女子教育をして、ます〳〵完全ならしむる楷たるを得べし、彼の歐米各國の如く、女子教育の隆盛なる國には、そが進歩も著しく、女子大學校、及び專門學校さへ設立せられ、而して、爰に修學せんとする女生の爲には、特に宣教師の手になりたる都下學生を監理すべき義務を負ふるものゝ所謂監督院といふものすら、完備せりといふ。而して、是等は皆慈善事業の一に數へられたるものなり。そも我國は、善く義に進み、善く徳を尙ふ國なり。何んぞ爰にかへりみざる理あらんや。

世の諸兄諸姉よ。女子が社會に及ぼすの力や大なり。女子は男子を迷亂せしむる力を有するもの。思ふべし、恐るべし。英明豪傑を生じ、國家に益する士を育つるものは女子なり。惰弱遊惰に導き男子を腦殺せしむるも、亦女子なるを。されど今日、妾が希望する所は、小なりといへども、その目的は遠大なり、至難なり。到底、妾の如き力もてなし、能はざるものなり。されどそが眞義を以て向ふところ、何事かならざることあらんや。世に教育と云ふ大任を有し給ふの諸士諸女よ。妾が今日公に訴ふるを見て、亦、以て黄口の漢論たるを、冷嘲するなく、宜しく、同情同感を與へ給ひ、卒先以て、我等を贊助し、今や眼前に橫たはりたる救策の方法を示し給ひてよ。





精華

博愛

人の、常に、其の業務に勉勵し、勤儉力行して、富裕の身となり、多く、財を貯ふるは、畢竟、一身一家の爲のみにあらず、博く、世を救ひ、貧窮なるものを助けて、人たる本分を全くせんが爲なり。如何に、多くの財を貯へたりとも、單に、之を、一身の奉養にのみ用ゐ、己が奢侈の爲に浪費することをば厭はずして、慈善の爲には、毫も、費すことなからんには、其の不仁なる、禽獸と異なることなくして、人たる甲斐はなかるべきなり。故に、富貴の人は、いふに及ばず、然らざるものも、各、其の分に從ひ、力に應じて、博く、人を愛し、世のたよりなきものを恤み助くべし。殊に、急難に臨み、危殆に瀕せるものは、其の賑恤、一時も緩くすべからざれば、たとひ、面識なき人なりとも、急に、之に赴き、力のあらん限を盡して救助すべし。家道訓に、もし、富貴にして、たからを多く貯へもたば、是、天より、我一人に、あつく賜ふにあらず、おほく、人を救はしめんために、われに授け給ふとおもひて、天命にしたがひて、常に、仁愛の心をもちて、貧苦なる人を惠み、饑ゑたる者を救ひて、善を行ふを以て、樂とすべし。是、天の御心に背かざるなり。かくの如くならば、富貴なる甲斐ありて、大なる樂なるべしといへり。思はざるべからず。

人生和樂の源、唯、仁愛の一義に歸す。一國一家和熙輯睦なる所以のもの、皆、人々、互に、相愛

する善行に基せざるはなし、人の、此の世に棲息して、世の中の幸福を增進し、互に相愛して、輯睦拯濟し、和樂の郷となすことを希ふもの、是、人生の天職にして、獨、逸樂に耽り、他を顧みざるは、世の和樂を害することの大なるものなり。而して、博愛は、必、富貴强盛の者のみ、之を行ひ得るにあらず。如何なる境遇に處すとも、一念、仁慈の至情、中に缺くることなくば、救護濟生の善行、企つべからざることなし。是、名を求むるが爲に、然るにあらず、本心の自然にて、祖先の遺範に法り、君子國の國民たる本分を顯彰するものなり。博愛とは、人々、相愛する美德なり。然れども、愛には、順序あり、緩急あり、大小あり。近きもの、急なるもの、大なるものを後にして、漠然として、博愛を云ふが如きは、是、其の本旨を誤るものなり。人、動もすれば、博愛の假相に眩して、人道の本然を失はんとするが如きことなきにあらず。省察すべきことなり。

平素に於いて、容易に、實踐すべき博愛のこと、甚多し。貧困の者には、物を與へて、其の苦を救ひ、人の危難に瀕するを見ては、知らざる人なりとも、走り赴きて、之を助け、又、老者、幼者と同行するに、其の携ふる物あらば、代りて、之を持ち、旅客の、道に迷ふ者あれば、之を示し導く等、つとめて怠るべからず。これ、まことに、大なる博愛にすゝむ道なり。

皇后陛下の御詠に、

四方の海みなはらからとむつびなば
世に波風はたゝじとぞ思ふ

と遊ばされたり。謹みて、御歌の御意を伺ひ奉るに、四方の海とは、一國を四周せる海にて、國中の萬象を指して宣へる御詞なり。はらからは、兄

弟と云ふ語。波風とは、海上に、大風ありて、波濤立ち騒ぐに譬へて、人事壞亂して治らず、紛爭喧擾なるを云ふ。さて、此の御歌、初の句に、海といふ詞あるより、その縁にて、波風とは宣へるなり。是、歌詞の妙所なり。一首の御心は、四海兄弟といへる言の如く、海内國中の衆庶、各、相視ること、兄弟の如くして、博く、衆を愛し、互に親しみ睦みなば、世間、常に、和氣洋々として、安寧靜謐なること、猶、海面、風波なくして、平穩清澄に、眞景愛すべきが如くならんとの御意にて、我が君の御代、斯の如くなれかしと希ひ給へるなり。國民たる者は、よろしく此の御心を服膺し奉り、互に、仁愛を旨とし、國家の安寧を圖らざるべからず。

箕曲瀨の義女

井上頼文

今はむかし。伊勢の國、度會の郡、朝熊村と、志摩の國、答志の郡、小濱と對へる山のあはひに、箕曲瀨の長者とよばるゝ富豪の家ありけり。代々、この處に住みて、春の花に謠ひ、秋の紅葉に醉ひ、もち月の、たらはぬことなく暮しゝが、滿れば闕くる、世のことわりは、まぬかれがたくやありけん。家の内の人々は、疫病といふ、いとおそろしき病にかゝりて、皆枕をならべて、うち臥しぬ。もとより富める家のことにしあれば、よき醫師をむかへ、あたひたふとき藥を用ゐたりけんも、遂に、そのしるしなく、月ならば、三日、花ならば、つぼみともいふべき、一人のむすめのみ殘しおきて、みなこと〴〵く、よみぢの人とぞなれりけ

る。あはれ、少女は、昨日まで、かざしの玉と、父母にめでいつくしまれ、あまたの侍女どもにかしづかれ、園生におふる若竹の、うきふしとては知らざりしを、たちまち、天外の孤客のごとく、さながら伊勢の海士の舟ながしたる心ちして、よるべをなみの身となりぬ。こひしき父母のおもかげ、なつかしき慈愛のことのはなど思ひいでられて、いかばかり小さき胸をやいためけん、おしはかるだに、いとゞいたはし。しかのみならず、長者が親族は、みな腹ぐろのよからぬ者のみ多かりければ、こたびのまがことを、うらうへに、こよなきさちと、うちよろこび、われおくれじと馳せあつまり、長者の田畑山林はいへど更なり、金銀財寶屋敷まで、のこるかたなく分ちとりぬ。されど、むさぼる强欲は、なほ飽きたらで、うれひに沈める少女の身を、うりしろなさんとなしたりけり。

少女は、心もこゝろならず、ひそかに家をしのびいで、おぼつかなくも、朝熊村なる、いさゝかのしるべをたより、からくも、そこに身を寄せぬ。しかるに、此の家も、いとまづしき家なりければ、いかでいたはりかしづくべき。あはれむべし。少女は、たちまちに、草かるわらはのむれに入れられぬ。いたましきかな。昨日まで綾羅につゝまれ、紅閨にふして、荒き風にもあてられざりしを、あしたには、踏もならはぬ深谷におりたちて清水を汲み、ゆふべには、こゞしきかけぢつたひて、なげきをこり、そばだてる岩がねにつまづきては、時ならぬ紅葉をちらし、おどろがもとをかきわけては、鎌とる袖にくれなゐの露をやどす。なれぬしわざに身をくだく、そのいたづきや、いかなりけん。かゝるかなしみの中にも、月日ばかりはすぎゆきて、をとめも、いつしか二八の春をむかへぬ。

つゝれの衣はまとへども、天然の美質はかくれがたく、花のかほばせ、柳のまゆ、ひなはづかしきすがたなれど、やどのつまにときそふもあれど、さきがけせんと、うちつけにいひよるものも多かりけり。されど、をとめは、心けだかく、かゝるうきたるたはれをと、あだなる契むすばじと、野中にたてるひとつ松、つれなくのみぞすぐしける。時に、ほどちかき松本といふ所に、道庵とて、力あくまでつよき浪士あり。劔術、體術にすぐれたるを誇りて、人を人とも思はず、身にもふさはぬ、廣くいかめしき家を搆へ、近郷近村のあぶれものをよび集へ、日夜酒色にふけりて放逸をきはめ、良民を苦しむることひとかたならず。みなみな、その暴行をにくめども。かれが勢におぢ恐れて、制するものもなかりければ、亂業日々に増長して、ますます、はなはだしくなりぬ。或時、村内のものども謀りていはく。道庵このごろ、みめうるはしき侍妾を抱へんとて、あまねく探ねもとむれども、いまだ心にかなへる美女なしとか。これこそ、われらにとりて、こよなき幸なれ。かのあてやかなる、箕曲瀬の少女を餌ばにして、おびきいだして殺すにしかじ。さりながら、花のつぼみの、たをやめを、ものゝあはれもあら鷲にあたへんことのいたはしさよと、各々ふとき息をつき、とみには決しかねしかど、外になすべきてだてもなし。かれに、少女をつかはすは惜しけれど、一村の害には替へがたしと、やうやく相談とゝのひしが、かゝる事、うちつけにいひいでなば、少女は、さぞな驚きて、如何に心をいたむらんと、しばしがほどはたゆたひつれど、かくてあるべきにあらねば、みなみな、うちよりて、そのてだてをぞ、かくかくと、少女にかたりきかせける。少女は、手をつ

き、かうべをたれ、しばし思案の體なりしが、いさゝか、さわげるけしきなく、しとやかに、こたふるやう。わらはゝ、數多の年月、此の所にさまよひて、をさなきより、かたゞゝが、篤き御めぐみをうけ侍りぬ。されば、この村の御ためとしならんには、たとひ、この身は、八裂にさかるゝとも、いかでか、いなみはべるべきと、ことばすゞしくうべなへば、さと人どもは、大によろこび、遂に少女をともなひて、道庵方につかはしぬ。少女は、ことにかこつけて、枕のちりはらはねど、すがたかたちの艶なるのみか、たちゐふるまひ、しとやかに、わけくれあつくつかへければ、鬼にひとしき道庵も、そのよろこびはかたならず、二なきものとぞめでにける。ある日、道庵は、かのあぶれものどもが、もよほせる賭博の集會に趣きたるを伺ひ、少女は、さとくも、里人どもに、かくかくと合圖を示し、あらかじめ、道庵が歸り來ん時刻をはかり、その途中に出でむかへて、いへるやう、あまりに、御歸のおそきにまちかね侍りて、こゝまで、御むかへにまゐり侍りぬといへば、道庵大によろこびて、今日は、いたく飲みすごしつるに、よくも、むかへに來りしよと、皿の如きまなこを、糸の如くなしつゝ、少女が肩によりかゝり、一歩は高く、一歩は低く、蹌々踉々として、字、殿林といへる所にさしかゝりぬ。こゝは、老樹森々として、晝だに、こぐらき所なり。少女は、すきを見すまして、隱しもちたる用意の懐劔、拔く手もみせず、ぐさと刺す。さしもにたけき道庵も、一心こめたる義女が刃につらぬかれ、ひるむ所を、里人ども、かねて合圖のことなれば、むらがり來りて討ち果しぬ。鬼をもひしぐ、道庵を、かくやすゞゝとうちとりしは、ひとへに、少女がは

たらきなりとて、これより、こぞりて、少女のさかしさをほめたゝへき。ことに、たをやかなる姿のみかは、たけくをゝしきこゝろざしをめでゝ、わが子のよめになさばやと、きそふ老夫婦あれば、われいち早くめとらばやと心を焦す富豪もありて、さきをあらそふもの、その数をしらず。少女、つら／＼おもふやう、たとひ、この村のためとはいへ、悪漢ながらも、ひとたび主として、つかへたるものを、刃にかけてうしなひしは、そらおそろしきわざなりけり。よしや枕はかはさねど、いまはしき、そば女に似たる名を得たれば、女のみさをは、はやすたれぬ。それのみならず、つたなきわらはをめとらんと、あまたの人のきそふあまりに、いかなることをひきおこさむも測りがたかり。たらはぬ、この身ひとりのために、れはくの人のわづらひとならんも、いと罪ふかきわざなりけり、と、心をさだめ、みどりつやます黒髪を、ねよりふつと薙りはらひぬ。あはれむべし。月もはぢらふ妙齢の少女が、いまだ、春あたゝかき、鴛鴦の夢もむすばずして、樹下石上に身をさらす、圓頂黒衣となりにけり。少女は、やがて、さゝやかなる草の庵をむすび、父母のなきたまは更なり、一家の人々、さては、かの道庵が亡魂をも弔らはんと、行ひすまして住みけるを、見る人も聞く人も、感ぜぬものこそなかりけれ。いたはしきかな。此の可憐なる妙齢の尼は、多年の辛苦にや、やつれけん。はた今昔の感にやたへざりけん。いくほどもなく、父母のあとをおひて、やがて、よみぢにいでたちぬ。里人、少女が功をあらはさんとて、その霊を神とあがめけるが、正保五年に至りて、朝熊村なる、醫王山、莊嚴寺の境内に、碑石をたて尼森明神と、たゝへしよりこのかた、産土

神にも、さきだちて、義女が芳魂を祀ることゝはなれりきとなん。

附言、箕曲瀬の義女が名の傳らざると、惡漢、松本道庵を刺したる年代のつまびらかならぬこそ、いと遺憾なれ。そのかみ、箕曲瀬に屬せる、田畑山林を併せて、二十六町餘、今は、朝熊村の共有となれり。是、箕曲瀬長者が遺產のはしなりといふ。長者が住居の遺跡は、今、朝熊村の元標より、六十町餘にて、二見の浦より、志摩の國、鳥羽に行く、新開の縣道に架けたる、長者橋の西にあれたる邊なりといふ。

閻王山、莊嚴寺は、今、廢寺となりて、義女の石ぶみは、むなしく荊棘にとざされ、塵埃に埋れはつれども、いにしへをしのび、一抹の香、一枝の花だにたむくる人なくなれりとぞ。いとくちをしきことならずや。ひろき朝熊にも義女の舊功を忘れぬ人はすまざるか。ひろき朝熊にも、可憐なる義女の芳魂を弔ふ人はあらざるか。あはれ。

義女が玩びし人形も、もとは、この寺にありしを、今は某の屋に所藏せりといふ。莊嚴寺の石ぶみは、神都名勝誌に

碑面

正保五戊子年墓春初一日

丷八 尼 森 僚 老 明 神

六月一日祭焉

莊嚴寺の境内に建てり。四尺許の生石なりと見ゆ。

按ずるに、義女が、妙齡にして歿したりいふ碑面の諡號に、僚老明神と鐫りつけたるは、如何なる所由にかあらん。いといぶかし。

名勝誌編纂の當時、江村梅莊子は、莊嚴寺に行

さて、石碑を見、遺愛の人形のかたをも寫しおきたりしが、今は、寫したるその紙もちりぼひうせたりとかたりき。いとくちをしきことなりけり。

おのれ、義女が石ぶみを吊ひ、遺愛の人形のつくりざまを見て、その年代をも徵せんとすれど、いとすなきをいかゝはせん。

因に云ふ。土俗、箕曲瀨長者をコタンといふよしを考ふるに、長者が激しき疫病のために、かの少女一人のみ殘して、一家、ことごとく、黃泉の客となりしかば、そを直指秘傳抄、簠簋內傳等に云へる、備後風土記の巨旦、蘇民の故事に附會して、コタンと訛り傳へたるものなるべし。箕曲瀨にとなれる、松下といふ所に、松下神社といふものさびたる社あり。この社を、神前の社の舊址なりとも、または、素盞烏尊を、阿部の晴明の勸請せし所なりともいひ傳へ、この森を、晴明の森とも、蘇民の杜ともいへり。むかしは、毎年十二月十六日、本村の村役人、神職、寺僧等、うちつどひて、蘇民將來子孫家と、木札に書ける符を製し、近鄕近在に配付する慣例ありきとぞ。これ、箕曲瀨長者をコタンと訛り傳へたるにれこれるか。なほよくたづねまほしきことにこそ。

終にのぞみて一言す。いやしくも、血あり、涕あらんものは、荆棘にうづもれはてたる義女が石碑に、一杯の水、一枝の花を手向けて、可憐なる香魂を吊ひてよ。

のぞむらくは、同情の志士よ。義女が事歷の顚末をさぐり、もれたるを補ひ、あやまりを正し、その行實を千載に傳へられんことを。



訪問の心得

師岡須賀子

百事進歩の、此の世の中にありては、從來の如く婦人なればとて、只深窓室内にのみ籠り在らるべきにあらず。祝弔、其の他萬般の事によりて父母兄姉夫等に伴はれ、或は、その代理として、訪問、或は公會の席に出でざるべからざる事あるべし。然る時は、諸事尊長の命を守り、規約に違はざる樣にすべきは、勿論、其を訓諭せるものなきには非ざれ共、尚實驗せるところに就きて注意すべき節々を述べんとす。其の順序輕重の別の如きは調はざるも多からん。唯、取るべき處だに有らんには、甚しき幸ならんかし。

一年若き婦人は、父、母、夫、其の他保護者の許なくして外出すべからず。

一早朝深夜は、勿論午前十時前、午後五時後、および、飯時には訪問すべからず。

一獨居の男子、又は、旅宿等に婦人のみにて行くべからず。且書状の往復も、極めて嚴格にすべし。

一招待を受けたる時は出來得る丈は、用事を差繰り、時間に早過ぎ、又は、遲れぬ樣に行くべし自巳の意志都合等を以て、先方の好意を空しくせぬ樣にすべし。

一乘車のまゝ門内に入るべからず。尊長の邸宅ならば、猶更のことなり。

一如何に懇意の間柄なりとも、案内なくして、座

敷に上るべからず。

一 玄關應接所座敷等にて、待合するときは、四邊を見廻し、器物に觸るゝ如き事は、勿論、待遠く退屈がましき擧動あるべからず。

一 尊長に伴はれたる時は、諸事、その命にしたがひ、決して、差出がましき事有るべからず。

一 尊長の代理として行きたるときは、十分に、その代理者たる意を述べ、代理者たる任を果すべし。決して己の意見を以て、事を行ふべからず。

一 祝祭慶賀に行きたる時は、己も、然も、嬉しきさまになすべし。然りとて諛がましく、空々しきは見苦しき限なり。

一 弔喪哀傷の場にては、眞實に哀戚の意を表すべし、と云べとも、聲立てゝ號哭し、家人をして悲歎を増さしむるが如き事あるべからず。心を慰め、氣を引立たしむる樣にすべし。

一 病氣見舞に行きては、病重りたる人の事死去の話などは、決して爲す可らず。病人にも、看護人にも、氣の霽れて、慰となるべき樣にすべし。長居して食事、其の他手數を掛くる如き事有る可らず。

一 類燒、又は、近火には、速に見舞ふべし。使を遣す、折には、名刺を持たしめ、其の意を述べしむべし。場合によりては、手助となすべき樣、書遣るもよろし。水難その他、暴風雨地震等、皆同じ。

一 出産の悅に行きては、産婦に逢はんとすべからず。母子の健康を聞き、程よくして、早く歸るべし。

一 親族の外は、用なくして、幼き子女を携ふべからず。先方に病人あるか、又は、家業繁忙なるか、同じ程の子女を亡ひたるか、又は、未だ小

兒を育てし事なき家などには、親戚たりとも憚るべき事なり。

一美しき服を着て、身分低き家を訪ひ、見苦しき容姿にて、尊長に近つくは、共に婦徳の欠くる處なり。注意して、虚飾不敬にならざる樣にすべし。

一土産物、又は、贈物は、よく先方の品位と場合とを見はからひ、祝賀には、それに用ゐらるべき、反物鰹節綿等、病氣見舞には、雞卵牛肉、看護人の食すべきもの、弔祭には、金幣等すべて、誠心を籠めたる物たるべし。但し、贈物は、己の精神を表すものに過ぎざれど、必ずしも、物品を以てのみすべきに非らざれど、猥りに驕奢華美を競ふが如きこと有る可らず。

一他に合客あるときは、其の目前にて、贈物を出す可らず、人無き處にて出すか、又は取次人幹事等まで差出し置くべし。

一饗應、其の他のもてなしある時は、悦びて、之を受け、靜に、之を終るべし。婦人の常として、遠慮の甚しきは、却て、惡し。さりとて、又活潑に過ぎて、しとやかならぬは、婦人たる德を失ふものなり。何事にも、中庸を得んことこそ肝要なれ。

一賓客となりては終始愉快なる狀をなし、假令行屆かぬ、款待笑ふべき節々あらんとても、何氣なく心付かぬさまになし居るべし。

一我最上客なる時なりとも、決して高ぶり、又は興がり、又、不愉快氣なるさま有る可らず。談話は高からず、低からず、中聲を以てし。有益なる智識を得、德を養はんことを心がけ、用事を辨せんことを務むべし。門地才藝を衒ひ、他人を誹謗するが如きこと有るべからず。

一すべて、要事も終り、一座の興つきなんと思はば程よく見はからひて、暇乞して歸るべし。但し、尊長の座を立ちたまはぬ前に退出するは宜しからず。無用の長居は、人も我も害ありて、益なし。殊に家事繁き婦人にありては、一層の事なり。然れど、又、俗に尻燒とか云ふらんやうに一向歸宅せん事をのみ思ひて、折角の主人主婦の好意をも空しくし、用辨をも果さぬ様なる事は、尤も忌むべき事なり。

一新年の廻禮歳暮の祝儀等、人も我も事繁き時は、必ずしも、主人主婦に逢ふに及ばず、取次の人に、よく其の意を述べて歸るも、却て便利なるべし。

一先方不在にして、用辨をなす能はざる時は、在宅の日時を問ひて、又訪ふか、然なくば、家人取次人等に來意を述へて、傳達を依賴するか、

又は歸宅後、書面を以て、之を言ひ送るへし。

一歸らんとする時、自ら送らんとし給はゞ、辭し奉るべし。但し强ひて止まらせんは失禮なれば、再三に及びての後は、そのまゝになすべし。

一又、歸路の車見送人等を賜りたるときは、謹みて拜受すべし。然る時は、奧へ御入を乞ひて門外より乘車すべし。其れも强て進み給はゞ、直に乘車するも苦しからず。見送人車夫等は、着宅せば、能く勞りて歸すべし。

一婦人はたとひ親戚たりとも、保護者尊長の許なくして、宿泊すべからず。何事も夕刻までには着宅せらるゝ様に取計ふべし。同伴者ありとも、婦人の夜行はつゝしむべく、畏るべき事なり。

訪問の事なはつきせず、云ひ殘したるも多かれど、此處には省きつ。次には被訪問、卽ち、來客を受くる方につきて、心づきたる箇條を述べんとす。

接待の心得

一 朝寝すべからず。

一 早朝より、門の内外玄關客室等を、清潔に掃除し置くべし。

一 少くも座敷一間丈は、早朝深夜等、不時の來客にも差支なき樣になし置くべし。

一 茶菓子烟草盆火鉢敷物團扇等は、上下を區別して、調へ置き、何時の客にも差出さるゝ樣にすべし。便所は、別して不潔ならぬやうに注意し、手水鉢の湯水は十分に入れ手拭は、新しきものか、又は、能く洗ひたるものを掛け置くべし。夏ならば、風通を能くし、打水しなどして、客をして爽快の念を増さしむべし。

一 豫め約束ある客ならば、主人、又は主婦は前以つて、其の準備をなし多人數ならんには、座敷の裝飾膳部の献立接待給仕等、其れ〴〵分擔せしめ、手落ちなき樣にすべし。少人數なりとも、取次、其の他のものに、言渡し置きて、不都合不行屆なき樣注意し、約束の時間前に、諸事を整頓して、待ち居る程になすべきなり。

一 來客あらば取次人、玄關、又は、入口に出で丁寧に、一禮して、姓名を問ふべし。始めての來訪、又は、如何と思ふ處ある人には、來意を尋ねて、主人、又は、主婦の前に出でゝ、其の事を述べ命を待ちて、應接所、客室等に案内すべし。

一 主婦、自ら取次がず、婢僕をして爲さしむるときは、豫め、よく〳〵命じて、不敬不遜ならしめざることを務めしむべし。これ、先づ、家庭の整不整を推測らしめ、來客の快不快を起す基となれるなり。

一玄關應接所待合室等には、大なる姿見鏡含漱用の器櫛等を備付け置き、客をして、容姿を正さしむる樣にすべし。

一客をして、長く玄關應接所等に待たしむべからず。

一貴人尊長ならば、自ら、玄關まで、出で〻迎へまゐらせ、客室に御案内すべし。

一遠國、又は、雨雪などの時の來客ならば、先づ洗足の湯を取り、夏ならば、冷水を汲みて、顏手足を拭はせ、清潔なる衣類に着換へさすべし。食事は何にても、早く濟ませ、宿泊せしむるならば、その夜は、速に寢所を設けて、燈、マッチを供へ、便所への通路を知らしめ、寢衣を添へて、就褥せしめ、心靜かに、眠らしむべし。隣室にて、高聲の談話荒々しき戶の開閉等をなすべからず。雨雪、猶止まざる中に歸る客には傘履物等に注意し、途中破損し難義する事なき樣に注意すべし。

一火災水難によりて便り來れる客には、先づ心氣を落付けさす事をつとめ、靜なる間に居らしめて道具の運方片付方を家人に命ずべし。決して與に〳〵周章騷ぐ如き樣子あるべからず。其の人の不幸災厄を推測して、出來得る限の親切を盡して、之を慰め、之を助くべし。

一客よりは、勝りたる衣服を着るべからず、只禮に欠げざる程なるべし。然りとて、垢付き油染みたるま〻にて、急ぎ出でたるも、すさまじき心地せらる〻ものなり。

一來客に對しては、誠心を以つて遇し、快く話し樂しく用を辨せしむべし。但し、男子の客に對しては務めて、嚴肅に言葉少かるべし。

一談話は無害有益の事を以てし、決して、客の感

情を害ふか、又は他人の誹謗に渉る如き事あるべからず。兎角婦人の會合と云へば、半は、衣服装飾具の競争品評知人の批評等なるぞ歎しき。この弊を改めんこと、教育ある婦人達の要務なるべしかし。

一 多人數を招待せる時は、一層注意して、其の談話の一般に差支なきやうにすべし。雅馴優美なる音樂などは、其のよろしきものなるべし。

一 馴染なく、要なきに幼き子女を客の前に出すべからず。殊に要事あり。飲食物ある時は、猶、更のことなり。

一 贈物の多寡有無等によりて款待に厚薄あるべからず。

一 飯時に至らば、何はなくとも、有合の品にて、飯を出すべし。態とらしく、割烹店より取寄せたるものよりは、却りて、其の心籠めたる總菜の方、心易くして、遙に美味を覺ゆるものなればなり、これは臨時客の場合なり。

一 食膳は主客ともに有るべきは、當然なれども、家に、よりては、客にのみ供することあり。これ經濟上、已を得ぬ事なるべけれども、禮の宜しきものにあらず。假令善美を盡したる饗應にても客の愉快を感ずること、少し。樂を共にせんとするは、人情なり。況して招待を受けたる主人主婦の陪膳せざるは、物足らぬ心地するものなればなり。

一 客に物を饗して、後惜しさうなるは、極めていやし。又驕奢に流れて、華美を誇るが如きもよろしからず。

一 客の將に去らんとするや。物饗せんとて、強ひて止め、それより、俄に厨房を騒がしくするものあり。尤も厭ふべき事なり。

一主人不在の折の來客には、成るべく主婦出で、挨拶し、來意を問ひ、手扣に認め置くか、又は能く記臆しおき、品物ならば、其の品目、數量を調べて、受取り置くべし。主人歸宅あらば、正しく、殘りなく、之を傳へよ。來客をして、主婦を信用して、疑念なく、意見を述べしむる樣にす可し。さりとて男子の客に馴々しく、言葉多かるは、見苦しき限なり。愼むへし。

一宿泊人、同居人等に來客ありたるときは、我家の客同樣丁寧にあつかふへし。然りとて、差出がましき樣の事あるべからず。若し、其等の人不在の時ならんには、程なく歸宅すべきものならば、扣室に待たせ置き客は、急ぎて、歸宅の時間遲きものならば、其の事を述べて、便宜に從ふへし。兎角に疎略になり易きは、此等の客なり。主婦たらん人は、務めて、誇なからんやうにすべきなり。

一多人數、又は長時間に渡る客ならんには、馬車腕車等を門內、又は、妨にならぬ所に入れしめ供人には、茶烟草盆團扇火鉢等を出すべし。飯時には、食事せしむるか、又は金を遣して、之にかふるもよろし。如何なる場合たりとも、酒は一切遣すべからず。測らざる厄、これより生せん、實に畏るべき事なり。

一客歸らんとするときは、玄關まで送り、乘車を待ちて、一禮すべし。去りたる後、あわたゞしく、走り入るは、尤も見苦し、目下なるか病氣の時は、其に及ばず。

一夜ならば、車、又は然るべき見送人を以て送らすべし。雨雪の折、婦人老幼などは、尤も然すべきなり。

一客の去りたる跡にては、決して笑ふ如き事ある

へからず。他事にて笑ふとても、その感情を惡しくし、其の家風さへ、淺ましく思はるゝ物なればなり。

總べて、客の快不快は、主婦の注意の如何に因ることにて、其の修德の程も、推し量らるゝものなれば、家政を學ばん人、及び、これを司れる婦人達は、務めて用意周到ならんこと必要るべし。猶洩らしたる箇條も、少なからねど、其は別に云ふ處あるべければ、今は、此迄にて終ることゝはなしつ。



一言のあやまちにて、莫大の禍となり、一些のあやまちにて、一生の惡となる。

人のあやしきことは、己が心の中に、しりわきまへて、口にはいだすべからず。

人われに無禮なりとて、わが耻辱にならざるときは、とがむべからず。

我よりは善をほどこすべし。彼よりも、亦、善を以つて報ゆることを忽むべからず。

言語をつゝしみて、一言を出すにも、よく思案して物をいへば、言語は、おのづからすくなし。無理に、口をとぢて、いはざるにはあらず。



漫録

恩賜の御衣

吉野眞澄

かけまくも畏しこき、北野の社を始めまつりて、國の八千國島の八十島いつこといはず、此の御神をまつらぬ里もなし。ふりはへて學びの道の祖神と、いやしくも、世に志あるもの皆に、崇め尊ばれたまふになむ。いとたふときや。

さても、其の過ぎし昔の春を問へば雲井の奥の九重の中にて花をうたひ、雪を愛でし事もおはし、また心つくしの秋の空に、雲を見て都を忍び、月をながめて獨り膓を斷たれし事どものおはするなるが、こは誰人も朧げならさめれど、此の頃の春の日の梅の香の面白き時に、讀者と共に其の梅のあるじの昔を忍ばんとて、かくはものするになむ。

抑も菅原朝臣道眞公は、野見宿彌の裔にて、父君は參議、是善とまをしき、當時世にはゞかられし方なりき。母君も賢くおはせし事は、公の世にたゝれん事を願ひて

久方の月の桂も折るはかり
　家の風をもふかせてしかな

とよまれし一首にても、大方は推しはからる。實に、此の親ありて、此の子ありとも云はなむ。されば、少き時より梅の梢より生れ給へる、神童とも呼ばれし程に、才秀れておはしますけるが、父の是善公、島田忠臣をもて、春の夜の月わかく梅の花のにほひかんばしきをりに、詩を試みしむ。此

の時公は、僅かに十三の春を迎かひたるころかとよ。花もあざむかんばかり、美くし御姿にいまして、いふがまゝに筆とりて、さら〳〵と

月耀如晴雪　梅花似照星
可憐金鏡轉　庭上玉房馨

と詠せられければ、時の人之を傳へて、感じあへりとぞ。

宇多天皇の貞觀中文章生にあげられ、得業生となり、下野權掾を授けらる。ある時、公、都良香を訪はれけるが、良香をりしも庭に出で、あまたと射の遊びを興せしが、公の來れるを見て己がもてる弓矢をとりて、公に射よと云ふ。公辭めともきかず、さるは此の儒生射の事はいかでと思ひ、ひそかに恥しめんの心なりけり。さても公は、良香がおしつくる弓をとりあげ給ひて、はなちたまへば、一矢だもまぎらふ事のあらでこそ。並み居

たる人々、公が文才のみならで、武術にも勝れたまへる事におどろけりとかや。

元慶の始めつかた、從五位上に叙せらる。時に渤海の聘使裴頲なるも來れり。天皇公をして、かりに治部大輔の事を行はしむ。後位、いよ〳〵進み、遂に正五位下、春宮亮に任せられぬ。よりて公自ら書を皇太子に敎へたてまつる。曾て遣唐使の我に不利なるをさとりて、止めしむべき旨奏上せしが、其の議、遂に用ゐられたるより、公大によろこび、こは王家のためよろこびなりとて、おのが敎へ子を集ひて、宴の莚を開きてあられしが、あやしの翁、祝の文と、沙金とをもち來り、案に置きてされり。人々、いたくあやしみしが、こはかしこくも、天皇のかくせさせたまへるなりとぞ。公の重せられし事の一端をうかゞひまつるに足れり。

なほも、進みて、三位大納言に任し、右近衛の大將を兼ね、氏の長者となる。公つねに　天皇をいさめまつり　天皇も、また、公を、また無きものに思し給ひて昌泰二年　醍醐天皇の御位に即かせ給へる折にも、公を右大臣となし、藤原時平を左大臣となし、且つ右相は、年もたけ、才もかしこくて、天下の望むところ、左相は譜代の器なれば、すてがたしとの御意の詔りをたまひけり。

天皇、御實算わづかに、十四におはし玉ひけれど、左右の大臣に、萬機を決せしむ。昌泰三年に天皇　上皇と朱雀院にて、ひそかにはからせ玉ひけるは、左右の大臣相ならびて、政を執るからに、統一する所なし。しかず、道眞一人にまかせんにはと、即ち公を召して、太政を司どらしめらん事を仰せらる公深くいなみまつりて受けざるのみか、固の將相の任をもとかれん事を請はれければ、天皇　上皇、み自ら御衣を賜ひて、さて、其の事はやめられたり。

天皇、しば〲神泉苑にみゆきありて、其の乾臨閣にて、宴したまふ。公いさめて、こをとゞめまつる。公は、しかも翰林よりおこり、位、將相を極め、政をとる事明に、あまつさへ裁決なかるゝが如くなりしかど、天下の萬民謳ふるもの、皆、公の許に行く。左大臣常にこゝろ安からず、ふかくねだみてありしが、又、此の頃の密諭などのある事を聞きて、いたく憤り、名をいふだにいまはしき、源光、藤原定國、さては、藤原菅根らのあしき輩とかたらひはかりて、此如も尊とき、忠なる大臣を陥れんとて、たま〱公の女の齊世親王に嫁けるを寄とし、天皇にまをしけるは、道眞、陛下を廢し奉り、彼の齊世親王をたて、おのれ、國權を擅にせんとの虛謀の企てあり。速

に誅し給へと申しければ、天皇、いまだ、春秋にとませたまひ、御位におはし給ふ事、日なほあさくましませば、遂に惑されたまひぬ。

延喜元年正月、従二位に叙せられ、俄に、太宰の權帥となむ云ふ、いとも、いやしきものに貶され給ひぬ。萬の民くさ、いたくをしみ、公もまたこよなくうれひて、

なかれ行く我はみくづとなりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

との一首をもて、法皇に訴へ奉りければ、法皇おどろかれ、宮殿におもむき　天皇に申して、赦したまはんとせられしも、菅根ら、門をとざして入れまつらず。

公の子たち、高視、景行、兼茂、淳茂等、あまたおはせしが中に、高視は、大學頭に任ぜられてありしが、此の時、土佐の介に貶せられ、其の他も、ちり〳〵に流されたまひぬ。たゞ、いと幼なき末の二人の子たちのみは、共にゐてゆく事をゆるさる。

さても今は年ひさしくも住みなれし、九重の帝都をば、今をかぎりといでたゝせ給ふ。心の内おもひやるだにいとかなしきや。憂きをばとめぬ門の戸を、出んとして、庭の梅のあはれに咲きてありけるを見て、如何はなつかしく、はなれにくゝかりけむ。

こちふかばにほひおこせ梅の花
あるじなしとて春はわすれそ

かくて、山城國山崎といふ所に至りたる頃にやあらむ。都の遠くなりて、いとあはれに心ぼそくおぼされて、

君がすむやどのこずゑをゆく〳〵も
かくるゝまでにかへりみしはや

又、播摩の國、明石のうまやにやとらせ給ふに、うまやの長、昨日まで大臣にておはし丶御身の、いたくかはらせたまへる事におどろきて、いみじう思へるやうなるを御覽じて、つくらせ給へる詩、いとかなし。

驛長無レ驚時變改　一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしましつきて、あはれに心ぼそくおぼさる丶ゆふべ、をちかたに、所々けふりたつを御らんじて、

夕されは野にも山にもたつけふり　なげきよりこそもえまさりけれ

また雲のうきて、たゞよふを御らんじても。

山わかれとびゆく雲のかへりくる　かげ見るときぞなほたのまる丶

さりとも、世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも　きよきこ丶ろは月ぞてらさむ

君を思ひまつる誠忠のほど、おもひ知られて、いともかしこし。

筑紫におはします所の御門もかためて、おはします。大貳輿範が住む館のはるかなれども、かはらなどの心にもあらず御らんじやられけるに、また、いとちかく觀音寺といふ寺のありければ、かねの響をきこしめして、つくらせ給へる詩、

都府樓纔看二瓦色一　觀音寺只聽二鐘聲一

こは、白居易の遺愛寺鐘欹レ枕聽。香爐峯雪撥レ簾看と云ふ詩にまされりと云へり。

さて九月十日、菊の花を御らんじけるついでに、また京におはしまし丶時、九月のこよひ内裏にて、菊花の宴を行はせられし時、詩をつくりて、みかどより御衣たまはりし事のそゞろにおもひいだ

されて、

　去年今夜侍二清凉一　秋思詩篇獨斷腸
　恩賜御衣今在レ此　捧持毎日拜二餘香一

とよまれしかば、時の人、皆、感せぬはなかりきとぞ。げに、いまきくだに、なほ、斷腸の思ひあり。また雨のふる日、うちながめ給ひて、

　あめの下かはける程のなければや
　　きてしぬれ衣ひるよしもなき

やがて此地にて、うせたまひぬ。御年五十九、安樂寺に葬る。

公は、しかも文章にたくみに、詩歌に秀れ給ひ、今の世に傳はるもの妙へなるもの甚多し。彼の渤海の使、裴頲、公の詩をみていへけるは、白居易の體に近しと。されば醍醐天皇もかつて、其の集の終りに、平生所レ愛白氏集。今得二菅家集一不二復開レ帙とのたまはせたまひき。

今日に傳はる三代實錄、及、類聚國史は、公が詔をうけたまはりて撰びしものなり。

一條天皇正一位太政大臣を贈り給ひ、天曆中、北野に社をたて、公をまつりて、天滿天神と申す。

紅蘭女史をおもふ

三輪田眞佐子

花鳥の夢の通路遠々に
　しのぶむかしの君がよの春

このごろの霞たな引く空をながめ、花も、日ならずして香るべし。鳥も、今より歌ふらんとおもふにつけて、おのれが紅蘭女史の恩愛を受けたりける往時の春のしのばるゝなり。あはれ、花は年々咲きけるも、苔の下なる女史は、これを見ること能はざるべし。鳥の音は、舊に變らざりけれども、

女史の聲は、亦、聞くよしもなし。されど、女史の面影ばかりは、なほありし世ながらにして、わが眼中にあり。

女史嘗て、東叡山に花を賞して

惟擧一隅堪見貴、　衣皆羅縠食皆珍、
但敎風氣歸清儉　未害歡呼共醉春、

の絶句あり。そは以て、女史の見識が、單に風雲を追ひて、放逸に耽るごとき、死學者の比にあらずして、經國營世を人生の目的とする、活學者たるを知るに足るべし。

亦、女史は、良人なる星巖翁に後れて、孤立の身となりけるとき、佐久間象山氏、京師に來り、女史の家を訪ひて曰ひけらく、われや昔日の我にあらずと。すなはち、金圓若干を包みて、女史に贈りけれど、女史は、忽ち曰ひけるやう、われ窮せんも、故なくして、人より金圓を受けず、君の好意は辱きも、返納せんと、高潔の氣品見えければ、氏も強ふる能はざりけりと。實に今日の黄金を尊ぶを知りて、仁義を愛するを知らざる人は、これを聞きて、將に慚死すべし。

その春興の詩に

太平風俗競豪奢　不問桑麻只問花
我儞亦栽桃花在、竟拋針線弄春霞

とあり。これ女史は豪奢を悪み、質素を尊ぶ意向をうかゞふに足るべし。然るに今や、風俗華美に流るあり。女史、若し、世に在さば、必ず歎きたまふらん。且つ、世人動もすれば、女史は、詩人なり。畫人なりなどおもふものあらん。されど、この針線の二字を見て、女史の任じけるところを知るべきなり。

長州の人、澄川拙三氏、夙に星巖翁の人となりを欽慕して止まざるより、その死後の門人たらばや



とて、京師に行き、紅蘭女史を訪ひ、翁の平生を詳にせんとせしか、やがて女史の風采と、見識の仰ぐべきとを知りて、爾來女史をも、師とせんとの念起りけりとかや。

右に述べしは、單に女史が逸事の一端に過ぎざるも、これに由りて、なほ、その人物を推度するに足らんか。おのれ、女鑑二百號の臨時發刊につき、兼て論説をものせんとて、既に原稿も調ひけるに、熟ら考ふるに、今日は、論説の必要にあらずして、一世を風化するに足る、女傑の出づることそ願はしけれは、おのれが春色と共に、聯想する女史を、讀者に紹介することかくなん。

我が國女子著述の一斑

三木五百枝

我が國ありてより、今の大御代に至るまで、その年を經たること數千年、その間、女子の、貞操にして、世に聞えたる者、武勇にして男子をも驚かせる者、賢才ありて、功を建てたる者、親に孝を盡して官より賞せられたる者、その他、女工をよくせる者、文筆に秀でたる者、勤勉倦まざりし者、よく子女を教育せる者は、いふも更なり、才藝に長じて、世に用ゐられたる類、實に數ふるに遑あらず。それらは、皆傳ふるに足る者なるを以て、本誌初號以來、熱心なる諸氏の、引續き、その行實を記して、各欄に寄せられたれば、こゝにいふべき要なし。たゞ、我が國女子の著述に至りては、果して幾何あるか。またその著者はいかに。その

種類はいかに、などいふ事に至りては、下野遠光氏の、日本女學史のほか、いまだ記述せるもの無きが如し。己の、こゝに聊か述べむとするは、即ちその著述につきてなり。

さて、いかにして、そを知らむかといふに、まづ女子の著述をのみ擧げたる書（日本女學史にも、悉くは擧げず）につきて見ば、よろしかるべけれど、己、いまださる書あることを知らず。さればとて、數ある書籍につきて、一々、その作者を撿閲して、これを擧げむことは、容易き業にあらず。如何せば可ならむかと惑へる時節、幸にも、友人佐村八郎氏、この程、その著述せられたる國書解題の完結したればとて、一部を恵興せられぬ。披き見るに、古人の著書の、卷數、年代、性質、著者等、皆明亮にして、一々掌を指すが如し。ことに、その書目の多きこと、從來世に行はれたる、この類の書の中にては、群書一覽、最も稱せられたれど、それすら、これに比べては、全く九牛の一毛ほどなるべし。よりて、この書と、群書類從とにつきて、維新前までになれる、女子の著述を、讀者に紹介せむとす。

我が國維新前までになれる女子の著述は、全體にて、幾何あるかといふに、國書解題のは、僅かに五十部に止まる。これを同書に擧げたる總書數、一萬五千餘部に比ぶれば、大凡三百分の一に當る。その卷數は、百七十四卷にして、その中にて最も大部なるは、源氏物語五十四帖なるが、これにつぎては、枕の草紙十二卷なりとす。次に、その種類を擧ぐれば、最も數多きは、自らの歌集にて、その數廿四部あり。次には日記類、六部、紀行類六部、物語文章類五部なり。その他は、教訓類、歷史類、隨筆類、數學類等にして、いづれも五部

以下なり。このほか、群書類從に、十五部十六卷あり。又その作者は、如何なる人々に多かりしかといふに、宮仕の女房等に多くして、その他には少く、その時代は、平安朝に、最も多きが如し。今、その書目、卷數、著者等を、左に擧ぐ。

奥州ばなし（一）	只野眞葛
赤染衛門集（二）	赤染衛門
阿佛乳母の文（一）	阿佛尼
文　布（二）	倭文女
祐子内親王家紀伊集（一）	紀伊
いかほの道ゆきぶり（一）	倭文女
池の藻屑（六）	荒木田麗女
十六夜日記（一）	阿佛尼
石原記（一）	黑田直純母
伊勢大輔集（一）	伊勢大輔
伊勢集（一）	伊勢
磯つたひ（一）	只野眞葛
和泉式部集（七）	和泉式部
右京大夫家集（二）	右京大夫
馬内侍集（一）	馬内侍
庚子道能記（一）	武女
蜻蛉日記（八）	右大將道綱母
加茂保憲集（一）	保憲女
源氏物語（五四）	紫式部
賢女物語（五）	滿女
小馬命婦集（一）	小馬命婦
古今和歌六帖（十）	紀貫之女
小町集（一）	小野小町
權大納言典侍集（一）	權大納言典侍
齋宮女御集（一）	齋宮女御
相模集（一）	相模
狹衣（八）	大貳三位
算法小女（二）	平孝子
讃岐典侍日記（二）	讃岐
佐遊李葉（一）	百合女
佐與子詠草（一）	武田佐與子
更科日記（一）	菅原孝標女

重之女集（一）　源重之女
俊成卿女集（一）　俊成卿女
杉のしづく（一）　荷田蒼生子
月なみ消息（一）　鵜殿よの子
通女歸家日記（一）　井上通女
月のゆくへ（二）　荒木田麗女
中務内侍日記（一）　中務内侍
庭のをしへ（一）　阿佛尼
濱松中納言物語（八）　菅原孝標女
辨乳母集（一）　辨乳母
辨内侍日記（二）　辨内侍
發心和歌集（一）　選子内親王
枕の草子（十二）　清少納言
松蔭日記（四）　柳澤吉保侍女
民部卿典侍集（一）　民部卿典侍
紫式部家集（一）　紫式部
紫式部日記（二）　紫式部
往事集（五）　井上通女

右のほか、群書類從に見えたるもの、左の如し、

和泉式部日記（二）
經信卿母集（一）
本院侍從集（一）
清少納言集（一）
出羽辨集（一）
待賢門院堀川集（一）
小侍從集（一）
權大納言典侍集（一）
嘉喜門院御集（一）
檜垣嫗集（一）
中務集（一）
康資王母（一）
二條大貳集（一）
二條院讃岐集（一）
殷富門院大輔集（一）

これもとより、國書解題と群書類從とに擧げたる書のみなるを以て、このほかにも、なほ數々あることなるべし。されども、かりに、この他に、一倍ほど(世に傳はらぬは別)あるものと見むも、我が國女子の著述は、決して多きものにはあらず。また歌集の如きは、後人の集めたるも多ければ、普通の著述と同じからぬものあるなり。とにかくに、まことに多からざれども、その中には、永く文學界の珍寶として、人々にもてはやさるゝ、源

氏物語、枕の草紙などありて、我が國の文學に、大なる影響を及ぼしゝは、殆んど男子をして、後方に瞠若たらしむるに足れり。

右二書のほかに、歴史の事實を記したるものにて、池の藻屑、月の行方は、古の世繼、續世繼、増鏡などの體を學びたるものにて、いさゝか他と趣を異にせり。また、たゞ一部のみにて、他に類なきは算法小女なり。佐村氏曰はく、算法小女は、約術以上點竄法の自問自答の算書なり。善本として賛美するに足らざれども、當時の出板として、大に見るべきものあり。況んや、女子の算書に於いてをや。古來女史にして、算書の出板ありたるは、唯此の幸子ありしのみ。安永七年戊戌(二四三八)出板す」と、又曰はく、平幸子は、將士平某の女なり。攝津に居たり。後ち東都に來りて、城東に住し自ら索中隱者と稱す。」と、いはれたり。

以て、その大概を知ることを得べし。

女子の著述にて、まとまりて世に出でたるものは、右の如くなれど、女子にして、歌文、俳句等の文學に秀でたるを以て、世に傳はれるものは、決して少からず。さらば、世に出でたる著述少しとの故にて、直ちに、女子に文學者少かりしとは、いふこと能はざらむ。

明治の大御代となりては、女子の學問することも、昔に變りて多くなりたれば、その著述の、世に出でたるもの、甚だ多く覺ゆ。以後、文化の進みゆかば、やがて、古の淸紫を凌ぐ傑作の世に出でざるべき。その然らむことを望むは、我が國の文學を思ふ者の、誰も均しき所なるべし。

終に臨んで、おのれは、この一篇の、頗る粗漏杜撰なるを讀者に謝せざるべからず。さるは、今少し、諸書を參考し、捜索して、完全なるものとな

すべき考なりしが、その暇なくて、こゝに載せたればなり。讀者、もし、その不足を補ひて、本誌に寄せられなば、已の幸のみにもあらじかし。

よき會話家

蓼花

能辯と雄辯の間には、大なること渠溝の如き、差別あり。人々必らず、善く之を知りたらむ。わが拙き筆を以て、之を辨別するの勞を、取るべきにあらず。よき會話家とは、饒舌の人の謂にはあらず。饒舌の人は、恰かも、能辯の人の如く、よき會話家は、雄辯の人に似たり。かれはたゞ、舌の運轉滑脱にして、その動くこと、常人にまさりて容易きにして、これは、腦裡清明にして、舌の運轉常に、論理をあやまらざる、神經の指導によりて、行はるゝなり。今の世は、能辯の人、饒舌の人、徒らに多くして、雄辯の士と、よき會話家とは、全く之を缺けりといふも妨げず。これ豈に、社會の一大恨事にあらずや。

俗に、井戸傍會議の目あり。無智なる下等社會の人々の、饒舌なるを罵れるなり。而かも見ずや。多少の學識を具へ、身を中等社會以上に處く人にして、猶且つ、暖爐邊會議あり、宴席會議あり。男子は比較的に、その業務に忙しきを以て、かゝる會議に與ること稀なりと雖ども、女子や、概ね閑散にして、遊覽に時をうつすにあらずば、必らずや、この種の會議を起す。女子の智識は、男子のよりも、早熟にして、淺薄なりとは、往々にして、耳にする所、かゝる會議の議決が、概ね賞すべき事にあらざる、亦、以つて証とすべし。三女にして姦。姦は惡しき行なり。女子が相會したる

とき、必らず多少の、悪事を企つる事、遠き昔よりして、あり來れるにか。

かくいへばとて、余は女子の會合を、非定するものにもあらず、女子の談話を、廢止せよとの、議を建つるものにもあらず。却りて、この益々進むべき社會に於いて、女子も亦、大に社交的生活を、營むべきを勸めむとし、大に人と對して、談話を盛にすべきを説かむとするものなり。たゞ、その會合や、その談話や、今日普通に行はるゝが如きものにして止まらば、斷然として、寧ろその無きを希はむと欲す。所詮、今のまゝの、會合と談話とを以つてしては、世の志あるものが、如何に、社會改良に、絶叫し、女子教育に、大呼すとも、決して、その効を見ることなかるべし。

言辭を須ゐるまでもなし。從來の會合と談話とは、大に改良せられざる可からざるなり。會合のことは、しばらく言はざるも、談話の題目を聞かざるか。俳優その他、藝人の噂にあらずむば、衣服裝飾の評、新聞雜誌に於ける、講談小説の評にあらずむば、物見遊山の相談。或は他人を惡評し、或は人の短を罵り、或は人の過を數へ、相會して、二三語に至るや。直ちに、他人身上の事に及び、更に五六語にして、忽ち之を嘲り、笑ひ。自ら省みむとするの心、絶えてあることなく、ラロシフコオルが所謂、人を賞むるは、自ら賞められむとする時にのみ、之を行ひ、人に過ありと言ふことは、已、過なしとの義にあらずといふ、箴言を曉らず。饒舌のため、時に言下に、秋風寒き、思ひあることあり。衝口して出づる處、しば〳〵、駟馬も追ひがたきを、嘆せむ。語るもの、退いて快味の覺ゆるときなきのみにはあらず、聞くもの亦、甚だ心を安んせざるに至らむ。これ饒舌なる

會話家のみ、決して、よき會話家あらざるにはあらず。よき會話家の話題を取るや、材を卑近に起し、興、愈、酣にして、快、益、大に、一話了りて、滿室の氣清爽なるを覺え、身を仙境におくの思あり。話境進むこと深くして、聞者は實に醉ゑるが如し。高尚なる趣味を以て、學德兼備の人の口より、發せらるゝにあらずは、焉ぞ能く、かくの如きを得むや。獨逸の將に、大に起らむとするや、「會話辭典」なるもの、先づ盛に行はれたり。世間の趣味を高め、會話の材料を供するもの、之にこえたるはあらず。歷史地理よりして、理化百般の學術的事項はもとより、政治法律上の事件、術語の如きに至るまで、細大之を漏らさず。一に英の百科辭典といふと同じ。その百科辭典といはずして、會話辭典といへる所、また以つて、その國人、意の在る所を、察するに足らむ。今の社會にして、止まりて可なり、敢て進ましむるを要せずとせむ、余亦何をか言はむ。苟くも、社會の改善を、希圖せむとせば、先づ婦人社會の、會話の材料よりして改撰し、新しき社會の需に應ずべき、よき會話家を養成せむことを勉めざる可からず。

國語統一案

秦　政　二　郎

統一の必要

世界、何の國にても、先づ、其の國語國文の一定するや否やを觀察せば、即ち國民團結して一の國是の下に統一せられ居るか、又、おの〳〵分立部落の生活をなし居るかを知り得べく、從て其の國體の強弱をもトせらるべし。今、我が國體の槩

略と、國語國文の沿革を繹ぬるに、此の國土は、畏くも、吾等が先天の大君たる、皇室の大祖が開かせ給ひし皇國にして、此の國民は忝くも、わが　皇室より分派せし皇民の子孫たる、世界唯一の日本人種なり。大和民族なり。外邦の如く、蠻族四方より烏合して、各其の土地を拓き、就中、雄大なる者、或は、兵力ある者、或は、財力ある者等を擁して君主となし。其の力なきに及では、之を廢し、若しくは、弑殺して自立したるが如き、民主國にあらず。則ち吾らの祖先より、君臣宗支の關係ある、萬國無比の君主國なり。世界統一の天職を有てる、大家族國なり。されば、神代開國の後は、多少外邦より移り住める土人種の地方語もありしが、約ね日本民族一系の通語にして、特に言靈の幸はふ國なれば、應用自在なる言語を以て、思想を交通せり。

其の後、種々なる地方文字起りしかど、皆只日用の記號字に過ぎざれば、國語は常に一定して、言文同致に安んじたり。之を要するに、地方文字所在に起りたれども、國語一定して、言と文との間、未だ相離隔せざりしなり。斯の如く、分數なる地方文字あれど、世の大數は尙ほ言語を選んで思想交換の通貨となしたれば、地方文字は漸く総合せられて、竟には、全國一定の文字成り出でんとするに、先だち、漢字漢文の一分子、わが西陲の沿岸に渡り來りぬ。

尋いで征韓の止むを得ざる勢となりて、彼の我に屬せしより、紀元九百四十年代始て漢字、及、漢籍を公に採用せられ、紀元一千六十年代に及び史官を諸國に派して、民の言事を錄されしより、漢字自ら全國の一定文字となり。隋唐と直接の交際ありしより、言思の代表、及、事物の記錄等は、

專ら漢文世界となり、紀元一千三百六年の改新以來は、漢文を以つて干祿の材とせしかば　天武天皇、大に之を改良し給ひたれども、漢語は竟に固有の國語間に行はれ、言文相分れて、全く、離隔の源をなせり。之を約するに當時全國の文字は一定したれども國語區々にして言文の距離、漸く遠かれり。

其の後紀元千三百七十年來平城の朝に至りて、李唐文弱の餘弊を承け四六排偶の體一變して、華飾浮誇の虛文に流れ、對句層語の歌文に耽りて、實用を顧みず。わが國をして、宛も、唐人の公園たらしめんとせり。之より、假字の用、詩文と對峙し、只花鳥風月の侶伴にのみ用ひられて、草體漢字交り文、音訓混讀の始めをなせり。

降つて千八百四十五年より、鎌倉幕府の時代となりては、素武の俗をなして、花月閑雅の風少きが

爲め曾つて、其の侶伴たりし、文事は、自ら必要を失ひたれど、兵のみを尙びて、筆硯典籍の事を、僧侶に一任し、評定衆、寄人の屬まで、書牘文を以て、思想を表し、（今の所謂手紙文の源なり）甚だしきは各自の姓名を記すに足れりとせり。

紀元二千二百年代、足利の季世より、群雄割據の頃は、文事、全く地に墜ちて、地方語の種類、數へ難きに至り、言文の距離、ます〳〵相隔たれり。

二千二百六十年德川氏偃武の政略を以つて、雄大なる外藩の尙武心を殺がんが爲、佛教、茶事、插花等の興隆と共に文藝を振起せしめたれば、是より、宋儒理氣の學、元明詩文の擬連歌俳諧の如き、風流の間に行はれて漢文直譯の體起りしが、稍、わが國體を辨へたる者は、故に平城時代の擬古文を作りて世道を論じ、或は漢文の折衷派と互に考

體文を以て、實用に應じたれども、又、歌詩辭章を事として、所謂花月の伴侶たらしむる弊を伴ひたり。是、わが古の習弊として、上流の者のみ、文事に關り、中流以下には、學事の要なしといふ支那風に倣ひ、文章は必ず學者の專業として、國民普通の教育に用ひざれば、上下社會の交通には勿論科學民業の上にも、必要を感ぜざりしなり。紀元二千五百二十八年明治維新の際に至りては、更に西洋物質の開化を摸するに急ぎ、大化の古、妄りに唐癖に流れたる轍をも省みずして、之を同化することを能はず。從來の混淆文に加へて、歐文、直譯體を交へ、前代、未曾有の奇觀たる渾沌文となりて、言語、文章共に一定せざるのみならず、言文の離隔、是に至りて極まれり。

吁、我等今皇上大政の下に統一せられて同胞一致の國風を保ちながら、言文の渾沌たること、斯の如し、いかでか、之を統一せざらん。

凡、此の統一は固より、斯學者の任たるのみならず、亦、國民の本務にて、國語國文は、之を人倫に譬ふれば、吾人の父母なり、吾等同血の父母に教育せられて、一系の同胞と共に、父母の言語の下に四十餘萬の兄弟を契り、此の一家族の脈管を連絡して、國體の全き强健を維持せるなり。されど、縦ひ幼より外國に在りて、わが國語を知らず、外國語に依りて、育てらるゝも、何わが國語の慕はしきを。況や、生るゝ、即ち、漸々と相馴れて、此の言語に養成せられたるをや。實に國語は、國民の精神を一結する者にして、千里の海外に在るも、其の船中に、わが語の通ずる人あらばいかに喜ばしきか。況や同胞の一船に在るに於てをや 然るを、世には、己れが父母たる言文の一端を見て、迂遠なり、固陋なり、野蠻なり、因循

なりと罵り、益外、邦語を慕うて、わが國文國語を混同せんと欲するが如き、見識なく、氣慨もなき外國學者あり。其の意蓋し、心醉に在るか、或は、自家の爲めにする所ありて、然るか知るべからざれども、實に、是自巳の父母を嘲りたる不孝者なり。忠臣烈士は、此の不孝門より出でざるなり。夫の毎日養ひ育てらるゝ父母の大恩を忘れ、偶一片の菓子を惠まれたる他の父母を德として慕ふが如きは、果して、萬物の靈長なりや。孝子たる者は、必ず、此の渾沌を一統して、父母の名を揚げざるべからず。

然りと雖、之を統一するは三長兼備の大博士にあらざれば、果し難き大業にして、必ず、斯學を專攻したるのみならず、又深く、音韻語源學史哲學生理地理博言論理敎育の諸學、及、漢歐佛の學に通じ、兼て斯學の專門普通敎育に經驗ある者、若しくは、普通敎育を經て、專門に研究したる諸學の大學、一堂に會して、相議し、然る後始めて、大成を見るべきなり。

定義

國語國文の定義は全國一定の言文を保つをいふ。これ、一は其の國體を維持し、一は國體の光威を光かし、一は國民の獨立せるを表はすなり。若し不幸にして、一定の言文なきか、或は外國の言文を假り用ふる時は、既に、其の國體を傷つけ、國光を滅し、獨立を失ひたる者にして、則ち一國言文の定義なき者なり。されば、漢學者にまれ、英學者にまれ、政事家にまれ、宗敎家にまれ、農工商にまれ、軍人にまれ、醫師にまれ、婦女にまれ、先づ、此の定義を識り、普通國文の敎育を受けて然る後專門の業に從事せむ、よく、其の學びたる者を同化して、夫の三者を過まるが如き事ならん

若し、然らずして、其の素を養はざれど、各、崇とする所に心醉して、其の極、阿部仲麿たり、物部徂徠となるのみなり。

外國にても、獨乙の愛國學者ルーテル羅甸語より國語の基を建てしが、フレデリック王の佛語を崇ひしより、第二聯邦組織の望まれざるは勿論全國殆ど佛蘭西となりしが、有名なる文豪ゲーテシルレル等が政傑なるスタイン以下に一致し、國語を以て、普通教育の根柢とせしより、幸にして、佛蘭西の公園とならざりしなり。されども其の後無稽の徒ありて、往時を夢み今日の社會黨等は國語の固陋俚俗なるものを、擧げ、田舍語なりとして佛英等の語を採用せんと議するものさへ多けれど、ビスマークは、剛に國是を執して、其の説を斥けたり。（是等は曾て、大日本政體史の自序に引證せり。）

凡、國語國史の國家と大關係あるは、今更言ふを俟たざれど、西人は初學、先入の文思を起さしめんが爲め、文典の劈頭には必ず「パーツオフ、スピーチ」を以てせり。則ち先づ、國語の性質を示し、一定の言文を以て諸科學を連鎖すべき金線たらしめんとするなり。わが日本國民は古來一致して、忠君愛國なる歷史を保ちたれば、外國の如く異に同音の國語を以て呼應せざれば、外人の公園となり、殖民地となるが如き虞なけれど、忠勇なる國民は、自ら國語を卑しめて、外國語を尊ぶべきにあらず。わが國史を蔑にして、外邦史を重んずべからず。わが國教を措きて、外教を奉ずる能はず、情理の上より、必ず國風を愛護して、力を改進に致すべきなり。若し、之に反して、言靈を賊ひ、教義を亂すあらば、罪を數へて亂臣賊子といはんのみ。

古より、濫に外國の文物を崇拜して一國の團結を解くは、總て國語國史等を輕んずる物質學者、或は國躰を顧みざる盲政治家にして、斯の如き國はいかに獨立を希ふとも得べからざるなり。

そも〳〵自ら悲むべきは、渾沌たる、今の國文國語にして、固より、之に滿足すること能はず。故に此の渾沌中より、專ら固有語を抽き取り、又、外來語にても、固有語に譯し得られぬ名詞等の、既に全國一般の通語に用られたる普通語（今より後さても亦之に同じ）は採つて、之を收め、最、適當なる言文を一定して、ます〳〵、皇國の國躰を固め國家の光威を輝かし、國民の獨立を表はして、萬國に雄飛せざるべからず。

然るに今わが國には、只、歌文の古調に醉ひて、自ら國學者なりと誇れる者もあれど、これ眞の國學者にはあらざるなり。但し、余は國文に心醉して、文弱たれといふにあらず。極端なる精神敎育に偏して、忠義狂を作らんとするが如き愚をも學はず。只夫の外國學にのみ溺れて、國躰を知らず或は實業に僻して、質の文に克するが如き弊を恐るゝのみなり。

目的

總て、何種の學科を修むるにも、各目的あり。然れども、其の目的には得たるあり、失まれるあり。國語科の學も近ごろ、之を以つて諸敎育の基礎となし、國民をして、普く國文思想を有たしめんとする目的の躰を立てつるに至りたるは、寔に國家の大幸なり。

抑國語は智情意の三識眞善美の三術を化合する原動力にして、諸の科學も、諸の智識も、皆、之に依つて得らるゝ者なり。換言すれば、國民同胞の意思を交通し、國民を敎育し、智識を增進せしむ

るにも、皆、此の國語を口にし、筆にせざるべからず。從つて、國語國文を一定せざるを得ざるなり。然るに、世間往々、其の本旨を察せず、所謂目的の用を誤りて、專門普通を混じ、普通學の範圍に於いても、其の階級連絡の漸進を稈らず、初等より專ら古語を說き古文を教へ單に美文美辭の方に傾きて、實用に適せしめず、甚しきは、文屬せしむるにも、擬古体を尙とびて、讀本に作例に、皆、其の摸範を以つてせり。然のみならず、漢文敎員は、四六駢儷より說文文選の如き支那の古文辭、及、句詩の調、或は、唐宋以下の直譯体を學ばしむるあり。洋學敎師は英佛の小說新体詩に酩酊して、韻文調、或は字典の直譯語を習はしむるもあり。されば、我國にては、柿本人麻呂、紀貫之、紫式部淸少納言、鴨長明兼好法師、北畠親房、新井白石、貝原益軒、本居宣長、平田篤胤、伴蒿蹊等、支那人にては、孔孟、遷固、白李、韓蘇、陶王、程朱等、西洋人にては、チョーサ　シエークスピヤ　ルーテル　ゲーテ　シルレル　コルネーユ　ダンテ等の古人異世の外國人が明治の新聞雜誌記者、墮落書生の小說家等と、此の日本の一堂に會して、支離滅裂したる混淆談をなせるが如き觀あり。是皆、專門學者の師にして、古代の文辭なり。然るを、今國語としいはゞ必ず、本居平田の諸翁より遙に故人の文を標準とし、漢文科には、程朱より遠く、上世の辭章を祖述し、稍、英語を學びたる者は、シエークスピヤ等より、以上に則り、獨語の門に入りそめたる者は、シルレル以上を宗とし、羅甸、又は、伊語の糟を嘗る者は、ダンテ等を稱して、各、時文の師と仰がんとす。實に誤の甚しき者といふべし。

凡、故代の文脈は專門科學の參考物にして、孔孟

等の說は究むるも、わが國敎の萬一を補はんが爲なり。支那人となりて、姓名を改め、或は、自ら屈して、東夷と稱せんが爲ならず。樂天淵明等の文を見るは、其の美辭氣韻を知らんが爲めなり。ゲーテ、ミルレム等を景慕するは、彼等が愛國の文思に倣はんが爲なり。其の他佛經、及、「バイブル」を讀むも、宗敎の源理を探らんが爲にして、わが國敎を措き、わが歷史を省みずして、十字架に死せんが爲ならず。(然るを心醉の極古代の妖僧行基等が本地垂跡を說きて、わが神州を瀆したるが如く、　皐上に、傳會して、十字架の徒となし奉らんとする人畜動物を生ずるに至る)されば是等は皆、普通文の標準にあらで、則ち專門學者の、わが文學に同化し、國家經倫の一分子たらしめんが爲なれば、敷島の大和錦に織りてこそ、唐紅の色もはえあれ。況や、わが古代の國文を以つて悉く、今代の普通文たらしめんとすることの迂なるをや。

今わが國文の文體、及、時代を按ずるに、上古中古近古近世、及、今世の五體あり。(言語を類別する時は、先づ、太古の口傳時代あり。)上古體に平城時代あり。平安時代あり。平安時代に延曆風、延喜風、物語風、佛化風あり。中古体に鎌倉時代、室町時代戰記時代あり。近古體に、假武時代、元祿寶永享保等の時代、及、戲作時代あり。近世體に、今古糅雜時代、蘭學和譯時代、漢洋參化時代あり。何れも、不都合ながら文體に、各時代あり。されども、今世に限りて、普通文は勿論新聞に、雜誌に、小說に、公文に、書牘に、私信に、皆漢文直譯あり。洋文直譯あり。國文擬古風あり。俚言小說ありて、文體一定せず。故に、余は名づけて、之を渾沌時代といへり。吁悲まざるべけんや。

そも〳〵渾沌は事物一定の原因なれば、又豫め、喜望して待つべきなり。さても、待つべきは時機なれや。其の得失は知らざれども、近ごろ稍、この目的に注意するに至れり。今、其の二三を上げんに、先第一には、初等なる小學生徒が「こそけれなん侍る」調にて、「今日六時の一番瀛車で、上等の切符を買うて、東京へ參りますから、人力車をもつて來て下され」といふことを

けふしも、六つ時の初のひぐるまにて、貴き限りのわりふを賜ひあづまの都にまう上りなんさす。あはれ人ぐるまをば、物し給はなん

の如き古文を作り、又新年の郵便はがきにまで、

あら玉の年の初めを祝きて、長へにと祈る君が代。

と書くに至りしより。教師は、之を教ふるに困り、生徒は、之を學ぶに苦しみ、普通文として、通貨たるべき價なきが爲、無智不文の徒は、新に一の外國語を加へたるが如き不便を感じ稍文字ある者は、實用に供すること能はざるを、慨へ、己等が年限なき家塾教育に就きて漸々學び得たる舊習を引證し、又、不用なる漢籍の却りて應用し、易きを論じ、自ら、漢文改良の旗を翻して、之を奬勵せしかば、再び「其れ然り、豈夫然らんや。況んや斯の如くならんとは」などいへる直譯體となりて、

即日六辰の最始列車を以て而して、貴値の券符を賜ひ、正に東京に向はさす焉。宜しく、且つ腕車を具して以て、之が備應をなすべし矣

の如き陳腐漢文を屬し、又、年賀のはがきにも、

恭賀此新禧　敬頌二其萬祉一併謝二平素疎一希三更辱二往恵一

といへる詩にあらず、文にもあらず、支那の捕虜に筆話する時より、外に用なきが如き、唐人の囈語を弄びたり。是に於いて、洋學者流の自稱教育家は寧ろ平常の談話に近き翻譯調に若かずとて、意想のまゝを書かしめたるに、

渡は吉野山にまで往き、能ふ限り南山に於て、「ファノザ」を従へたりし、其の花の比較的吉野よりもより多くである、彼は老人なりし杖に於て、歩まれつゝありし

など、作文わりしより、教育者等、大に悲みて、和漢洋の長したる所を採らんと欲したり。されど三國合の子調たる奇文を見るに至れり。則ち、左の如し。

彌生のいと麗かなる日、友とちこれかれ打ちそゝのかして、一瓢を携へ、杖を外郊に曳かんと、袖ふりはへて春日野の辺に物しつ、此日、天氣清朗にして、馥郁たる梅花金風に翻り、倩分爛熳たる櫻花、既分綺羅たる紅葉と競争し、錦繍たる黄鳥は、淺間に囀られたり、其のさま絶對的に、之を批評せば、窈窕たる淑女の天樂を奏するかと怪まれぬ、之を「インタールゲーションマーク」すること數十分既にして、眼を轉すれば、一帶の妖雲山の端に鈎鎚として、見る〳〵一天群雲となり、砰おごろ〳〵しく鳴りはためき、朔風、之に加はりて、霰を弱くが如くゆくりなき、白雪片巴も散り亂れ、北陸の吹雪も啻ならず、より多く積りて、地上にまで堆くなりし矣、依てとある賤か伏家に憩ひたれども、益嶮峻にして、中々に還り能ふべくあらぬ、居ること數時にして、天漸く晴れたり焉、是に於て乎、茶代を白雲の老人に投し、辭して行く事數里、浩濱たる曠原に出てたりき、之なん名にしおふ武藏野の原にして、日既に西山に曰づきたれば、驚き起ちて、脚に鞭うち、磁針の指す方を右にして、急行せり、かくて、行くまゝにいつしか、島かなく東路となりて、先づ鎌倉に辿り着きぬ、然り而して、日全く暗れたれば、直に發して浜くしげ、箱根の關を、小淘綾の大磯小磯打過ぎて、富士の高嶺を三穂か崎、こゝはいづこと遠江、今はやうやう足重く、いとゞ苦勞を駿河道、夜も闇になるみ潟、美濃尾張さへ知らぬ火の盡し果てたる思ひにて、老蘇の森と聞くからに、鏡の山をなつかしく、涙はいとも森山の下路を彷徨へば、郵便脚夫に大津道や、其の他の人に粟津なる、馬屋を過きて九重の帝都迄に伏し拜み、伏見の里を夜船にて、よしあし知れぬ難波津に、船ばてしてぞ明石潟、漁笛一聲夢破れ、白濱さわぐ綿積に、身を浮船の浮き沈み、いつか時雨のふる里に、辛うして歸りつきしは、空蟬の夜中過ぎつる頃なりし、やがて硯に向ひ、燈下にかくなん。

是に至りて、さすがの教育家も、只呆然たるのみなりしが、同感の學者各意見を著はして、目的を定めんと欲し、或は、在來の種々なる文體をば、專門教育の研究となし、普通教育にては、言文を

一致せしめんとせり。されども、

おんたはんごこいいきゃはりまッか

にても嫋々たり。

おいら上野の公園にッて、てはさうでもして見やうしらさ思ッてるんだ

にても野なり。

おはん、おいどんさ、一ぺいこッぺい、さるいちッこんか

にても通せす。

あすた、すんばすの、いつばんぎさで、かやるふさ、たぐろ

にても訛なり。

だんべー、ばつてん、ヘッちよ

なども、其の典語は正しけれど、用ひ難し。

諸君吾輩が、責任問題を決行せんさ欲する所以の者は、業に已に、昔年に原因しさる所の、大々的鐵血じやから、何でもかんでも構ふこたあない。其の爲す所は、是か非か知らないが、積極的に反對じや。おまけに氣に喰はないのは、外國奴で、やつ等も善か惡かは知らんが、敵愾心で以て、無闇にやッつけてしまッたらうさ思うが、諸君以て、如何さなす（ノー／＼、ヒヤ／＼）

といふが如き、演説調も採られず、眞の普通語は、方言中より、彫琢したる者を、擇んで談話語を直に文に寫し、一切漢字を廢して、假名のみの標準語と定めんといふもあり。さにては、

むかしいちにんのいしやあり、あるやくしやによばれて、いたりしに、やくしやはおほいにおさろいて、おまいさんはなにひさかさいふ、いしや、わたくしはいしやなり、さこたへたればなにしやうばいにするひさかさーふ、いしを、しやうばいにするものなり、やくしやのうちからよびにきたさのことゆゑ、まゐりたりさこたふ、やくしやはつひにわからすしてそのひもくれたり、

といふが如き、文も、くすし、いしだくみ、わざおぎびと、くすりわきびと（くすりやとしては、地方により、蛤屋をくすりやといひ、藥種屋をやくしやといへば、却りて混じ易し）とせざれば、くぬきかつらのかはの誤解を免れず。されども、此の類を以つて標準とせば、又、甚しき時代違の

混同文となるべし、仍て羅馬字に綴らむよからんといふ人ありて、之を試みたるに、國語歷史、書物、紙、私、などいふ名詞にても、

くおくうぐお、ゐにきすい、しおむおつう、くあむい、うあさあくすい。

と書かざるを得ず、是に於いて、新國字論起り、新綴、字法を創して、こくご、れきし、しよもつ、かみ、わたくし、

とかへむ簡便ならんといへり。如何にも、國語を統一して、言文を一致せしむる爲には、此の新字綴語法も、一理あれど、高等國民教育の爲には、一新字形を增すが故に、不都合なり。且つ古來、漸々に離隔したる言語と、文章とを、順序もなく標準もなく、急激に近接せしめんとする目的は實に危險にて、もし一籌を失まることあらば、必らず、潰亂して、又收むべからざるに至らん。故に、今先づ左の順序標準、及方法に從つて、成就すべきなり。

其の他國漢文の守舊派、之に對する、改良派、折衷派、漢文削減派等の說あれども、各實行し難きことのみなれば、茲に略せり。

統一の順序

凡、事物に本末始終あるは、自然の天則にして、之を順序といふ。されば無形の事業をなすにも、必ず、其の順序あり。之を有形なる物質の事業に譬へんに、採鑛冶金の術にても、先づ、其の試掘を施して、次に、竪坑を穿ち、排水道を作り、通氣管を設け、點火機を備へ、次に、採掘法に從事し、次に分拆精錬の目的を成就すべし。若し、其の順序を厭うて、一時に鑛山を火けば、只、其の害あるのみにて、其の利を得ざるが如し。されば、わが言文を一定せんと欲する者も、亦、之に鑒みて、必ず、其の順序に從はざるを得ず。此の順序

は固より、各自の見る所に任すれども、亦、其の得失を講究すべきなり。

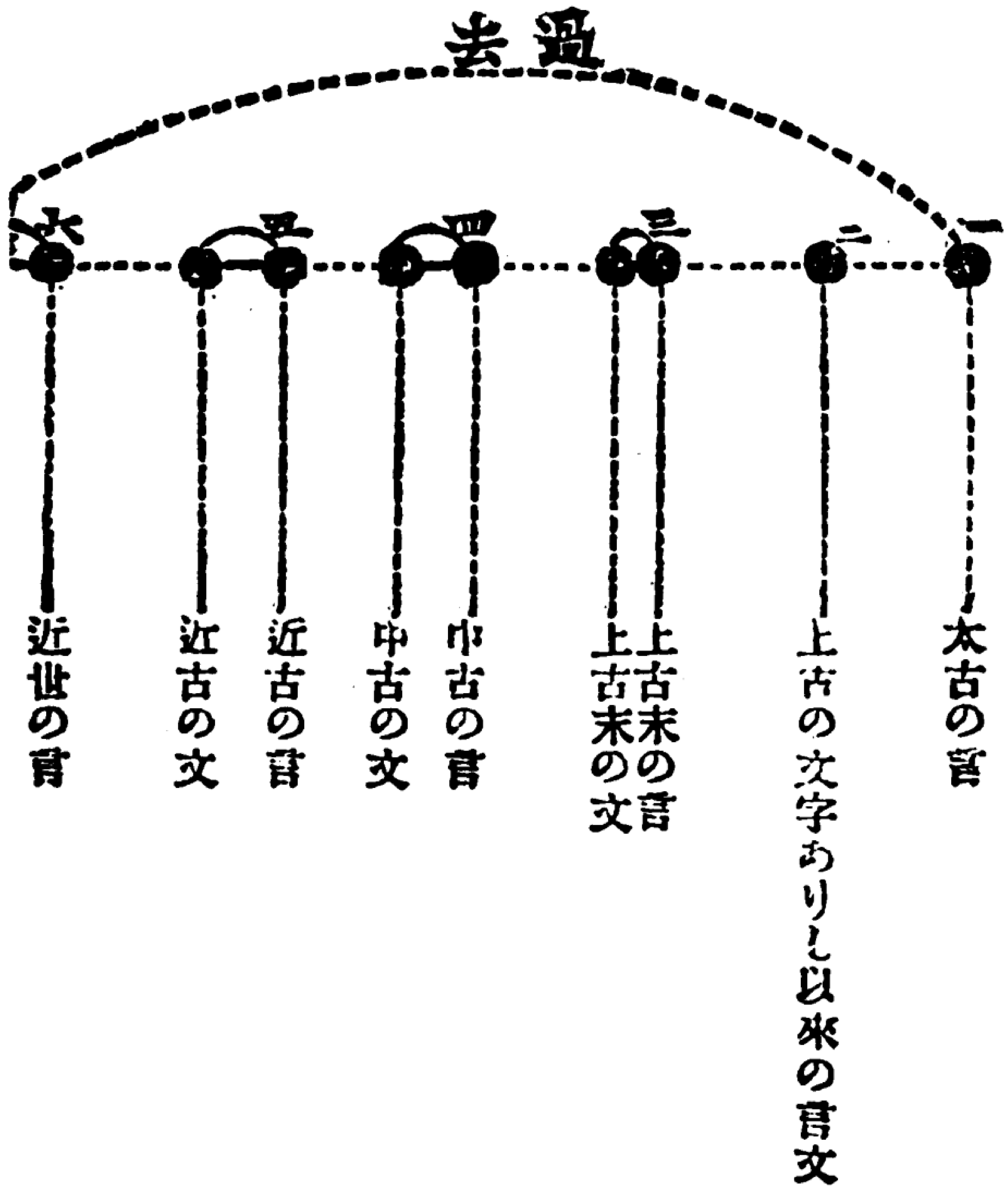
今、余の管見をいはゞ、則ち、二期の順序に從ひ、其の第一期には、先づ、漢字交り、文の句讀法中最も、妥當なる標準を擇び、全國統一の通語通文を定めて、稍言文を近接し、完全なる方法を以て、之を普及し、第二期には、前期の通語通文を標準として、更に適當の改良を加へ、羅馬字、或は、假字を選定して、十全なる綴語、綴字法を以つて、言文を一致せしめ、竟に統一の大目的を達するにあり。

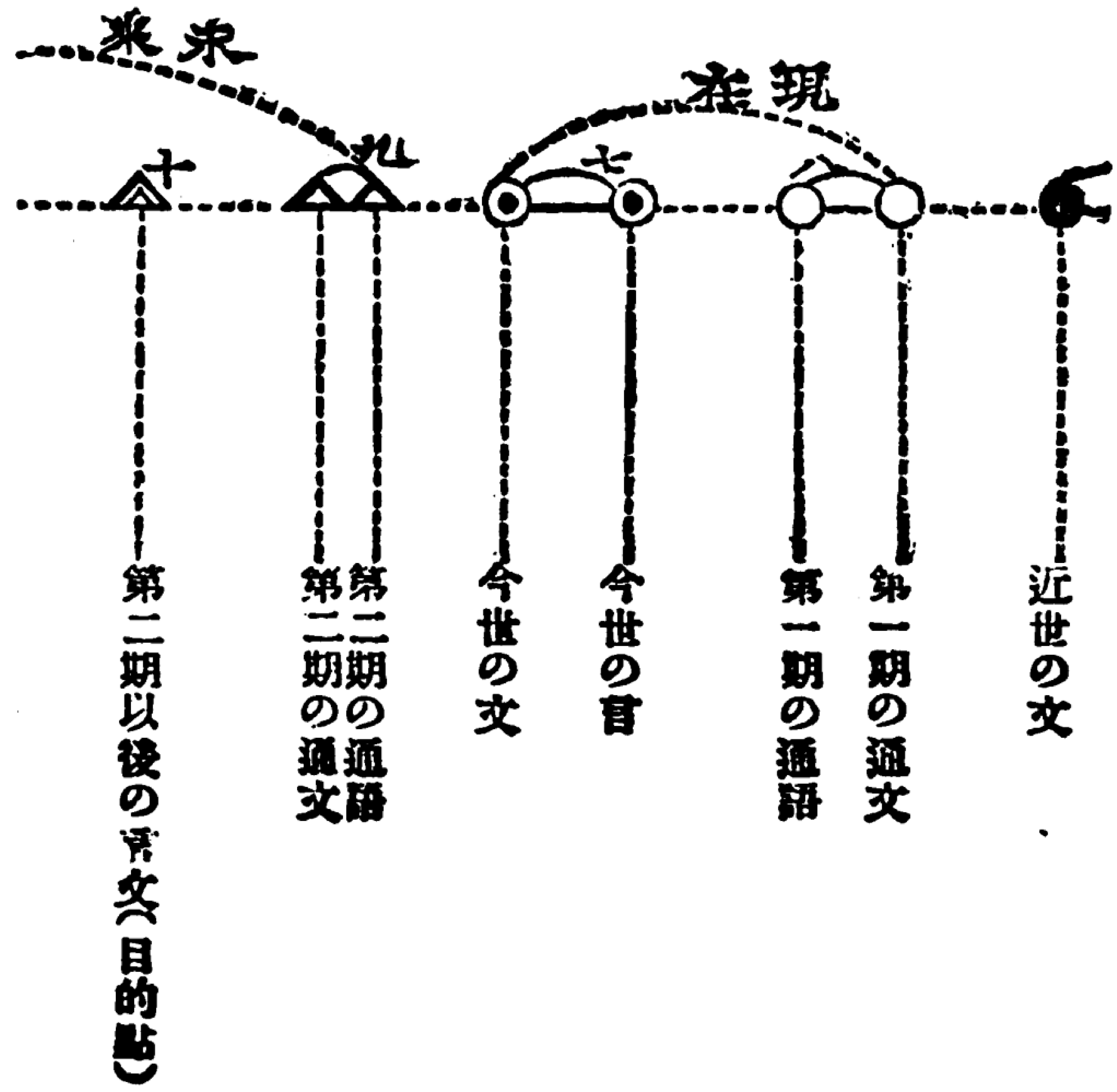
されど、各期の年限は、豫め定むべからず、則ち第一期の目的を遂げて、然後、第二期に改進せん。但し、第一期は、約ね、二十年にて成るべし。如何となれば、先づ、今より着手せば、三年以内に其の標準を擇び得べし。次に、兒童の始て、小學に入り(上にいへる改定學制にて)中學高等科をへて、普通の教育全く終るべき、年限、則ち、十四ヶ年にて、其の結果を見らるべし。是より、更に三四年間高等、專門の研究にて、得たる成績の如何を試むると共に適當なる改良を加へて、第二期の準備をなしつゝ、之を標準學校にて、實驗せば可ならん。

さて、第一期より、第二期まで、深く研究すべきは、音韻言語の本源、及、語法文法の學にして、音言の神髓は、博言學以下の學理と實際の眞理とに照して、練らざるべからず。又、第二期後の言文一致といふも、前に所謂、一致派の一致と同じからず。則ち、言語文章を全く同一たらしむるを要せざるは、開化せる人類音韻の通則にして、其の發音中音尾音には、必ず轉通省略、切約、延長歸便次、清濁音等の格あり。其一例(　)は敬語

文	言
されども　しかれどもの切約なり	されど
いはく	いはふく
うつくしうさきたり	うつくしうやき(まし)た
はなもさきたり	はなもさいた
よくよみたらば	よくよんだら

今左に順序の大體を圖せん





圖中の八は、則ち、第一期點にして、五則ち、近古の文中若しくは、六の近世文中、適當の時代より選抽して、成るべく、七、則ち、今世の言文に近く改作して大低字句の解釋を用ひずして、足るべきものを一定の通文となし、同時に成るべきた

け、今世の普通地方語より通文に近くして、正しきものを解釋談話の通語となして、言文の間を結合し、止むを得ざる通文も、此の通語にて解するやうに力めて、筆語を口語に同化せざるべからず。若し、然らずして、地方語より、標準通語を擇ばんには、亦、之が標準文を要すべし。而して今の地方言は、將來、果して變遷せざるか否や。既に通語としたりとも通文を、一定せざる間は、勿論、之を一定するまでに、其の標準なきが爲、變遷極まりなからん。されば、往時より、歴代口語のままを採りて筆語とせず、且、其の筆語を一定の通文とせざりし故、通語從つて多く、變遷したるなり。

標準

近ごろ、國語を、批評したる者の要領を蒐め閲するに、生理上、氣候上、及、飲食上、わが國と異なる外國の言語文學史等に心醉したる自稱英才あり。或は、わが國の如き國語、國體國敎なきが爲、僅に、其の國語たる俚言を以て聯邦を維がんとせる民主烏合國の外形開化に心を奪はれたる獨化の神あり。又、古の入唐留學生、學問僧等が、長安城天台山の如き、物質の文明に眩したると同じく、獅子鼻に夢想翼を生じて、自らルーテルなりと信じ、甚しきは「デモン」世界の救世主を以て任し、或は「クリストス」信者の口調にて、俚俗の言語を天堂の福音となし、之を統一して、世に知らする「マーターヤ」たらんとし、却つて自ら國語界の「デモノマンア」となれるを知らず、又、わが國の學者中にマーターヤ、ルーテルの如きはおろか、渾沌世界の救濟者ともなるべき三長兼備の大家なきにしもあらざれど、事業の絶大なるが爲、輕々しく無責任の言を公にせざるを見て、傍に人

なきが如く、をこがましくも、鳥なき郷の蝙蝠となりて、翺翔し、かたはらいたくも、國漢學者等を罵詈し、責任をも負はずして、百舌を弄し、今日の方言のみを主として、正しからざる、新成語を訂さず、自他轉用敬語の語源は、勿論國音成立の本素をも省みずして、妄に漢字を廢せんとし、新國字を行はんとする者ありといへり。果して、然らば、これ世を惑はする卓上の無稽論にして、實際に應用すべからず。」

然るに、其の中を得て、切實に當世守舊の國學者を警め、漢學者を愍みて、特に、わが國の爲、わが、同胞の爲、又、わが國語の爲獨乙の國語の如くに、貴賤老幼男女の別なく、蝦夷隼人の訛語、文人學者の雅言、大工左官の俗語を論せず、全國、八大地方語より、最、多く普通したる者を取りて、わが國語の標準となし、之を談話語として、

文にも寫し、平民的實業的として、普通教育の其語と定め、國文（前習の國文をいへるならん）は一切國文學者に任して、貴族的美術的、及、專門的たらしめん。但し、時勢と共に、理想の變遷しゆく時は、從つて、其の標準を轉移しゆくべきものなれど、縱ひ、多少轉變を免れ難き場合にても、尙、其の進行を一層知覺的に、一層秩序的になさしむる丈の制限力を有す。今の國文學者は、國語國文を混同して、依然ぞや。かの何とかて、けり、なん、こそ、かの死失せたる語法を以て、今日の文章にも、應用すれど、之等の係結は、今日の語に一もなき所なれば、古の國文は、古の語法にて解し、今の國文は、今の語法にて釋くべし。古文の規則にては、今日の立派なる言語を支配すること能はず。今日精密たる、思想を現はすには、口語の談話體を、文にも寫して、言文を一致に定めんといへる博學

者もありとぞ。其の大體は、わが宿論に近けれども、又、悉く首肯し難きものあり。所謂標準語の標準は何に據りて採るか。普通教育より、專門教育に進むには、何を以つて其の豫備とするか。今の語法とは、大工左官の轉訛語までを、標準とすべきか。凡、標準語はいかに、選定すとも、先づ、之を、標準文を作らざれば、變遷を制限すること能はず。且、其の正否を擇ぶには、必ず適當なる標準の文に據らざるを得ず。特に今日の談話語のみを文に寫して、直ちに普通教育に應用せむ、專門進學の端緒は、遂に、開かれず、其の弊必ずしも、普通教育を訖へたる後、更に數年間　專門の豫修をなさゞる可からず。故に言文の一致は、先完全なる順序に從ひて、全國の言語と文章とを、各一定の範圍に統一し、兩者を相近づけて、標準文を擇び、次いで標準語を定め、之を以て、普通教育の國語國文となし、漸く、進歩するに從つて、專門教育に要する國文、及、其の語法文法に及ぶべし。然らば普通教育を經て、實業に從事せんにも、專門教育の門に入らんにも、其の豫修の備を要せず。所謂言文一致の大成は、第二期以後の目的なり。今、大工左官等の語をも取らば、いかに選擇の法を盡したりとも、固より、文盲者の、訛語なれば、「大めん、ごっぽう」等の俚言を免れず、例之ば美しといふ語も、立派綺麗見事結搆等の類似語に亂されて、全國十分の一は、美しを用ひ、十分の二は立派、十分の三は綺麗、十分の四以上は、結構を用ふとせば、美くしといふ、美しい口語、適當なる筆語を棄てゝ、結搆といふ、結搆ならざる語を取るに至らん。いかに平民的、實業的、普通的の語といふとも、澆季の世、漸々外來語の化合したる、咿唔

轉訛の音言を取りて、古より今日に傳はり行はる、自在言靈の神髓を捨つべからず。且、ぞ、や、か、こその如き係結辭も、將來規定の標準語とすべからざれども、今の口語に、一もなき所ならずして、全國に普行せられたるものまで、廢せんといふは、則ち極端の説なり。

又國語、國文は、二種にあらず、國語は、則ち口語、國文は、筆語にして、只、古今の差あるのみなり。而して、上古文の今に、口語となれるあり。近世語の今に傳はらざるあり。判然たる古今の境界ありて、古言古文は、必ず、今世に行はれざるに非ずいと、いとゞ、いみじ、ゆゝしう、の如き、今日の言文として、或場合に用ひらるゝものも、亦、尠からざるなり。されど、今、既に消滅したる往時の時代語、及、一地方の俚言を混合し、又は内外文を交へたる渾沌體を統一して、妥當なる標準文を定め、之と、相近き標準語に、結合し、則ち、通文通語として、第一期の目的を達せざるべからず。時代語、及、一地方の俚言とは、「けしう、なん侍る、もくりこくり、こッぽう、らくちう、さんさずしす、ばッでん」の類にして、内外文とは、和漢洋、及、佛語、歐語等の化合文體なり。

そもそも今、行はるゝ國語の普通教育法は、猶、甲冑を擐し、砲戰に出でたるが如く、優美なるのみにて、實用に應じ難し。もし、然らざれば、漢文に偏し、或は歐文に僻し、或は、和漢洋を化合したる、渾沌文にして、甚だしきは、新譯なる流行成語の句調にて、

滊笛一聲、一瞬千里を走りて、社會に絶大の影況を及ぼす、彼の滊船滊車の昔にありては云々、姑息策を廻めず、苟且學を事とせざるの結果する所以の者は、大成、期なく、無頼性となりて、痴漢學なきの徒は、自ら「セントルマン」氣取の者となり云云、

の如き文を作る者多し。斯くては、譯し難き「コーヒー」を故に洋茶と譯し「ペン」を洋筆と譯せるにも拘らず、譯すべき父母の事をさへ「ち、」「はは」といはで、「ファザーマァザー」とか「ファデル」「ムッテル」とかいふに至らん。又、言文一致に、しかも古言を交へて、

ぞ、や、かの何さか、てけり、なんし、さか等の死失せた、語法を以てし、杏を説かせ、筆を取らすにも、兎角、春の花、秋の月、いさ古めきたる優長なる、文を以て致します、

などいへる言文を公にし、其の他「如何にされても、足りる、支配しよう、おつう、納めり、賤しめる、よすが」等は俚言俗格、古今混淆數ふるに遑あらず。

故に之等の渾沌體を統一し、成るべく、今世語に近き、近世、近古の文を改作して、標準文となし、或は、諸學科と連絡すべき、標準文を新作して、小學科の通語讀本となし、其の最高級に、通文讀本を以つてし、中學科も、之に同じく、之を高尚にし、四年級以上には、其の原文を交へ、授けて通語に解釋せしめんと欲す。

故に、此の通文は大概解釋を要せざるやう通語と相近似したる文を用ひ、、學年に應じて、漸々原文に進歩すべく、心して音韻學上の通則たる語尾の省略格、延長、敬語、轉用通音、及、切約格等の外は、離別せしめざらんことを要す。

其の標準通語通文は、語彙の備はらんことを欲すれども、語種の多からんことを望まず。又、其の用字も、一定の假字と漢字を要す。されば、漢字も、及迨曁等は及のみとし、是之此茲焉等は、之とし、則乃便輙等は、則とす。さて語彙語種の別は、適當なる文字を思ひ出でざるが故に、假に塡譯したれど、要するに、語彙は、名詞動詞とも、其の物に、一つゝあるをいひ、語種は、其の物に

多くあるをいふ。則ち、戯る、ふざける、はたえる、つはえる、じやれる、ひろく等の種類を戯るのみに定めんとなり。

通文通語の一例

こは、大和言の葉を一つにせんあらましのふみになんある

といふ、擬古文ありとせば、

是則ち、國語を統一せんさ欲する衷なり。

といふ通文とし。

是は、國語を一まとめにせうとする書物であります。

といふ通語とし、又

夫れ四時の觀たるや、春に於ては、馥郁たる梅花あり爛熳たる櫻花あり、夏に於ては壯快なる瀑布を見て、熱を消ずべし、秋に在ては皎々たる明月に嘯いて離情を遣るべし、冬に至れば、皚々として淡白なる六出の花あり、以て世の垢塵を洗ふに足れり、

といふ、直譯流の奇文あらば、

總て、四季の眺は、春の初より、香しき梅なり、又和心の匂へる櫻花あり、夏は、潔き瀧の音に暑さを忘れ、秋は、凉しき月影に、憂を慰め、冬は純なる白雪に心の垢を洗ふべし、

といふが如き通文となし。

總て、年中の眺は、春の香しい梅があり、又、朝日に匂ふ櫻の花があります、夏は熱いけれども、觀瀧などして凌ぎますし、秋になると月見をするのが面白う御ざります、し、冬は眞白て美しい雪が降りますから、寒いけれども、雪見をして樂しんで、雪のやうに心を淸うします

といふ通語とするが如し。故に、所謂省略格の語ならば「にてぞありける」といふ古文を「にてありたり」といふ通文としてあり(まし)た(であった)といふ通語とす。

但し文運の改進と外交の頻繁とに從うて、事物の現象ますく増加するは自然の勢にして、名詞動詞等に新成語を生ずる者なれば、盡く固有の國語を以つて、言ひ表はすこと能はず。故に自ら、其の外來語新成語を以つて、普通語とすべし。况や、古より、既に全國に普通せる、各時代の外來語新成語にして、之を譯する國語なく、第二の國語

となりたる通語をや、假之で「去年の三月」といふを、こそのやよいとせず「きよねんのさんぐわつ」といふが如し、此等は第二期に至るも、只、其の文字を羅馬字、又は假字にて、書くのみなり。されば漢語にまれ、梵語にまれ、何語にまれ、衣食住文武具、内外品産、事物、人名地名、年號忠孝義勇等の名詞、動詞は必ず通語通文とせざるを得ず。特に歌の格言、俳諧の切句社會の諺、則ち「大和心と櫻花、六日の菖蒲、十日の菊、論語誦の、論語知らずの如きは、其の語源頗深けれども、よく冗長の語を簡單にせしものなれば之を採つて稍高等の通文通語に編すべきなり。

統一の方法

國語國文の統一を成就せんが爲、又第一期の標準たる通文通語を一定せんが爲には、種々の方法に依りて、之を實行せざるべからず、爰に其の一二をいはゝ。

一帝國大學に教育科を新設して、國漢文以下の普通諸學科を修めたる者、及び之と同等以上の學力ある者を募集し、専ら統一上の標準たるべき、通語通文を研究せしめ、之を普通教育國語科の教員とすること。

二東京に國語教育研究大會を置きて、朝野の學者を、其の委員に任じ、全國の地方語を網羅して、討覈材料の上第一期、二期の通文通語を一定し、又、完全なる、大辭典を作らしむること。

三同會に囑して、通語通文の教科書を編纂せしめ、大學教育科の生徒が研究上の資けをなさしむること。但し編纂の用字は、一定の漢字平假名交りのこと。

四公文は總て、此の通文を以つて發すること。但

し用字は一切平假名交りとすること。
五諸公會の議事は通文通語を以つて錄すること。
六新聞雜誌は通語通文と美文とを用ふること。
七專門文學書、高尚なる論說、小說、稗史傳記雜體文等の外は總て、美文を用ひざること。
以上の方法に從り、天下の學者、有志は、小異を捨て、大同に就きて、一致の成功を主とせざるべからず。

(をはり)

そゞろが記

三石直子

文章、詩歌の上にて見らる感歎辭の、あな、あゝ、あはれ、あゝ等の詞は、麗しきもの、おかしき事を見聞くにつけて、自然、心の奥より洩れ出る嘆美りてゐなることには、今更言はむも、事珍しげなりや。如何に、斯のわづかしき二三音の詞によりて、其の和歌なり、文章なり、さては、古人の對話なり、其の意義を崇高ならしめ、優美ならしめ、莊嚴ならしむるよ。さて、かばかりのめでたき詞も、今は、全くもとの意義にて用ゐられずなりにしてそ、口惜しけれ。今日普通に用ゐらるゝ是等の感歎詞について一考せよ。即ち、殘念口惜しといふ意にあらざれば、ツライ、ツマラヌといふ意を表すにすぎず、たまたまは、前者のごとき意義にて、用ゐるものなきにはあらねど、其は、所謂風流人、即ち自己は世すて人と稱すといへども、實は、世にすてられたる人々の間のみにて、世道に益をなさゞる輩なり。後者の意義にては、世の人、大方、日々に、少くも三四遍づゝは用ゐずといふことなし。蓋し、殘念、口惜し、ツマラヌ等の歎を發するものの多きは、即ち、世に不注意の人の多きが故なり。

うたてある世にもあるかな。

不注意

注意だに周到ならば、世に、後悔といふことはなきを得べし。殘念、口惜し、ツマラヌといふことは、畢竟、後悔のこゝろより、發せる長大息に外ならず。注意なるかな、注意なるかな。

然はいへ、熟ら之を考ふれば、全く後悔なからむことは、よのつねの人に對ひて、望み得べからざることなり。然り、心識明なる偉人か、放心白痴、世の事物をわすれおきて顧みざるものか、高慢不遜、また他に人あるを知らざる狂者にあらざれば、或は、學あり才ありといはるゝ人といへども、たとへ、君子賢人と稱せらるゝ人さへ、遂に後悔なきを保する能はざるべし。

然れば、飽くまで、世人の不注意を嘲けるの酷なるを知らざるにもあらざれど、さりとて、現今のごとく、あまりに不注意なるを見聞くにつけては、亦默視しがたき節あり。

いでや、其の一ッ二ッをあげて、おどろかさむか。

あはれなる親々

白金も黄金も玉も何せむにと歌ひけむ、親の心はさるものにて、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ故には、種々迷ふ岐路の多からむかし。

某家の子息はいたく酒を好むとか、いづくの子女は心をぞれるものなりとか、他人の上を聞きてだに、親ごゝろには、いとせめて物憂げなるを。ましして、わが子わが孫のために、心を苦しむるものは、外よりは、思ひもよらぬことのみ多かるめり。

家を起せよ。わが名をも顯はせよかしとおもふにつけても、心ゐらるゝことのみ多きか如し。然あらぬも、亦、ゆくすゑ、飢ゑず凍えず世を經れかしとて、心には泣きながら、いと腹立しげなる顏

色をつくり、或は策ふりあげて、うちふるひながら、痛まぬ様にと念じつゝ打擲するにもかゝはらず、叱られしが腹だゝしし、打たれたるが口惜しと、いよ〳〵放逸にのみながれゆき、親をして、世間に恥らひ、我が身をくやみ、若し死なば、この苦痛やなからむかなど、おそろしきことさへ思はしむる不孝者のみ多し。子の罪は、勿論いふにもおよばざれど、親々も、亦、全く罪なしとはいひがたし。即ち子をそだつるにあたりて、最も注意せざるべからざる時、この注意を忽諸にせしこと是なり。

東京感化院の統計

試に、明治卅二年一月に調査せし、東京感化院の統計表を見よ。思半にすぎむ。即ち、愛情の過度のために、子弟を不良ならしめたるもの、一〇〇に對する二丶六四、冷淡の敎育よりのもの、一七丶九、朋友の不良より一五丶三、家庭敎育の不完全より一一丶二、原因不詳一二丶七、遺傳の不良四丶九、生母不良より四丶四、地方風俗の不良より三丶三、苛酷の敎育より二丶〇、妾腹に生じもの一丶六、無敎よりのもの丶三の比例なり。

勿論一感化院の統計に過ぎざるのみならず、其の類別に於いても、また、不完全たるを免れずといへども、子弟の不良は、殆ど總べて、親々の注意の周到ならざるに起因することを證して、猶あまりありと信ぜらる。

愛情の過度

如何に無情なる親なりとて、わが子の放蕩無頼に心痛めぬものあらむや。然れば、わが子の行末をおもひやりて、放蕩無頼なれかしと、心を盡して、惡しきかたざまに育てあぐる親ありと言はゞ、人は以つて狂言なりと言はむ。然れども、世の親の

注意の到らざる、勿論他目より見れば、大方愛子をあしき方に育てあぐるさまなるぞいとはしき。やう〳〵、物ごゝろ知りそむるころより、たゞ眼前の愛に溺れて、たま〳〵は、後々のためよろしかるまじと心づくこともあれど、見る目のいぢらしさに心うばゝれて、甘味きものを擇りて食はせ、分に超えたる美服を着せ、萬のこと成儘勝手を許しおく故、遂に、ためなほすべからざるものとなり終るなり。さて、其の時にいたり、今更のごとく、千々に心を碎きても、一度惡風に染めたる糸の、再びもとの純白にかへすこと、容易のわざならむや。

すべて、愛は人をして聾盲ならしめやすきものなり。平常用ゐる言語の中にても、たゞ、愛といへば、既に多少偏頗の意を含むが如く感ぜらるゝはぞなれば、少しく其の度を過すことあらむか、到底偏頗に奔らざらむとすも、得べきにあらず。既に偏頗のこゝろにて、奚ぞ、正しき道を以つて他に對することを得むや。最も注意を怠るべからざるは、愛情の過度ならむ。

泣く子と地頭

子供といふものは、物の道理を辨へぬものなり。然れば、然るものゝ、如何なることを爲したりとて、尤むべきことかは、何事も爲む樣に任せおくべし。やがて、物の道理わきまふるころにもなりなば、何事も言ひ聞かせ習はすべく、また、そのころにもなりなば、彼とても、よもや、惡きことばかりも爲居るまじといふが、多くの親のいふ所なり。然ればこそ、泣く子と地頭にかたれぬといふ俚言さへあるなれ。

かくの如き考を有てる親の手に於いて、多くの子供の性質習慣は成さるゝなり。然しながら、是

甚しき誤解といはざるべからず。人は道理によりてのみ事を行ふべきものならば、斯くても、猶、或は可ならむ。然れども、人といふものは、如何なれどにや、とかくに道理に背きたることを行ふことを好むものなるをや。まして、幼き時より、泣けば何事も聴き入れらるゝもの、わがいふ所を飽までも言ひ張れば、如何なることにても、遂には、遂げらるゝものと慣らされたる者の、いかんぞ又、道理にかなへりや否やを顧みるの注意あらむや。唯、初より、正しきことは聴かるゝもの、正しからざることは、決して遂げられざるものと、よく〳〵教へこむべきことなり。三ッ子の魂百までもと、人毎にいひふるしたり。豈にそれ、ひとり魂のみならむ。

わかりやすき道理

猶いひ續けゆかば、いづれも〳〵、皆斯くの如く、

誰も知れることのみならむ。うるさしとも思ふ心ければ、筆をさしおかむ。さても、終りにのぞみていふべきことを今少しばかりは許したまへね。何事にも、珍しく奇しきこと見聞くことを喜ぶ人情に投じて、唯、人に異なることを爲し、言ひて、虚名を得むと希ふもの多し。勿論、ありし普通のことゝて、必しも永久そのまゝに、さしおくべきものとのみも限られぬが尠からざれど、然る念慮のあまり熾なるにより人間普通に行ふべきとがらをば、さばかりのことは皆人の知れることとなり。極めて、わかりやすき道理なり。今更いふにも及ぶべき事かとて、一向すておきて、顧みぬものあり。わかりやすきこと、また必しも行はれやすきものにあらず。いな、このわかりやすきことがらこそ、却つて世におこなはれ難きものなれ。即ち、これ世に不注意者の多き所以なれば、先づ、わか

りやすき道理を實際にまもり背かざらむことを心がけらるべきことになむ。

名にさへ負せつるそゞろがき、そゞろなることのみなれども、はづかしげもなく、かゝげ出しつるは、まことに老婆の心ぞかし。ゆるしたまひてよ。

妻たるものゝ心得

棠陰

一、夫の不在中を考へ、或は、目を忍びて、事を爲すを好むものは、不德を爲す兆なり。愼むべし。

一、夫の不在中を考へ、客を招き、又は、私恩を沽るなかれ。卑陋尤も甚し。

一、夫の他業中は、容姿を飾る勿れ。外出は見合すべし。

一、夜行には必ず、提灯を携へよ。殊に男子に言ふときは、低聲なるを避けよ。距離を遠くせよ。物の受渡しに手足の觸るゝことあらば、是其の德を毀くと心得よ。

一、男子に言ふときは、艶笑を飾る勿れ。余り愛嬌を溢する勿れ。儼然として、威風を落す勿れ。然らざれば、彼我に意あるが如く思ふ。夫より、他に愛を賣りて、何にかする。是其の心の穢れたる婢妾等の行爲なり。

一、來客等の醉を装ひ戯るゝことあるものならば、尤も注意すべし。殊に、共に人なき室を通るときは、尤も嚴格に取り扱ふべし。

一、男子を宿泊せしむるときに、寢衣、及、紐等を貸すときは、男子のものを貸し、決して己の物を貸すべからず。第一失敬なり。如此行爲を爲し、優待と心得るものは、賤業婢、

或は、旦那取を爲すもの丶行なり。卑陋極りなし。

一、凡ての事、他の男子に向ひて、私かに親切に過ぐべからず。清潔の親切、却て、彼は、不潔の感情を起し、意外の過失を起すべし。注意せよ。

一、一概には言ひ難けれど、男子と交際するを好み、又ホタヘるを好むものは、是、多くは、淫婦の所行なり。

一、成るべく、恩を他人より受くべからず。手紙は、夫の許可を受けて後出すべし。

一、苦樂を共にし、一生を托したる夫に身上を隱くし、其の他、何事も秘密に取扱はんとするは、却つて、夫の感情を害し、愛を減するものなり。萬事、心中を打明けて相談すべし。哀願すべし。

一、出入の賣物屋等に媚びて、値を安からしめんと欲し、又は何かの便利を計らんとする勿れ。如此卑しき行爲は、夫の品位を落し、且己も見下さる丶に至らん。

一、自己の所有品たりとも、猥りに賣りて、他の品と買ひ替ふるなかれ。必要品あらば、夫に請求すべし。遠慮に過くれは、却て活眼なる夫には、見破られ。愛を殺くべし。

一、舅姑には、夫が、斯く言はれしと詐り、我が夫には、舅姑が斯く言はれしと欺き、己の意見を、程能く兩方へ立て、貫かんとする姦婦あり。是等は、油斷なりがたき毒婦なり。

一、夫に對して、滿腔の實意を込めたらんには、爲すこと言ふこと、意に適はずと云ふことなし。却つて、無理に機嫌取するは宜しからず。

一、舅姑及夫に忍び隠して、自己の寫眞等は、決して他人に與ふべからず。如此き所爲あるものは、妻たるの値なし。

以上列記したる事項は、固より、萬々有るべからざることにて、少々詮鑿に過ぎたれど、余輩の杞憂を記しのみ。故に萬一、此の内の一ヶ條たりとも、心に當る人あらば、以の外と云ふべし。急に懺悔して、即時に改めよ。ゆめ、おろそかに見るべからず。

ゆめのあと

税所とく子

とかく、才いみじきは其の德全からず、をゝしき心もてる女は、また、大方文の道にうとし。才德兩ながら兼ね備へむことは、男子にてだに、いといとかたくなむあるを、まして。

されば、わが女鑑精華の欄にて、この種の史傳を得むことをつとむといへども、常に、其を得ることの極めて、容易ならざるを憾む。

税所敦子刀自の如きは、即ち、才と德とを兼ね備へられたる人にして、近世容易に見ること能はぬ人なりき。不幸にして、二月四日逝去られぬ。かへらぬことながら、痛みても惜みてもなほ、あまりあることになむ。

大方のことは、前號雜報のらんにかき記しおきたれば、既に知られしならむ。然りながら、其の折も記しゝ如く、刀自は、わが女鑑の初めて世に出でし、十年あまりの昔より、絶えず其の力を添へられき。唯、その人と爲を欽慕すといふのみならず、讀者諸嬢の上にとりても、師の君を喪ひしにて、日頃の心より推しはかれば、

歎き痛まるゝほども察せらる。即ち、刀自の息女とく子の君の物せられし、ゆめのあとといへる一篇を乞ひ得て本欄に收めつ。一は、ありし當時のさまを知らせまほしく、一は、いと高き德と稀なる才學とを仰がむがためなり。

更に、詳傳を物し、精華のらんに收むべく、また、遺稿をも乞ひ得て本誌に揭ぐべし。今、ゆめのあとを載するにあたり一言そのゆゑよしをかき添へぬ。

編輯者しるす

二月一日。ことしは、年ごろにためしきなきさむさにて、あしたのあらし身をきるごとくなれど、母君はものともおはさず、午前六時めさめたまひ、けふは天氣よければつねのごとく九時より御所にとのたまふ。けさの寒さはことにきびしければ、御老體にさはることもや候はんと止めまゐらすれど、御用もことにあまたあらん。あすといはゞ、空さえかへり雪ふらんもはかりがたし。さあらんには、まうのぼりがたくやなりなむ。おいたりといへども、つかへの身なれば、かばかりのさむさにてたるべきにあらずとて、九時三十分に立出でたまふ。御あとにのこりて、なにごとも手につかず胸うちさわがる。後におもへば、むしのしらせなどいふものにやありけん。つねには三時半にかへりたまふを、けふはむかへの車をもまたで、御所のにのりてかへりたまふ。おかへりといふ聲にむねとゞろきて、出迎へまゐらするに、御足もと、すこしよろめきたまふを、たすけまゐらせて御居間にいれまゐらせぬ。けふは、道のほども風いたく身にしみて、大奥には、御火桶もあまたあれど、つゆあたたまらず。ひるには、かゆすこしたうべたれど、と

かく心地あしければ、にはかにまかりかへりぬとのたまふに、うちおどろかれて、いそぎふしどにふさせまゐらせ、こたつ火桶など、さま〴〵にあたゝめまゐらせ、くずしをまねきてみせければ、熱は三十八度三分あり。御年たかくおはせば、心づかひせらるゝよしかたりぬ。夜にいりて、八時半ごろ、小用にたゝんとしたまふを、しひてとゞめて、うつはもてきてかゝらせまゐらせ、御うしろにつきそひをりしに、つとたふれかゝりたまふに、おどろきて侍女とゝもにいだきおこし、からうじて、床にふさせまゐらするに、いと氣どほくなりて、ものもおぼえたまはぬさまなるに、胸つぶれて、こゑをかぎりによびもどしまゐらせ、くすしのもとに車をはしらせてむかへいれたるに、いまは、御心地ももとにかへり、熱もすこしさめて、すや〳〵とうちねふりたまひぬ。いとうれしきものから心もとなければ、夜もすがら御枕べにゐて、御かほのみまもりをりしに、暁ちかきころめさめまひ、よひのことどもかたりいでたまふ。いとうれし。

二日。わさ八時くすしきたり。熱は三十度七分にて、容態はいとよろしといふ。けふはことなることもなく、すや〳〵とねふりたまふ。されど、よべのごときこともありてはとて、もとめしつかひたまひし、ゑみといふものをよび、うからにもしらせ、また、こぞよりやみふしたまへる高崎御歌所長の君にも、文してつげまゐらせぬ。こは、母君つねにのたまふに、おのれもし病おもりていまはとおもはん時は、たれよりも、まづ、かの君に告げまゐらせよとありしによりてなり。

三日。御容態きのふにおなじ。朝とく高崎君のもとより、みやまひかろからぬよしうけたまはりみ

づからとくまゐらましけれど、いかにせん、やまひの床にありて、心にまかせねばとて、人をつかはされ、くすし、看護婦のことまで、なにくれと、いとこまやかに心ぞへしたまふ。いと心づようおぼえて、かたじけなく。早蕨のすけの君よりも、人をつかはされ、岡侍醫をすゝめたまふ。やがてむかへつるに、午後三時ごろ來て、ねんごろに診察せらる。胃腸かたるに心臓のやまひもくはゝり、御からたの衰弱甚しくおはせば、いかなることあらんもはかりがたきよしいはる。かなしともかなし。

四日。あさ、熱三十八度三分。なほ、すや〳〵とうちねふりゐたまふ。九時頃ふとめさめたまひ、御局の人々の詠草なはさんとのたまふ。しひてとどめまゐらせて、やう〳〵とゞまりたまひぬ。高崎ぬしのよつぎ元彦ぬしきたまひ、きのふよりのやうだい、ねんごろにたづねらる。三宮夫婦もたづねらる。母君も、ふたこと三こともの、たまふ。十一時ごろ、牛乳すこしもちゐたまふ。看護婦、けさよりまゐる。午後三時にいたり、もやうすこしかはれるやうなれば、いそぎくすしをむかへ、氷もて御口をしめし、注射といふことをす。一たびはこたへありしが、二たびせしときは、こたへいとうすし。ぶどう酒すこしまゐらせたれば、すこしこたへありき。とかくするほど、岡侍醫もきて、ともに〳〵、さま〴〵力をつくさる。四時十分といふに、（略）ときれたまひにけり。今はのきはにも、いさゝかも苦痛をおぼえたまふけしきなく、ねふるがごとく大往生をとげたまひぬ。こたびは、かりそめの御やまひならじとはれもひまゐらせたりしかど、ゆめのうちにゆめみるこゝちせられて、ものもおぼえず、かなしなどいはんもな

かなかなり。高崎元彦ぬし、岡侍醫より電話かゝりぬとて、とるものもとりあへず、かけつけたまひ、後のことゞもにつきて、さま〲力をそへらる。母君、かねてのたまひおきてたまふやう、やまひおもりなど、くすしはたれをまねき、看護婦をつけよ。枕べにはかの屏風をたて、よるのものは、御所にあづけまゐらせたるをかけよ。(略)墓地は青山になど、のこるかたなくのたまひおきてたれど、あつまりきぬる親族のものども、みなその用意のこまやかなりしに感じあひて、よろづのこと、ひとつも御心おきてにたがはぬやう、とりまかなひまゐらするゝことゝなりぬ。なほ、めしものは、御所のはおそれあれば、すべて、新らしく白木綿にて、小袖ひとかさね、襦袢など調じ、御からだすがし〱う淸めまゐらせて、すべて、ゑみと二人にてきかへさせまゐらせ(略)日ごろ、朝夕のいでいりに、とくよ、着物きかへさせよとて、かならず、おのれにのたまひつけたれば、けふも、人手をからずものしまゐらせぬ。かく、きかへさせまゐらすることも、けふをかぎりぞとおもへど、身におはぬ力さへいでぬるこゝちす。やがて、近衛光顯院の君にもきたまひて、御名號などたまふ。御つばねのかた〲よりも、かうやうのものおくられたる、皆ひつぎのうちにいれまゐらせぬ。かねて、白き木綿にて袋をつくり、みづから棺入としるして、いれおきたまへる文庫ひとつあり。その品々、御爪、御齒、はながみ手巾などとりそろへ、なほ、うちき、緋のはかま、かいどりをいれ、下に、大ぶとん一枚、上に、中ぶとん二枚、すべて三枚。けふ午後五時すぐるころ、御所より御見舞として鈴木侍醫をたまふ。すでにことぎれたまへしのちにて、おぼしめしのむなしうな

りたるもかしこし。また、御料理をも下したまひぬ。こよひ、特に御使ありて、掌侍に任じ正五位にすゝめたまふよしつたへらる。ついで、葬儀の料、又あまたの賜物あり。かくあつくかたじけなき大みぐみのほどを、いきのうちにみせきかせたらましかばとおもふもかなし。

五日。御つばねのもとの同僚のかた〳〵、つぎつぎとはる。高崎元彦ぬし、父君の御使としてきたまひ、遺稿のたぐひ、すべてちりははぬやう、かたく封じてひめおきたまへとのたまふ。かゝることまで心そへたまふも、としごろの二なき友と、母君のたのみきこえたまひしによりてなりていとうれし。（略）又、御所より御料理たまふ。

六日。午後六時三十分、入棺の式あり。

七日。御局のかた〳〵、かはる〴〵きたまふ。

八日。樺山、三宮ぬしなど、親族あまたあつまり、式をはりて、午後一時御ひつぎ出したてまつる。けふは、空いとよくはれて、日かげうらゝかに春めきわたり、道のほどもすら〳〵と、青山につきたまひぬ。かく、たぐひなくよき日にあへたまへるも、けふのみほとけの御徳にこそと、人々のいひあへる、かなしきなかにもすこしなぐさむこゝちす。式場には、北白川宮御息所の御代拝として、老女をつかはされ、近衛光闌院の君よりも老女をつかはされ、大臣をはじめ、つかさくらゐかたき人々、女官方の代拝なども、あまたおくりきたまひ、おごそかなる式をいとなまれ、（略）高崎元彦ぬし、父君にかはりてしぬびごとをよまる。母君のおひたちより、おほやけにつくされしことまで、いとこまやかにのべつくされて、式場にたちみちたる人々、袖をしぼらぬはなかりき。まして、おのれをはじめ親族のものどもは、みな

泣きくづをれぬ。（略）なほ、しるさきはしきことかぎりなかれど、おもひいづるごとに、むねふたがりて、つねにつたなき筆の、ことにはこびかねれぬ、すべては、またこそとはしぬ。
母君のみやまひにかゝりたまひし日より、四日むかりまへの夜、ともしびの消えたりとゆめにみて、

ともしびのきえつとゆめにみえつるは
　やみぢにまよふしるしなりけん
きのふまでかたりしこともけふはたゞ
　はかなきゆめとなりにけるかな
いまひとたびことかはさんとおもへども
　世をへだつるぞかなしかりける
たらちねのみかはもけふがみをきめと
　おもへばむねもはりさけぬべし

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず

白松園主人

我國、千古の文豪として、兒童走卒に至るまで、誰知らぬものもなき、曲亭馬琴翁が、明治の文章界に及ぼせる影響は、甚だ大なる者なり。世人動もすれば、その趣向文章の如何を喋々すれども、試みに、今日所謂小説家、新體詩家等の、操觚者流が、文章を熟視するときは、其の根蔕は、皆馬琴の文より胚胎し來りて、語調文字の、いかに之より脱化し來れる者の多きかを知るに足らむ。

抑も、徳川時代、和漢の學者、能文の士、蔚然輩出せしかども、巧みに文語を調成融和して、所謂普通文の摸範たるべき、大文章を作爲して、文章界の一生面を闢きし者、馬琴を措いて、他に幾人

かある。句調流暢にして、語路圓滑、優美と勇壯と兼ね具りて、或は賢愚邪正を辨じ、或は倫理道徳を談じ、或は地理歷史を説きて、皆神に入らざるはなく、特に、其の、山水景物の狀を叙するに至りては、高尚なる筆を以て、緻密纒綿の情を曲盡す。其の文字の艶麗なる、其の志操の優雅なる、雄健にして而かも迫らず、卑俗を説いて、而かも卑俗に陷らず。爲めに讀む者をして、或は泣き、或は哭せしめ、一たび、之を繙くときは、寢食を忘れしむるに至る。只其の鬼神を説き、妖怪を談ずる事の多きを以て、人文の發達せる今日にありては、三才の童兒といへども、その妄誕なるを咎むべけれど、か丶る部分を除きたらむに、は、他の忠孝節義の爲めに、或は人情に遠く、事實に疎きことの如きは、所謂馬琴が本領のある所にして、却りて、今日、教育上の弊害を避けしむるに適して、彼の人情の微を穿つといふなる、寫實小説の比に非ざるなり。されば今日文章を學ばん輩は、必ず此の大文字を讀まざるべからず。さらでも躬行實踐にうとき教師の、倫理を聞かんよりは、八犬傳一卷を讀むの勝れるに、若かざるべし。

そはさておきて、余は之より、馬琴が眼中に映ずる女性を論ぜんとす。こはいとえうなき事ならめど、一つには本誌の讀者諸孃に、其の文章を紹介し、一つには、馬琴が理想を披瀝せんの、微意なるものから、當時おのれ、用務繁劇にして、殆んど執筆に堪へず、寸隙を盜みて、ものせしなれば、杜撰はもとよりの事なりかし。

さて、馬琴が理想の人物を讀まん者は、必ず先づ馬琴の人となりを知らざるべからず。馬琴本姓は瀧澤氏にて、江戸に生れ、幼時より讀書を好み、少かりし時、士たらんとして旗下の諸士に歷仕せ

しも、皆意の如くならず、即ち醫を學びて、亦遂げず、儒たらんとして、復成らず、遂に山東京傳の門人となり、小説を以て世に立たんことを誓ひぬ。之蓋し、天の馬琴を憫みて、その博覧の識を以て、大に、才華を發揚すべき途を發見せしめんが爲めに、前に屢々蹉躓せしめしなり。されど其の人物、方正剛毅にして、世俗に阿らず、時に或は、一言一行の合はざるを以て、絶交することさへありき。故に其の初め儒たらんとせし志氣は、どこまでも失せず。思ふに小説によりて、大に儒敎を擴めんの志なりけむ。その嘗つて、蒲生君平の如き人と、交り深かりしを見れど、その心も亦ひそかに勤王にありて、彼の八犬傳に、犬江親兵衛をして、朝廷に貢を献せしめしことなど、寓意なきにしも非ざるべし。かゝれど、其の女性を描出するにも、渠が性行に徹するときは、思ひ半に過ぐる者あらむ。

・・・・・・

●●●●●椿説弓張月は、渠が傑作中の巨擘なり。其の文章は、例の七五の弊なくして、八犬傳にまされる處も、亦、之にあり。篇中源爲朝を以て骨子とし、之に對するに、勇婦白縫を以てす。爲朝保元の戰に、父に從ひて新院の御味方に參り、其の軍利あらざりけれど、ゆく方知らずなりぬ。さて九州なる居城を、菊池原田に襲はれて、既に危ふく見えける折、白縫の父阿曾忠國が、とく落ちよと諫めける處に至り、彼が性行を説き出して曰く

白縫涙さしぐみて、わらは女子の身にしあれど、父の子にして爲朝の妻たり、今夫の生死をしらず、父又討死し給ふを外に見て、いかで落ち行き侍るべき、殊さら幼きより母御に後れまゐらせ、父の慈愛に人となれば、させる孝行は竭さ

ずとも、せめて死出の郷導して、三途の川の筏とも、埋草ともなり侍りてむ、かく思ふ身をわりなくも、落ちよ活きよと仰するは、味氣なき世にながらへて、うきを見よやとればすらむ、父の仰はそむかじと、辨へながら是のみは、うけひきがたく侍り、

其の勇、其の貞以つて「六條判官爲義の八男、冠者爲朝と聞えしは、智勇無雙にして、身の丈七尺、豺の目猿の臂、膂力人に勝れて、よく九石の弓を曳き、矢繼早の手鍛錬なり」と云へるに配するに足る。げに當時勇敢なる武士の妻は、かくあらざるべからず。況して爲朝の妻たる者に於いてをや。馬琴眼をこゝに注ぎて、暗に[illegible]君の面目を標出せり。而して又、その容[illegible]せる言にいはく

年紀二八ばかりなる美女の、都にも鄙にもあらぬ打扮して、縹緞に紅の襲せし袷も、虚焼の薫さへ得ならず、月の眉の艶なる柳の腰のなよやかなる、譬ば櫻の枝に海棠を咲せて芙蓉の色香をこめたるに異ならず、ほとりにはあるべき従者もなくて、女童只ひとりなん侍りけるに、眞菅の莚布まはし、月に對ひて筑紫琴かきならせる光景は天津少女や影向しけん、龍宮なる乙姫の、人間に遊ぶかと疑はる、

例の句調を以て、口を極めて、その美を賞し、一方には、又、儼然として言をあらため、やをれ、武藤太怕るゝ事なかれ。わらはゝ汝に告訴せられて、縲絏の恥辱を受け給ひし、爲朝の妻白縫なり。」と烈婦の意義を揚ぐ。美にして勇、眞に女丈夫なり。而して爲朝の大島に流さるゝに及び、島主忠重の娘彪江といふ者をかき出して、更に篇中の美を添ふ。彪江は、其の氣魄、もとより白縫の勇壯なる

に及ぼず。されども、非道の父にも背かず、主たり夫たる爲朝にも、節を破らずして、只身ひとつに其の薄命を歎き、遂に刄に伏して、忠孝の貞烈を全うしたるは、尤も讀者の同情を曳きて、哀れにやさしく、末代婦人の龜鑑たるべう覺ゆ。白縫は女子の性行としては、少しく變則に失する點あれども、彪江は溫にして迫らず、優にして貞烈なる、一點も非難すべからざる美徳を具ふ。彼れは菊花の下に、昂々然たるが如く、此れは、梅花の雪中に匂へるに似たり。蓋し馬琴も、此の彪江をもて、篇中第一の薄命者となし、尤も哀れに、尤もやさしく、尤も處し難きところに處したる、婦人の行爲を、尤も雅健なる筆を揮つて縷述せり。先づ、そのそだちをのべて曰く、

彼の彪江は、沙風わらき島には人となれど、姿もくろまず、洛の手ぶりを、見ならふとにはあらねど、その心ざまいと怜悧、すべて父には似ざりけり。

と云ひて、更に、其の心のやさしさを著はして曰く

爾かるに三郎太夫が女兒彪江は、ものを隣むこころふかけれど、父があしき行ひの、今にはじめざる事にはあれど、わきて傍痛くおぼえ、これを諫めていふやう、この頃人の語るを聞き侍るに、彼の爲朝とやらんは、智勇世に勝れ、弓いることは、いにしへにも比ふべき人なしとかや。今こそかくてれはせ。免されて歸洛し給ふかさなくとも、島人その徳に感じて、主とし仕へんことを願はゞ、その威猶遂に、わが父の右にあるべし。かゝる人をそわきて勦り給ふべきに、かく情けなくもてなし給ひなば、禍の來らんことも久しからず。常言に、慈悲は人

の爲ならずとぞいふなる、けふより邸に迎へとりて、誠心を示し給へかし。

彭江は、實に婦人の特性たる、愛情慈悲に富める女子なりといふべし。（以下次號）

女子書翰文につきて

東宮鐵麻呂

往年、世人、皆、洋風に心醉して、婦女子さへ、殆んど、其の魔風に魅せられんとせしをり、世の風潮に逆らひて顯はれ出でたる、此の女鑑は、多年、一意専心、此の狂瀾挽回に力を盡したるかひありて、先年より世の風潮全く變り、今は吾國固有の婦女の美徳を發達せしめんと力むるもの、多くなりたるは、いと〳〵喜ばしき事になん。然れ、　この女鑑の發刊も、日に月に盛になりゆきて、今や第二百號に達するに至れり。依りて此度は、特に臨時發行となして祝意を表する事となりぬとて、おのれにも、嘗つて本誌の教の庭にたつさはりし縁故あれば、一言記せよと、編輯部より促されつるにより、取りあへず、女子書翰文につきて思へる事どもを記して、餘白を汚しぬ。なほ思ひ出づるまゝに書き續けてんかし。

われ〳〵の思想を交通する機關の一として文といふもの、人類社會に欠くべからざるものなる事は、今さら事新らしくいふにも及ばぬ事ながら、男女をいはず、世の少年たちは、大かた、文といふものゝ意義を誤解して、文としいへば、みだりに華麗なる文字を並べ立て、さま〴〵形容の言語を綴り合せて、立派に飾りたるものとのみ思ひて、却つて完全なる思想を明確に（無用の修飾なく）

言ひあらはす事の、文の本意にかなへる事を知らず、從ひて、其の方に心を用ふるもの少く、ひたすら書翰文を輕視して、文とも思ひ居らざることくなるは、いと歎かはしき事なりかし。

さて、文とは如何なるものぞといへど、己が心に思へる事を、文字もて書きあらはしたるものなれば、細かに分たんには、その種類もいと多かるべけれども、貴賤男女の別なく、日常に使用して、最もその用廣きものは、書翰文に如くものなかるべし、まして現時の社會に於いては、一般女子に必要なるものは、書翰文のみといはんも、不可なからん。

然れど、書翰文は男女を論ぜず、最も心を用ひて、明確に、簡短に且つ社交上の禮を失せず、能く心意の通ずるやう爲べきなり。まして此の書翰文は、日常多忙の際、日に幾度となく、書きもし讀みもするものにて、書く者も十分に思考して、文を練る暇なく、讀む者も、又匆卒に讀み下して熟考する暇なきものなれど、もし其の間に、無用の言辭を弄して、明確を欠く事あらんには、たゞに其の用を達せざるのみならず、或は意外の行き違ひを生ぜんも計られざればなり。然るに從來女子のものしたる書翰文は、長きものと定まりたる如く心得て、記すべき要なきに、しひて無用の記述を爲し、不當の言語を書き連ねて、却て、旨趣のあるところを明瞭ならざらしむるごとき弊あるは、實に心得がたき事ならずや。

書翰文につきて注意すべき點少からねど、本號には、先づ女子の書翰文中に、最も多く用ひらるゝ用語の不當なるもの一二を記して、聊か注意を乞はんとす。

[扨とや] ○此の語、女子の書翰文には、必ず書か

ざるべからざるものゝごとく、思ひ居るもの多し。然れども、此は至つて穏かならぬ語にて、全く語意を解する事能はざるものなり。其は、扨は前條を受けて、更に詞を改めて言ひ出す時に用ふるものなれども、此の語のみを、然る意義のところに用ひんは、もとより可なれども、扨の下に、とを添へ、やを添ふるに至りては、全く語を爲さぬなり。其はとやのやを、詠歎の意のやと解せんか、即ちとよ(「然る事ありきとよの」類)と同義にて、俗譯すれば、「扨ト云フコトヨ」の義となり、又とやのやを、疑問の意のやと解せんか、即ちとか(「然る事もありきとか」の類にて、下に「云ふ」といふ語を略したるなり)と同義にて、俗譯すれども、「扨トカ云フ」の義となりて、共に文義を爲さゞればなり。然るに此の語を用ひたる場合を見れども、多くは、たゞ扨といひてありぬべき所なるがごとし。今まで何心なく此の語を用ひし媛たちは、試みに自の書きたる文に合せ見て考へたまへかし。

「おはしまし候」○此の語も至つて多く見る所なり。然れども、其の用法を誤れるもの多し。元來、此のおはしますの語は、存在の意の敬語にて、先方の動作の下につけて、俗譯の「居ラセラル」「アラセラル」の意に用ふるものなり。然るに現時の用ひ方を見るに、寒氣甚しくおはしまし候、」「暖氣の候におはしまし候」などの如く、人類の動作ならぬ語、即ち敬語を用ふべき必要なき語の下に添へて用ふるは全く其の使用法を誤れるものなり。此は男子の文に、用ふる御座候といふを直譯したるものなるべけれども「御座候」は「おはしまし候」とは別義にして、單に「アリ」といふ意を先方に對して丁寧に云ひあらはす語なれども、障りなきな

り。故に「寒氣にも障りおはしまし候はずや」、「母君も健かにおはしまし候」とやうに用ふるは可なれども、前に擧げたるごとき場合に用ふるは不適當なりと知るべし。

迷の雲霧を拂へ

宮地嚴夫

朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵に、あらはれわたるせゞの網代木。と讀れたるは、權中納言定賴卿の歌にて、千載集にのせられたるを、藤原定家卿の、小倉百首世にいはゆる百人一首の中にも擧られたれば、婦人子供と雖も、誰知らぬもの無きほどの名歌なり。斯くて、其詞書に、宇治にまかりてよめるとあるに依れば、定賴卿が、宇治に行れし時。宇治川の朝のけしきを見て、感ずる所ありて讀まれたるものと見えたり。扨此の歌の心はいと能く聞えたれば、解釋をも要せざれども、聊かこれを述べんに、朝ぼらけとは、夜の明方を云ふなり。宇治の川は、山城國の名所にて、名高き川なり。川霧は、此川は山ふかきわたりなれば、川霧も深く立こむるを云へり。絕々は、其の霧の且消え且殘りて、絕々になりゆくより、立隱されしものも、稍々に現はれ出るを云へり。網代木は、あみしろぎと云ふべき、あみのみを省きて、網代木とは云へるにて、魚を取るため、川中に立列ねたる木を云へり。さて、一首の大意は、夜のほの〴〵と明ゆく頃に、宇治川を眺望すれば、夜霧り深く立ちこめて、何處とも見えわかぬを、夜の明るに隨ひ、其の霧も稍々に消え失せて、薄くなりゆくまゝに、おのづから霧の絕間が出來て、其の絕間絕間より、川中なる彼網代木が、漸次に現はれわ

たりたるよと、讀まれたるに過ぎず、然れば、一度思はんには、深き意味ありとも聞えざるが如くなれど、能く翫味すれば、此の一首の歌と共に、宇治川の夜明る頃の景色、眼前に見る如く思ひ浮べらるるのみかは、猶深く考ふれば、只宇治川の朝たの景色に止まらずして、凡人々の心の上をも、此の歌にて說き盡さるゝは、實に名歌とこそ謂ふべけれ。其は、人の心に迷ひの雲霧のかゝらんには、恰も宇治川に深く朝霧の立こめて、何も見えわかぬが如く、正邪曲直も、利害得失も更に分らず、いはゆる五里霧中に彷徨ひ、遂には、一身の方向をも失ひて、得がたき生涯をも、誤るに至るもの無きに非ざれは、誠に歎ずべき事とぞ云ふべき。然るに、若し其の人心の中に於いて、一たび良心の旭日現はれ。彼の迷ひの雲霧を照さんには、今まで暗黑裡中に、彷徨ひ、善惡更に分ざりしものと雖も、漸次に良智の光明現はれ、自然に正邪曲直を知り、利害得失を辨じて、身を立て道を行ひ、家をも興し、世をも救ふに至るべきは、今日の事實に徴して、爭ふ可からざる所に非ずや。然れば、其の人心の中に於いて、良心の旭日將に現はれんとするまゝに、彼の迷ひの雲霧絕々に晴ゆくに隨ひ、今まで見えざりし、善惡邪正の、漸次に明かになりゆくべき事、彼の夜の明ゆくに隨ひ、宇治の川霧絕々になりて、網代木のあらはれ渡る狀に、異なること無き道理を具ふるは、歌の意味深長なるを證するに足るべし。今斯く此の歌の意味を解して、之れを利用せんには、修身齊家は云ふを待たず、治國平天下の道と雖も、此の一首の中に、求めて得られざるものに非ず。一首の歌、努々忽諸に看過すべからず。さるにても、實に忌むべく恐るべきは迷ひなり。其は一たび心に

迷ひの雲霧か丶らんには、親子兄弟の如き、骨肉を分ちたる中と雖も、或は妖怪の如くも見え、或は讐敵の如くも見えて、遂に相戰ひ相殺すことも有るに至る。實に恐るべきものは迷ひなり。夫に就きて爰に一の話あり。其は或所に極めて臆病なる兄弟二人の者あり。此の二人、其の臆病なるが爲に、互に相頼みて共に親愛すること、殆ど異體同心とも云ふべし。然るに、去り難き用事ありて、其の弟なる者、山一つ、越てあなたに行たるが、歸り來らず。兄なるもの其の夜は一睡だも眠ることを得ずして待更したるが、猶夜の明るまでは待得ずして、護身用の小銃を携へ、弟の行きたる方へと心ざして出立しに、彼の山越にか丶りし折しも、霧深くて咫尺を分たざる中に、何か彼方より來るものあり。是に於て、彼の兄思ひけらく、此は此の山に居る妖怪にて我弟の歸らざるは、必ず、此の怪物の爲め命をも失はれたるものならん。又今出來れるは、定めし我をも取らんとの心なるべし。扨は、我が寇弟の讐なり。いで一發の下に倒し遣れんと、用意の小銃を取直し、狙ひを定めしかど、何分にも霧深くして目的定まらず、暫し猶豫ふほどに、夜もほが〱と明渡りて、霧の薄らぐに隨ひ、彼の妖怪と見えしは妖怪にはあらで、全く人なるが如く見ゆるより、扨は危險なき事を爲したり。されど人をあやまらざりしは、此の上の幸ひなり。いざや一歩を進め見んと、此方より、進み行けど彼方よりも來りて、漸く近づきたる時、彼方より聲をかけて、其所なるは兄君にてはおはさぬやと云ふを聞くに、全く我が親愛する弟に違ひ無ければ、兄は大に悦び且驚き、先刻より其方を妖怪と見て、狙擊せんとしつるは、實に危險き事にてありきと云へば、弟も、我も亦

殆ど兄君を倒さんと爲したり、實に危險を極めたるなり。然るは、昨日用事畢らで夜に入りたるより、山の彼方にて一泊せしかど、兄君を心許なく思ひ、夜の明るをも待敢ずして爰まで歸り來つるに、霧の中に何か物あるは、必定此の山の妖怪ならん。いで一發にと思ひて狙ひたりしも、目的の定まらぬより、猶豫ほどに、夜の明けわたりて見れば、兄君にて有りしは、實に危險を極めたり。然るにても、先共に過ち無かりしは、此の上の幸なりとて互ひに慶び、手を相携へて歸りしとぞ。

然れど、斯ばかり親愛深き兄弟にても、霧の爲に隔てられては、誤りて互ひに妖怪と認め殆ど相殺さんとはなしつるなり。實に迷ひばかり恐しきものは無きに非ずや。今世間を見わたすに、亦之れに似たること尠からず。其は、我國の如きは、萬世一系古今一日の如き　皇室を戴き、然も　皇室は、

我國家の御宗家に在せられて、臣民は、其の支流餘裔に外ならざれど、皇室の臣民を見給ふこと、宛ら慈母の赤子を愛し給ふも啻ならず。臣民の皇室を戴き奉ることも、亦孝子の父母に事ふる如くにして、君臣にして父子の親を有するを以て、我が國家の基礎とせり。然れば、皇室は我が國家の父母にして、臣民は其の愛子たるのみならず、臣民互ひの間に於いては、全く同血脈の兄弟たり。然るに、動もすれば其の臣民の中に於いて、主義とか、宗教とか、學説とかの爲め、心に迷ひの雲霧を起して、互に感情を害し、國家の大事をも打忘れて、讐敵視するもの無きに非ざるは、彼臆病なる兄弟の者の類にはあらざるか。只其の迷ひの雲霧晴なんには、孰れも異體同心たるべき兄弟にして、共に親愛を盡さゞるを得ざる同國民たるを知らん。兎にも角にも恐るべきものは、迷ひの雲

霧なり。拂ふべきものは、迷ひの雲霧なり。請ふ、一首の歌も、徒らに看過すことなからんことを。

（完）



樂園

朝がほ

永潜生

其の一

春も、や、けしきと、のふ梅が香のかよふ軒ばに、ひとり居て、くもりもあへぬ朧月夜に、物思ふゆめぢは、なつかしき故郷の野山をわけしことも、あはれ、いくたびぞ。

さても、流れて早きは月日なりけり。八旬の休暇、みじかしとにはあらねど、久しく家庭の樂みに渇けるおのが咽には、いさなに魚のたとへさへ思ひいでらる、ぞ。桐の一葉は、心づよくも、あどけなく眠れるおのれを、故郷てふあたゝかき乳房よりはなして、再び都門の學窓に送りしも、きのふけふとや思ひしを、菊も落ち紅葉も散りて、又、たてなはす霜柱に、いつしか新玉の歳をも迎へぬ。降りつもる雪につけても、先づ忍ばる、ものは、わが故郷の垣根なりけり。あはれ、そのかきねに植ゑし花の朝顔、かつては、月の御神の清き光と甘き露とを身にしめて、白きはしろく、紅きはあかく、藍に紫に、あるは濃く、あるは薄く、おのがまに〱匂ひいで、、われをなぐさめし花の朝がほ。今、はた、いかになりけむ。限りなき喜びの望もて、朝な〱の枕をかろからしめしさへあるを、咲き殘りたる一本の、吹きしく野分の風


挿圖

にゆらぎつゝ、我がいでたつを送りたる、花のあはれは、なほまのあたり見る心地ぞする。咲きてかつしぼむはかなきものとな笑ひ給ひそ。霜に傲り、雪を凌ぎて、色かへぬ松の緑のたゝふべくば、燔くが如き日の炎にえ堪へで、玉ともまがふ白露をさきだてゝ、笑みし首の、やう〳〵にうなたれゆくを、誰かは、愛らしくあはれと見ざるべき。うべも殘りなく散るこそ、花はめでたかりけれ。かれは、剛の半面にして、これは、やがて柔の半面にはあらずや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

苦しと思ひし試驗も、殘なう終へて、夢魂常に飛びかふ五百里の山河を、滊車の歩みも遲く覺ゆるまで、晝夜やすみなく馳せて、なつかしきわが故郷につきたるけふのうれしさを、たゝふべくは、はた何とか云はむ。立ならふ山々は、笑うて我を

迎ふるが如く、さしよする潮は、我が爲めに湧きて動くに似たり。路の邊の柳蔭は、かつてひねもす釣を垂れし所、打ち渡る橋は、かつて水泳の足場とせしもの。一の石も、一の艸も、皆我が舊友の如く思ひなさる、を。まして、家に歸りつきては、いつくしき父母の御顔を仰ぎ奉ることは、さらにも云はず、愛らしき弟妹等の見擬ふまで生ひたちたるが、兄上よくこそと片言まじりにいふもあれば、早も表に走りいでゝ、今兄上の東京より歸り給へりと、さもほこりげに友達に打ち語らひたる。さては年頃仕へこし奴婢等の、まめまめしげにふるまひ出たる。見るもの聞くもの、皆喜ばしからぬはなく、身はさながら、華胥の國にも遊びたらむ心地ぞせらる。打くつろぎたる浴に道々の汗を拭ぎて、家族團欒の夕餐を催せば、そよ〳〵と吹く夕風の袂に入りて、身はさながら天津そらをもかけるに似たり。庭の木立に鳴く日ぐらしの聲もめづらしく、軒につるせる、しのぶの露の涼さは、又、ひとしほなり。魚は鮮らしく、酒は甘し。まして、母君の手づからものし給ひたる心づくしのくさ〳〵は、鳳の膸なりとも、いかでか、之に過ぎん。盃をかはして迭にこし方を語らひつゝ、心おきなき夕顔棚の下すゞみに、夜の更けゆくをも覺えざりしが、何事ぞ、一聲帛を裂く如きあやしき音聞えて、つゞきて打ちのゝしる聲の、いや高らかにあまたゝび響く、其の鋭きこと、五臟にもしみわたりて、みのけだつまですさまじともすさまじきに、我は思はず、取りたる盃を落しぬ。折しも、大道は俄かに氣色たちて、人々の馳せかふさまなり。

「何ぞ」我は、思はず拳を握りつ。

「汝しは未だ知らぬにや。知らぬなるべし。そは、

狂人なるものを」

父君は、いとおち居ての給ふ。母君は、語をつぎ給ひて、

「知らぬも理ならむ。あはれ、いとしきものよ。世には、神も佛も居まさぬにや。あれこそ、井筒屋の娘なれ。かねて、おとなしくやさしきが上に、萬まめ〳〵しくいそしみて、誰一人として賞めぬ者なかりしに、卿も知らるゝ如く、家運の日々に衰ひゆきて、積りつもれる不幸を憂ひてのあまりなりとか」

「さては、あはれなるものよ。いつ如何にして狂ひたりけむ」

父君は飲みさし給ひし盃を傾け給ひて、

「亂れそめしは、去る彌生の末つかたなりけん。皆人は、花よ酒よと狂ひさわげるに、あはれなることしてけり。さるにても、夫の龜は、いづくいかにしてかあらんずらむ。全く兄と妹とに生れ來ても、かくもかはれば變るものにや」

こざかしき腕白盛りの弟の一人は、いつのまにか見に行きたりけむ。息をもつかず馳せ返へりて、

「今しがた、氣違ひの、戸を打敗りて狂ひ出でたるを、近所の人々大勢して、やう〳〵に取り押へぬ。なか〳〵の騒ぎにて、おもしろかりしことよ。今もなほ例の如く、我は神の使なり。我を押ふるものは天罰あらむ。我が右の手には黄金の丸あり。いざ、貧しき人々にわかちやらむ、我が左の手には、壽の水あり。なやめる人よ來りて飲めと、丸藥をまきちらし、水藥をこぼしつゝあるなり。兄上よ、共に行きて見給はずや」

母君は、高聲に呼ぶ彼を制し給ひつゝ、

「氣違〳〵と左な罵り給ひそ。彼の子の如く、家を

思ひ親を思ふ者は、世にまれなるべきを。」
「龜とは、彼の兄にては候はずや。」
「さなり」と父君は答へ給ひつゝ、
「世には又々、彼の如き無道の者も尠なかるべし。家を倒し、身をそこなひ、あまつさへ、親の壽をも縮め、はては、おのが妹しかも玉の如き彼を、かくもあはれなる者とならしめたるは、げに人の面かぶりたる獸ならでやは。」
折しも、今まで晴れわたりたる大空は、俄にかき曇りて、行かふ黑雲は、さながら群れたる獅子の狂ふに似たり。片われ月は、見えつかくれつ、すごき光をかなたの松か枝にもらしつ。遠山寺の鐘の聲は、かすかにひゞきわたりて、冷風一陣、鬼氣人を襲ふ。
「いざ寢よ。いたくも疲れたらむを。盡きぬ話は、またの日に殘さずや。」

父君の後に従ひて、われも臥床に入りぬ。さわさわと鳴る木立の音に、ふと耳をそばたつれば、絶えてはつゞくあやしの聲。
「から〳〵」と笑ふかと聞けば、やがて「かなしやな」………「うらめしやな」

其の二

井筒の翁とは、わが里に誰しらぬものなき男なりけり。井筒の煎餅とは、隱れなき名代のもの。それよ、我が幼なき時の二つなき好物なりけり。翁、むかしは家いと貧しくして、とある橋のたもとに、さゝやかなる屋臺拵へつゝ、そをやきて、やう〳〵に細き烟をたてけるが、其の味のすぐれてめでたかりけるにや、日々に榮えゆきて、彼の顏にも似かよひたりけん、福の神は、いつも彼を護りつ。幾とせの後、家をも求め庫をも建て、さして富め

りと云ふにはあらねど、花の莚はおのれまづひらき、ゆきの酒は人にもわけずあたゝむるやうなりしものから、家事をば、悉く子に讓りて、心安く餘命を送らむとや思ひたりけむ。すける道とて、音曲遊藝、さては園藝のわざなど、凡そめづらしと聞き面白しと思へるものは、費惜まず習ひ覺えて、みづからも喜び人をも樂しませてけり。われは、たしかに記臆しぬ。我が宿のまがきに匂ふ花の朝顏、今もなほまなかひにかゝりて忘れもやらぬ其の花も、あはれ、此の翁が好意もて植ゑんけ種子の、おのづからこぼれては、年々にかく美はしく榮え行きしものなるを。さては、鄕社の祭宇蘭盆の夕などは、翁が最も得意の日なりかし。いちはやく、紅のはちまきしめ、紅の衣を



着けて、或る時はふし面白き謡を歌ひ、ある時は巧みなる笛を吹き、得手たる三味をかきならして、町々を經めぐり行くに、それ八筒屋の翁が出でたり。今年はいかなる狂言をや演ずらむ。如何なる節をや奏づらむと、大方は耳打すまして聞くめり。翁、又いたく小供を愛して、手づからものしたる煎餅を與へては、くさ〜〜の昔噺などして、其の喜ぶさまを見るを、何よりの樂みとはなしぬ。あはれ、おのれも、其の温かき贈物受けたると、幾度なりけん。されば、郭子儀にはあらぬ翁のある所に、小供の影の見えざるとなかりしも、あながちに、そが煎餅の甘きのみにてもあらざりけらし。翁に二人の孫あり。長を亀太郎と呼び次をお石といふ。他人の子さへかゝるを。まして、

子よりもかわゆしとか云ふ孫のことにしあれば、眼にも入れたき程にてなん。美々しく裝ひたる二人を兩の手に引き具して、よき兒なり、かわゆき兒なりと、人にはめらるるを、自ら賞らるるよりも嬉しく、それ神輿もわれ造りやらむ。巾着もつけてよ。なに刀がはしきとか。よし、之れも買うて來よと、思ひの儘に養ひ育てつ。我は忘れじ。龜がもてる弓矢の、しきりに欲しくて、終に母君にねだりて買ひてもらひしこともありしを。龜が、祭の日になせし義經の扮裝の羨ましさにえ堪えで、いたく父君に叱られしこともありしを。かくて、夙くより故郷を出でゝ遊ぶの身となりたる我は、詳らかに其の後の事を知るに由なけれど、坐して食へば山をも空うせんを。まして、數千の金、いつまでか久しかるべき。夏の休暇に歸りて見る度ごとに、彼か門口はます〱さみしく、かつては美はしかりし井筒のしるしの板も、彼が齡と共に、やうやうに傾きつ。落つる歯にむかしの大津繪もいでず、屈む腰に得意の狂言も舞はすなりぬ。只、年々に增し行くものは、龜が惡しき噂さのみなりけり。されば彼は、げに、太くたくましき若者となりぬ。されど、かれが我儘の性は、歳と共に增し行きて、迚も抑ゆべからずなりぬ。惡魔は閉居に弱はれる彼が胸を犯せり。酒に荒み廓に狂ひ、さては博徒の群に入りて、はや彫るべからざる朽木となり終はんぬ。御意見無用とは、彼が唯一の楯なりけり。かつてはおのれを溫めし母の胸を突けることもあり。かつてはおのれを負ひし翁が脊を打てり。蛇の受けたる寸の古症は、おろちとなりて、はや尺にもあまるべくなりぬ。さらぬだに裔の盡きなんとする燈火の、いかでこのあらしに堪え得らるべき。嘆げく翁と怒る父母と莫大の負債とを殘して、

何處ともなく龜の姿を隱くせし時の一家の哀れさは、はた、いかなりけむ。井筒の底は、敗産の役人によりて水もたまらず打ちぬかれぬ。きのふまで住みなれし家をも庫をも人手に渡して、これのみはと手を合せて、やう／＼見逃がされたる煎餅の道具をもちて、なく／＼さゝやかなる家に引き移りたるは、それよ、おとゝしの休暇中のことなりけらし。

其の三

ふり積むゆきに色かへぬ松の緑は、一しほ濃かに、あやなき暗にかんばしき梅の薫は、ます／＼しるからむを。その松その梅にも劣らぬ堅き操は、あはれ、このお石なりけり。彼は、はや二八の春をかさねて、花も羞ふ妙なる乙女となりぬ。げに、彼れが姿は、心ゆくばかり美はしきを。其の形よりも、なほ美はしきは、其の心なりけり。かく集ひ



つどへる憂きことの中にありて、つゆひるむけしきなく、朝は鷄に先だちて起き、夜は月に後れて寢ね、てりやかゝやぐ夏の日も、ひねもす爐の側に、すぎはひの業をいそしみ、圃を劈く冬のあしたも、ひゝ切れたる手につるべなはとりて、老いたる祖父につかへ、悲しめる父母を慰さめては、たゞ一すぢに家をぞもとの樣にかへさんものをと、勤めにつとめ、勵みにはげみたりけんを。みじがき物を端切るとか云ひたりけん世の諺にはもれであまりにも、世をはかなみけるにや、翁は、此の程よりしていたくもおいばれてけり。かつては、笑みて小供の「公事を」なだめたりけん彼は、今は小供の如く何事にもくじをならべて、朝より、肉と酒とを供へざれを怒りて箸さへ取らず。まして、手足のやう〳〵叶はずなりし彼は、飲食より二便の世話に至るまで、悉くお石の手を煩はすに至りぬ。世には、數多の財を積める人夥だしく、貴き位をふめる人多し。去れど、其の寶、其の位もて、心よりして親を喜ばすの人は、果して幾たりぞ。さるを況んや、かゝる貧苦の中にありて、色を和らげ、誠を盡して、よくこれにつかへ、つゆ、其の心に逆らふことなきお石の如きは、濱の眞砂に玉拾ふよりも、げに少なかるらむ。德はかならず孤ならずとか。此ひ稀なる花のかほりは、つゝむとすれどやう〳〵にあらはれて、鄕黨隣里一人としてそを賞めたゝへぬはなく、さては、厚く心をつくし貴き贈物をよせて、いろか妙なる、この一本の花を手折らんと願ひしも幾人なりけんを、家の不幸を外に見てれのれ獨り榮華を極めんは心苦しう侍ればとて、皆辭みつ。彼はげにやさしきが中にも、亦、雄々しき乙女なりけり。龜の如き不敵の輩も、尤も恐ろしく覺しは、あはれ、

この菩薩の眼なりけりとか。宿世いかなる惡き緣やありけむ。はた神は、ぬば玉の暗を送くりて塵にくもれる人の、心のかゝみとも仰ぐべき、此の星の光を、いやが上にも輝かさむとや思ばしたりけむ。雨はさらにすさまじき嵐を加へぬ。龜の走りたる日より程遠からで、父はふと風の心地、とて打臥しつ。年ごろ日比、心を惱まし身を苦しめし彼が躰は、病の神のあれにあらぶべき、いとよき社なりけりと醫師は云へり。窒扶斯いふものにて熱いと高ければ、なか〳〵に心し玉ひてよ。あはれ、お石の驚きと悲みとはいかなりけん。人は、鄕の社の瀧壺に氷を砕きて、凝する彼を見たり。程遠き稻荷の祠に、夜をこめて、百度踏む彼は見たり。帶をも解かぬ心づくしの彼が介抱も、定れる命の、如何ともしがたくやありけん。苦しみ堪へで、たわごといふか中にも齒がみしては、龜が無道の憤り、掌を合はせてはお石の誠を謝しつつ、しづかにひゞく入相の鐘にさそはれて、散りかふ花の乙女の手に眠りしは、雪いと積りたる師走のある夕なりしとか。あはれ、其の雪には、古りにし松の幹さへ折れけんものを。かよはき花の乙女のいかで、堪へ得らるべき。彼は泣けり。日ひと日、生心地もなく泣きて伏しぬ。彼れか心を思ひやりたる町人等は、おのがじゝ集ひ來つゝ、限りなき仝情の涙を寄せて、彼を慰め、彼を助けて、やう〳〵に野邊の送りをすませし、其の初七日の夕なりき。龜は、ゆくりなくも歸り來たりぬ。さすがに人目を憚りてか、夜更けて戸を叩きし。其の歩みは、げに龜よりもなほ遲かりけむ、燈火影暗うして、香の烟繚の如きところ、降りそそぐ花の乙女の淚の露には、けがれ汚れし彼が腸もいかで、濺かれであるべき。彼は泣きて死せ

る父と生ける母とに詫びぬ。親に向ひて、彼が頭を垂れしは、あはれ、けふぞ初めなりける。一月二月、彼れは別人の如くなれり。かわくひまなき涙の沖の石も、せめてこれのみは、友千鳥のうれしき音をや立てたりけむ。

さても、飲むまじきは、酒なりけり。持つまじき者は、惡き友なりけり。染めくれし絲は、再び素ならんやうなく、こぼれし水は、再び盆に返へらずとかや。かくまでに悔い悛まると見えし龜、人の心もそゞろ浮き立つ彌生のあした、花見の莚にとて招かれて、古き友達と酒くみかはしては、むかし樂しと思ふ心のむら〳〵と起りて、春野に萠ゆる若艸に心の駒の狂ひそめては、抑へんとしてれさふべからざるものやありけむ。彼は、いつしか又良からぬ仲間の數に入りぬ。あはれ、潔き千古の石よりおりて、再び尾を泥中にけがす龜の身ぞ、あさましくも亦あさましからずや。打ち振る賽の目の、常に彼に背きしもこゝろありしや、否や。彼は鬪うて敗れぬ。やぶれてはたゝかひぬ。かくて幾程もあらぬに、又莫大の負債さへ重ねつ。仲間の一人は彼に迫りぬ。磨かで玉ともならん石を、値ともなさでむなしくさし措かんは、寶の山に入りてむなしく還る痴人ならずや。

「やぶれかぶれ」とは彼が最後の叫びなりけり。彼は、げに世を照らし道の鑑ともなるべき此の賴と玉をあなかしこ浮き河竹の流の底に沈んとはしたるなり。彼は巧みに説けり。「汝しは、長らくの間祖父君さては、父母に親しく仕へて、よく内を守り與れたれは、いざ、けふよりは我代はりてん。世に座ませし時不孝を重ねし父の御靈に、盡させぬ詫びごとをもなさんと思ふを、御墓もしぜし我に守らせてよ。日頃よき奉公もがなと心をくだきし

に、けふやう〳〵によき口尋ね當りつ。はや約束もと〳〵のへて還り來ぬ。もとより分つべき財もなき我が家なれば、いかて、其の給けし金を貯へ置きて、やがて、こん嫁入の簞笥ともせよ。これぞ家のため、はた御身のため、此の兄か唯た一つの頼みなれ。」「嫁入との給ふか。妾ははつゆさる心なし。たゞ諸共にいそしみつとめて、身をも立て、家をも興し、給ひて、せめては、艸葉の蔭なる父を喜はせ奉らんこと、妾かこよなき願ひなれ」と辭む妹を、「さな云ひそ。父在さぬからは、不肖なれども、我は父なり。兄なり。其の言の聽かれぬは、さては、我が歸り來たれるが心に叶はぬならむ。さらばよし、我もせんやうあり」などおびやかしつ。泣く〳〵左右の袂にすかる翁と母との手を拂ひつゝ、妹を、とある怪しの船に載せつ。あはれ、其の船よ。天邊月黑く海霧暝々として向ふ所をしらず。

＊　◦　◦　＊　＊　＊

名にしおふ石の堅き心も砕けてさとちりぬ。日ひとひへだて〳〵、くるわのあるじの、年若き一人の狂女を連きて吾が里に入れるとき、皆人の袂の露はいかに重かりけん。人ならぬ龜は、夙く姿を隱しぬ。絶えなんばかりなげき悲しむ翁と母との前に、立ちて笑みつゝ、狂女は云へり。「さな嘆きそ。我は貧しき人に、幸を齎らすべき神の使なるものを」げに、彼は其の言の如く神の使となり、汚はてたる浮世の塵にすゑじと、神は彼を召しけるなり。あはれ、凋み果てたる花の朝顔は、いづれの時か又開きて、我を慰さめむ。



少女と蟹

聽雪女史

或海岸に、毎日〳〵干潮の時を考へて、貝拾ひにまゐりまする艶麗い少女がありました。年の頃は十二ばかりでした。極く小サな籠に、蛤だの、あさりだの、赤貝だの、櫻貝だの、どつさりひろひまして、重くなると、金時太郎の樣な眞赤な顏して、其の籠につなをかけて、えんやらはいと、引上ぐるのですよ。それで老翁は、な――或日少女にたづねました。

老「コレ、姉さん〳〵、おまへは、いつもよく働くにね、少し手傳つて上げやうか。家は、遠くなのかい。

少女「ハイ、私の家は、近う御坐ります。

老翁「年は幾何なの。お父さんも、お母も、爰に來ないのか。

少女「ソウデス、私のお父さんは、漁士で御坐りましたが、去年の秋でした、大そう海が荒れまして、浪の高い日に、船出いたしまして、見る見る浪の爲に、食はれてしまいました。あとには、お母さんお獨で御坐りましたが、今年の春に、ふつと風邪ひきまして、寢てしまつたきり、今におきることが、出來ませんで私が毎日拾つた貝を賣りまして、お世話して居りますの。

老翁「ソウカ、氣の毒だね――。よくお母さんに、御孝養をつくしなさい。そうすると、今に孝行娘の評判が、高くなつて、お上から御褒美を、いたゞくこともできるよ。

少女「オヤ大そう遲くなりました。潮の出で、こない間に、ひらつて參ります。また明日。

と、云ひつゝ横手に鎌をつかみながら、さがしに沖の方へまゐりました。

小児「オイ――、太郎まつてくれ、爰にも、赤い強いやつが、いやがつた、逃がしちや いけない。

太郎「ツウカイ、どちらにやあ――、大變だ〳〵、早く、早く――、來てくれろ、蟹が袋から出たやうじや。作坊僕の背中を見て呉れ、あー、あー痛い、痛い、はさみでつめぎつたやうだいたい〳〵、につくいやつじやないか、いたい〳〵。

蟹「コレ〳〵、さあ――、どうだい、痛いか、痛いか、是でも、痛くないか、折角吾輩が、海の干汐に遊んでいたところへ、來やがつて、むやみに、握り取つて、こんな、強い、袋に入れてしまつた――。どうじや、これでも出さないか、ださなけりや、きつく、つめぎつてやるぞ。

太郎「痛い〳〵、降参だ、降参だ、ゆつてくれ〳〵。

と、二人は、手足を、もがもがして、わい〳〵騒いで、やつと、大な袋を、海の中に、落してしまいました、太郎は、ぷつ〳〵怒つて、自分の、背をなでまはしました、

太郎 あ――いたかつた、オ――次郎よ。作坊よ。君達が擔いでいきな、僕は、いやだ。食いつくじやないか。

作次「いやだ――、僕達だつて、困るじやないか。い丶わ、捨ておけ。ねー太郎。

太郎「ツレジヤ、袋の口を、結んでおけ〳〵。そして蟹奴に、困らしてやれ。なに袋が浮くといけないから。斯して、石で押へておけ。あはゝゝゝ、

とわらいつゝ、逃げて行きました。
蟹「ヤレ〳〵、皆さん、お蔭で助かりました。さあ〳〵逃げて歸りましやう。
と、一番に大きな蟹が、がさ〳〵と、歩るきはじめました。すると、皆の小さい蟹やら、まるいかにやらが、贊成〳〵と、がさ〳〵はひあるきまして、
小蟹「オヤ〳〵大變です。大將、袋の口が、かたく結んでありまして、にげでる所がありませんよ。困つたものです。私達は、身が小さう御坐りますから、穴をさがして、歩きましやう。大將達は、どうか、鋏でこの布袋を截つていたゞきましやう。
大蟹「フン、ソフカ。そらいまいましい事じや。よろしい皆が、かゝつて、鋏でつき破ぶつてやれ。

と、申しました。ところで大變だ、あちらの、すみには、鋏をちよいと、突き出して、ぎし〳〵、やつて居ました、こちらのすみには、大きな鋏でごし〳〵やつて居まして、充分に、氣張つて、ぶつぶつと、大騷をはじめました。すると、向の方から、先程のやさしい少女が貝を拾ひつゝまゐりまして、あら、何んでしやう。ぶつ〳〵、いふ聲がすることよ。私の貝だらうかと後を見たり、前をさがしたりして、やつてまゐりました。ところが、大きな袋から、どつさりの蟹が、鋏をたてゝぎしぎし、ごし〳〵やつて、外の海に、でそこなつてゐましたので、少女は暫くの間は、見つめて居ましたが、やがて袋を明けてやりました。
少女「蟹どん〳〵、おまへたちは、誰に入れられたのだい。可愛想に、私がわけてやるから、サア〳〵、早くにげなさい。さつと、おまへ

のお父さんや。お母さんや、子供などが、待つて居るだらうね――、

大蟹「へイ、へイ、有難うぞんじます。實は、先程、漁士の子供奴が、吾輩を捕へまして、ひどいめに、遇はせましたので、困つてゐたのです。ありがたう存じます。サヨナラ、お孃さま。へイ、へイ」

と、一ばんに大きな、赤い鋏を、かいしめてゐる大蟹が、でゝまゐりました。少女も悦んで見てゐました。すると、又次には、すこし小さい蟹が、二匹ならんで、うれしさうな風に、ぞろ〳〵、でてまゐりました。

小蟹「お孃さん、どうも、すみません。難有う存じます。へイ、〳〵、眞平御免蒙ります。」

と、お禮を言ひながら、逃げて行きました。少女は、「どういたしまして、早く逃げて、行きなさいよと、一々に、頭を下げてゐました、」すると、又、今度は、少し大きな赤黒い、かにが、五匹づれで、

蟹五「どうも、お孃さん、すみません、おかげさまで、歸ることができます。ありがたう存じます。

と、いひながら、でてまゐりました。すると、又、今度は、十匹が一列になりまして。

蟹十「ありがたい〳〵、お孃さんの、おめぐみで、たすかりました。きつと、忘れませんよ。」

と、云ひながら、横走りに、大急ぎで、かけて行きました。すると、また、今度も、二十匹程が、二列になりまして、出てまゐりました。また、今度は、すくなくて、三匹づれで、話しながら出てまゐりました。少女は一匹づゝの、かにのおれいを、一々きいてゐまして、なに、かまつ

て、いないで、はやくれにげなさいよと、いく十度も、いひました。とう〳〵おしまいに、出てまゐりましたのは、五匹よつてまゐりまして、

蟹五「お孃さん、ありがとう存じます。あなたの御親切は忘れません。お孃さん萬歳」

と、大呼りをいたしました。少女も、今度は、おしまいだと思ひまして、

少女「皆の蟹どんは、御機嫌よくにげたかね――。

まづ〳〵、よろしかつたね――さよならと。

これも大きなこゑで、まをしました。たくさんありました、かにの捕虜は、一匹も、ゐないやうに、うまく逃げてしまつたのです。少女はかにのにげて行きましたのを、見て居たものですから、かひをひろふ時間に、長くかゝりまして、まだ〳〵拾はなければなりませんから、驚いて、

さあ――これから、せつせと、ひらひましやうと、いきはひをだしてゐましたうちに、太陽は、にしにくれかゝつてきまして、おそくなりました。ところで、このをとめは、お母さんに孝行で、御坐りましたから、さぞ、お母さんが、待つて入らつしやるだらう。今日は、よそのお老翁さんとはなしをしたり、又、蟹を逃がしやつたりして、かひはまだ少ないことよ。さあ――、沖の向の方まで、行きましやうと、ひとりばなしをしながら、どん〳〵行きました。ところで、干汐の時間が、過ぎましたから、しはがましてまゐりまして、寸時の間に、どん〳〵まんてうになりました。少女は何にまだいゝわといひながら、彼ら、こちら、とさがしてひろつてゐましたが、かせが吹きつけてまゐりますと、なみがおとめの肩まで、被ぶつてまゐりま

した。おとめは、「あら――どうしやう〳〵、たれか、たすけておくれ〳〵と、こゑを張り上げて、呼びましたが、しかたがありませんから、この少女は、根がりやうしの娘でありましたから、游ぎましやうとけつしんしたのですが。折角拾つた貝をおとしてしまうのが、惜いから、一心にかいがんの方を見つめました。すると三尺程ばかりのところに、黒い岩が見えました。少女はさて、甘いぞと、よろこんで、飛びつきまして、又むかふを見ました。ところがまた、一つのいはがありました。あら嬉しいと、飛びかへました。すると、また一の岩がありましたから、あら嬉しいと、とびかへまして、いくつもいくつも、こんないはを飛びこえて、まゐりまして、氣がついて見れば、又もとのかいがんにつきました、そこで、をとめは、ひろつた貝も、どつさりありました、水にもおぼれないで、無事に着きまして、おとめは嬉しうて、嬉しうて、よく見て考へますと、いはではなくて、澤山〳〵のかにが、集つてまゐりまして、全く少女をたすけだので、いははかにの黒い背中の甲でしたから、少女はあきれて、ぼんやりして居ましたが、地にふしてかにどん〳〵ありがとうと、まろがつて、おれいを申しました。すると、がさ〳〵、岸にはい上つて來た大蟹は、

大蟹「はい〳〵、どういたしまして、私こそ、お孃さんに、お禮を申上なければなりませんよ。先程は、私の小供や孫供を、だん〳〵お助け下さいまして、おかげさまで、命もたすかまりしたので、御坐ります。それに、これしきの事で、お禮くだされては、まことにおそれ入ります、何か結構なものを、持つてまゐり

ましやうと思つてゐましたが、何分蟹の事ですから、つまりませんが、これは、あなたのお母さんに上げて下さい。」
と、大きな〳〵、少女の手で持てない程の鯛を、鋏で、引き上げました。すると、海の中から、お孃さん、ずゐぶん御機嫌よく入らつしやい。さよなら、こゝまでお送り申しましたと、大聲して、澤山の小蟹が云ひますと一つに、小岩が、どこへか消ゑてしまつたやうでした。少女は、さよなら有難う有難うと、お禮を致しまして鯛をさげて、走つて歸りました。まづはめでたし、めでたし〳〵。



文林



河上春月　　東久世通禧

大井川いり江のまつにふくかせの
　おとしつかにもかすむ月かな

橋邊柳　　鍋島直大

青柳のしけりしかけにあたらしく
　かけ渡しけりさとのいたはし

江上霞　　前田利嗣

芦のめもつのくみそめて難波かた
　いり江のとかにたつかすみ哉

里春月　　大谷光尊

のとかなる葉やまのさとの夕月夜
　ふしはかすみの奥にかくれて

海邊春月　前田利鬯

春の夜の月はおほろにかすめども
よる浪しろしたけしはのうら

樵路春月　宮地嚴夫

わらびをる春の山路に日はくれて
木こりとともに月をみしかな

野春風　北郷久政

雲雀なく野への霞をわけ行けは
はなもにほひて春かせそふく

春朝　坂正臣

花のいろさやかになりぬあさ日影
むかひの山にいまのほるらん

柳露　植松有經

春の日はかすみてくらき我がかどの
したりやなきの露のさやけさ

雲雀　鎌田正夫

夕雲雀あかるかぎりやあがりけん
おなじところにこゑの聞ゆる

名所川　諏訪忠元

みなと川水はかれにしいまのよに
高きその名はなほなかれけり

披書知昔　伊東祐賢

かきのこす文しなけれはいにしへの
人の心をいかでしらまし

清水菊子令嬢の新婚を言ほきて　大畑弘國

末とほく千秋五百秋かをるらむ
ねさしもしるき菊の花園

おのれ子の年に生れてことし
七かへりの子年にあひぬ　三浦千春

なす事もなくて空しくなしかへり

また子のとしにあひにけるかな

故郷殘雪　三輪義方

ふるさとのよしのも雪はみねにのみ
のこるころともなりにけるかな

松上鶯　遠山英一

ときはなる松のはやしもうくひすの
鳴く一聲に春めきにけり

老狸皷腹の圖に題す　井上頼文

つれ〳〵と雨のふる夜のふる狸
ねむけさましに皷うつらむ

女鑑二百號の發刊を祝ひて　三木五百枝

天照らす神のみくにの女かゝみ
さやけき影はくもらざりけり

仝　足立正枝

山はたに咲くらむもゝの數をまた
うちかへしても匂ふ文かな

垣若草　蜂須賀随子

はる雨のふりし一夜をへたてにて
庭のさゝかきくさおひにけり

夕春雨　近衛貞子

風もなき夕べのそらにさくらはな
うごくは雨のふるにそありける

春月　鍋島榮子

吹く風は寒くおぼゆるそらながら
かすみそめたる月のかけかな

野徑蝶　前田朗子

おもしろく飛かふ蝶にさそはれて
思はすきたる野へのほそみち

早蕨　西四辻茂子

いつしかともえ出にけり春の日の
光にあたるにはのさわらひ

春雁離々　南郷柳子

つらなりし鴈もかすみに中たえて
離れはなれにみえわたるかな

霞中雲雀　柳原愛子

空たかく雲雀のこゑはきこゆれと
そこともみえす霞みはてつゝ

春雨晴　小池道子

雨たりの音またのこるまとのとに
かすみてにほふ月のかけかな

落梅風　北島以登子

うくひすの聲をのこして梅のはな
風のまに〳〵ちりもゆくかな

望遠帆　大谷章子

へたゝりし岸より見れはおき遠き
白帆はなみのおやかとも見ゆ

月前歸雁　松平健子

月影のかすめるそらにこゑはして
すかたはみえぬはるの雁かな

月夜に花を見て　保科節子

もろともに匂ひおひつゝ春の夜の
月もさくらもいまさかりなり

漁父　小川直子

影暗きあし火のもとのうらひとか
あみつくろふと夜をふかす覽

月前花　常盤井文子

おほろなる月も梢にみえそめて
立ちさりかたき花のかけかな

花見ありきて　原田蒼生子

あかて見し名殘留りてきぬかさを
拂へはおつるはなのしらゆき

春曉　鶴久子

花みつゝありき勞れていねし夜は

れもひ明るをおはえさりけり

古寺春雨　　佐藤艶子

花みんと訪くるひとのかけたえて
わめしつかなるしかのやま寺

名所春雨　　服部磯子

この夕へやなきにみゆる風もなし
春さめかすむかものかはつら

里春風　　中澤延子

あくまても袖にしめてや歸らまし
梅さくさとのはるのゆふかせ

海上霞　　宮地小東洋子

みはつくし立かひも無しうら〳〵と
霞みこめたるはるのうなはら

梅村聞笛　　諏訪晴子

梅の花匂ふかをりをさそひ來て
ふえの音すなり月か瀨の里

友　　海上壽子

まとゐしてふることかたるふるさとの
ふるき友こそたぬしかりけれ

松老澗底　　安東菊子

かしこきも昔はすみし谷ならん
千代をふる木のまつの下かけ

椿　　安齋さく子

大宮の池のうきはの玉つはき
八千代をかけて咲きにけるかな

夜話　　森川眞鶴子

おもふとち昔かたりも春めきて
のとかにふくる埋火のもと

柳　　安齋やす子

春風に池の氷も打ちとけて
なみのあやおる靑柳のいと

遠山霞　　清水靜子

春霞たな引くひまにつくし山
殘れる雪を花とこそ見め

菊子令孃の新婚を言ほきて　清水竹子

相生の松の綠のうるはしく
ちよとことはにいやさかゑませ

春閑居　足立みつを子

庭の面に花しなければふく風に
こゝろつかひもなきいほり哉

歸雁　名取正代子

いく里のはなにふれつゝかへるかり
いかにたのしき旅路なるらむ

海小舟　中西健郎

一

うき世の海に船出して　はやいくとせか梶枕
うきねの夢を重ねつゝ　沖べはるかに漂へば
過ぎこし方はしら波の　立ちも騷るばかりなり

二

聞きても厭と歎きけん　浮世の海のならひとて
波のさわぎにしく風の　音すさましき折々も
うらやすからぬ時々も　山とした のむ親船の
かげに隱れて安らけく　渡りきにしを思ひきや

三

あからしま風吹落ちて　あはやと言ふまも荒波の
荒立つ勢ひすさましく　肝も心も失せはてゝ
あやめもわかぬ眞中に　思ひたのみし親船は
碎けて見えず成にけり

四

行くへも知らぬ海原に　楫も絶えたる海小舟
かゝらむ島の蔭もなく　寄邊も浪に揉まれつゝ
漂ふはてやいかならむ

五

海原遠く見渡せば　うき世の海の浮寶
黄金白金積みのせて　なげきを外に安らけく
たのしみ遊ぶ船もあり

六

時を得良に帆をあげて　矢よりもはやき船脚に
勢ひたけく波をきり　勇みきほへる船もあり

七

千尋の底の眞白玉　龍のあぎとの玉得ひと
沖べはるかに漂ひて　心そらなる舟もあり

八

さもあらであれ捨小舟　もろき浮身の行末を
神に任せていたつらに　心もなしく手を束ね
漂ふ海月骨もなく　果敢くのみや朽ぬべき

九

學びの海の末とほく　泊てむ港は知らねども
いにしへ人の殘しけむ　澪標をばたどりつゝ
いざ漕出てむ海小舟

十

いざ漕出でむ海小舟　あやつる術は知ねども
梶とる腕は瘠せたれど　心ひとつにさして行く
行くてはるけき海原や
すさぶ鹽風吹かば吹け
怒るあら波立たば立て

春雪

下田歌子

日影待つ間の露、風の前なる燈火をこそ、世にははかなきものゝためしには云ふめれど、其れは始めより、幽かに、はかなきものなれば、もとより目驚くまじかめるを、これは、花やかにきら〳〵しきものゝ、時の間に、跡かたも無く成りぬるなれば、今一きははかなくてこそ覺ゆれ。

汀の柳枝先づ動きて、軒端の梅の蕾三つ四つ二つ綻びそむる程、ちゝぶね颪、俄かにさえかへりて、夜ひと夜、吹き荒れたりしが、曉がたに成りては、ふつに音もせず。枕がみのあかり窓、例よりもいとあかう覺ゆる、雪の積りぬるにやと、妻戸おしあけて見出だしたれど、木毎に咲ける花ともいはず。破れたる軒端、折りかへりたる垣根、其所ともわかず繕はれて、柴の扉も玉の臺とかはりにけり。げに、雪は豊年のしるしと云ふもうべなりけりな。見るからに、心ものびらかなるやうになりて、何となう勇ましうさへぞ覺ゆる。あはれ、心にも任する身ならましかばやがて、みやびの友を迎へもせまし。將た、これよりもとはましを、さふるまふべきにあらねば、朝飯したゝめあへず、例ざまに、例の所にまうでゝ、例の事取りしたゝめつ。とかくする程に、梢よりしづれ落る音、ばた〳〵として、朝日の光、いとまばゆく玻璃の窓を射たり。かゝらんには、まかんであへぬ程に、消え果てなましと、心ときめきしつれど、いかゞはせん。辛うじて、家路にのぼるべき時待ちつけて、すべり出でたるに、ふと打ち見やらるゝ限り、木だちすい垣なべて、青やかなるもとの色にかへりたるさながら、むら雨の後とのみぞ見ゆめる。あないと惜しと打ちひとりごちて、さし寄せたる車にもえ乘りやらず、しばし、打ちまもりゐたるに、内なる人の、君は何事をか案じ玉ふぞといはるゝに、春の雪の餘りにはかなく消え渡り侍るが口惜さにと云へば、其人打ち笑ひて、などてか君はしか思ひ給ふ。已れは、うらうへにいとあらまほしくこそ覺ゆれ。われはかへりて、冬の眞中に降る雪をこそ、いと口惜きものには思ひ疎み侍れ。さるは、人にあふづらるゝものとか云ふめる、北

おもてのひさしに、いつ迄も〳〵しみつき居たる上に、烏のついばみ殘したる、魚鳥の骨やうの物引き散らされたる、白き色にはえて、いとゞしうきたなげに見ゆるもいと佗しきに、老人の寒げなる顏さし出でゝ、この雪は、いつ迄か殘るらん。とく失せねなど舌打ちしたるなどよ。況て、大路の片隅におしつけられたるが、塵ひぢにけがれたる、又は、溝の中に打ち込まれて、泥にまみれなどしたるが、なほ執念く消えもやらで其色をしもわかず成りたる、花と見し間に、消えなましかばと思ふも口惜し。人の身も斯くこそありけれ。あはれ、彼の人の、知命の齢にも達したらましかばなど惜まれて、みまかりたらんは、いと羨ましからずやは。四十が程にてと願ひけん。兼好か詞げにさる事ぞかし。かれも、そのかみは、世の光といはれつる人よ。老いてはからも云ひがひ無く成りぬるものにやと打ちうめかるゝも知らで、なほありし盛の時の事繰りかへし〳〵、語り聞かせなどしつゝ、若き人に侮らるゝ、いと〳〵口惜し。千里ゆく駒も、老いては小荷駄馬にも劣りつべし。其を思へば、春の雪の、一時の榮を見せて、衰へを示さず、あはと云ふ間に跡無く成りぬるこそいみしけれ。さは侍らずやといはるゝまた、さる方にいとをかしと傾き聞く程、この見ゆる大路の隅にけしきばかり殘りたるさへ、いつの程にか解け渡りて、まことに跡はかなうこそ成りはてたりしか。

鹽原遊びのうち　小川直子

畑下戸の記

高崎大人のなり所より歸りたる夕つ方、宿りかへて、同じ里なれど、畑下戸と云ふ所にうつりぬ。此の樓は二位御局のなり所、又、奥蘭田氏のなり

所と軒を並べて造れたる樓なりけり。此の樓の上より見れど、石にわたりて、吉井瀧見ゆ。これはた峯は、夏木立生ひ茂りて、いとも〳〵高けれど、水はさ斗も、多からぬが、九折のこゝしき岩がねをつたひて、うすらかに落るなり。さればはげしくはあらで、あてにみやびやかなる姿ともいはまほしげなり。

みどりなる木のま〳〵にあらはれて
雲よりおつる瀧のしらいと

めぐりは、杉どもの程よきが多くて、そがなかに、名はしらねど、白き花の咲みてる木末ども、爰かしこに交れり。川岸には夏かげの柳、川風に、打ゆられてたてるも、亦をかしう見ゆ。麓の岩ねには、小萩のまた秋ならねど、すゞしさにおとろけるにや、さきかゝりたるもあり。此の流やう〳〵廣らかになりて、せきとめたる所あり。これより下つ方は、さま〳〵の岩ともまろびあひ、中洲などもあまたあれば、早瀬白波、音高く、右にとれ、左にめぐりつゝ、流れ行くに片淵の深き方には、いとあやふげなる柴橋渡したり。夕されどむかつその坂路よりおりくる杣人、馬にはさらなり、おのれも、柴あまた脊負ひて、此の川にいりて渡るを見るに、いみじうあはれにおぼえければ、

柴おひし駒ひく賤も世のわざと
この川の瀬をかち渡るらむ

など、ひとりごちつゝ、打見やる程に日もくれはてぬ。今宵は闇なれば、すゞろにものさびし。燈かかげつれば、内にいりて、例の文机に向ひつゝ、大和唐土の文どもくりひろげて見るに、心靜けく樂しき事、いひしらず。さるに下をみなの、なつ虫どもの、火につどひ來るこそうとましけれ、これをあかり障子の外に出さましといへば、いな

どよ槇の戸をさしねかしといひけるに、頓にさしてけり。猶、川音、高う聞えけれど、

あし引の深山の庵に軒の戸は
さしてもすごし夜半の川音

又、夏としもなく虫の音の繁ければ、

谷川の音にまじりて聞ゆなり
しははら山の夜半のむしの音

かゝる程に、夜もいたう更けたりければ、衾かつぎて、打ふしぬ。

岩の湯の記

けふは、空もうらゝかに晴わたりたれば、朝はらけの程に宿りをいでゝ、岩の湯のあたりせうえうす。先づ川の此方より見渡せど、此地をかこひたる峯々、五重斗かさなりて、同じ緑なれども、とり〳〵に、色替れり。遠なるは、いたう濃くて、其の上に薄きぬ着せたらんやうに、霧たちこめたり。前なるは、年經たる松とも並立て、うるはしう見え、其のかひより白雲の立のぼらんとして、むら〳〵と打なびけるに隣の岡どもは、楓の青葉、限りもなう打繁き、岸の巌苔なめらかなるを、猶洗はむとや、川波の打そゝぎたるも、いと清し。同じ川の流なれど、此のあたりの氣色、此方は汀より早瀬白波、岩にくだけて、湧き歸り、清く滞りなきは、うめる心を勵ますに似て、勇ましくも亦いさぎよし。彼方の岸は、中洲のためにやわらん、中々に上つ方へゆるらかにのぼり行くも、亦やうかはりてをかしう見ゆ。かゝる程に右にあたれる峯より横雲を分つゝ、朝日の、やう〳〵のぼれる、波の上にかゞやきて、ゆる〳〵流るゝ方は水底まで、すき通りたる日影に、いと深き水なれど淺きやうにさへ見えて、波のうね〳〵たとしへなう面白し。ただ此の岩の湯は、向ひの岸なれは

假初なる板橋をみつにわやとりたれば、折れてめくれるさまいと面白し。此の橋の上にて

ちりの世を拂ふ帚木の川風は
　衣手寒し夏のなかばも

あかぬながめに、時をうつしければ、こゝかしこより、人々起つて來つゝ湯あみむとて、そこらの行かひしけく來りぬ。

苔むして千とせを經たる岩の湯を
　あむれはいえぬいたつきもなし

と口すさびつゝ、徐にたち歸りて宿りにいりぬ。

虎のことを識す

赤　松　景　福

今はむかし德川の世のすゑの事とかよ。上野國厩橋に、國の守につかふる女虎といへるありけり。十七八ばかり、形いとよく、心もまめまめしくわりければ、守も北の方も朝夕にめでつかひ給ふになむ、自ら女どもの中に勝れたる覺なりける毛を吹き疵を求むるならひに、いつしか虎をいひ貶しめむとすれども、さしも事たつこともなかりけむ。さがなき女ども語らひ合せて、虎の御饌捧て出る時に、いとみそかに針を飯の中に入置ぬ。守そをめしたまひしかば、忽喉をさしけり。いといたく腹立たまひて、世の常の罪なひにては足らずとて、虎の身に大石を結付て、深淵に沈させつ。あはれと思ひて、川より逃るべく謀でちしものありけれど、其日は守の白出立て見たまへれば、かひなし。この守の城は、所の樣最すぐれたる所なり。城をめぐりながるゝ川は即ち利根川のみなかみとかいへる。築土石墻などいと高く固く築たり。さるに虎をしづめし日より。幾日もおちで大雨ふりつゞきて、川の水みなぎり、築土石墻などいた

く崩ゆきて、水の勢いやさかりになるまゝに、構ふべくもあらざりければ、殆危くなむ成ける。こは川邊なれど、かゝる禍はむかしよりなかりしをいかで、と人々あやしみあへり。その後守も虎の罪なかりしをしろしめして、その後また神といつき祭て、千僧の供養などせられて、淵の上に祠をたてさせたまへり。其淵を虎が淵といへるは此由なり。今も猶水の色青くて、うづまける樣、人の心にしむばかりなりとぞ。」

あはれわが亡き弟よ

三石直子

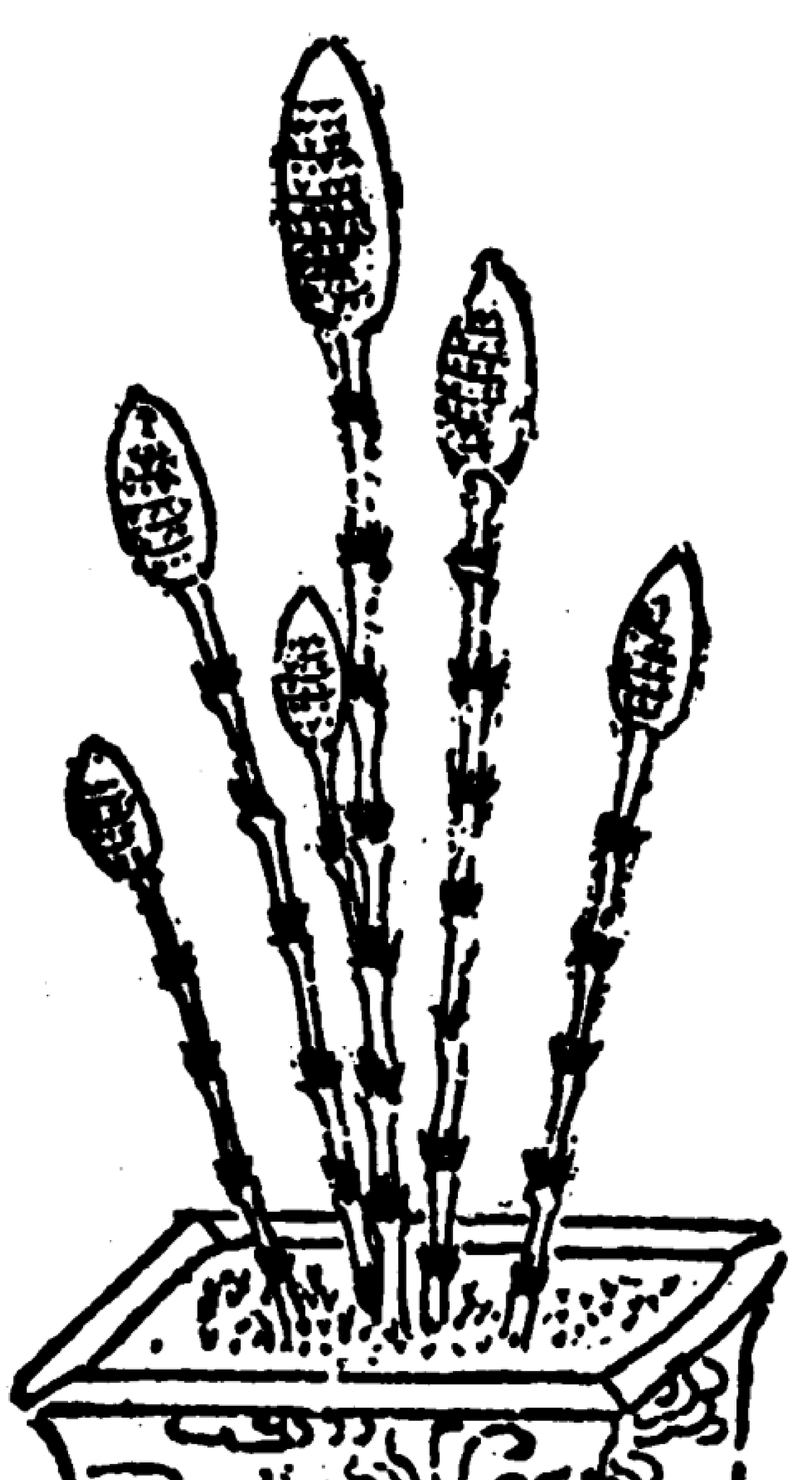
われに、年二つ下の弟ありき。

日かげうらゝかに、萌えいづる若草も一きは映々しう見ゆる春の朝に、われは右の袖をひき、彼は左の袂にすがり、いなみたまふ母君をそゝのかして、蝴蝶追ひにと出でありきしころよ。樂しさは實にたぐふべき方もなかりき。降りしきる雪に往來も途絶えて、吹雪かるゝが、たまく\は窓をうつ外に、物の音も聞えぬ冬の夜に、彼は、火桶にむかへたまへる父上の膝に膝うちかけ、われは母君が膝の上におきたまへる手に、頭をなげかけ、互にうなづきかはして、昔のなつかしきゆかしき種々の談を聞ける時よ。いかに、うれしくも樂しかりしぞ。斯くて年月をおくり、伊呂波を讀むにもアイウエオを書くにも、彼と共にするにあらざれば、更に樂しと思ふこともあらざりき。

其の弟は、十歳にも滿せずして、馬皮風といへる病氣のために奪はれぬ。

今は早、拾餘年をへたつれど、事につけ折にふれつゝ彼が事のみ思ひいでられて、忘らるべくもあらず。

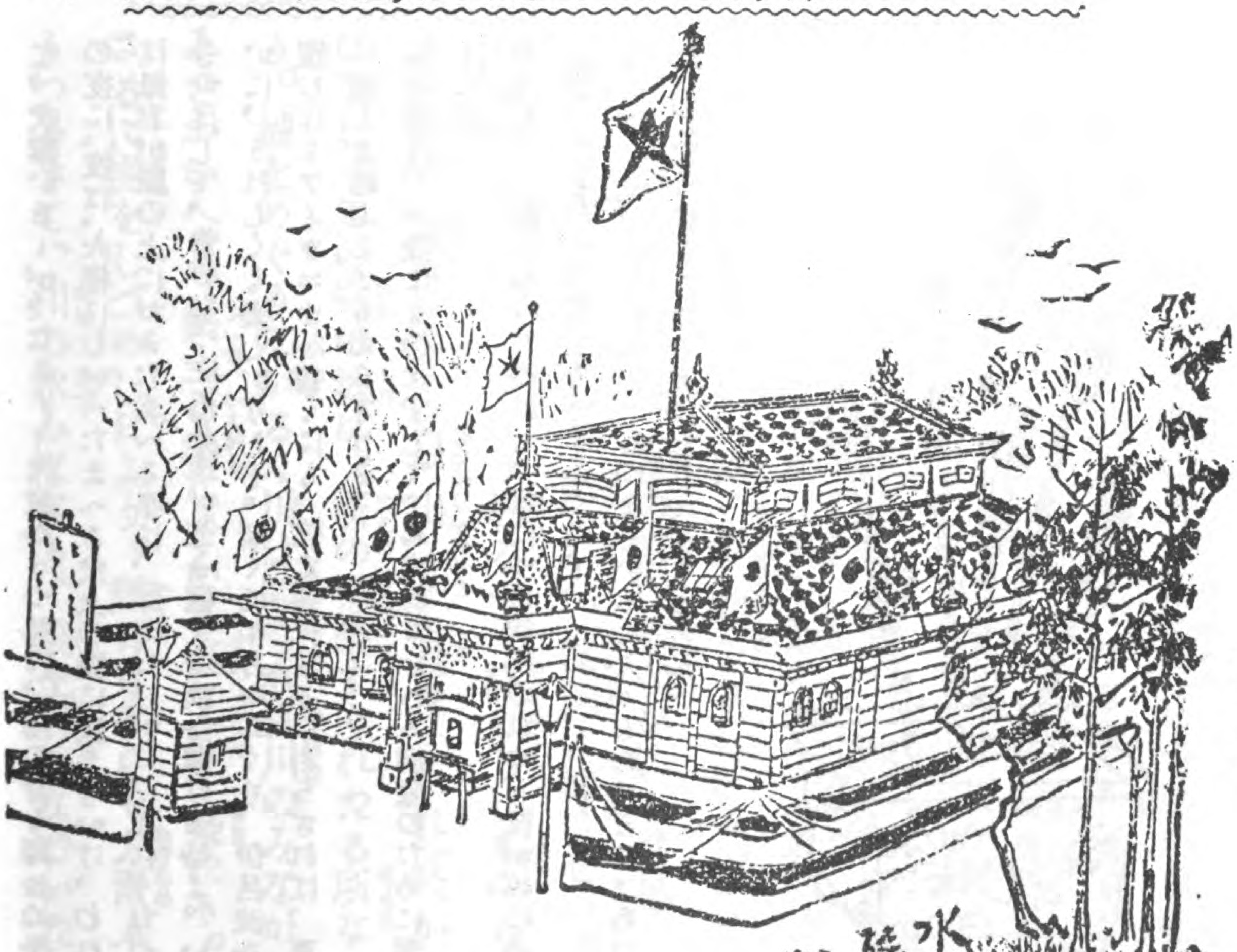
世には、兄弟のなからひ、むつましからぬ人々もありさか。あはれ、われは、むしろ然る人になりてましものを。



雜報



●皇室婚嫁令議定　黑田議長を始め、大鳥、海江田、田中、細川、九鬼、蜂須賀、杉、尾崎、高島、河瀨、佐野の各顧問官は、去にし二月二十日宮中なる樞密院に參集し、豫て、御諮詢中なる皇室婚嫁令に付き、種々審議する所あり。內閣よりは、桂陸軍大臣出席、又、說明員として、三宮、多田の兩御用掛も參會、穗積御用掛は、書記官として參會せしなり。同十時五十五分より、天皇陛下親臨會議の模樣を聞召され、同十一時過、一と通り結了せしに付き、陛下は、同十一時十五分頃入御あらせられ、引續き、



水族館 (1)

黒田議長より、更に、詳細議決の摸様を奏上し、正午頃、一同散會したりと云ふ。尙聞く所に依れば、御諮詢に相成りしは、單に皇室婚令のみにて、附屬儀式は會議に上ざりし由、尤も、皇室婚嫁令は、約二十條程より成り立ちたるものにて、昨日の會議にては、多少の修正を加へしのみ。大体に於いて、原案を可決したりと。

●御慶事後聞

●各公使の御慶事献納品　本邦駐劄各國公使は、我が　皇太子殿下御結婚の當日を以て、祝賀の意を奉らん爲め、献納品をなすことに決し、其の品種撰擇中の處、此の程白耳義國特命全權公使アルベルド、ダヌタン氏、豫て、懇意にせる宮内省御用達玉寶堂飯塚伊兵衛方に　今上陛下立后御式の砌り、正殿に飾られたる花瓶雛形の、秘藏しあるを見て、之を摸造し、種々の寶石金屬を以つて、古代摸様の象牙を施せる銀瓶一對を献納せんと發起せしに、各公使とも、同意せるを以つて、今回同公使より、右飯塚へ、其の調製方を命じたりと。

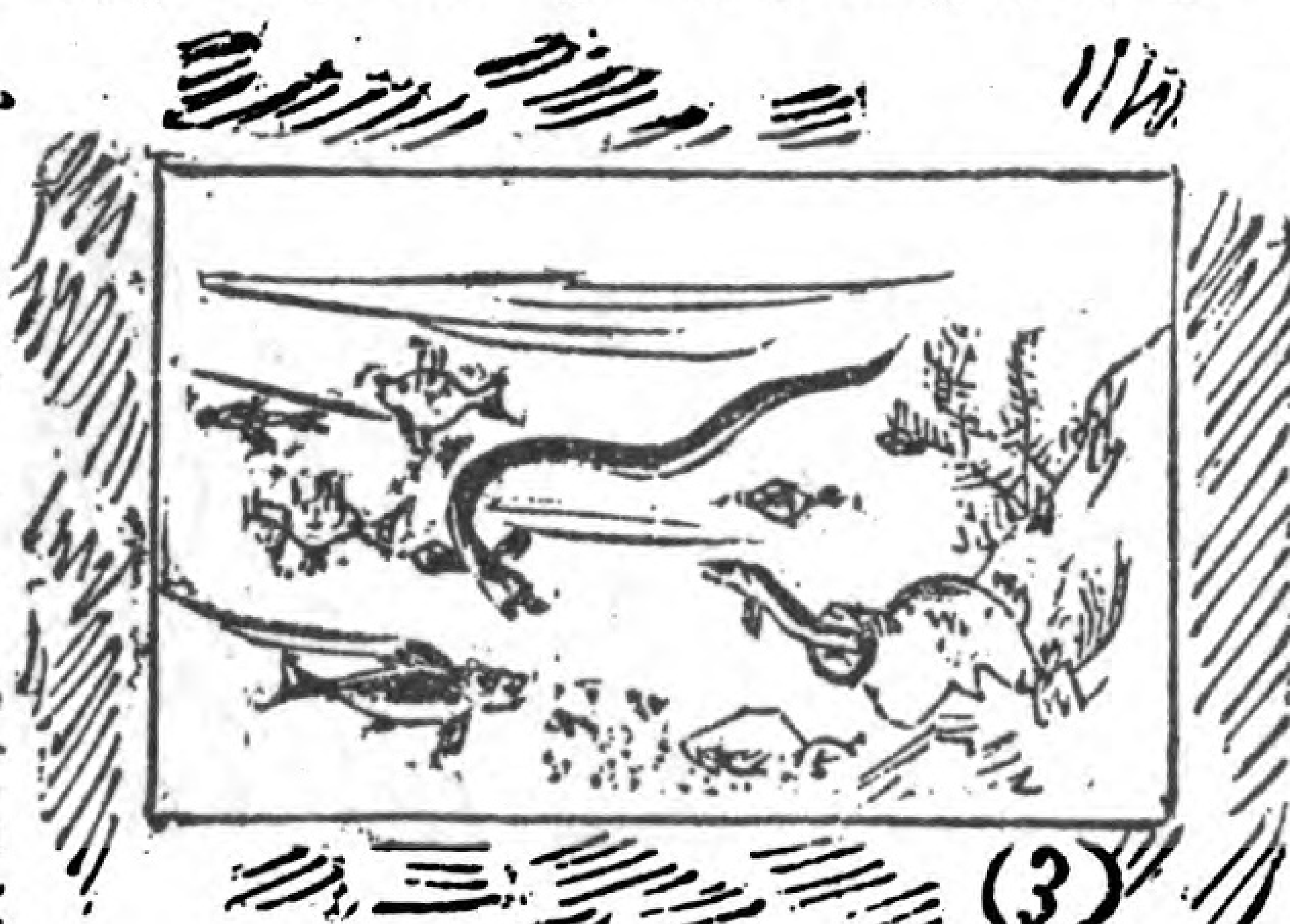


○東宮職女官　從來東宮職には、一切女官を置かれざりしが、今回立妃御發表に附き、創めて各級の女官を置かるべきことに決し、曾て、女官たりし萬里小路幸子、吉見光子、生源寺政子、外拾餘名を夫々御任命相成り、右女官は、孰も、東宮御所、及び、節子姫君御附として、勤務する筈なりとぞ。

○東宮御慶事献上品　皇太子殿下御慶事の盛典は、既報の如く、來る四五月頃舉行あらせらるべき由にて、聞く處に據れば、全國の臣民中殿下の

御慶事を奉祝する爲め、種々の献上物を爲さんとするものあるを以つて、東宮御婚儀御用掛は、一兩日前會議を開きたる際臣民の赤誠を以つて、献上し、且つ、殿下の御覽に供せらるべき物品より、代價の高下を論せず、御嘉納あらせらるべき事に内定せられたるも、名を献上に假り、恐れ多くも、廣告的意味を顯すものは、一切御受あらせられざる事とせられたりと、もれうけたまはりぬ。

○紀念切手　東宮殿下御慶事紀念切手の事は、新紙等にて屢々見えし所なるが、最初は、大婚御祝典の時發行したる切手の如く、横長の大形と爲し、且つ、御結婚當日の年月日等を記入する筈にて、既に、模型を作り下刷迄なせしも、其の後遞信省當局者中にて、種々研究の上、大婚紀念切手は、實用上甚だ不便尠からざりし實驗ありとて、遂に改板する事となり、其の形を普通の郵便切手と同樣にし、色合は、眞紅にて、日時の豫定、甚だ、六ヶ敷に付、單に菊の御記章と、九條家の紋所たる藤花とを抱き合せ、御慶事當日御使用の典膳の具をも彫刻し、年月日は、全然削除したりと聞けり。



(3)

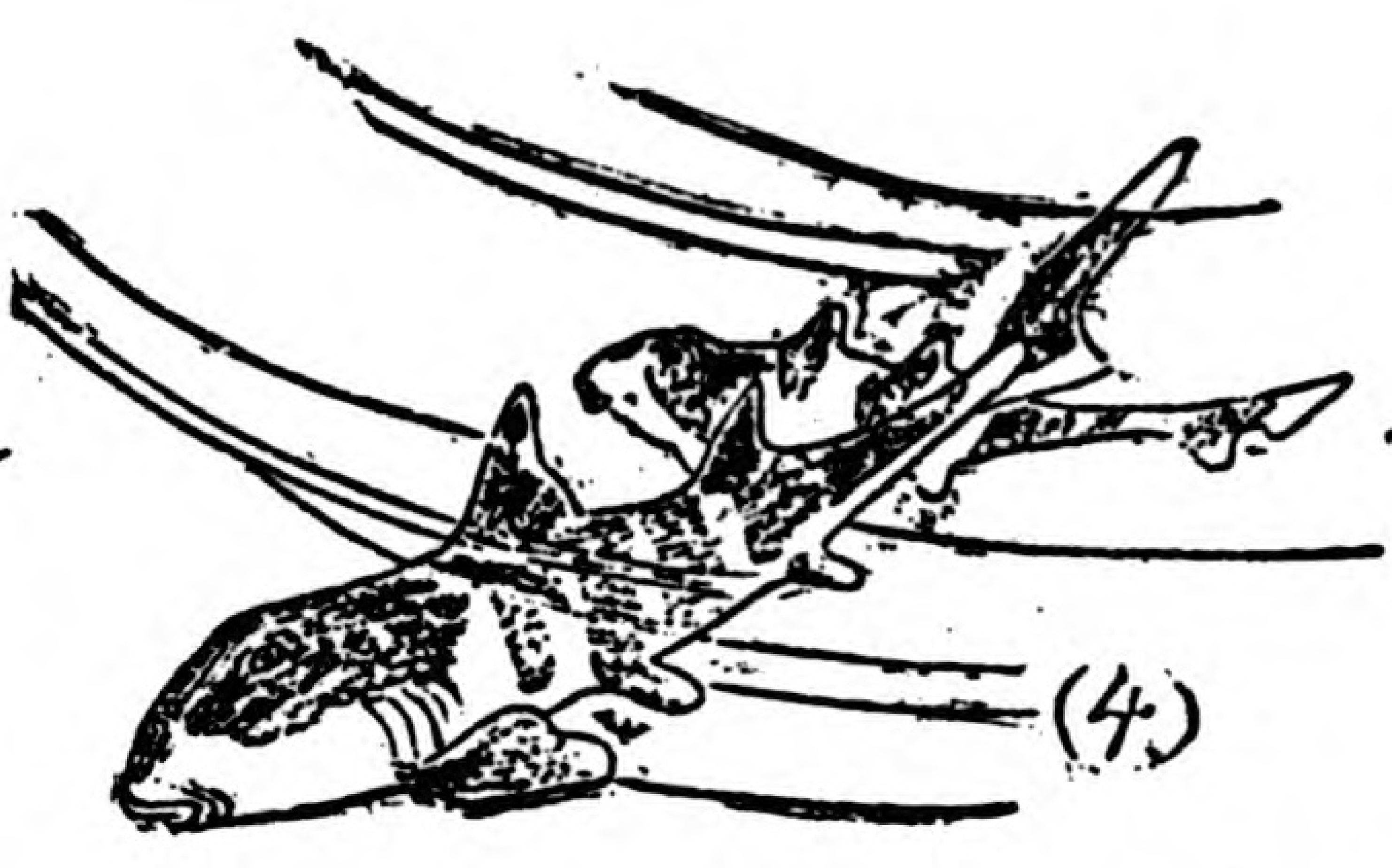
●閑院宮殿下御出發　閑院宮載仁親王殿下には、御豫定の如く、去月十六日午前八時二十分の新橋發列車にて、御渡歐の途に上らせらる。

●古代の手水鉢　第十師團長伏見中將宮殿下、兵庫縣下龍野附近にて、野外演習を御覽せられたる時、鵤村班鳩寺の庭前にある角形の手水鉢(重量八十貫目)の古色蒼然風韻最も愛すべきを御目に止めさせられ、相當の代價にて讓受けた

しと、同寺に御沙汰ありしに住職山本恵眞は悦んで、姫路の御邸に献納したりと聞く。

●丁抹皇族入港　丁抹皇族乗艦ヴァルキュリエー號は、豫定の如く、二十四日七時三十分上總沖に碇泊したるに付き、横須賀軍港よりは、富士、平遠の二艦護衛として、派遣され稲葉式部官、坂本海軍大尉等の接伴員、皇族御乗艦に乗移り、ヴァルデマール親王殿下に拝謁仰付られ、夫より富士平遠二艦案内して、午前十時横濱港突堤内の豫定錨地に無事御着相成りたり。

●もれ出づる月影　世益々くだり、道徳頽廢し、行の見るべきものなき時勢とは云へ、天道豈衰ふる理あらんや。黒雲いかに空をおふとも、もれ出る月影、いつかはあさやかならざる。されば、孝子貞婦のあらはるゝを見聞する時はなは此の世をたのまるゝよ。

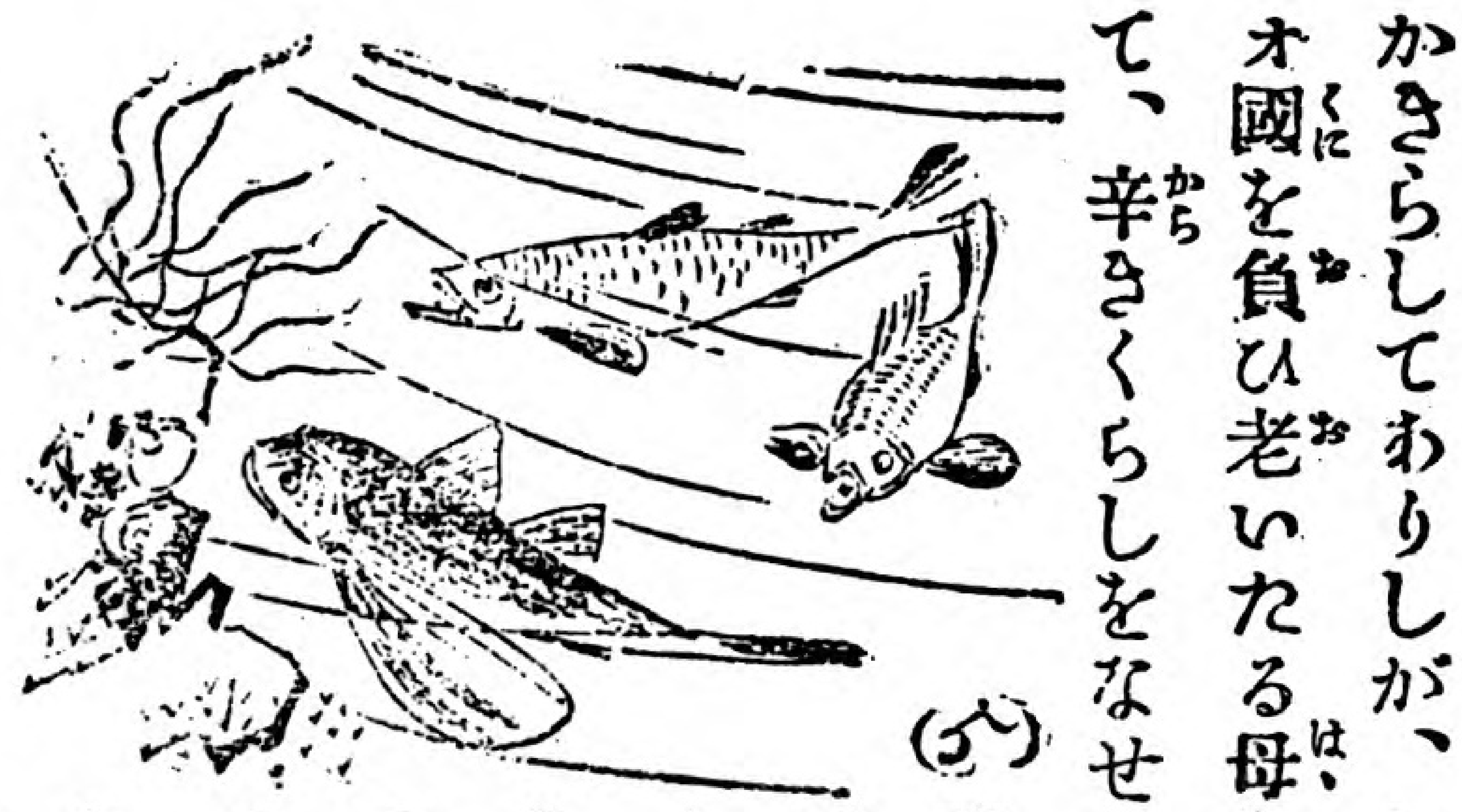


(4)

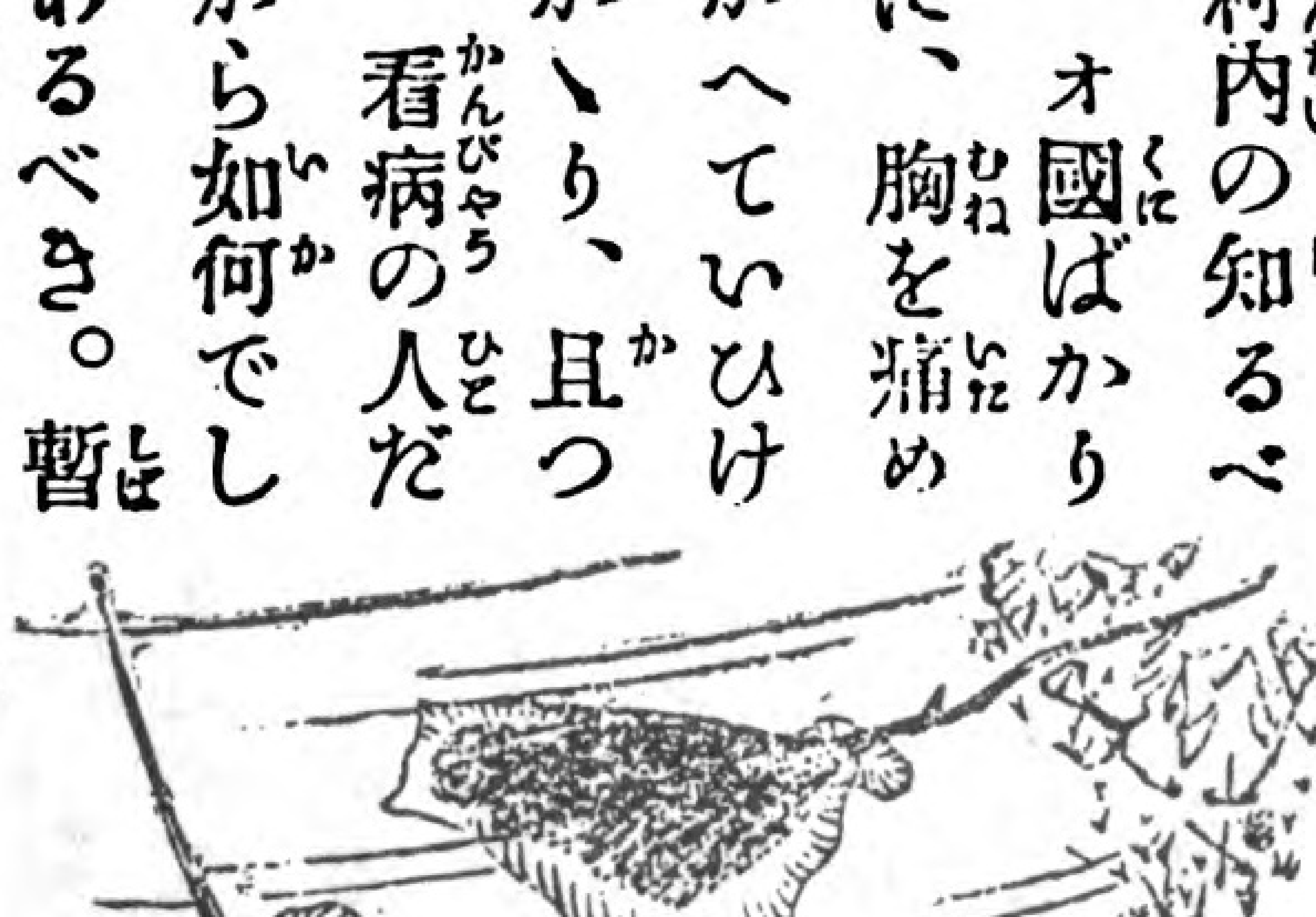
○孝女

豊後國東國東郡來浦村に坂本權作といへる商人あり。今を去ること、廿五年前オ濱と云ふを迎へて妻となし、一女オ國をあげたり。さるに家計始の程は豐なりしが、權作不幸にも、商の失敗をかさね、遂に、其の日の煙をさへ覺束なきありさまにいたりぬるものから、あはれや、權作、かよわきオ濱と、襁褓の中なるオ國、さてはおひまといへる母親とを跡にして、去し明治十八年の冬の夜さむのころ、行末知れずになりぬ。さらぬだに物たらぬ勝なるオ濱の驚ろきなけき譬へん樣もなかりけり。一日二日は、ふり捨てし夫をうらみ、又、我が身の幸なきをかこち、涙に

かきらしてわりしが、かくては果てじとて、脊に才國を負ひ老いたる母を養ひ、出來得るだけ働きて、辛さくらしをなせり。かゝる程に歳月に關守なく、秋は暮れ、春も過ぎて、早や十年を夢の間に送り、廿八年の秋風に稲葉のそよく頃、はからずも權作の京都にさまよへる由、風の便に聞しかば、才濱は、大に喜び、いそぎ、文などやりて、おのが營める有樣を具さに聞えやりしに、權作はや、いかに感じたりけん、返書に、夫婦離緣狀を送り越しければ、才濱母子とも、物をも云ひ出でず、なきゐへりとぞ。かゝりし程に、權作は、病にかゝりて、醫療を求めしも、捗々しからねば、今はやむなく、歸國し、


(5)

よし離緣はしたりとも、子までもおる交情なればお濱の許にて療養せばやと、廿九年の冬杖を力とたのみて、遙々京都をいで、たどり〳〵來浦村には到着し、事の由をかくと才濱に告れば、お濱は、かゝる境遇なれば、一時は應せざりき。權作よりどころなく、村内の知るべに宿りけるに、才國ばかりは、幼ながらに、胸を痛めやがて母にむかへていひけるは、父病にかゝり、且つ遠方より來り、看病の人だになきを見ながら如何でしらぬかはにてあるべき。暫時妾を、父の看病にと云へば、母もふかく感じて、涙に咽せ返へり、之を許しければ、才國はよろこびて、父が枕邊に、我を忘れて、看病を盡しけれ


(6)

ば、村内誰とて、感賞せぬものもなく、軈て同縣知事にも聞えて、オ國には賞狀と金若干を賜はりて、其の美行を賞せられ、又、同村會は、決議の上、左の賞狀を送りたりと云ふ。寔に得難き孝子と云ふべし。

賞　狀

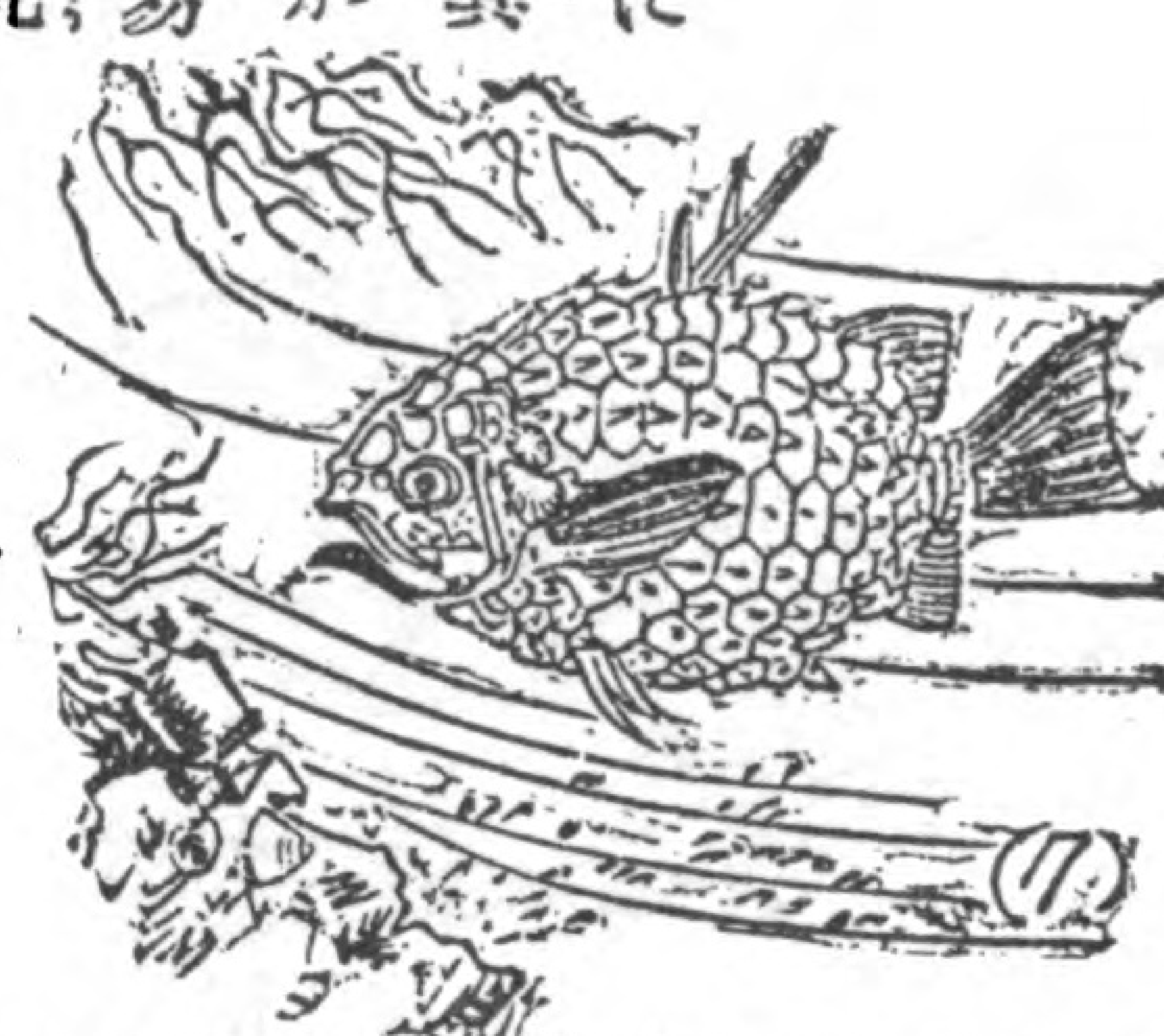
東國東郡來浦村權作長女

坂本　くに

幼年浦柳の質を以て、孝心深く、其の母離去の際の如きは、年齢、僅かに十二歳なるに、順逆を謬らず、易を去て、難を取り、旦夕の衣食に究乏し、身體自由を失せる病父に付き、赤貧中能く看病に力を盡し、除暇を以て、採薪傭賃奉養に供し、數年一日の如く孝養怠ることなきは、感賞するに餘りあり、依て本村會は、其の善行を旌表する爲め、滿場一致を以て、別紙目録の金員を贈與し、其の奇特を賞す。

明治三十二年十月四日

來浦村長　吉武郁爾



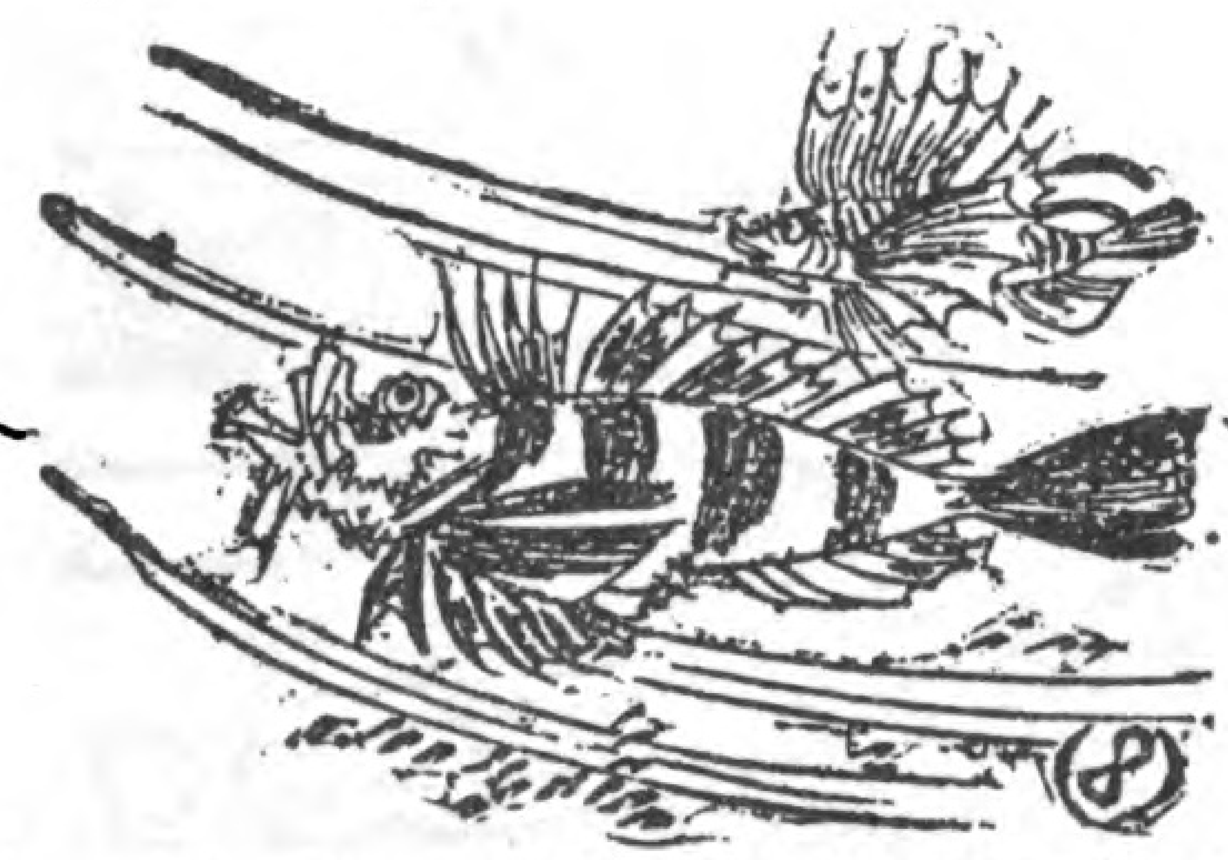
○まごゝろ　長野縣下伊那郡下條村字親田の古田茂吉(二十)氏、性質温順、且つ勤勉にて、孝心深く、幼より、家道に意を用ゐ、能く父母に事へ、實業に熱心なるは、殆んど世に、其の比を見ず。朝に霜を踏み、夕に星を戴いて歸り、時には、夜半に及ぶことありと云ふ。此に氏の祖父、長重郎、嫁の父と好からざるも、氏は、是を慰め、常に靄然たり。然るに、長重郎素學なし。一昨年にて八十七歳となり、米壽の祝賀前に當るを以て、其の筆跡を遺したしとて、祖父に勸め、朝に夕に手を取らん計

りに盡力し、實に幾多の辛苦と日子とを積みて、昨年の米壽には、「八十あまり八年になりてまめやかに壽き祝ふ今日のうれしさ」と自筆にて歌を認め、知巳親族に贈りしと云ふ。尚其の他農業に養蠶に、大に相勵み、謙讓誇らず、同村一人の賞賛せざるはなしとは、最も喜ばしき事なりかし。

○よき心ばえ　麹町區飯田町二丁目の大工職、岡田三之助の長男岩造(十さい)は、過日來より、母の病氣を苦にし、此の程鼠一疋を捕へ、其の金子にて、日頃より、好めるものを母に侑めしを、通學の富華小學の教員が聞き、大に稱揚せしとは、末頼もしき子にこそ。

●ゆかしきものがたり

○ありたき心　宮城縣仙臺市常盤町わたりに、



身を沈め居る、佐藤アヤメは、業體にも似ず、心ばえ優にやさしく、同地字堤町士武田欣彌兄弟が、可憐なる由を新聞の記事に見、同情の涙堪へず、金圓を惠與したりとぞ。

○義僕と義婢　飛驒國吉城郡船津町廣田德右衛門資性硬直、年甫めて、八歳船津町、庵屋七兵衛の傭ふ所と爲り、爾來主家四代に仕へ自家の勞苦を顧みず、専心一意以て、主家に忠實を盡すこと、茲に六十有餘年間一日の如し。洵に奇特とす。仍つて、其の賞として、岐阜縣知事より、木杯一組下賜せられしと。

○また　同じ市の上城なみ、資性順良年甫めて十三歳また同じ主人に事へて、爾來主家四代に仕へ克く家務を補佐し、毫も、おこたらず、忠實を盡すこと、茲に六十有餘年に及べり。洵に奇特の

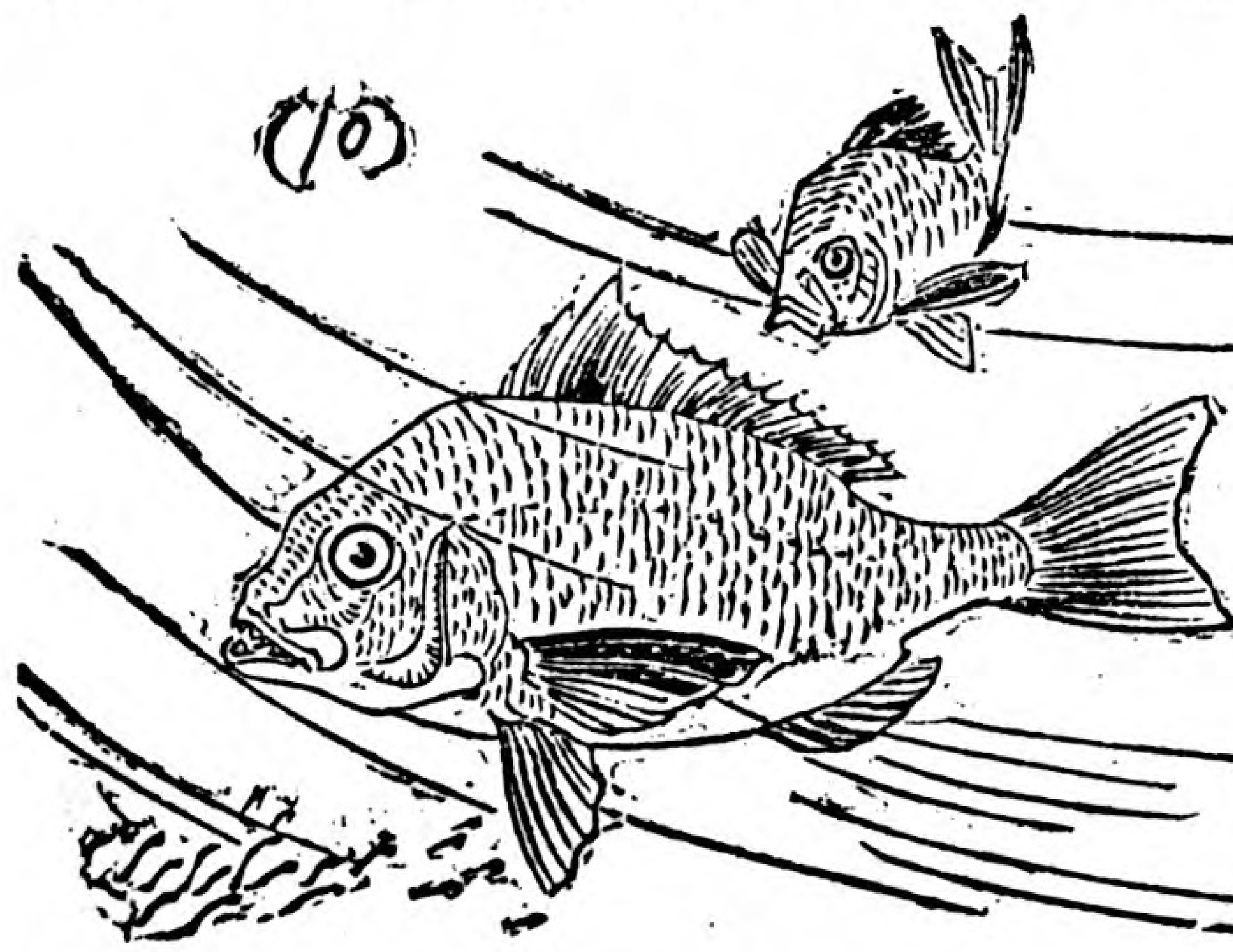
事とて是も賞として、金圓下賜せられたり。

○妻の鑑　尾州中島郡國府宮村、大字、國府宮廿二番戸大津行道の妻おてつ(四十九)は、同國、西春日郡落合井村鈴木徳兵衛の長女にして、性質温厚年十六にして、行道に嫁し、能く夫及び姑に事へて、孝貞の道を盡せり。行道は、愛知縣巡査を奉職し、各署に轉勤する事、十有八年、殆んど家事を顧みるに暇なし。家事一切を、自ら經營し、殊に姑は、中風症に罹り、身體の自由ならざるのみならず、口耳、其の用を失ひ、聾啞同様臥床する事三年なりしも、日夜病床に侍して、起臥を幇助し、藥湯を進め、慰藉至らざるなく、姑みまかりて後は、專ら、農事を勵み、益々資產の增殖を計る等、多年孝貞の道を盡したるものにて、其の行爲、殊に奇特なるを以つて、此の程、其の賞として、木盃一個を下賜せられたりと云ふ。豈に之の人ひとりの面目のみならんや。


(9)

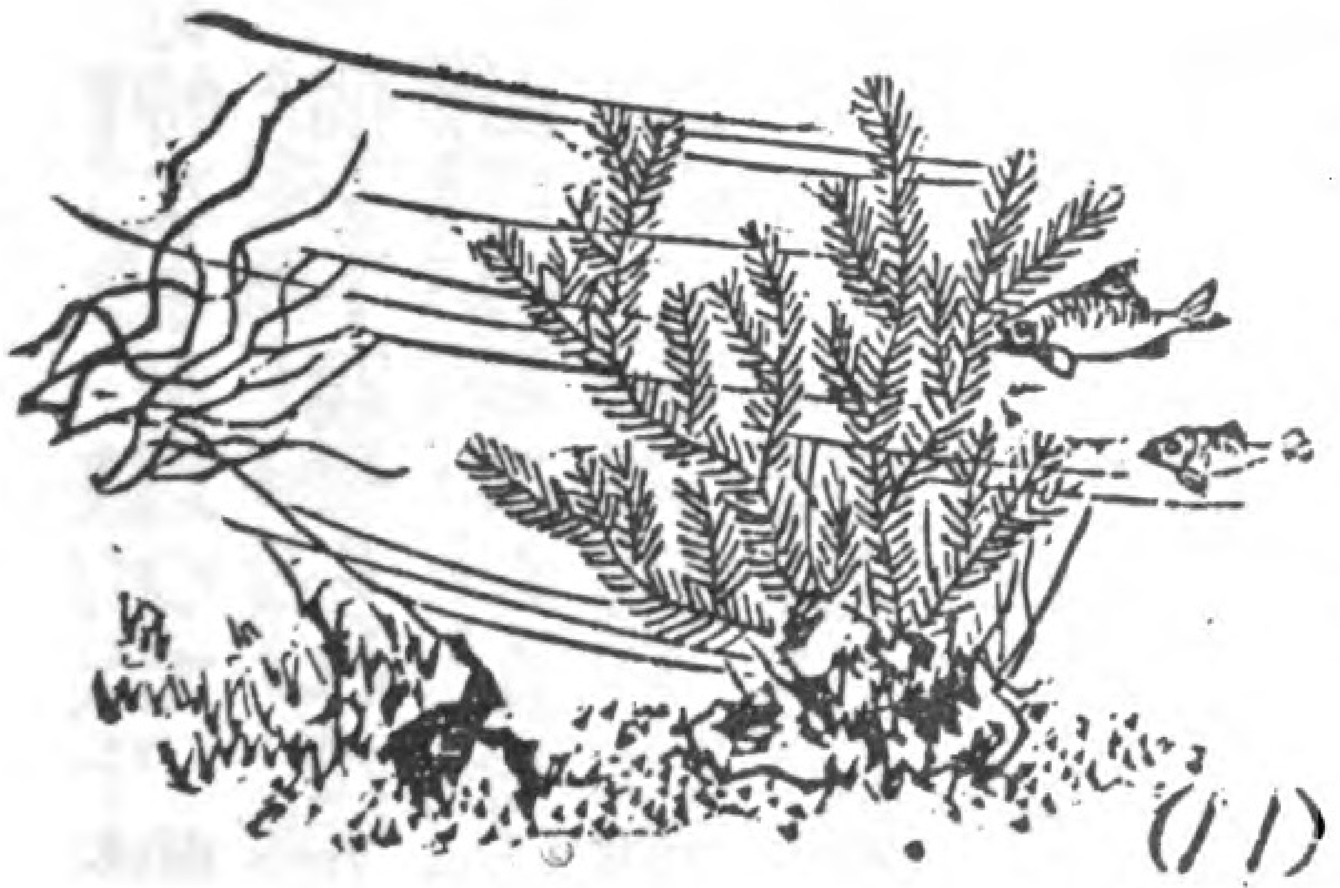
○感心なる少年　岡山縣、津山町、大字、銃砲町上田お繁の長男恒(十六)は、早く父を亡ひて、母と祖母との三人暮しなるが、家貧しくして、日々の生計にも、困難なるより、傳手を求めて、岡山市片瀨町、紙商石津義三郎方へ、丁稚に雇はるゝことゝなりしは、今より、四年前の事なりけり。斯て、恒は、爾來誠實に立働き、殊に性質朴直なるより、主人、其の他店員の愛顧を受け、去る十四日は、懇意の人に連れられて、同市の旭座と云ふにて、演劇を見物せしが、折節こゝにては、觀客に對し、抽籤を以つて、景品を贈り居りしが恒も、籤を抽き

たるに、幸にして、玄米一俵を受くることとなりしにぞ、欣喜一方ならず、歸りて、主人に、かくと告ぐれば、主人は、そを早速[illegible]園にて買ひ取り呉れたれば、恒は、僥倖にも、生れてこのかた始めて四圓の金を得たることゝて、せんすべしらず思案せしが、思ひつきしは勞せずして得たる、此の金自分一人の有にせんは良心にも恥かしければ、半を孤兒院へ義捐せんと決心し、主人へ相談せしに、主人も、大に其の志に感じて、賞賛したりしかば、恒は、翌日孤兒院に至り、二圓を寄金し、殘りは津山町

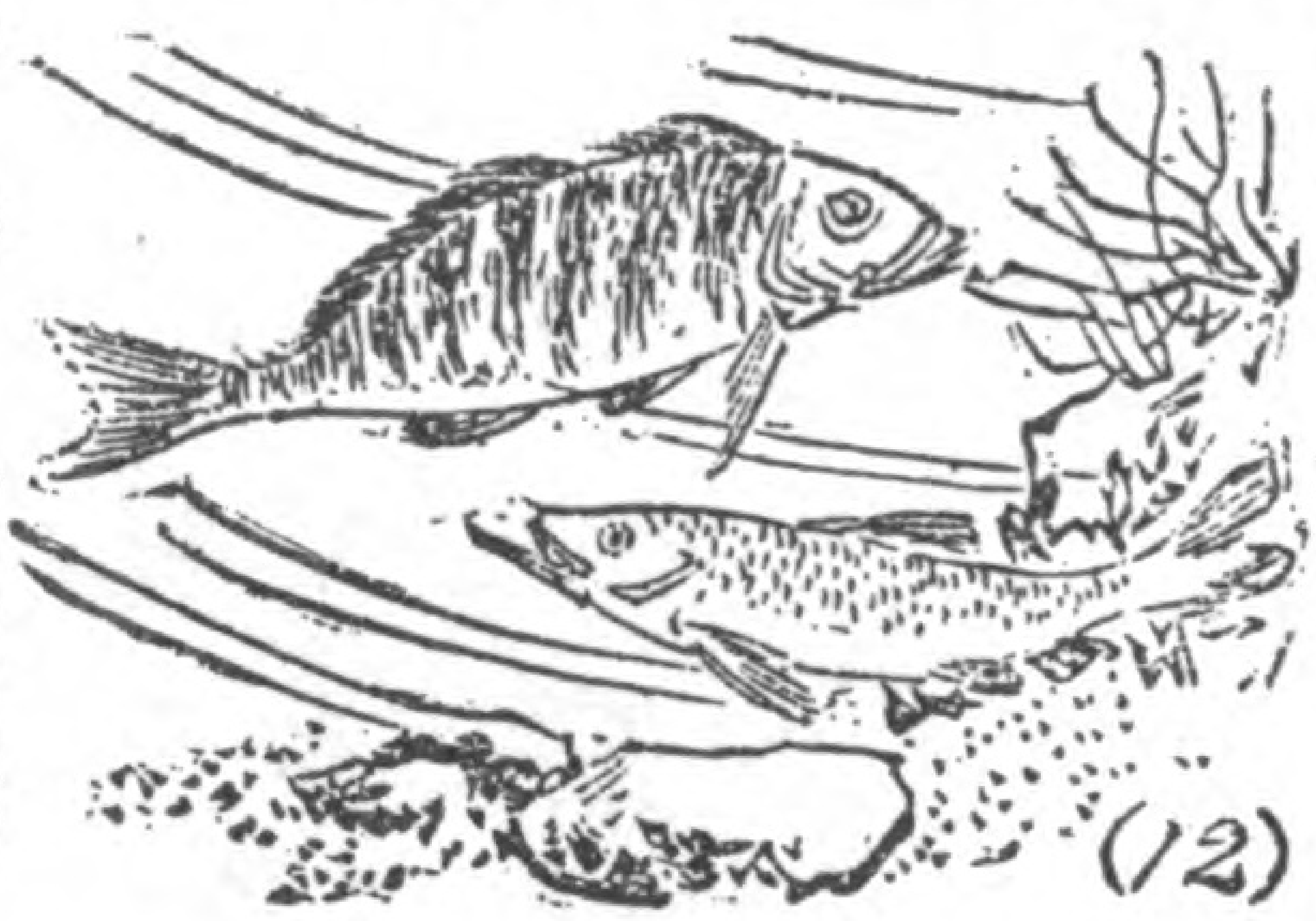


なる母の許に送り屆ければ、母と祖母は、且つ喜び、且つ驚き、大に恒の孝心に感じ、倶共喜びあへりけるが、其の日恰も、祖父の二十五年忌日に相當りたれば、折角愛兒の送り越したるものを、徒らに費すべからずとて、遂に、位牌を新調し、幾久しく紀念と爲すことゝしたりとぞ。

●苔の下草　瑞雲女史といふは、元郵便貯金爲替管理所長佐野渡氏の、生みの母堂なりしが、先つ日七十九歳を一期にみまかられたり。女史は、舊高松藩士深見金藏といふ人の四女にて、文政五年九月、江戸目黒の邸に生れ、名を長と呼ばれ、十一歳の時選ばれて、高松侯の姫君の侍女となり、



勤務の餘暇には、和歌、及び、易學を學び、三十
歳の時同藩士佐野家に嫁き、家政を治むる事嚴
肅、されど、婢僕を召遣ふ間に、自ら慈愛の心が籠
りてありければ、いつしか、藩中の、よき評判と
なれりけり。女史の良人多病にて、早
逝の後は、一子鐵太郎を教育し、再緣
などゝは、なかなかにおもひよらぬ事
なりき。其の教養の種は、明治の御代
となりて、はえある花咲き、鐵太郎、
即ち正六位勳六等佐野渡といふ實を結
ぶに至れり。氏の職にあり、たまたま
病んで苦痛を感ずる事のあれば、女史
は「汝の疾病苦痛を察すべし」しかも務ある身は、
しかじかとて教訓せられたりとぞ。氏の人望おほ
ろげならざりしは、かゝる事のあればなりと聞け
り。あはれ、女史、一月初旬より、肺炎を煩ひ、


(12)

同月十八日黄泉の門出に「妾が死んには、寫眞帖
の裏を見よと」といはれたるものから家人らは右
の寫眞帖を早く調へて見しに、左の和歌のたとた
としくも記されたりとぞ。

述懐

花鳥に心まかせし言の葉も
かねてけふより苔の下草

佐野渡氏遺訓

古のためしを引きて梓弓
巖をもとほす心ゆるべな

●四色ぐさ

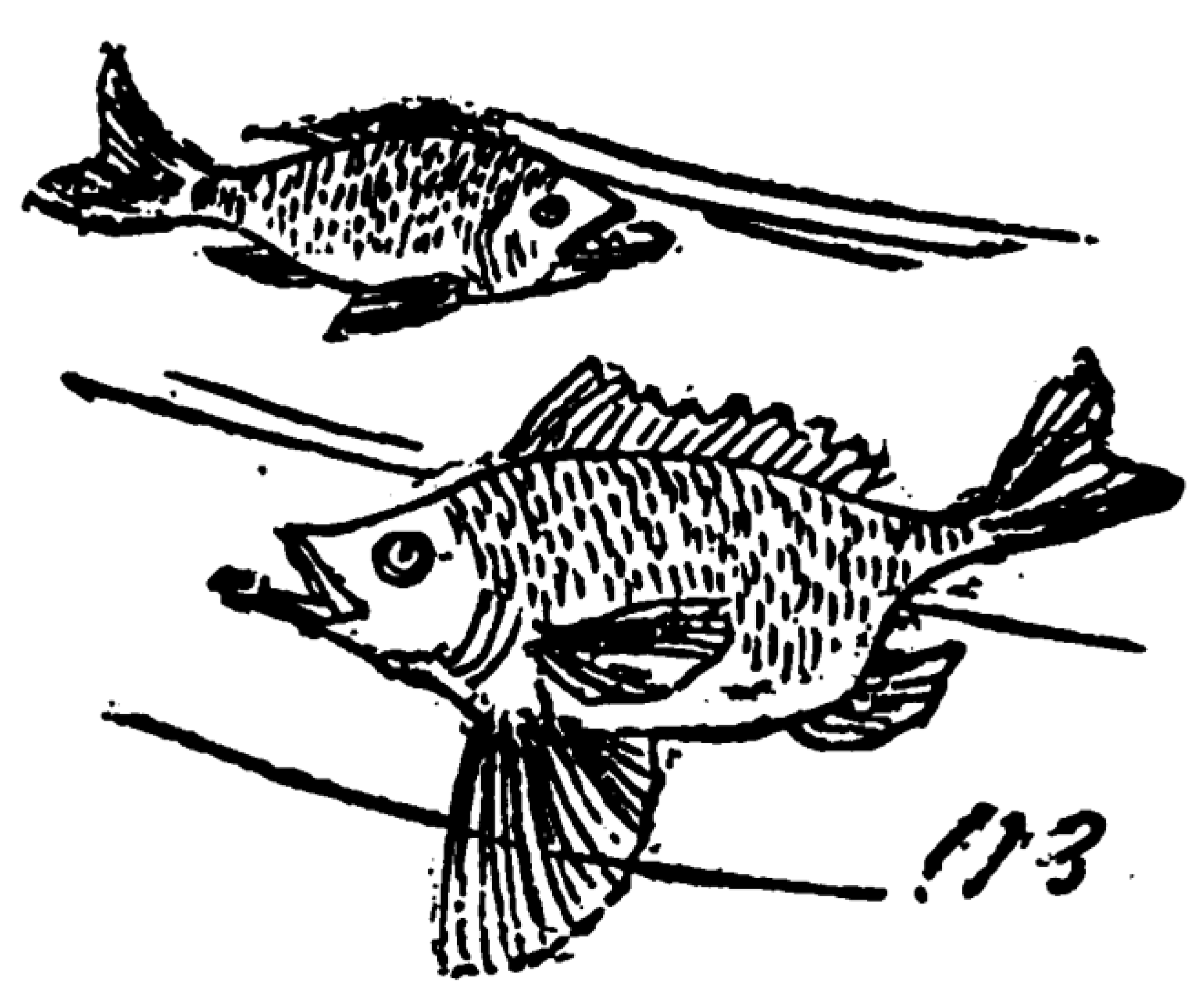
○能書の女子

紀伊國帶解村の元村長植田宇一氏の次女、靜野(六さい)能書の聞えあり。曾て、花開天下春と書たるものゝごときは、筆力優健女兒の筆蹟と認むること能はざるものあり。其の姉孝子(十五)亦、靜野に劣らざる能筆にて、幼時

より神童の名を得たりときく。

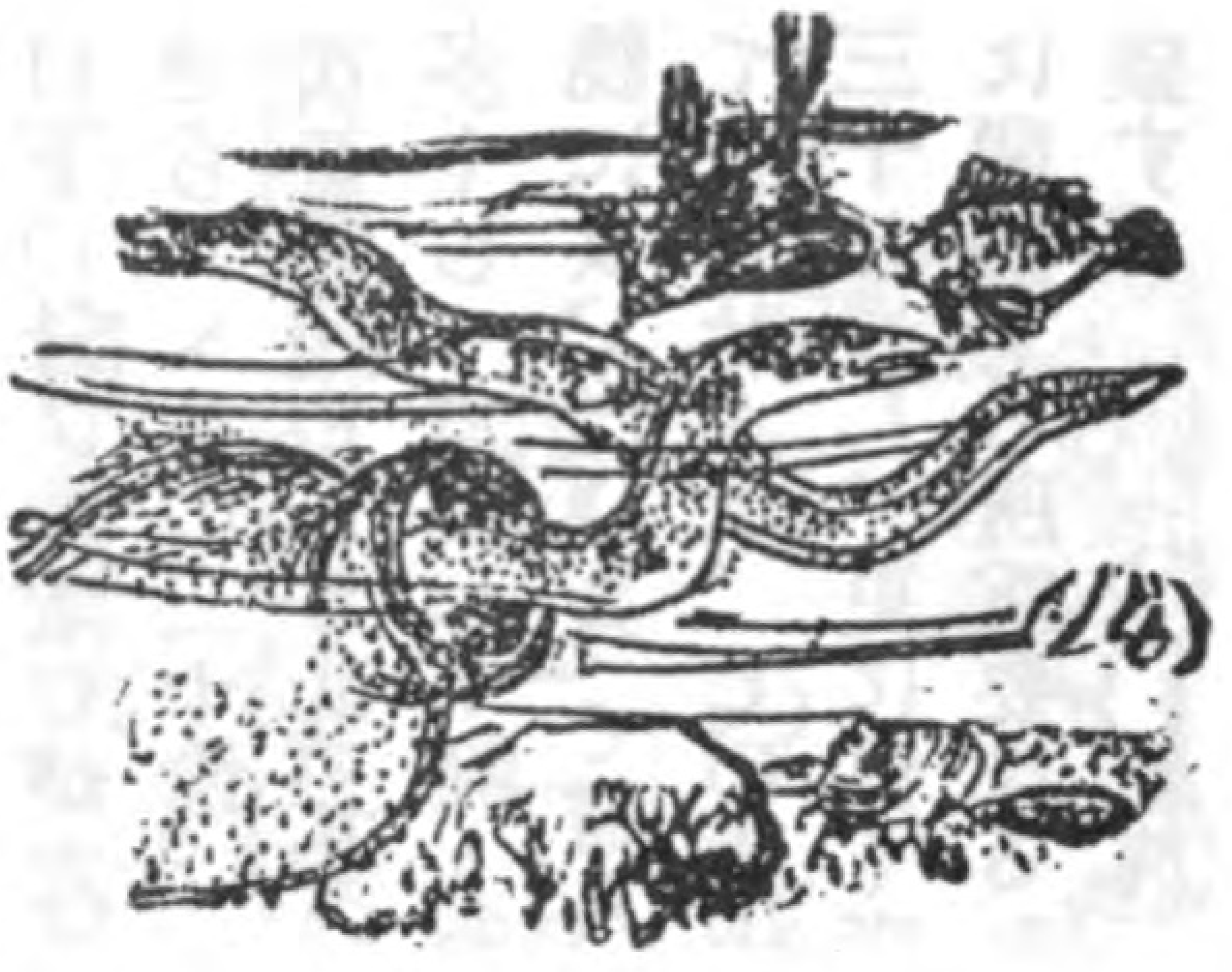
○赫鑠たる三老婆　九州鐵道に三人老婆とて、誰知らぬ者なき、男まさりの女あり。一はスリッパ婆さんとて、一手に枕木を負ひ、一は石炭買込を業とし、大勢の石炭業者に、一歩も讓らず、一はコブ婆さんとて、茶店小間物店を出し、得意に商をなせりと云ふ。勞力の女とて、いやしむべきにあらず。

○飜然悔悟す　福井市、岩野熊藏妻ツノ(三十四)初め姑(六十二)を憎み、其の病床に在りて、起臥意のまゝならざるに對し、冷遇、甚しかりしを、夫熊藏、深く憂ひ、妻を誨ふる傍ら、自ら孝養を盡し、只管、妻の之に慣はんことを努めしに、ツノも夫の誠意に感ずる所あり、且つ己の婦道に背きたるを深く悔悟し、飜然心を改めて、姑に事ふること懇切至らざるなく、腰を摩り、肩を按で、夜を徹するも、毫も厭ふ色なしとぞ。君子だも、過なきを尊しとはせず。よく改むるを、之尊しとす。



●郵便局と爲替貯金　遞信省にては、數年來爲替貯金の事務を擴張し、現に三十二年度内に於いては、全國の各郵便局所中、新に一千有餘箇所に爲替事務を開始し、又、一昨年より、今日まで、新に、三百有餘所に貯金事務を開き、殊に伊豆諸島に在る六個の郵便局にても、來月十六日より爲替貯金の事務を開始する筈なれば、今は全國郵便局、及び、郵便受取所にては、爲替貯金を取扱はざるものなきにいたれり。

●澎湖島の結婚式



澎湖島にては結婚の始め、媒介人は、嫁御寮の生年月日の書附を婿の宅に屆けて、三日以内に双方の家に事なければ、婚姻の約定を取結び、其の書附を送り返へし、更に再び遣り取りを爲し、總て、約定前に當りても、緣起を大事さする風あり。結納の禮は、富者は手燭一雙さ、婚錢さて一文錢二百文、貧家なれば、頭簪一對、別に婚錢百二十文を媒介人に托して、婿の方より嫁の方に送る定聘金は、貧富を論ぜず、三十六圓を定さし。其内より、三圓を、別に紙に包みて、女の家より、婿の方に、送り返へすを例さす。然れども、必ずしも、一時に完納するを要せず。約定の後糧食、又は、牛羊を以て、漸次、其の額に充つることを得れども、完納せらるゝまで、女家にては、堅く嫁御寮を婿の家に送るを肯んぜず。偖、式を擧ぐるに先だち、婿の方より、一擔の禮物を具へ、猪腿、麪麵、糖霜、檳榔、蠟燭、禮香等、凡そ十種の品を送りて、黃道吉日を撰び、速かに大禮を擧げんことを望む。多くは十二月三十日の除夜を以て、吉日さなせり。而して、其の檳榔は四個にして、之に百年偕老の四字を彫鏤し、更に金箔を以て、其表を奇麗に貼付くるなり。いよ〳〵、其日さなれば、嫁御寮は轎輿に乘らずして、牛車に跨り、家門を出づ。牛車には青藍色の幕を打廻し、前面に、一條の紅布を懸け、嫁御寮は、其の內に安坐し、附添ふもの多くは、帽を冠り、車前に銅鑼を鳴らし、爆竹さ提灯さを携ふるあり。到着すれば、媒介人、嫁御寮を扶けて、下車せしめ、中庭に至る。此には、既に婿殿あり、手に米の篩の上に紅く八卦を畫きたるを持ち、直に、嫁御寮の手を取り相携へて、房裡に入り、小さき秤を以て、嫁御寮の打被れる烏色の巾を取り去り、兩面始めて相對して、嫣然一笑す。布は更に嫁御寮の肚部の内に藏せらる。此の夕新婦新郎對酌し終れば、湯圓二碗を備へ、毎湯圓六枚を載せ、男女、各、其の一碗を取り、「各其の二枚を食す、次に男女碗を交へて、又二枚を食ひ、各々二枚を剩す、新郎は、其の取る所水碗を以て、新婦の碗に重ねて、之を床下に置き、而る後、寢に就く。之より先き、嫁御寮の母は、嫁御寮の腹部に、暦一冊、桔餅二個、氷糖一色、小鏡一面、洋銀一圓、小さき餞具一塊、生炭一塊を入れ置かしむ。嫁御寮は、此の時、之を取出して、婿殿さ相見ゆ。嫁御寮の房裡に在る三日、三日目に、小姑來りて、房裡を出でしめ、先づ天地神明及び、祖宗を拜せしめ、更に伯叔兄弟等、凡ての家人に見ねしめ、午後は知己、其の他の婦人客さ相座し、酒を酌むこさ三杯目にして、嫁御寮挨拶あり。始めて來人より、婚禮を以て、相對せらるゝなりさぞ。



第一懸賞應募期限延期に就きて

第一懸賞題　地方に於ける婦人會の規則

▲右應募期限を延期して四月三十日限とす
▲發表は全五月廿日發刊の女鑑にて
▲應募者は總べて女鑑百九十七、八號に掲載せる應募者心得によるべし
▲延期は再びせらるゝことなし必ず其の期に後れざらむことを要す

目下の急に應ぜむがため、善美なる地方に於ける婦人會の規則を江湖に求たりしが、幸にして募に應せらるゝもの三十餘。いづれも皆熱誠を注ぎ、其の題目の主意を盡されたり。然れども、この種の重大なる問題としては、其の募集の期限甚短かりしが如し。即ち、應募者は都下若しくは近縣の人々にのみ多くして、少しく隔りたるよりは、僅に二三の應募に接せしのみなりき。蓋し、之を審査し發表する曉には、之によつて婦人會を創設せらるゝ地も尠からざるべきを信ず。然るに、今應募到着せるのみにて査定せんは、この重大なる問題に對して遺憾なき能はず。よりて、茲に應募期限を延期して、四月三十日とし、更に汎く應募を求め、猶多數の善美なる規則を得んとす。是れ此の問題の當今女子敎育に關係する所重要なるを信ずればなり。大方諸賢、幸に其の意を諒し、奮つて應募せられむことを希望す。



教の庭

第二懸賞

伯爵副島種臣公選

自ら戒むる詞

當選　甲府市山田町　名取正代子

朝夕、鏡に向ひて、其の面を装ふことに、先づ、其の心を修むべし。女子は容色の美なるを尊しとせず。其の行正しくして、徳の勝れたるを淑とす。

選外の優等

自ら戒むる詞　秦　鏡子

行を知る者は心なり。心邪なれば、顔正しからず。形直からざれば、影曲れるが如し。顔は心の鏡なり。顔を映すは何ものぞ。朝に容を鑑み、夕に行を省みよ。内に疚しきことなく、外に愧かしきことなくば、其の身、則ち修まらむ。

仝　眞野吉子

鏡はよく姿を照せり。われはた何をか射さむ。父母の賜は顔なるか、鏡の映さぬ所にあるべし。心愧かしきは、面耻かしきに如かざるなり。

仝　兒玉さは子

皇御國に住むからは、をのこのみやはをゝしかるべき。をみなとても、心をゝしく、さて氣はなよやかなるべし。言の葉のすゑまでも、つゝまやかにして、束の間も家のをさたることを忘るべからず。舅姑につかへては、風に柳の心なれ。夫をして、心ひかさるゝ振舞なからしめよ。孟母三遷の教は、いふも更なり、胎教の心を擴めては、未だ嫁がざるに心せよ。人は我につらくとも、我は

などて人につらかるべき。古の書は見るたびに、新しき鑑なり。忠と孝とは、御世を照す日と月との如し。夢の間も、ゆめな忘れぞ。

ヽ印の所意あきらかならず

仝　　河原芳子

ひと日のうちに、二たび三たびもわが身の程をかへりみせよと、古の聖はいはれけん、げにとふとしや。苟くも、大和島根の國民の母となり、妻となりて、家を治むる婦人の身には、仇し風になびかず、仇し色にそます、朝な〳〵にうち向ふ眞澄の鏡のくもりなく、平らかにまどかなるを心とせよ。いたづらに老ひさらはひたるのちに、『花の色は』など、かこつことなあらじよ。あはれ、かの鏡の清らかなる光にはぢざるやう、心の程をみがきにみがけよとて、自らを戒むるになん。

仝　　伏脇米子

深山隱れの花紅葉、譬へ人の愛つるなしとも、春は匂ひ、秋は染むる習ひなるを、人として誠なからんは、情なき草木にも、恥づべきことならずや。形より業より、女は女なれば、即て女たるの誠ぞあらま欲しき。子として孝に、妻として貞に、主婦として勤儉に、母として慈に、やがては忠良なる兒女をはぐゝみ上げて、君と國とに答へ奉るぞ、女たるの誠なりける。この誠を誠にすると、せざるとは、己が心懸一つになん。一つの心懸より、五つの誠は生れ來り、五つの誠より、萬の德は備はり行くなり。舅姑に疎まるゝは、子たるの誠なきなり。夫に後れて、操を變へ、身を汚すは、妻たるの誠なきなり。子を善くはぐゝみ上げぬは、母たるの誠、臣たるの誠なきなり。勤儉もて家を興さぬは、主婦たるの誠なきなり。一つの誠なければ、女の道遂に立たざるなり。況いて、明日とひとしく、追へども追へどもえ及ばぬ流行に耽り、果ては、姿さへ心さへ、外國ぶりに泥みて、あたらこの御國を忘るゝに於てをや。あはれ、朝夕たもつ唐衣起居に省み戒しむべきは、女たるの誠になん。さてもおのれに、この誠ありやなに。

仝　　上村まさ子

い　衣服に心な労するな

ろ　容貌なりさて自ら爽つ可らず

は　腹立つ時は鏡にむかへ

に　日本の國体忘るゝな

は　主公の恩を心掛くべし
へ　隔てなき人には禮儀の道を辨へ
と　外つ國人に心ゆるすな
ち　忠孝の道一日も忘るべからず
り　吝嗇なれば人にうとまる
ぬ　奴婢には慈悲を垂れよ
る　留守居には殊に身をつゝしめ
を　行ひて後に言へ
わ　賄賂は卑屈の人のなすところ
か　髪を亂す女は家をも亂すといふ
よ　嫁姑の仲よきは家のほまれ
た　他人にたよらず自ら事を爲せ
れ　廉恥は當世に最必要
そ　祖先の祭を怠るべからず
つ　過りたる花には實なし
ね　妬みそねみは女の大瑕瑾
な　生意氣なる女は人に忌まる
ら　樂を希はゞ先づ苦しめ
む　無駄話しする暇あらば讀書せよ
う　賣り言葉買ふべからず
ゐ　威儀備はらざれば人に侮らる
の　後を慮りて事を爲せ
お　おちつきたる人には過少し
く　草木と共に朽つべからず
や　病に骨折れ無きを見よ
ま　誠は何事にも必要なり
け　見識あるべし

ふ　不虞の備へ無かるべからず
こ　言葉多ければ恥多し
え　益友と親しむべし
て　出ず入らずなほなるぞよき
あ　朝起は家をも起こす
さ　幸ひは勉むる者に來る
き　金言を常に味へよ
ゆ　雪にも色ます松にならへ
め　目に立つ裝飾を避けよ
み　身分相應忘るゝな
し　慈善は婦人の好事業
ゑ　笑顔は和樂の母
ひ　貧者を疎むべからず
も　專らなれば何事も成る
せ　聖賢の教を貴べ
す　直ぐなる人は神守る

第三懸賞（歌）

子爵 黑田清綱公選

慈悲の心をよめる

當選　香川縣高松市濱之丁百二十五番戸　鳥飼るつ子

玉きはる命よかへてこを思ふ
れやのこゝろをなにゝたとへん

優等 二首

待花

鹿兒島市山下町四百七十四番戸 丹下花子

つくばねも霞みそめたり隅田川
つゝみのさくらいつかさくらん

菅原道眞

出雲國杵築町 石田龜野子

梅か香を送る朝東風身にしめて
いかにみやこをしのびましけん

秀逸 二十七首

慈悲のこゝろをよめる

肥後國菊池郡城北村 徳永廣子

うきことは吾身のうへにつもるとも
ひとのやす世をねがひぬるかな
肥後國菊池郡城北村 佐々有鄰子

うつし植ゑて學のにはにさかせなん
よにすてられしなでしこのはな
日向國都城子 尾島いろ子

仇びとのうきをはおのがみにつけて
めぐむにまさるめぐみあらめや
出雲國杵築町 天津すゑ子

人のうへをわが身とおもふ心より
ふかきめぐみのつゆはおくらん
肥後國八代郡八代町 田代艶子

なさけふかき人のこゝろの奥にこそ
たまにもまさるたからありけれ
甲府市山田町 名取よし子

おもひ子におもひくらべて思ふかな
うゑになくなるあはれみなし子
神田東紺屋町四一 黑田とり子

われもまた露の身なれどおなし世に
おきどころなきひとをめぐまむ
神戸市兵庫湊町一丁目 財田富子

子の親となりてこそ知れたらちねに

うけしめぐみのうみのふかさを

新潟縣佐渡郡金澤村　植田てふ子

おのが身におもひくらべてよの人の
うきをとふこそなさけなりけれ

花を待つ

うら〳〵とかすめる空にうきたつは

神田ぬし町六番地　丸　たま子

はなまつころのこゝろなりけり

いたつらにすくるもをしと思はぬは

肥後國飽託郡横手村筒口　仁保しま子

はなまつころのつき日なりけり

出雲國簸川郡杵築町　島　すみ子

さくらいろにかすむ高嶺のしら雲は
いつかまことのはなこなるらむ

山形縣最上郡新庄町　金森とし子

すみだ川はなやいかにとあくがれて
まち暮す日のながくもあるかな

美濃大垣町　吉村せむ子

咲けばとくちるをならひのさくら花
いかでまつまのひさしかるらむ

東京市下谷區徒町三丁目　岡田はる子

大そらはかすみのどかにたちながら
いつまでさかぬさくらなるらむ

東京赤坂一ッ木町八拾壹番地　河田いし子

春かすみたちそめしよりいつしかと
またるゝものはさくらなりけり

伊豫國松山市鐵砲町　田中　賢子

山の端のかすみそめにしあしたより
はなのたよりを待たぬ日ぞなき

肥後國菊池郡加茂川村　石井　豊子

このころは花のたよりをうまにくら
おきてもねてもまたぬ日ぞなき

菅公

肥後國飽託郡横手村筒口　仁保しま子

なる神のおとよりたかくいまも世に
ひゞくはきみがまことなりけり

尾張國愛知郡熱田町字富江　川田　艶子

菅はらやふしみのさとのうめのはな
ちりてののちもたかくにほへり

伊豫國松山市一番町　宇高　松子

くもりなきかゞみと今もあふぐかな
こゝろつくしのあきの夜のつき

奈良縣丹波市　梅本房江子

梅が香とともに千とせににほふらむ

きみがこゝろのたまのひかりは
四谷本村町　下田しげ子

秋の夜の心づくしもしばしにて
きた野にはふつきぞさやけき
美濃大垣町　吉村せむ子

末つひにまことのこゝろあらはれて
きたのゝかみとあふがれにけり
本郷區駒込西片町拾番地　高嶋福子

ふぢかつらおひひろごれど菅はらの
まことのみちはかくれざりけり
三河國寶飯郡陸美村　大林み幸子

身に染てあはれなりけりこちふかば
にほひをこせのきみかことの葉
肥後國菊池郡加茂川村　石井豊子

もみぢ葉をぬさにかへての言の葉は
たむけのやまのにしきなりけり

（以下原稿到着順）

慈悲のこゝろをよめる

あはれみとなさけと人にかけはしは
あやうきものとおもひけるかな　石井登子

千はやふる神のこゝろにかんならひ
澤田春子

くるしむものをめぐめみなひと

たまくしげふた親あらぬうなひ子が
よはのあはれぞいとゞ身にしむ　小森田輝子

雪をしのぎ雨につとめてひとの子の
しづむうきせをすくひてしかな　佐々小琴子

もろ人をすくふこゝろをふかしとは
はるのあめともいふべかりけり　坂本瀧多歌子

人といふひとのうちにもすみかなき
ひとのすみかをさだめさせばや　服部倫子

朝ゆふにあだしこゝろをうちはらひ
まことのみちに身をつくさめや　山代由子

百八十のころもほしくもおもふかな
ゆきにこゞゆるひとにかさんと　徳永萬壽子

世の中はたふときひともいやしきも
うゑにくるしむことをわするな　溝口貞子

身の程もうちわすられておほけなく
よをすくはんとおもほゆるかな　宮地小東洋子

ふすまなき賤かふせやはいかならん
きくもさむけしゆきおれのこゑ　阿保松子

にくしとて己が子しかるをやぞなき
これやまことのなさけなるらん　田村多豆子

數ならぬ身にしあれとも世をおもひ
ひとをおもひてあかしくらさむ　石川端子

世のなかはかはる〱にきゆる身も
きえぬは人のなさけなるらむ　石川類子

よかれかしとおもふ心にめぐし子を
しかるもおやのなさけなりけり　宇高まつ子

身をつめははふり捨るなかたぬらも　おなじ世にすむはらからにこそ　藤井幽惠子

夜をさむみあら野の末の田鶴か音は　子を思ふやみにな(ほ)まよふらん　河野みち子

ほふらるゝこさゝもしらでゆく牛の　いさむしかたをみるぞかなしき　早川信嘉子

はたのをきりてむつ折こらせしも　なやのなさけのこゝろなりけり　早川千代子

あらはさぬなさけの花のいろさかは　世にもかくれぬにほひなりけり　尾島しつ子

田はあれて土さなりたるなつの日に　ふるむらさめそめぐみなりけり　井上常子

人のためつくすなさけはひさのため　孫すにもあらすわがためにして　小川たに子

世の中のひさにしられぬ不知火の　こゝろつくしはかみのしるらん　鶴山みれ子

あはれみのひかりくまなく世の中を　てらすやかみのこゝろなるらん　尾島みの子

人の身をおもふこゝろのふかければ　ふかきめぐみをかみやくださん　河原芳子

いさ深きめぐみのつゆやはるのうみ　こゝろづくしのおきのをふれに　天野眞佐子

仇なしもあはれみすくふまごゝろを　わがおほきみはほめたまふらん　北郷あき子

さしつきにながれ出てもみめぐみの　みなもさ深しつく世あらめや　天野ちか子

よるへなみ乳房ふくまぬみなし兒も　天野ねい子

ひさくさを惠むこゝろに咲かばなは　めぐみある世におひてなくらん　天津ふさ子

わび人のうれひをよそに見てやまん　さきしくにこそかなりかたけれ　湯川鐵子

おそろしき病しなくはかくまても　身をつみてしもいたからぬ世は　湯川淵子

よもきかみみたれるみれは王ぬきて　あしきれすみもにくまさらまし　別火佐壺子

あめつちのなきけの露のかゝらすは　かさすわか身そやさしかりける　永井良子

冬枯れてよはのあらしの吹くごさに　いかてめぐまむよものくさ木も　久住もさ子

あめにぬれ霜にこゝねてあそふかさ　れざめするかなふせやおもへは　古瀬りく子

なさけある人のこゝろをかゝみにも　きつかはしきはわが子なりけり　田代敏子

しらたまのわかこを捨つる親なれさ　うつさはいかにうれしかるらん　河野しけ子

世の人のあはれをものが身にしめて　やさかるのきをいらひぬるかな　稲垣政子

人さしてひさをあはれむひさなくば　めぐむぞじひのこゝろなりける　米村菊子

子をうしさ屈はさりせはなかくに　ひさてふひささひさはいふまじ　柏木静子

浦やまにみつるみくにさふほのをん　ゆきふみならふこさはさせまし　鎌田さみよ子

つゆちりほさもわすらるゝやは

あすまなる旅ちにありていとゝしく
はゝのめくみをおもひけるかな　森　このゑ子

おもひなき身にはありとも大かたの
ひとのなけきをよそにやは見ん　武田榮子

己か身のつひゐをはふくこゝろこそ
ひとをめくみのはしめなりけれ　山田稻子

よみがへるよろつのくさのはゝこ草
めくみのつゆの置くところなり　熊耳二曾子

こゝろよりこゝろに繼くあたしのゝ
むしもへたてぬかれのひゝきは　熊耳さつき子

己か身のいたさをしのふこゝろこそ
もとのいたさもおよぶなりけれ　熊耳すみ子

はくゝまん猫のこゝろにそはれはや
むかしもおのかみをかこちけん　伏脇米子

かけたのむはゝそはかれて下もゐの
ふた葉の小くさいかにそたゝむ　名取正代子

いそのかみふるき神代もいまもなほ
かはらぬものはおやのこゝろそ　春永政子

夏ふゆのかせにつけてもおもふかな
こひしきひとはいかにありやと　田中さく子

たらちねの親の子おもふこゝろもて
たゝひとすちによをわたらなん　兒玉さは子

よの人のうきもつらきも身のうへに
おもひくらへてまことつくさん　河田いし子

かたね子が物恐げむとていだす手に
もろくもおつるわがなみだかな　津田千代子

みもしらぬ人のあはれをたまほこの　鏡山増代子

めくみのみちにすくはるゝかな　岡崎千年子

我が袖はいとせはくともひとの身を
おほふは慈悲のこゝろなりけり　都木春子

賤をおもふなさけのはては多からぬ
たからも捨てゝをしまざりけり　吉村和歌子

つかのまもおこたりなきはあけ暮に
子を思ふおやのこゝろなりけり　吉村せむ子

おやの子を思ふかこゝにはした女を
みちひくひとのなさけふかしも　纐木頁子

おのかしゝ遊ふわざにさたらちねの
なき子いだきておくれがちなる　纐木鶴子

粟もなく居るにいへなき世のひとは
しも夜をいかにゆめ結ふらむ　下田しげ子

いさゆきてはらひやらなむ深けれと
にはの小まつのゆきおもげなり　有坂せん子

あたなさむ罪そさておき四方の國に
にくしとおもふひとなかりけり　於保あや子

はゝそはの母のめくみのなかりせは
身はつきはなを見さりしものを　山方春子

あはれてふ人になさけのなかりせは
なさかねらはんとりやけものと　根田よし子

天つちもなどうごかざらん情けなる
ひとのこゝろのふりかゝりては　大塚小松子

なさけある人はわが身もひとの身も
とりやむしにもへたつことなし

ちゝはゝの海よりふかき慈悲こゝろ
うけしわらはのかくもおもはで　菅野春子

淺ちふのしつのわらはもうつくしみ
　ふかきこゝろのある世なりけり　日高かず子

うつくしみふかき世なれや子を思ふ
　おやのこゝろをこゝろさはして　日高かれ子

まつはりてはなれぬかどのいぬ丸も
　うつくしむてふことやわくらん　上杉光子

おのが身に思ひ比べて惡きをくみ
　めぐむやひさのまことなるらん　小野花子

あしさまに我をのゝしる人をたに
　めくまはいつかおもひかへさん　臼井美辰子

いにしへの高津のみやのこゝろもて
　めくむやひさのまことなるらん　神田秀子

あはれなる人をあはれむひさをこそ
　なさけある人といふへかりけれ　島すみ子

たよるへきひさに別れてひさゝなる
　みちなきひさをめくまさらめや　島立子

あさゆふの露のなさけのかゝらすは
　なつののくさにかれやはてなん　永井さい子

あはれなる人さしきかは身をつめて
　こゝろのかきりいさめくままし　萩原ろく子

かさに立つしつか乙女をおもひやり
　うすくころもをかされけるかな　牧綠子

我ちから及はんかきりめくまなむ
　あたなすひさもなつき來るまて　齋藤よし子

こさたらぬ身にしあれさもよの常の
　あはれをよそにみてやすきまし　大瀧みさを子

世にいきてたよる方なきみなしこを　梅本ふさね

　めくむもひさのこゝろなりけり

親こゝろうつやしもさにふりそゝく
　なみたはあつきめくみなるらむ　神保しつ子

ちゝはゝもかくありけらし束の間も
　わすれかたきはわか子なりけり　神山かつ子

子をせむるおやのこゝろや人の行く
　なさけのみちのしをりなるらん　田村道子

よきうへも猶よくあれさめくし子を
　しかるはおやのなさけなりけり　宇島松子

あはれなる人のこゝろにくらふれは
　こかねゝたまもをさりこそすれ　川端まき子

賤のをかあさゆふたねぬせのあせを
　くみてしるこそなさけなゝけれ　川邊まき子

はゝ人の手さりのまわた思へいれし
　ぬのこにあつきなさけをそしる　須藤ふさ子

哀れさもいふべきものはみなしごの
　そだつるひさのなきさおもひば　栗田口のぶ子

いさしさよ木枯しすさぶゆふまぐれ
　なく子をせなにうたふこもりは　鈴木まつ子

わたつみの千尋のそこもなにかせん
　ふかきめぐみのきみがなさけは　玉枝すゞ子

わが身には飢ゑもさむさもいさはずに
　子をおもふおやのなさけふかしも　松野みさを子

よそほひに盛さんかれのをしきかな
　世の身なし子をすくはんさもせず　若松さめ子

さこさはに人のあはれを身にかねて
　いたはるひさのたのもしきかな　高砂菊代子

織るはたの糸たちきりしたらちねは　川田豁子
こゝろみたりとひとやみるらん

山たかくうみをふかしとおもへるは　田村多豆子
ひとのなさけをしらでなりけり

親もなくうからたになきをさな子を　賀茂鐙子
やしなふひともある世なりけり

殊さらにめぐむこゝろのあるひとは　三宅中枝子
ものゝあはれをしればなりけり

學ぶべきちからなき子のおほき世に　河合鏈子
あまるちからをかさせましかは

とある人おほかるよにもまづしきを　加藤數子
めぐむひとこそすくなかりけれ

ねもころにみちびくみよにうまれきて　伊東千代子
それともしらぬひとぞかなしき

おろかなるものこそ弱くおもほゆれ　服部萬子
おやのこゝろを子はしられとも

病みさかるわ子を守りてくらしけり　中島しげ子
身のいたつきもしらぬなみだに

しづの女が今しばしとてぬふいとの　原口いち子
泣く子にひかれみだる夜半かも

夜もふけぬ今しばしとてせくはゝの　島田みさ子
なく子にひかれそひ寝するかも

花を待つ

今朝ははや外山のかすみたちそめぬ　前原千代子
尾のへのはなも咲きいそぐらむ

かすみたつ彌生のそらに咲きにほふ　峰川好枝子

はなのこずゑを待つぞたのしき

いとなみの多かる身にものうけきは　池田みさを子
はなまつほどのこゝろなりけり

まちまちてと山にかゝるしらくもゝ　德永廣子
にほふさくらのおもかげ[illegible]ゆ

春かぜのふくにつけても八重ひと重　澤田春子
またるるものはみよし野のはな

まつ人のこゝろもしらで春雨に　佐々有鄰子
つれなくみゆる山ざくら花

ふる雪のはなの木すゑをみるたびに　小森田鄉子
またるゝものはさくらなりけり

さきいづる花をまつまの春の日は　佐々小學子
しづこゝなくおもほゆるかな

月に日にわがおいらくはつもれども　坂本遊多畝子
はなさくはるのまたれつるかな

ふりしきる雪はものかはあづさゆみ　堤　彬子
はるのみそらのはなをこそまて

山さとのかすみそめたるあしたより　服部倫子
はなのさかりをまつぞたのしき

ゆびをりて花まつころははるさめの　山代由子
日ごとにふるもうれしかりけり

春のそらとやまにかゝるしらくもゝ　德永爲壽子
はなまつ身にはなつかしきかな

ゆきめぐる老のとしつきまたれども　濟口貞子
はなさくころの日かずをぞまつ

うら〳〵とかすみこめたる山の端に　宮地小京洋子
待たるゝものはさくらなりけり

またずとも花はかならずさくものを
こゝろにかゝるやまざくらかな　加藤壽枝子

咲きにほふさかりみじかき花ながら
なとまつこころのかくぞつれなき　阿保松子

いつまでもひもとく蕾はみねやらで
まつ間もながきいとざくらかな　田村多豆子

老ぬればこゝろいられてさくはなを
いよ〱おそくおもほゆるかな　石川[illegible]子

春の日をながしといふはきさらぎの
はなまつときのこゝろなるらむ　石川類子

けふもまた峰のかすみにはかられぬ
はなまちわぶるこゝろまどひに　宇高まつ子

かすみたち空ものどかにみゆれども
はなさかぬまははるとしもなし　新井と代子

とふ人もなきやまざとのあけくれに
たゞまたるゝはさくらなりけり　若代りう子

さくら花さかばとはむとおもふどち
ちぎりこめつゝまつぞたのしき　川島さく子

春さめのふるもうれしきやまざくら
はれなば行きていちはやく見む　松野澤子

みねの雪たにのこほりもろともに
やよときそめよはなのしたひも　大谷つる子

よしの山のこれるゆきを見てもなほ
はなの香おくるときぞまたるゝ　西村ひろ子

かすみさへかけて恨めしまつ身には
はなやいかにとおほめかれつゝ　藤井りゑ子

待ちわぶる我こゝろとはかすみたつ
とやまのさくらしるやしらずや　河野みち子

まさかれてやまのはとほく眺むれば
はなかあらぬかみねのしらくも　早川信嘉子

指をりてつもるひかずをかぞふれば
はなはほどなくさきにほふらん　早川千代子

朝かすみへだてぬほどにおきて見む
尾上のさくらさきやしつらむ　井上常子

うぐひすの聲きゝそめしあしたより
おもかげにたつやまざくらはな　宮武一子

さめて猶まつぞくち惜しき思ひねの
ゆめにいくたびはなはさきしを　小川たに子

さくらはなあまりにまては山の端の
くももそれかとおもひけるかな　尾島いろ子

一日だにはやくも咲けと思ふかな
ことしこゑたるやまざくらはな　福山みれ子

またさかぬさくらが枝にねるてふは
ゆめのうちにもはなやまつらん　尾島みの子

はつ花のいかにあるらんわがにはの
てうゑのさくらつぼみこねたり　河原芳子

はることに見る花なれど老いぬれば
我が待つやとにこゝろひとすぢ　天津眞佐子

いつしかとまたせのみして春の日の
ながきやはなのこゝろなるらん　北郷あき子

君がよはとつくにひともみよしのゝ
はなのあけぼのきてやまつらん　天津ちか子

立去らばひとやしめなんさくらがり
ほころぶまではありてこそ見め　天津すゑ子

[illegible]の[illegible]

木のもとに立ちよりてまつさくら花　天津ゑい子
なほし咲かずはさくなとぞおもふ
海の外にはるしすきなはみよしのゝ　天津ふさ子
はなもよそにてまさゞらましを
今日もまたまつちの山のしらくもを　山田新子
はなとまがひてながめつるかな
はるかすむたちそめてよりよしの山　宮内俊子
またるゝものはさくらなりけり
いく度か立ち出て見れどいかなれや　大谷津峰子
さかむともせぬにはさくらばな
まちわびし花やさくらんこもりくの　遠山たゞ子
ひかげのどかになりそめにけり
なか〳〵に花はさかりをめつるより　永井貞子
さくをまつまぞたのしかりける
花をめつるこゝろはをなしくるとしも　遠山よしね子
またくるとしもいとゝまたるゝ
いつしかとまたれし梅の香のみだれ　久住もと子
いまはその面のはなぞまたるゝ
春のひのながきをうしといひつゝ　古瀬りく子
はなまつくらしゐるひとやたれ
春かすみつゝみて見ねぬさくらばな　澤田京子
はや咲き出てむときを待つかな
のどかなる春のこゝろに似ぬものは　玉井隆子
つく〳〵はなを待つ日なりけり
咲きそむる花をまちつゝ木のもとに　田代艶子
かすみにつれてたゝぬ日ぞなき
花をまつこゝろをとはゞはるの日も　田代綾子

みしかしとのみひとにこたへん
待ちわぶるこゝろもしらぬさくら花　河野しげ子
けふのをさめにはやもさかなん
あくがれてはなまちくらす老が身の　稲垣政子
こゝろもしらぬやまざくらかな
待ちわたるはなより先にあはれたゝ　鳥飼つる子
はるのひかずをくらしぬるかな
今朝のにはうめはのこらずうせにけり　木村菊子
いろもきよけきはなをまつかな
さくら花このはるさめに咲きいでよ　五味綾子
なれをまつ人あまたあるをや
かすめども花はつれなくさきやらで　神月壽美子
こゝろづくしのみれのしらくも
春さめのふるぞうれしきやまざとの　稲原文子
はなまつこころのはるのつれ〳〵
いく度かくりかへしけり去年の日記　柏木静子
はなはことしもかはらさらめと
歳としにひらくさくらのやへひとへ　織田さみよ子
かされかされにさくをまつかな
さし涙のよるもわすれてみやこひと　森このね子
おひもわかきもはなをのみまつ
ふりつみしこずゑの雪をながめても　稲岡都子
さくはなさきのまたれぬるかな
いざさくら咲かぬ木影にあくがれて　内海順子
はなまつころのながくもあるかな
いつしかとはなまつほどはいとゝしく　武田粂子
ながきはる日のかこたるゝかな

こゝろから長きかはるのひもかゞみ
のどかのやまのはなをこそまつ　山田稻子

咲きやらぬこすゑたとりてはる雨に
ぬるゝひと枝のいろを見てまし　熊耳二酉子

ふるさとにぬくみおほひて咲く花を
いそぐこゝろのまさるあめかな　熊耳さつき子

先立てむむちをくれつゝはないそぐ
こゝろのこまにくら置てまつ　熊耳すみ子

さわがしきよのうき雲をへたつみの
またるゝものはさくらなりけり　大竹はつ子

うぐひすの鳴くれ床しくきこえけり
はやもさかなんやまさくらはな　大竹はる子

さくら花さくを待つ身となりしより
こゝろのどけき日もなかりけり　渡邊龍江子

時をしむひとこそさきをいそぐらめ
はなのさかりの今日か明日かと　小林しげ子

さくら花咲くをまつ間のこゝろには
あさゆふかゝるみれのしらくも　茨木しげ子

さくらはな待たるゝころはなが〳〵に
のどけきはるもしつこゝろなし　屋舗鈴枝子

待ちわぶるこの久しさをさくらばな
咲きてののちとしてもみまほし　伏脇米子

かすみたち春のけしきも見えそめぬ
はやもさかなむやまさくらはな　名取よし子

朝な〳〵ながめくらせるしらくもの
いつかまことのはなとさくらむ　名取正代子

うちなびく軒端のやなぎみるたびに　春永政子

まつまたるゝはさくらなりけり

さくら花さくと見し夜のゆめさめて
ひとりながむるみれのしらくも　金川かれ子

待つからにいとゞおそしとかこつかな
はるをわするゝはならなくに　立神富子

つくしおふる野邊に雲雀のうたうなり
みれにははなのいつか笑むらん　纈木龍子

いつる世に匂ひいつらむやまさくら
こゝろのともまちもこそすれ　織木貝子

よし野山あさな〳〵に見ゆるかな
はなやさくらんみれのしらゆき　於保あや子

待つからにいとゞとほしと思へども
はなはさきしもたがへぬもとな　上原八重子

ひまを行く駒のあがきをかこたぬは
はな待つころのこゝろなりけり　小笠原元子

世の中にまつことあらぬ身にもなほ
さきあへぬ花にあくがるゝかな　梨田さく子

名におはゞいざ比べてむま松が枝に
わがこゝろざしはなやしれると　田中さく子

のどかなる春とはいへどなか〳〵に
はるまつ身にはしつこゝろなき　辻一子

のどかなるはるの長日をはなゆゑに
こゝろみじかくまたれけるかな　村上正子

はなを待つ人のこゝろにかゝるらん
かすみのおくのみれのしらくも　財田富子

ちきりてしみやこの友はとひ来しに
にはのさくらのなとてわらはぬ　兒玉さは子

さくころはまたとほ山のさくらはな
まつはなか〳〵ひさしかりけり　山田き代子

さきやらぬ花まつほとにいさゝなほ
こゝろいそかすうくひすのこゑ　道家しすの子

咲きぬれは心おかれてやすからぬ
はなはまつ間そたのしかりける　津田千代子

いつしかとまち遠しきはよしのやま
こそのはな見をおもひいつれは　辻さみ子

たのめこし山路のさくら今日もまた
さかぬなからにかへるわびしさ　小野操子

年なみのよるにまかせて去年よりも
ひさしほはなのまたれけるかな　古瀬斐野子

待ちわふる花のさかりはぬはたまの
ゆめのみにしてそらたのめなる　鏡山増代子

目かれけるはるのかよひち雨はれて
またるゝはなはやかて咲くらん　岡崎千年子

咲きぬれはしつこゝろなき花なしも
なとかおそしとまちわふるらん　西川順子

しら〳〵とかすみにそゝくむら雨も
はなまつほとはうれしかりけり　笹子歌子

うくひすの春つけしよりこまにくら
おきても寝てもはなそまたるゝ　笹子旗子

さくら木のはなまつ頃はつれ〳〵と
ふるはるさめもうれしかりけり　鈴木綠子

としことにおなし色香に咲くものを
飽かでも待つは花にそありける　都水春子

まつとも〳〵なきつれ〳〵のやま里に　佐藤峰子

ひとりまたるーまとのうめか香

時を得は咲くと思へとしかすかに　鷲野もゝよ子
はなまたるゝはひとのつれかも

ことしこそ妻子もろともみむと思ふ　吉村和歌子
はなをまつまのたのしかりけれ

かとまつにつもれる花をみてしより　下田しげ子
またるゝものはさくらなりけり

いつかはと待つもわひしやさくら花　有坂せん子
さかぬやまさへうちまもりつゝ

朝なゆふなたちむかひつゝつきやまの　井上つまを子
まかぬはなさへたのしかりけり

さきぬれはちるをならひのさくら花　永矢臨子
なか〳〵まつもたのしかりける

いつしかと花まつほとはしらくもを　永山登子
はやまのすきのうれになかめん

よし野山はなかとはかりおもひねの　中島しげ子
ゆめにもかゝるみねのしらくも

なか〳〵におそきそ花のこゝろなむ　島田みさ子
咲くもとくちる世をおもひつゝ

八重さくらつほみ色こくなりにけり　原口いち子
咲かぬ限りもけふにやあるらむ

のとかなる春のひかりに咲くはなを　山方春子
待ちわひつゝも今日も暮しつ

さくら花さくべきころのとし〳〵は　根田よし子
おそきものともおもはれにけり

こゝろしておほしたてたるさくら花　大塚小松子
いろかいかにとまたれぬるかな

うめのはな散りてもこゝろのどけきは
またるゝさくら有ればなりけり　齊藤はる子

我がにはの梅にほひのなくなりぬ
よしのゝさくらはやもさかなむ　村田吉代子

春かすみたつよりやがてまたるゝは
去年みしはなのすがたなりけり　富瀬八重子

しら雲にあらぬこゝろもいつしかと
はなまつやまにかゝるころかな　東野さく子

たゞひとつたのしみにして彌生かな
わが待花ぞ我をまつらん　菅野春子

またるゝはよしのの里のはなざかり
くもゝかすみもにほふころかな　海島伊登子

春ながらはなまのころはなか〱に
のどけくもなき我がこゝろかな　日高かず子

けふもまた花をまつちのやまのはに
まづかゝれるははるのしらくも　上杉光子

いふせくも降るこそよけれ春さめの
やみなははなのゑみやもらさん　神田秀子

待つわびてあけくれはなを思ひやる
こゝろはやまをはなれざりけり　田中松野子

去年の秋つきにうらみしあまくもゝ
はなまつころはたのもしきかな　島立子

春もなほつれ〲にのみおもふかな
はなまつほどのとほきこのころ　長澤いゑ子

長閑なるはるの日かげに似ぬものは
はなをまつ間のこゝろなりけり　永井いさ子

さけはかつちるをならひのさくら花　萩原ろく子
待つまぞはるの日かげなりける

さく花の短かきさかりにひきかへて
まちつゝすごすはるの日ながさ　矢野ちかな子

さほやまの雪もかすみと見ゆるまで
はなまつ身にはゆきもこひしき　吉田まさゑ子

おき餘るめぐみのつゆにうるほひて
くにのほまれとひらけなでしこ　高橋直子

けふいく日まつとしらすや山さくら
花のこゝろのながくもあるかな　牧綠子

みよしののよし野の山のはるかすみ
立ちてもゐてもはなぞまたるゝ　齊藤よし子

さくらばなはやく咲かなむなべ植し
やなぎのいとばもつれそめしに　松本靜子

まち〱し梅はゆき間にさきぬれど
なほまたるゝはさくらなりけり　北原すゑ子

あくがれてあけくれ見れどさくら花
こずゑのつぼみ笑まむともせず　榊原八千代子

さきやらぬはなを待乳のやまはまた
はるとしもなきこゝちこそすれ　大瀧みさを子

みよしのゝやまのはる風そよ吹けは
まなく咲んとはなぞ待たるゝ　上杉久子

春さめのふるさへうれしのきはなる
さくらのはなのあすはにほはむ　梅本のね子

匂ひなばやがてちるてふさくらはな
しるもしらぬもまちわぶるかな　梅本ふさね子

さしことに見あかぬはなの色なれど
咲くとし思へはわびしかりけり　榊保ゑつ子

春さいへはこその名殘のしのばれて
はなさくころの待たれぬるかな　神保すゞ子

花見んさわけ來しかひもあらしやま
またひもさかぬおそさくらかな　神山かつめ子

まちわひてむすほゝれたる糸さくら
はなのしたひもいつかさくらん　田村道子

待ちわふるひさのこゝろもしら雪に
いつまてはなはふゆこもるらん　宇高松子

たちそめしかすみ眺むるあしたより
こゝろのうちにほふはなかな　川端まさ子

はるたつさきゝにし日より遠やまの
はなやいかにさまたれぬるかな　清水富美子

散さきのうきにかへては惜もはしさ
ちかひしはなをなほまたれけり　植田てふ子

日にすゝむ大和しまれにおひなから
おくれてさくかやまさくらはな　川邊まさ子

春がすみたなひきそめしあしたより
はなのさかりをまたぬ日ぞなき　黒子玉枝子

咲きぬれは靜こゝろなくちるはなの
なさいくはかりまちうかるらん　中島さみ子

雪ふかきしづがのきばのうもれぎも
はなさくけふをまちにけるかな　栗田日のぶ子

心あらばはやさきなましさくらばな
わが戀ふる日はひさ日ふた日か　鈴木まつ子

きのふけふ野山のゆきのきえしより
咲いづるはなの待たれぬるかな　岩波后子

春さめのはれにし日よりけふあすさ　岩波はま子

はなのたよりの待たれぬるかな

けふあすさ花待つ身にはやまのはに
たつしらくももあやまたれける　岩波のち子

おもひねのゆめにみえつるさくら花
まくらのやまにいつかさくらん　鎌田絹子

山きはのほそくたなびくかすみこそ
はなをまつまのながめなりけれ　錦浦よさ子

花さいふはなのさくへきはるなれさ
またるゝものはさくらなりけり　國枝すゞ子

吉野山みれのこすゑのゆききえて
まことのはなの咲かん日ぞまつ　松野みさを子

ちりやすき花のさかりはなか〳〵に
待ひさおほきまにこそありけれ　高橋しげ子

雁かれのおさつれしよりひさかたの
くものうへ野のはなそまたるゝ　若松さめ子

はるかすみへだてもぞするさくら花
まちわびぬれどなほさかぬさは　曲田すゞ子

待つ間こそかへりてものば樂しきを
なほまたれけれみよし野のはな　可知しも子

さくら花さけばかつちるものうさに
またぬやまてる極みなるらし　曲田つれ代子

ちるきはのうきをおもへばさくら花
まつさはいはじ待ちはすれども　曲田さの子

さくらはな盛りやいつさ待つ間こそ
見るにもましてたのしかりけれ　古瀬しん子

花咲かはまつたづれんさみなひさの
待つや野やまにかすみたつころ　古瀬てふ子

待つほどの甲斐もあらしに散る花を
待つこそひとのこゝろなるらめ　古瀬じゆん子

雨をいとひ風はなかれといのりつゝ
はな咲くときのまたれぬるかな　佐々敏子

ひとみなの花まつころのこゝろには
ひまゆくこまも知らでやあるらん　高砂菊代子

まかる友あるにはあられど獨り居て
いとゞまたるゝにはさくらかな　高砂き代子

はやくさけ我が山さくらわれのみか
ちきりしともゝさぞなまつらん　川田艶子

まつほどのながき日數をさくらはな
さきてののちにと思はるゝかな　田村多豆子

おもひやれかすみこめたる山ざとの
はなまつほどのはるのつれ〳〵　野里もと子

あくがれてまつほどながき糸さくら
ゆめぢもはなをくりかへしける　高桑きみ子

うぐひすのはつ音ころよりよし野山
こずゑにこめてはなぞまたるゝ　菊池廣子

さくら花はやく咲きてよ日ころより
したしきともゝともに見んとて　小山ふく子

春きてぞなには思はず野にやまに
とくさくらはなさかせむとのみ　靑柳いさ子

絶へず見る峰のしら雲いく日あらは
まことのはなとたちかへるべき　畑野てふ子

いつしかとたのしきものはさくら花
待ち渡るころのこゝろなりけり　梅田りん子

花るかはなにして愛てむをちこちに
春山はな子

まちわたるひとつてに知らせよ

身のうさもほころひそめて樂しきは
はなまつ間のこゝろなりけり　園田梅子

ふかむかぜ降るあめいかで野に山に
わかまつはなをさくさかせてよ　上杉つる子

おもふともこふとも知らぬ花なれば
ゆめにもまてとつれなかりけり　賀茂縫子

花をのみおもひくらしてぬはたまの
よるはゆめにもまたれぬるかな　三宅中枝子

山さとはさかりおそしときゝつれど
はなのつかひのなほぞまたるゝ　河合縫子

このあめにはなのさかりはあらし山
おもひのほかのたよりをぞきく　伊東千代子

のどかなる春のかすみにひかれつゝ
たちてみゐてみはなぞまたるゝ　伊東いさ子

花さかばつけむといひしそのひとの
たとりまつまぞひさしかりける　大林みゆき子

ものいそくわれにならはで老木さへ
花さくはるのおそくもあるかな　服部鳶子

明けくれにさくらさくらと立てゐて
はなまつはるのひごそながけれ　服部正子

かぎりなくまたせまたせて春の日を
いつまでしらぬさくらなるらむ　加藤数子

雁がねは行きてつばくらすくふとも
かすみたゝればはなもきたらず　林蕾子

菅原道眞

捧けてし御衣のにほひのよにもりて
はらわた断たぬひさなかりけり　金川かれ子

眞心をつくしのはてにくたきつゝ
きみかみけしの香をしのひけり　黒田さり子

九重のみやこのこさはしらきくに
つけしも去年のあきおもふらむ　田中さく子

大君にわかまこゝろをつくしつゝ
つくしはてたるきみをしらすや　辻よし子

いかつちのひゝきは空のこさなれさ
いさをのひかりかゝやきにけり　辻一子

つく〳〵さ鶴のこゑにそなぐさむる
こゝろつくしのあきのおもひを　村上正子

遂に身はこゝろつくしに果てにけり
きみにつかへしむかししのひて　財田富子

大御衣のかはたぬなくにつくしかた
みのぬれきぬをほすよしもかな　兒玉さは子

こき雲のはれてひかりもみちわたる
こゝろつけしのありあけのつき　河田いし子

あな君かきよきこゝろはふりつもる
ゆきにかくれぬうめか香にしる　道家しつの子

さり出ていふさもつきしいにしへの
こゝろつくしのうめのにほひは　木下千代子

いまもなを仰ぎ見るかなくもりなき
こゝろつくしのなみの上のつき　小野操子

くもりなき君かこゝろは有あけの
そらにすみつるつきのかけより　古瀬斐野子

梅か香のかをりもたかききみか名は　鏡山増代子
いくよふるさもかはらさるらん

鴫かはの水にもふかきこゝろあらは
きみをつくしにながささるらん　岡崎千年子

月かけにむかししのひてはま千さり
こゝろつくしのうらになくなり　西川順子

なかれ行く身こそつきぬれつくし潟
なみならぬこゝろ君そしるらん　笹子歌子

君がためまこさつくしのつき見ても
こゝろみやこのそらにすむらん　笹子蔦子

おほそらは世のうき雲のへたてゝも
身にくもりなきありあけのつき　鈴木猿子

なかれてはかへらぬ涙をうらみつゝ
こゝろつくしのはてそかなしき　鈴木金子

つみなくてかりやの月をみながらも
こゝろやきよきすがはらのおみ　佐藤峰子

梅か香にのこすつくしのほまれこそ
あじきなき世のかゝみなりけれ　窪野もゝよ子

手むけやまぬさしか〳〵の言のはは
あかきこゝろのにしきなりけり　吉村和歌子

いかつちのそのしひ言はあさたへて
くもりなき代にづきぞ出てけり　有坂せん子

かしこくも君かみけしをささけつゝ
たもさやいかにぬらしましけん　井上つさを子

おほみけし月のみかけにさゝけては
こそのこよひさかなしかりけん　永矢譲子

かくはしき君かみけしをさゝけつゝ
こそのこよひさなけきましけむ　永山豊子

君が身はつくしのつゆと消ねしかと
いさをは世々にてりまさりけり　山方　春
君おもふあかきこゝろのすがはらや
せめしいさをは千代よろづ代に　横田よし子
こゝろだにまことゝ云へる菅の葉そ
いくとせまてもいろはかはらじ　齊藤はる子
みぞ神げおつるなみだも盡きあへず
こゝのへあたりながれゆきけん　群田際子
ますらへし身にしあれともおほ君に
つくしこゝろはかはらさりけり　宮瀬八亞子
君がため身をもこゝろもつくしがた
いさをとともにのこるうめが香　瀧口佳都子
哀れなるつみなききよみ住むしまに
つきをながめて去年のおもひを　菅野香子
まかしらはつゆもうらまで君をもふ
みなぞがほるうめのはなびら　山田つゆの子
思ひきやみけしのそでにみめぐみの
つゆより外のつゆおかんとは　日高かず子
なるかみになりぬといふは君が名の
世にこゝろけるたとへなるらん　日高かず子
おほはれしうき雲はれてつくしがた
てるかげきよしありあけのつき　金森さし子
たまわりし君がかたみのみけしをば
御身にそひてもをろがましけん　上杉光子
みはつひにますらへ人となりぬれど
こゝろのはなは世々にかゞやく　神田房子
ぬれ衣をほすよしもなくひさりたゝ　島すみ子

こゝろつくしのつきやめてけむ
難波津を手ならふ子等もあふぐかな　島　立子
まなひにひてしすがはらのかみ
君を思ふふかきこゝろはつくしがた　長澤いゑ子
つきさすに任ふなこそながるれ
よにたかく君がみいつはいかつちの　永井さい子
かみならねともとゝろきにけり
たまものゝ衣のうつりがみにしみて　荻原ろく子
つくしのあきやわびしかりけん
にごりなきこゝろつくしのなみの花　荻原ろく子
すゑのよまでもかをりけるかな
あきの夜のやさけき月もきみしのぶ　天野ちかを子
なみたのあめにかきくもりけむ
うきくもに天津日かけはおほはれて　上村まさ子
ほすよしもなききみがぬれきぬ
うちあふぐ御稜威は千代にかをりける　吉田政榮子
手うゑのうめのはなをわすれず
よしや身はつくしのはてに埋むとも　高橋直子
はなのいろ香は千代に八千代に
つくしがたあたにさゝせしむら雲の　牧　榮子
はれてひさしほきよきつきかげ
筑紫の海にいさよふつきのかげ見ても　北原すゑ子
しのばゝかなききみがこゝろを
習のれのなかきつきひをつくしがた　大瀧みさを子
きみがみけしの香をしたひつゝ
おもひいつのきはの梅のかほるれは　梅本ふさね子
きみがゆかしきむかしがたりを

君のごとこゝろまさかにきみもてば
つくしのあきもさやけかるらん　神保ゑつ子

東風吹けばいく世ののちもかをるなり
はるをわすれぬうめのはつはな　神保すゞ子

咲き匂ふうめの香はしかくめてまし、
神の御こゝろしのはるゝかな　神山かつめ子

そらこさのそのなるかみもよにみなの
たかくさゝろくあまりなるらん　田村道子

はるされはさきをたかへすさく梅は
きみかまことのかほりなるらむ　川端まさ子

賜はりしみけしのうへにうちなみの
ぬれきをきみかかされきんさは　植田てふ子

君めてしうめのいろかはうなぬらか
つくゑのうへにいまもにほひて　川邊まさ子

いかはかりかなしかりけんうつりかを
こゝろつくしにこひしきみはも　中島登美子

皆はらもあしきふちはらなかりせば
かうへうきことにあわじしものを　粟田口のぶ子

幾千あきふるさもきけじあさゆふに
さゝげしそでにはふきくが香　鈴木まつ子

月あかき夜はいやさらにしのばるれ
みこゝろもささぐきみがおもかげ　岩波后子

筑紫のうみたつあらなみの昵ければ
きみがたもさのひろよしもなし　岩波のち子

おもひきやみけしの外につくしかた
なみのぬれきぬかされきんさは　飯田稻子

あきの夜のさやけくすめるつきこそは　箕浦よさ子

君かため心つくしもあたなみに
きみかこゝろを汲みしなるらめ　園枝すゞ子

九重のきた野ににほふうめの香の
あへなくなりしこさそくやしき　松野みさを子

梅のはな東風にまかせて咲きながら
きよきぞきみがこゝろなりける　若松さめ子

月みてはありしむかしをしのびれに
かへらぬあるし惜くもあるかな　林壽子

つくし潟ながれしうめのあまかへり
なげきしきみぞ世にきこねける　佐々敏子

むら雲はあさなくはれてつくしかた
なかくも世々ににほひぬるかな　高砂菊代子

あたおみのかたそら言のなごりにや
なみの上きよしありあけのつき　高砂き代子

見聞つるかはらのいろもかれの音も
さゝろきわたるなるかみのおさ　村上いつ子

なるかみになりしさいふは天つちに
みやこおもひのたれさなりけむ　村上操子

おもひきや君につかふるみちにしも
御名のさゝろくしるしなりけむ　田村多豆子

たまはりし御衣のかをり身にそへし
こゝろつくしのうみあらんさは　谷口房子

すゑ終に世々にかくはしくなりにけり
うらみぬこゝろたふさかりけり　田中賢子

なによりも思をのこすうめのはな
こゝろつくしのきみがまごゝろ　瀬戸かめ子

かをりはおくれ身はさほくさも

うき雲におほはれましゝきみが身の
こゝろのつきは歴代にさやけき　徳永廣子

まこゝろは筑紫のはてにあらはれて
世にあふぐべきすがはらのかみ　澤田春子

すめらぎにつくしゝまこゝろもまくら
たかまのはらにさゞろきにけり　佐々行郎子

大御衣をかみまつりてかたさきも
めぐみわすれぬきみがまごゝろ　小森田輝子

もみじ葉のあかきこゝろの手向やま
たかきいさをあふがさらめや　佐々小季子

大きみのめぐみかしこくすまのうらに
よろまでみつるつきのみかげを　坂本遊喜歌子

盛しけんそのまごゝろはよろづ代も
きた野のまつにかをりけるかな　服部豊子

身につもるうきもいさは寸色かへぬ
きみがみさをや千代のおいまつ　徳永萬壽子

かきくれしみ空ははれてつくしがた
かゞやくつきはくものうへまで　山代由子

世のために心つくしのさすらひも
みやこのほかにすめるつきかな　濱口貞子

たまはりし御衣になみたそゝきけん
こそ見しつきのかけをおもひて　宮増小東洋子

くもりなき月にみやこをしのびつゝ
こゝろつくしのそでやぬれけん　阿保松子

こゝろのみまことのみちにかなふとも
世のうきくもははらひがたけむ　田村多豆子

よの中のたからにまでもうつされて　新井さ代子

澄みのぼるつきにしたさふ君が身も
くちせぬなこそめでたかりけれ　若代りう子

かゝるうきくもさけんよしなし
みにしらぬ人のれたみをせにおひて
きぬにしきみのはてそかなしき　川島さく子

つるふさきふちは菅はらおほへとも
にほひあふるゝうめのひさもさ　松野澤子

思はるれきみがつくせしこゝろこそ
きみが名にをもたかはさりけり　大谷つる子

さゝりたる雲にひかりはまさりける
こゝろつくしのありあけのつき　藤井りゑ子

めゝけ持つ御衣にかゝるつきかけの
こゝろつくしにはれすや有けん　河野みち子

くもりなきつきのみやこにすみながら
なさてつくしにみやしつめけん　早川信惠子

くもりなきこゝろつくしの月かけは
きたの丶まつのうへにみるかな　早川千代子

わかれてもまたかへりくる雲を見て
我が身のうへさだのみましけむ　井上常子

こち風にふかるゝうめのはなみれは
きたのにゐますかみしゝのはる　宮武一子

賜はりし御衣のかをりの身にしみて
こゝろつくしになきしきみかな　小川たに子

みやこひさ露不知火の如何ばかり
あちきなき世をきみはへにけん　尾島いろ子

そのかみに仇をくだきしいかつちの
ひゝきはいまも世にひゝきつゝ　稲山みれ子

むらくもにおほはれながらつくしがた
さやけかりけんあきの夜のつき　尾島みの子

横ぐものおほはさりせはいかはかり
さやけきつきのかけやのこらん　河原芳子

れき得つる木は甕きせてすゑとほく
きみがいさをは千代八千代まで　天野眞佐子

くらきよをうめのにほひは久かたの
あめにもみちてさやけかりけり　北郷あき子

いかさまに空なるかけをなかめけん
こゝろつくしのつきにとはゝや　天野ちか子

こゝろなき梅さへあさなしたふらし
かほりやあめのしたにみつらん　天野すゑ子

千木たかく北野のみやにいつかれて
みやこおもひやはれわたりけむ　天津ゑい子

なる神こ世にとゝろきしそらことは
たかさかしらにいひはしめけん　湯川織子

たまはりし御衣をさゝけていくたひか
ぬれしたもとをしほりましけん　湯川瀧子

つくしがた穴にすみぬるつきかけは
のちの世てらすかゝみなりけり　天津ふさ子

雲は晴れなみもなごみてつくしがた
みやこにきよしありあけのつき　山田新子

すめらぎのめぐみの衣みにしめて
なかめたまひしあきをしそ思ふ　宮内俊子

つくしがた涙のぬれきぬかつきても
つきのかゝみはくもらさりけり　別火佐喜子

さゝけもつみけしの袖にあさからぬ　遠山たゞ子

こゝろつくしのうめが香ぞする　遠山よしね子

ほしあへぬぬれ衣よりもなるかみの
うきなやきみがそてぬらしけん　久住もと子

みとりなるさすがはら邊も枯れにけり
なさけもらさぬふちのしたかげ　赤川よし子

都にはかゝりしほとのうき雲も
つくしにはれてつきのさやけさ　古瀬りく子

つくしがたあたにくたけし白たまは
いつまでのころひかりなるらん　玉井隆子

たまはりしきみの御衣はあさなゆふな
こゝろつくしのたれとなりけり　田代點子

大きみのみためにこゝろつくしがた
身はしつみても名こそくちせれ　田代綾子

あた波にかけくたけてもつくしがた
つきのこゝろはくもらさりけり　河野しげ子

たまはりし君のみけしをさゝけつゝ
こゝろつくしのあきの夜のつき　稲垣政子

流れてもきみにまごゝろつくしがた
なみのよるひろ香をしたひつゝ　鳥飼つる子

君をおもひくにを思ひてまこゝろを
あはれつくしにはてしきみはも　大和田千代子

君を思ふこゝろもあかきありあけの
つきにもかほれうめのひともと　木村菊子

こちかぜのよしなかりせばすが原の
名をもときはにふきのこさまし　深尾千代子

老いたるもわかきも問はずはるまつは
つまりはる咲くはなをまつかな

ぐにたみのかゝみさなりて君がなは
よろづよまでもいさゝかぐはし　五味綾子

筑紫の海路ゐなさほくはなれても
なほひかりあるなみの上のつき　神戸壽英子

つくしかた濱のまさごのまさやかに
きよきその名は世々につきせじ　稲原文子

うつり香の妙なるみけしさゝけては
あはれいくたひそでしほりけん　柏木靜子

拙なきもおいもわかきもわかちなく
たふさむひさはみちのみちなり　鎌田さみよ子

君かためまこゝろこめてつくしゝは
いく千代かけてかなりぬかな　森このゑ子

梅の香のつきににほへるゆふべには
たふさききみのかけぞしのはる　山崎雅子

血のなみだいく度御衣にそゝぎけむ
みくになおもふこゝろつくしに　内藤順子

つくしまでにほへる梅の名さともに
きみがまことはよにのこりけり　武田繁子

仇し世のかぜに散りてもうめのはな
にほひはやみにまぎれざりけり　山田稲子

つくしかた望のこよひのつきかけは
あまりてにほふそでのうつり香　熊耳二酉子

ふるかゝみいまもうつらふ罪ならぬ
つみなあかせしつきのひかりは　熊耳すみ子

あつさゆみ春はきたゝのひさ夜へて
にほふはうめのすかたなりけり　熊耳さづき子

君かためよのうきくもにさへられて
つくしのうみのつゆさきゆさも　大竹はつ子

月かけはつくしのうみもかはられさ
なほみやこゝそこひしかりけれ　大竹はる子

今もなほ此にますなさゝけもちし
御けしの如何に尊さかりけん　渡邊龍江子

思ひきやおほきみのためひさすぢに
こゝろつくしのつきなみんさは　小林しげ子

梅にさへはろわするなさのこしてし
こさはにみゆるきみかまこゝろ　茨木しげ子

賜はりしみけしさゝけて朝なゆふな
めくみのつゆにぬれしきみかな　屋舘鈴枝子

はかなしやこゝろ筑紫にみなやつし
あらぬぬれきぬまさひましけん　伏脇米子

しからみさなりてさゝむる人もなく
なかれゆく身やかなしかりけむ　名取よし子

千代かけて香にこそにほへ梅のはな
かへりみられし君かこさの葉　名取正代子

めでましゝ梅かかなりさもろさもに
きみかいさほは千代もくちせじ　春永欽子

不知火のつくしのはてにうつりても
なほぞ捧けしあやの御けしな　畑野てふ子

かくはかりすへなきものか此の神も
なほきましけりなみのぬれきぬ　梅田りん子

はひこれる藤のかはらにさへられて
うめのいろ香も世にかくれけり　園田うめ子

君ひさりこゝろつくしのあきのつき
いかに照りしよはにはありけん　山本よし子

かれのこゑかばらの色をなくさめに
こゝろつくしゝ此のかみあはれ　香山はな子

藤かつらはひひろごりてたぐひなき
うめのさかりをたちかくしけり　伊藤すみ子

君なくはなにはの三つの四つのふれ
いかてさゝめむそのふなてをは　賀茂笹子

いつはあれさこゝろつくしの秋こさに
みやこのつきやおほしいてけむ　三宅中枝子

家のかぜふきのさかりにくもたちて
つきのひかりをへたてつるかな　河合縫子

まつはりしふちはゆかりの色もなし
ちりけむうめのかこそつきせぬ　加藤歡子

梅のはなこゝろつくしにちりぬれさ
かをりはあめにくにゝみちたり　服部萬子

あはれかなし都はなれてしらぬひの
筑紫にましゝこゝろおもへは　服部正子

さもこそは神もめてけむもみちはを
きみか手むけのやまのことのは　伊東いさ子

おほ神のみいつあふきてよもやまの
ひともきたのはにきはひにけり　伊東千代子

梅か枝をひなのつくしにうつしても
むかしながらのいろ香なりけり　於保あや子

わきて世にすみ渡るかなきみのため
こゝろつくしのつきのひかりは　續木耳子

ひさすぢに身をもつくしさあさぶさ
きみのためにはたしきさりけむ　椢木鶴子

きみを思ふまことのはなはつくしかた
やみよながらもにほふうめかな　中島しげ子

さゝけもつ御衣のそでの言の葉は
よろつ代つきぬにほひなりけり　幸徳千代子



第三懸賞

伯爵東久世通禧公選

吾つとめ

當選　　四谷區本村町　下田しげ子

凡妾かつとめは、君を守ると、親に仕へまつるとの二つ也。されど治まれるこの大御代には、妾如きつたなき女は大君をまもらすとてもたりぬべし。たゞ父母につかへまつるぞ第一なるべき。されば、常に柔順温和にして、何事もひかへめになし、あらく〵しきふるまひなく、よろづまめやかに、顔色をやわらげ、又嫁しては、能く舅姑をうやまひ、夫を助け、家を政め、子の出來なむには、よくそだて、よく學ばしめて、國のため君の爲に、

つくさしむるにあるべし。父君の、常に妾に教へてのたまはするには、この頃女子の教育てふ事いと盛になりしは、實によろこぶべき事なれど、少しく學の道たどり始むる時は、往々男女同權など云ひて、己一生を一人にてすぐさむことを思ふ。或は男のすべきわざなどを心がけ、女子に似あはぬ行ども爲して、目出度事に思ひ、又は、我が國の外國とことなる事を知らずして、歐米婦人などのなせるさまを見て、たゞちに、この國にて、それ行はむとするものさへあり。いと〳〵愚なる事也と教へ給へり。また母とのよるひるのたまはせ給ふには、耐忍てふ事を忘るべからず。人は、耐へ忍ぶといふ二字、いと大切なり。物に早あきし、又なげき、いきどほる、皆この耐へ忍ぶ心のともしき故なり。生ける者なれば、うれしきかなしき事のあるは、常なれど、かずならぬ事ともをもいとはしういひのゝしるは、皆この耐へ忍ぶ心のあらざればなり。と宣はせ給へり。わらはは、よくこれらの御言をも耳にとめ、見る物なすわざにつけて、思ひ出でらるゝなりけり。こたび、われらの、つとめの道をひらかせ給ふ女鑑にて、ものせさせ給ふ、懸賞の募集に「わがつとめ」といふ題のあれば、山の井のあさき心に底の心はくみも知らねど、三月五日をまちて、姉たちの御心を伺ひわらはが、心にくらべて、己が心つかざりし事を、おぎなひあらためむとて、かくはかいつけおきつ。

秀逸 十篇

わがつとめ

甲府市山田町 名取正代子

生きとしいけるもの、いづれか世にふる務を負はざるものあらむ。鷄の晨をつくる、犬の門を守る、將、春日梅花の馥郁たる、三冬松柏の不凋なる、是即ち各自天與の長所にして、必司るべき職分なり。禽獸草木すら。猶此の如し。況や人類をや。そも〳〵人は、老若男女、各其の分に應じて、務むべき業を異にするは、今更論を俟たず。されば、おのれら女子と生れたらんものは、又女子たるべきの務あり。即ち幼にしては、父母に孝養を盡し、

兄弟に友愛を致し、朋友に信實を盡す等にして、長じては、舅姑に事へ、夫を輔佐し、子女を敎育し、妯娌に和睦し、家政を整理し、以て良妻賢母たるの職分を盡すにあり。是即おのれら女子たるものゝ、天倫の性質に適ひたる務にして、所謂長所なり。天職なり。さて、此の天職を完美ならしめんには。幼き時より、德を修め、智を磨き、體を健康ならしめざる可らず。即ち敎育を忽にすべからざる所以なり。されば、おのれら、今日學校に於て受けたる敎育は、我が天職を完ふすべき基礎にして、他日は第二の國民たる子弟に、之を施すべき任務あるものなれば、いかで勤めざるべけんや。國の本は家にあり。家の本は、女子にありとかや。されば、此の職分を完ふするものは、やがて國家に盡すの一端といはんも、敢て不可なかるべし。之を思へば、女子たるもの、實に我務の輕んずべからざるを知るべきなり。

同

富山縣氷見郡
窪村大字柳田　屋鋪鈴枝子

この善き國に生れ、この大御代に遇ひて、山より高き恩を受け、海より深き惠の露に沾ふもの、誰かは國の爲め君の爲に、心を致し力を盡さんと、心懸けざるべき。おのれ生をうけてより、君と親との惠の内に、呉竹の世のいき節[illegible]らで、年月ふる任に、はやくも今のこの身となりにけり。昨日今日、まだ親に事へて學の業を勤しむ外、さして務てふこともなけれど、花の蕾のいつ迄かゝるべき。即ては妻となり、母となり、主婦とならざるべからざるを思へば、まだきより、其道其務を、造次にはた顚沛に、心懸けでやは。さても行末の我が心よ、舅姑に事へて孝子となり、夫を扶けて貞婦となり、子をはぐゝみて慈母となり、いかで忠良なる子女を仕立てゝ、國と君とに答へまつらせて、答へ奉らんと思ふのみなり。女の本に報ゆるの務、これをおきてはた又なにかあらん。あはれ、濱の眞砂の數ならぬこの身の務さへ、御國に關はるを思へば、すゞろうれしう、行末深く身にしみてならん。

同

福島縣師範學校　大和田千代子

よのなかに、人とうまれいでし上からは、おのが

じゝ、わがつとめをはたさでやあるべき。あるは赤きこゝろの十字を、かむりにしるして、つゝ音すごく、劍の光さゆるいくさのちまたに、骨くだけ肉さけし、ますらをの枕べに侍りて、水よくすりよとたちはたらくも、わがつとめをはたさむとてなり。あるは隙もるこがらしさむきとき、月かげもるわばらやに、糸つむぐわざにいそしむも、わがつとめをはたさむとてなり。夕あぜ路に馬をおひ、朝やまだに早苗とる、いづれかわがつとめをはたさむとにはあらざるべき。妾が志ざしたるつとめといふは、人の子を教へ導きて、よきにつかせむとにあり。世の中に、人のつとむるわざは多かり、さはれ教への道ばかりたうときはあらじ、つたなき妾が如き身にて、かゝる尊きわざをつとめむとにしあれば、罪なき幼な子を、あやまる愛はあれど、月の如き清きうなゐ子、花にもまして美はしき少女等を、朝日さす窓のもと、こち匂ふ春の野べに、教へ育つる妾が身こそ、いと〳〵さち多き極みにぞあなる。妾は、かくして、世を終へんとは思ふなり。これぞ、妾がつとめにぞありける。

所感

相模國箱根町　清水富美子

園生の梅のおひ風になど、里の乙女等がうたふ聲に誘はれつ、兒が好める若菜つまんと、近きほとりの野邊を、かなたこなたあさりありきて、はや、かたみにもみちぬれば、いざとくかへりてんと、家路にいそぐ折しも、あなたより、うつくしう着かざり給へる、いづかたの姫君かしらねど、そゞめしたがへ來給ひしが、肥えふとりたる賤の乙女が、つゞれの衣まとひ、ひなびし里なまりの言の葉もて、人々と語らひつゝ、草とれるをみて、指さし笑ふて行すぎぬ。

あはれ、妾こそひなびたれ、言の葉こそ、いやしけれ、心の玉のうるはしくぞ、いかで、あやにしき・身にまとふ人に、おとるべきやは。

平和

信濃國東筑摩郡鹽尻村　高砂き代子

平和は富なりとは、げにことわりや。兄弟、心をひとしうして事をはげまむ、如何なる業か成らざらん。如何なる富か來らざらん。平和は國を保ち、家を起すの基なりと。うべなる〳〵、人心相和して、

事を行はゞ、世に何の風波起るべき。世平にして、國、何を以て亂るべき。今更云はんもかしこけれど、和氣氏の忠烈、小松内大臣の孝も、皆これ平和の美徳に依らざるはなく、げに國を保つの基とは云ふべきなり。こゝに又、彼の毛利氏の一家、富を極められたるも、是れ元就朝臣の遺訓を守りしに依るならん。平和は「家を起すの基ひなりと。うべなりけり。かけまくもかしこけれど、皇國の勅語にも「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ」と訓せられしは、いともかしこき大御心ばへにて、我日の本の國民としては、一日も忘るべからざる事なめり、まして女の遵守すべき所、いかでつゝしまでやはあるべき。さるを世には心にもあらぬ事を根として、父母兄弟夫婦朋友の中にも、たま／＼不和を生するなど、聞くもうたてき限りになん。幸にもかゝる、太平の大御代に生れあひて、賢に學び、敎へ直しき嬢たちよ。かゝる事には習はずもがな。忠孝正義の道をわきまへ、直なる竹を心として、父母にかしづき、兄姉にしたがひ、弟妹をうつくしみ、友に相和し、やがて、良妻賢母となりなん事こそ、かずならぬ我心にも、ねがはしふなん。

なつかしきものと
うらやましからぬものと

越中國氷見郡氷見
南上町八五ノ一　伏脇米子

我が生れたる故郷。うからやから。玉あひの友垣のなつかしさは、言はずもあれ。後の山。前なる川も、さるものにて、いはけなき折のなべての闘度も、亦なん。朝に出れば送るが如く、夕に歸れば迎ふるが如く、打靡く門の青柳、夜道に伴ふ月の影。嬉しうなつかしからぬかは。特に身にしみて覺ゆるは、亡き人の植ゑ置き給ひし、軒の橘の香に匂ひたるぞかし、過ぎにし日、車にて物より返りしに、「雨の日とて道惡しく、え進まぬを、五六町が程、おと推しまするよと見えし人の、物とらせんとすれば、掻き消すがごと、はやくも立ち返りたる、今の世の人心にめづらしう、かつはなつかしう覺えしか。鄙びたれど故郷の言葉も。亦。世にうらやましからぬは、よく結び上げたれど、外國ぶりの束髮。人の富貴。さる人の又なきものに珍重する、薔薇の腰物、況いて、女の巧みに漢語をつかひたる。演説の上手なる。れのが夫を支

配するなど。宍勝に外國風にのみはやりて、心をやる癖は、うらやましからぬばかりかは、よいろうとましう、面さへ背き心地せらるゝや。

れなじく

松山市一番町　宇高まつ子

梅か香、櫻の句、鶯の初音、郭公もいとなつかし。月影哀れなる夕、聞く人もあらじと忍びやかに、心にくき歌など、打誦したる。人にきかせんとにはあらで、上手のかき彈したる琴の音。殊になつかしきは。親しき友よりおくらせたる文、母の膝もと、學も才も立ちまさりたる人の露おごり高ふらず、態となど何年も扣へ目に物いひ、打ふるまひたる。あらまほしうなつかしけれど、いと少しや。美しからぬものは、正なき事して、歌かるたなどに勝たる、まして一の上りなど、ほこりて負たる人に、容赦げもなく、惡くろ〳〵と附たる側に見る目もいとにくし。かゝる事は、よろづに渡るべくや。才子、交際家などいはるゝ人、あながちに、皆しかりとにはあらねど、己より卑く、はた富たる人には、側去らずおもねりへつらひ、徒に其意を迎へて、たまたまよくもちひられて、時めくを、才子とたゝへ、交際家といはるゝも、誠をもて、交るにあらず、たゞ己の快樂を願ひて、富貴の友多きをほこりて、貧賤の友をかへりみるものなし。かゝるを世の人も、とがめなば、己は、まして恥かしともおもはで、したりがほなる。美しからぬのみかは、いと〳〵なげかはしうなん。

れなじく

東京神田猿樂町
女子英和講習會　井上常子

母のそばにある、ましてやめる日は、いみじうなつかし。われをふりすてゝ、去にし乳母に、年へて後あへる、昔の罪もわすられて、なつかし。雨ふる夜、遠方に琴の音の聞ゆる、いかなる人の、すさみならむとなつかし。近頃こずなりぬる人の、ふと外國よりふみをおらせけるは、あはれ今一度とこそれもはるれ。またその人の、寫眞見出したるは、そゞろになつかし。若きとき。もてる紅の扇の。まだにほひ失せで。のこりたる。赤兒のうぶ衣。古郷にかへりたる春、いときなきときさしめせし、梅の花、多くさきたるもなつかし、文にもあれ、歌にもあれ。おなじ心によみもしかきもしたる人の、文を見つけたる、いかなる人ならむ

とこそ、れもはるれ。貞淑温良なる人の、果斷勇進なる、志ある婦人、剛氣勇猛にして、愛慈ある軍人國家を重くせる、政治家。女子の手よくかきたる。濁惡の世には沈まで、心清く住める聖僧。いづれも、いづれも、なつかし。心あはぬ夫婦、いかに富めるも、貴きも、さこそあるらめど、おもはるゝよ。洋裝の住ひ。利にれはれし。慈善心なき富豪者。德うすき博士の、位階すすみたる。あはあはしき女教師。年いたくすぐして、猶若き裝飾したる、まして白髮など、墨もて染めたる、結髮のふさやかなる・羨しからぬものなり。

れなじく

三重縣度會郡宇治之六切町　河原芳子

凡、世に、なつかしきもの丶數はあれど、わがすみなれし故郷はど、戀しくなつかしきものはあらじ。生みのみ親、はらから、さてはをさなき頃より中垣のへだてなくむつびし友どちなどのゐます處なればにや、遠くへだゝりたる處にありて、年久しくかへらざりけるを、かへりきて、生みのみ親の恙なきかんばせ、はらからのすこやかなる姿、いとうおもがはりせる友垣などにあひたるは更なり、あるはすたれ、あるはさかゆく家々、あるは生れ、あるはみまかりし人々など、うつりかはりし有樣のなつかしさよ。そのうつりかはりし樣々の物はうちきく程こそあはれなれ。近きわたりにすまへる乳母なりし人の、われかへりきぬときゝて、いそぎ尋ねきて、さてそのかみのをさながりなどいひいでたる、いとなつかし。雨しみじみとくりつゞくに、訪ふ人もなき伏屋のつれづれなるまゝに、とりいでゝよむ古の才高く世に秀でし媛のものせし物語文、いかにその詞の花のなつかしさよ。孝貞のほまれ世にかくれなき人、めぐみふかき人など、その心ばへのほどなはなつかしくめでたけれ。友なりし女の嫁きたるが、よく夫舅姑につかへて、家内なごやかにいとむつまじく、玉の如きをの子さへうみて、いつくしみあへるなど、たちかへりしをのことなど思ひいだされて、うらやましう思はゆるもわりなしや。されど其の家のたから多き。夫なる人の世にときめける。みめかたちのすぐれたるいかでうらやましからむ。たゞ、その夫たる人の心に忠質なるたからあり、その夫たる人に信愛なる情の花と實とそなはりたることそうらやましけれ。黃金の光も、花やかなる飾りも、世

にもてはやさるゝ地位も、いかでうらやましからむ。その心だに滑からざれば、黄金の光も曇り、花やかなる飾りも、うつろひて、つひにかへりみる人だになくなりはつべし。羨ましからぬは、この世の人の、利に走りて得、義にそむきて得たる幸福と、地位と、名分とにこそ。

同

但馬國出石町　西川順子

遠くも近くも、旅にありて、故郷よりの音信、はた旅なる人より、古里に送りし書狀。ことに外國よりのなどは、ましてなつかし。同窓なりし友のしばし打絶しが思ひおこしゝ玉章、まのあたりあひ見るにもまして懐かしきものなりかし。かつて、おのが旅行したる時、後の思ひ出にとて、もて歸りし、こゝかしこの紀念物、あるはその時ものせし紀行文など、ほど經て見出したる。あるは、なき數に入りにし人の、志るしおきし歌反古ども、今はかたみとなれるよとおもふに、いとゞ懐かしさも增りぬべし。をさなき同胞の、いさかひもせず、互にゆづりかはしてむつぶを見れば、家庭のさまさへおしはかられて、まだしらぬちでの母さへも、懐かしき心地ぞせらる。霞棚引く春の野に咲き出でしすみれの花、はなたば作りし昔もしのばれて。

われさかしげに語らふ人の、文字書けば、拙く見ぐるしき、さきに聞きし言の葉さへにうとまれてなん。みつばよつばにとの作りせる、やかたにすめるものから、家の内むつましからぬは、いかにわびしからんとぞおもひやらるゝ。よききぬ着飾りて、われはがほに大路行く女子、ことに眼がねさへかけたらんはましてあしき子持ちたる人の親。はらからのむつましからぬは、老の後さへ思ひやられて、羨しからぬものよ。

同

香川縣高松市田町二丁目二百八十五番戸　宮武文子

なつかしきもの、數はあれども、春も、漸半ば過ぎて、若葉茂れる木の間より、紅の花の三つ四つ二つ匂ひ出でたる。夏の初に雨過ぎ空霽れんとしける折しも、雲間よりもれいづる月に、名のりゆく子規の聲聞きたる。秋の半ばに、故郷に歸りたるに、山の端より月影のさしのぼりたる。心もはれぼれしうなん。冬の夜の、最冴えわたりたるに、

千鳥の友呼びかはする。或るは遥き旅路にて、ゆくりなく隣の人にいで逢ひたる。寂しき野路にて人に往きかひたる。朋どちの物學びする窓の下を通るに、灯のほのかに見えたる。親の墓に詣でしに、其の形見の詞の碑に殘れる。いづれなつかしからぬかは。さて羨しからぬものは、己がじし異なりぬべけれども、わらはが心よりいはゞ、やんごとなきあたりに、生れて人の爲め世のためを忘すれ、たゞ己が身をのみ飾りつゝ、空しく、其の日を送れる。身を修め道を求めん心もなく、徒に世につれ、時を逐をもて、こよなき樂みとしたらん。或るは夫をあなづる妻、牝雞の晨すてふ我が儘を振るまひ、身には綺羅を飾り、手には箒だもとらず、晝夜人の遊びがたきとなり、納凉の舟に雪見の莚に交りて、手枕のすきまの風をもいとへるが、やがて、花の顔色あせて、誰も拾はぬ捨小舟、よるべを波のうさに沈まんなど、羨しからぬのみかは。かたはらいたきめさしそはりて。

羨むな花こそあせれ色かへぬ
　常盤の松を心にはして

羨まし常盤の松の心には
　ほこりがほなる花の色香を

とやいひてまし。

わがつとめ

（以下原稿到着順）

瀬戸かめ子

父は沒かりて、母は老いたり。妾同胞なし。故に夫を定め、先祖の後を、限りなく永續せさるへからす。この務は、全く、我が身獨りなりき。人々の敎を受け、老いたる母にこそはかり。若き、妾が身の、樣々に思ひ迚りし事、なゝく〱つまらなき事なれさ、唯思ひ迚りし限り、明ら樣に書き列れんに、思ひあやまれる節々も、多かるべけれど、誠心のはしばしは、先つ、文明の進歩し、國勢の變動するさ共に、人の知識の範圍も運動の區域も、自然に廣くなり、高くなり、大きくなるべければ、妾如き數ならぬ女子さいへさも、可成無益をはぶき、有用なる公共的、個的思想事業、すなはち、世間萬事につき、意を注ぎ、もし我が身に利益き得る事柄さ見止めたれは、他人へも幸福を増さしめ、必を一つにし、力を協せん事を思ふなり。これ人間世界は、決して、一人一家のものにあらずして、相互に利害休戚を交換するに由れはなり。故に婦女子の、ふだん成すべき事務さて、別に法律にさだまるにあらす、又他の命令に賴るにもあらされ共も、第一教育衛生をもんじ、家をさめ、家事財政を整理し、以て生産等事に奮勵し、國家を富ましめ、事を計り、而て、我れ常に云ふ勞働を以て、婦人の高尚なる事業にあらずさなすは、是れ婦人の婦人たる天職を知らざる者のみ。事業に高下なし。高下は、之を爲すさ爲ざるさの間にありて、世を益し、人を利するの多少に存すさ。然らば、天然の性質、能力の及ばぬ所は、止むことを得ざれ共、成可く、妾にそうたうの男子をむかへ、和順にして心を合せ、家を立て、先祖の後を榮させ、老いたる母に安心なさしめ、以て國家に興隆せんこさ成る限り力をつくし、意を注ぎて奮はんさほつす。

徳永旋子

すべて、女のつとむべきわざは、織はた、裁縫、くりや のこと、そのほか、さま〴〵ありつれど、ひらけゆく世のさまは、内日剌、都はいふもさらなり、鄙よみものかき生花茶の湯、それぞれ、師の教にしたがひゆけば、妾も、此の道に立入て、共に學びはげみ侍りき。そは身をなさむるたよりにしあれば、とりわけて、かくべからざるは、仰げば富士山よりたかく、のぞめば、千尋の海よりふかき、父母の恩恵を、少しにても、むくひまゐらせんため、朝な夕な心にかけて、仕まつらんこそ、第一妾がつとめになもありける。

佐々有郁子

午前六時に起出て、こゝにむかひ、顔をあらため、父母の安否をうかがひ、訓靈社小竹神社に參詣をはり、父母のかたはらに侍りて、朝飯を食う、それより讀書、算術、習字、毛筆画をまなび、歌二首、文一章をつくる、午後は、父母姉弟の衣裳を裁縫し、織機のわざをならひ、園生の逍歩をなして、夕飯にむかふ。燈下にては、父君歴史を談し、母人家政を話したまふを、謹聽て、十時閨に入り、身を寢を、妾が毎日のつとめとす。かゝるうち〳〵のことをも、かきつゞらんは、いとはづかしきものから、中垣ゆはぬ、友人のとひにまかせて、かくなも。

小森田輝子

なべて、女子のつとむべきは、第一裁縫、くりやのわざ、織機、さまざまおほかる中に、ひらけ行、世のたしなみは、文學ものかき、茶の湯生花など、師の教にしたがひ、まなびつれど、ことたらぬことのはづかしきのみに侍れど、片時もかくべからざるは、大君のたふとき、御恩と、父母のふかき恩を、つかのまもわすれず、露ほどにてもむくひ奉らんと、朝夕心にかけ、忠をつくし、孝

なたて、家業をはげみつくすを、わがつとめとはおもひ侍るになん。

新井さ代子

最早、今年は、明治三十三年、外人も隣に住居し、商事競爭の有様とはなりぬ。一日の安を盗みつゝ、後日の難を顧みずして、徒らに、日を消すべき時にはあらず。故に女子と雖も、夫の力のみを頼みて、のどかに暮す可からず。抑も女子は、他に嫁して、舅姑に仕ふるは勿論、夫に從ひて、子を教育する最大の任務あり。一家の樂みは、和樂にあり。家庭をして、和氣藹々たらしめむも、はた、寂寞乾燥たらしめむも、妻たる者のゝ、覺悟如何にあり。妻たる者、經濟を善くし、家庭を整へ、老親、兒女、相共にむつみあひなば、世の樂み、此に過る者あらじ、家庭をして、此の如くならしめむには、父母は、老後を樂み、夫は出でゝ社會に辛苦するも、歸りて之が爲めに、大なる慰を得て、一日の勞を忘れ、新に働くを得べし。若し舅姑と中悪しく、夫婦相合せず、風波さわぎ絶ねずば、一家、何となう乾燥無味となりて、父母は眉をひそめ、夫は家に歸りて、一日の勞を慰むる由なく、遂には、花柳に踏み入らしめて、一家の滅亡を醸すに至らむ。妻は、家の支配者なり。若し、不心得なる時は、一家の不幸を來たすのみならず、擴いて社會に影響する所少しとせじ。女子の責、また重からずや。女子は、又、第二の國民を教育する、最も大切なる、最も重き任あり。男子も固より子を教育する、重き役目を持てりと雖も、子生れて、物心の付く迄は、母たる者の任務なれば、ゆるかせにすべからず。昔より、賢き母の教育によりて、人となりたる者少なからず。我か國にて小楠公、支那にて孟子、これなり。故に、妻の務は、最大なる者なり。妻善く内を治め、夫をして、内顧の患なからしめば。家内はいつも春風の如く樂しからむ。一村の内に、

がゝる家あらば、他人之れを見て、此の家庭に習ふべし。然る時は、家とみ、村とみ、遂に國の富とならむ。妻よく子を教へて、小楠公、孟子の如き、第二國民を作らば、これ眞の文明國なり。富強の國なる可し。露國大なりども、恐るゝにたらざらん。女子の務、豈大ならずや。

遠山よしね子

朝には、父上の好ませたまふ坪庭を、ちりもすゑじと掃き清め、岩陰流る清水を汲み、母上をたすけて、朝茶をすゝめまいらせ、やがて吾家にやどりたまふ師の君より、萬葉の講義をならひ、學びやにいでゝは、いとまめやかなる學びの道をいそしみかへりては、裁縫、生花などを師の君にまなび、夕食たふべて後は、たらちねわが兄上と四人、一つ題の歌よみなどして、打ちけうじ、さてまたさま〳〵の物語りに夜をふかし、一日の吾が行ひを手帳にしたゝめ、かへりみて眠に入る。一日のわがつとめをなしはて、眠れるときのこゝろよきは、言ふばかりなし。かくて、わが一生のつとめをつくし、をしへのみことのりにそむかざらんには、をみななりとも、おこたりなく、日々の、吾がつとめをつくすにしくはなし。

五味綾子

凡そ、世の中に生活する者は、たれとして、おのが務めのなくてやはあるべき。その中に、我が務めは如何なることを務むべき。女子となりては、柔順にして、貞操を守り、家に在りては、父母に孝を竭し、嫁しては、夫に從ひ、舅姑につかへ、良妻賢母とならまほし。それを行はんには、普通の智識を發成し、其の素養をそなへざるべからず。而して後、己が本分を盡すべきなり。凡そ婦人は、感情に制せらるゝこと多ければ、能く己れを顧みて、外柔に、内剛なるべく、さて、子女を教育するには、胎兒に關する心得より、賞罰を明かにし、恩愛威嚴を兼ね備へ、まがれるを矯め、怠たるを勵まし、事に當りて惱する色なく、將來日本國民たるに恥ぢざる人物を養成せざるべからず。女として、此の務を完くすれば足れり。然れども「諺に曰ふ如く、言ふはやすく行なふは難しとかや。」深くかんがみざるべけんや。

河原芳子

あはれ、世にかゞやく、わが日の本の民草の妻となり、母となりて、まづ家を治め、をゝしきたけをを生みては、かしこきのりの道に導き、國のため、大君の御爲に、民たるの義務をつくさんことをはげまし、やさしき女の子をうみては、ひたふるに婦道をさとして、國のため、家の爲、賢き母となり、貞しき妻とならんことを教へ、自らよろづに、心を用ひて、其の子らを養ひ、朝に、夕に、父母に夫に、孝貞をつくして、もちて、はづかしからぬ國民の妻よ、母よと仰がれんことをねがふべき。われらの身には、其のせめ、いと重くぞありぬる。さるからに、なみ〳〵の學問もし、なみ〳〵の智術もうけ、人に交はるゐや、世にたつよすが、家を治むるのり、妻たるの道、子たるのわきまへ、子をそだつるのすべなど、師につきておぼね、實地につきてさとり、婦徳を脩び、勤儉を守り、世の波風につれて仇めかず、いとよく、其の分をつゝしみて、女の女たる程をいそしまざるべからず。かの孟母の三遷を思へ、小楠公の母を思へ、かくてこそ、人の妻となり、人の親となりて、よく、其のつくすべきをつくし、守る可きを守りたるものなんめり。されば、わがつとむ可きは、日本の民の妻たる道と、その母たるべき道との二つを、たゞ一筋にいそしむべき外はあらずなん。

臼井こま子

われ父母に生まれしより、稚き程こそしられ。人の親の子を慈し

み育つるを見て、其の恩の高きを知り、人の子のすなほならで、親の困ずるさまを見て、其の恩の深きを知りぬ。いかで父母の恩恵に報いまゐらせでやはあるべき。やがて、これ、わが身のつとめなりかし。又、わが母の、祖父母たちに仕へ給ひ、わが父に事へ給ひ、任のまに／＼、家の営みにいそしみ給ひて、よく内をゝさめ給へる状の、いと有り難きを見れば、いとゞわがつとめの重きを知りぬ。あはれ學びの庭にて、師の君のかへす／＼説きをしへ給ひしも、皆わがつとめのゆゑよしにてぞありたりける。

岡田柳子

世に、いきとし生けるものにして、務なき者はあらじかし。さるは數ならぬ、園の梅の、霜雪を凌ぎて、艱難ふるも、色香かはらず、咲きいづるが如し。其を見ても、務あるは、知らるべし。殊に、此の花よ。肌もこほるばかりの寒けさにも、挫けず、ひさへに、其の務をつくすこそ、いともめでたききはみなりけれ。さればにや、心ある人は、殊になつかしき、山櫻はさはで、香りのまに／＼遠く、尋ね行き、歌に文に、この花の操を、稱するは、實にうべなりけり。あゝ人にして、己が定めの務をもなさで、徒にかへらぬ月日をすぐすべき事やはあると、いとゞ感も淺からずなん。妾先つ年、學のやを出でしよりは、樂しみを失ひし心地して暮しぬ。されど、日數ふれば、細やかなる家事に、少しはなれて、晝はひたすら、此の業に心をつくし、朝には、文の林にわけ入り、夕べには、女徳を養ふべき書、或は、いみじき、和歌の本など、よみもてゆけば、今は中々に、樂しさを覺ゆるまゝに、これを日々の務とはなしぬ。古人は、一日の己が行ひを、三度までかへり見るとかや。聞けば、愚なる我身には、いかに誤ちや多からんと、思ふまゝに、聊これにならひて、今日の務に、怠りはなきやと、夕べ／＼に己が心を誡むるになん。尚も、此の後は、梅が香をめづるのみにはあらで、此の花のすぐなる心に、ならひてなん。一筋に務を守りて、たらちねの厚き御惠のかたはしをだに、かへし奉らばやと、思ひ起しぬ。

岡田はる子

青柳の糸打けぶり、軒端の梅のかほる頃は、朝な／＼鶯のこゑの、きかぬ日もなきに、日頃怠りがちなる我身には、いたく感じられて、かれこれ心にうかび出でられぬ。

あはれこの鶯よ。春たちてよりは、己がつとめを怠らで、きなくことのゆかしさよ。かくてこそ、歌にもよまれ、文にもつゞられて、とこしへに、其の名こそは殘るなれ。さるをまして、人と生れたらむもの、己がつとめなく、徒にあかしくらしてのみあるべしやは。まことや、香なしにさく梅の花ならねど、匂はざりせば其の名はいかで知られざらまし。人も學びの道を怠り、わがつとめを忘れては、誰か仰ぐものあるべき。さばれ元より、愚かなる我が身は、呉竹の節づるふしもなく、埋木のうづもれてのみある事、いと口をしう覺ゆれば、朝に夕に、心つくして、たらちねの君に、仕へまつるはいとまには、文机のちり打はらひて、文よみ文字かくことをつとめとは打定めぬ。あはれ、師なくてする事だに、己の身につくすつとめと思へば、いと嬉しきものをまいがげ高きまなびの庭に、あそびて、物まなぶことをのみ、つとめとなし給へる姫たちには、いかに樂しく月日を送り給はんなど、獨りごたるゝ折しも、一こゑ高く、なきいでたる、うぐひすの、時しりかほなるに、よしや、家にあるとも、己がつとめは怠らでなど、今更に心のはげまさるゝも、此の鶯のあればにやと、思へばいとうれしや。

昔の業の花さく道をたどらばや
この鶯をしるべにはして

有坂せん子

兄もなく、弟もなく、女子に生れて、たらちねの親のもとにつかふる吾ゝ。妾がつとむべき事は、いと多かるめれど、先第一に心がくべきは、家の榮をもとむるにあるべし。家のさかゆるは、國の富也。國のとみは、君の富なり。家の榮はをもとむには、いかにすべきか。父母に孝ならずして、あるべからず。親に孝をつくさむとするには、いかにすべきか。柔順温和にして、よろづまめやかに顔色をやはらげ、よく教への道にしたがひ、神を敬ひ、朋友中よく、人を愛し、何事にもひかへめに、あら〱しきふるまひなく、からだを大切にするにあり。人となりては、早く夫をむかへやはらぎしたしみ、親の暑さ寒さをいとひ、飲食に心を用ゐ、家のため、夫をたすけ、親族の交際をなめらかにし、子女を、よく教へ、育て、あッぱれ父母の名を明にす、これ孝のあらましなるべし。それ孝は、妾がつとめなり。此の心をもて、萬の事にあたらざれば、よろづの事、皆いたづらごとゝなりぬべし。古人いはく、孝は百行の本なりと。されば、百行の本をこそ、妾がつとめとは云ふべけれ。

群田際子

朝おきいで身を清め、はるか大君のみかげと、父母のうつしゑを拜みまつり、授業始めの號音ある迄、庭にいでゝ逍遥するなり。八時となりぬれば、授業にとりかゝることなれば、同じ組の人々ともと、教室に行き、智に徳に体に、よき師の教へをきゝ、成るべく教育の　御勅意にそむかざらんとのみ つとめをれり。されど、素より拙なきわが身にしあれば、退くとも進むるけはひなく、父母に對し、師友に對し、いとはづかしきことになん。其の日の學業を了へば、忽ち思ふどちうちつれて、野に山に遊び、自然の氣を養ふことをつとめをれり。やがて夕食もをはれば、再び庭にいでゝ、をちこちを歩みつゝ、唱歌どもうたふを常とせり。七時よりは默讀とて、二時間の間あるものから、其の間一心に今日の學びし所を復習し、其の餘りの時間には、あすの下讀みすることとなり。これぞわが學生の、日々のつとめになん。

小山ふく子

をんなはしんたいのつくろいよりはじめ、よろづかよはきものなれは、すべて、ものいひたちゐふるまひしづかに、言葉すくなく、何事もひかへめなることそよけれ。又あさは夙におきて、萬づの事をつとむるを以て、みのならはしとし。わかき時は、記臆つよければ、何事もよく心にかけて、學び師のをしへに從ひ、人の妻となり、母となりては、其の子を教ゆるに、きよき心もて、よく教しへみちびき、あしき道に交はらぬやう、心がくべし。又家ををさむるも、よく夫につかへ、よろづもの事に堪へしのび、人に交はるにも、事にあたりて、よく、其よしあしをわかちさだめ、常に自が身をかへり見て、惡しかれと思ふ事は、何事にもあれ、速にあらためて、智をみがき、徳ををさめ、家にありては、よく父母につかへ、はらからに親しみ、嫁して、後に、の其夫をたすけ、家ををさむることそ、をんなのつとめなるべけれ。

木村菊子

吾等のつとめは、昔も今もかはらねど、世は、日々にかはりゆくめり。今より二十とせあまり昔は、男すら、物學に傾あしかりしに、近頃に至りては、何地にも、女學校の設け無きはなく、はた、其が實様を旨とする、職業學校さへ立らるに至れるは、いとも、目出度きことならずや・されば、我ら女子にありては、ひたすら勉めはげむべきを、或はあらぬ道にふみまどひ、あるは、昔ながらの心もて、ひたすら音樂糸竹にのみ意をゆだね、學びの路のいとやすらかになれるを知りながら、つゆかへりみず、只に顔容の

実はしからむことたのみれがひ、これかれ書を讀みかじりて、人をさみし、旨とすべき家事をも忘り、あたら年月を過す者も、はた多く見ゆめる。かくては、女の勉めを全うせしとやいはるべき。殊に嫁しては、呉竹に松の操をかふる事無く、家を整へ、舅姑をして、心やすからしめ、我が生みの子を善きに導き、後日天晴、御國の御川にも立たなむ臣民と、なさむことこそ、旨とすべきつとめたることをかへりみ、行を、古に鑑みて、己がじゝ重き責任を果さでやはあるべき。

宮瀬八重子

嫁しては良き妻となり。子をあげては、良き母となるべきは、己ら女子たるものゝ、いと重き本職になん。さるを、未だ年若くして、學びの庭に通ふ身には、かゝる妻のつとめ、母の義務てふことは、露いさゝかも、心に浮み出でざりしが、最早二九の初春をむかへし身の、いつまで、かくてあるべきかと、思ひ立ちし今日を境ひ、是よりは、今一入御孝養をつくし、且は學びの道をも、いや勵みにはげみ、身をつゝしみ、行を正し、やがて嫁したる後は、いや重き妻のつとめの、忍耐貞操の諸德は、いふまでもなく、家政の整理、さては母たるの義務を辨へ、たやすくなし得べき能力を、養ふこそ、己が今日のつとめになんありけれ。

所感

徳永廣子

國のため、　天皇のためには、水つくかばれ、草むすかばれ、身をも家をもわすれて、眞心をつくすは、臣民の道にこそ侍れ。今のかしこき大御代には、眞柴かる山かつ、海士やく海士をとめまで、學の道にわけ入りて、おのづから、心まで、あきらけくなりゆく、天皇の御恵のほどこそ、たふとくおぼゆ侍れ。皆人此をはげみ、家を起し、外國まで、　天皇のみいつを、かゞやかしからんとおもふぞ、臣民の眞心に侍る。其のなかになげかはしきことは、心よりも、姿をよそひ、禮儀言語にいたるまで、古道をふますして、日々新しきことをこのみて、朝夕にもてはやすこそ、口惜けれ。姿は、悪なる身にしあれども、古ふりを學び、　天皇の御恵の露を、心にかけて、忠孝を全なして、國恩にむくひ奉らんとぞおもひ侍る。

佐々有鄰子

文明開化を誇しは、いつしかむかしがたきとなりて、明治卅三年の春をむかへぬ。昨年のことをおもへば、生糸は、價高直にして、機織にくるしみ、米價は下落して、農家にくるしみしが、今年はいかならん。農業を旨とせし、水穗國の名にそむかず、萬國無比の農業を、大年神、御年神たち、千秋の長五百秋に、まもりますらんと、おもへば、いさゝか所感を、いくなも。

小森田輝子

いにしへの女子は、つらき世わたりのために、親夫のために、うき川竹に身をしづめ、あるひは、舞妓と身をやつし、孝貞をたてし、人も多けれど、いとくかしこき明治の御代に生れつる、身の幸は、足引の山里、もしほやくあまの身まで、ひらけゆく代のならひとて、それくのなりはひとへはげまば、心やすく、代をおくりつれば、いづれの賤たちも、古の心にいやまして、大君の御恵のほどを、たふとくかしこみ奉りて、兩親のふかき恩を、露ばかりにても、むくひまゐらせんと、朝な夕な、心にかけ、眞心をつくしてこそ、今世の女とはいふべけれ。さる中にいと心ぐるしきは、すゝみ行く世とほめたゝへ衣服などみやびやかに、人の目をおどろかすばかりよそひながら、心はむかしの賤の女にもは

づかしきまで、おこなふ人もおほければ、かゝるひがみ心を、ため直して、しき島の大和心をふりたてゝ、日本の婦女子はかくこそあらめとめでらるゝことこそのぞましけれ。

新井と代子

今社會の有樣を見るに、物皆華美に流れ、政界に立つ者は、國家の如何を省みず、己の利に目くらみ、月給のみ貪るなり。紳士紳商と稱へつゝも、自己の利と見る時は、詐手段を用ふるをもいとはざるなり。自巳は美衣をまとひ、美食にあき、花柳に入りて、かゝる財あらば、何ぞ不幸なる同胞を救はざる。其の美衣をさきて、同胞の襤褸を補ひ、其の美食を分ちて、悲しき飢餓を救ひてこそ、我々人類の務めなれ。

「あやにしきとりかざれてもおもふかな寒さおほはん袖もなき身を」と一詠よ。かしこきわたりすら、かくのごとし、まして我々同胞に於てをや。然るに一時の興に萬金を費し、酒に醉ひ、右左に賓妓を携へ、大道を我物顔にゆきくあり。近ごろ人倫のみだれたること、この、一にこゝに至れるぞかなしき。

伏脇米子

梅咲く方の窓を開けて、次讀めば、返す紙風さへ薫るに、偲る心をやりて、目をふたぎ、頭を傾けつゝ、この心を味ふに、友なる人のさいつ日、連れて訪ひ來し、稚兒の今年五つになりぬと、紅葉の如き指かゞなへて、喜びぬし愛らしさ、今も目に見ゆるを。思ひきや、今朝果てけりとの訃得んとは、頓のことに胸ふたがり、讀みゆく文字に先立つは、はふり落つる涙なりけり。さても嵐の花の咲きもあへぬを、疾く吹き散らせしとは、風はいよく仇なりけり。あはれ、掌中の玉を砕きて嘆く父、機上の錦を斷ちて、悲しむ母の、心のうち、思ひやるだに胸痛きに、香爐烟冷やかに立つところ、鳥邊野へ送り出す親心　日をふるまゝに、いたみの衣に對する、其の思ひやいかならん。あはれ、世は盛なりけり。夢なりけりと、なげく一殺那、聲朗らかなる窓前の鶯に、頭をあげて目を開けば、ありしことみな夢の迷と消えはてゝ、涙ばかりぞ現に殘りて、枕はぬれたりける。さても夢ばかりあやしきものは非じ、夢てふものは奇しきものかな。これに感じて、神功は三韓を從ひ玉へ。これによりて、正成は勤王の旗をひるがへし、芳はしき名を湊川に流しけり。桃を盗むと見て、食を斷ち身を愼しみ、心を戒しめたる人もありしとかや。あはれ、己はこの夢によりていかにせん、いかにせんと深く感じたるまゝ、後の忘れ紀念に、かく書いつくるになん。

瀧山たゞ子

所感など、ことぐしく書きはじむるは、女子らしからぬことなんめり。しかはあれ、をみなゝりとも感ずべきところいとゝかなくてやは。中につきわらはのいとも深く感ずるところをしるせば、やまとをみな、體格いとよはくしきことなり。次は、この頃の女學生のおこない修らぬことなり。次はをみなたちのおのこによらでは生活しがたきことなり。この三ッはわらはふかく身にかへりみて、人におくれぬやうつとめまほしと、あけくれねがへども、いともくかたきわざになん。わらわが深く感ずるところは、此の三ッのみ。

山崎雅子

雪いたう降りて、往來の人の少からずくるしめる朝、外套に身をおほへる少年の、兄弟とも見ゆるが、たすけたすけられつゝ、いとむつつましげに學びのにはに通へる後は、御國の柱ともなりぬべし、實に頼しともうらやまし。竹の園生の、いやさかねにかねまつれる、いともかしこし。御國の光いやましにまして、日の丸の國旗至る所にひるがへらん、か

りにし男と生れたらんには、一しほの綾を立てゝ、御國の爲めにつくさんものを。

色てふ色のおほかれと、紅にます色やあるへき。御旗はいはつもかな。しゆらのちまたにたちて、敵も味方もともに救へる神の御草の赤十字、さては明月に匂へる紅梅の花、なをも數へなは數多あるへし。國に盡くせる誠をも、赤き心といふぞかし。

園師　鈴枝子

醫師に質しなは、神經質とやいはん。いさゝけきことをさへ、穴勝に深く感ずるは、己が性なりけり。四方の海原立つ波もなく、時つ風枝を鳴らさぬ、この大御代に生れ合ひて、大丹の恩の露に浴るなどは更にて、偶々はふり落つる嬉し涙せき敢へずなん。かく目出度き世に、女の德はいや下りに下り行くてふなる。今さへあるを、此の末如何に頽し行くらんと、胸もとゞろになん。さても取長捨短の名もて、ひた學びに外國を學び、彼が如くならずは文明にあらず、彼が如くせずんば開化にあらじと、明日に爭しく追へども追へども、は及ばぬ流行に眺り、形のみかは、心をさへ寄る瀝滞の定まらぬ、浮草として潮の中に漂ふめり。果ては誇りがに、男女同權を論ふに至る。かゝる徒の眼には、いかで日本の國家あらんや。さても本や何、末やいづれ、いづれ輕くて、何は重きてふ、物のことはり事の序を忘れ果つるとは、そもをこの極みならずや。あはれ、美はしき心、清らかなる行もて、國粹となし來れるものを、徒に捨長取短の實を見るに至らんとは。

秋の涙かわき果てれは
君はまだ遠くは行かじ我袂の

今や國粹流れ下りしといへど、しかもなほ程遠からじ、岩波の立ち返らしむるは、木に縁て魚を求むるばかりにもあらじ、おのがじゝ身をかへりみ、過を悔いて務く改むるにあるのみ。德高き大方のまめびと達よ、日本の今日は、平易にはた温靜なる質をもて、婦女子をして、馬耳東風に終らしむべき時やなに、急症自ら劇藥を要すといはずや。

さがしらに感じたるまゝをなん。例の神經質と、笑はん人は笑へよ。

名取正代子

凡そ人のあひあふ時は、必ず言葉をかはすめり。まづ折ふしの移り變り、寒さ暑さにつけつゝ、大方のぶべきゐやは、さもあるべし。やがて話のうつろひゆくまゝに、はては用なき事まで、口に任せていひいでたらんは、其の心の底も知られて、よそながらいとむつかし。まして三人五人膝をならべて、語る折しも、おのれ一人進み出でゝ、かたへの人を押やりつゝ、何くれといひわめきたる。女にはいみじう見苦しき業なり。かゝる輩は、大方、其の志操の定かならざると言葉に心を用ゐざるとによるもの ぞかし。さても人のあひあふて、永く語らふ程には、益ある事ばかりはなくして、大方は、世に浮きたる說、あるはいたづらなる空言、將、人の上まで、長し短しとて、品定めして論ふが多かり。かゝる事、我爲にも、人の爲にも、何斗りの益あらんや。ともすれば、人の氣を損じ、怨み怒りを招き、將、貴き時をも徒らに費して、さて後おのれと快からぬ思ひに苦しむ事、恐るゝいたりといふべし。特に女は、生れながらに、口さがなきものといひのゝしらるゝものなれば、世の女子たちかたみに愼まざる可んや。特に今や日に實に進行く、此の大御代に生れあひて、學の道はいふも更なり、もろ〳〵の藝能とへ、をのこにもゆづらざらしめんとまで數へ導かせ給ふ聖旨をかしこみながら、何とて、女子と小人とは養ひ難しなどいひけん、古ざまのそしりをうけつゝ、默して愼む事もぜでありなんや。古き歌にも、「口の葉にまかする人のまへ

づりはものいふ鳥のたぐひとや見む、」などうたひて、言葉多きをいましめおかれたりき。しかのみならず、雑談は、おのづから徳を亂ることもいでくめれば、かろ〳〵しう物いひて、心の淺はかなるをあらはし、はては、人の缺み誹りをさへうけて、あはれ蛙のかゝましき、蟬のさわがしきとひとしなみに、いひさげすまれん事、いかで口惜しからずやは。鶯のよき音も、日毎にきゝてはめづらしからず、時鳥の聲も、夜ごとに所さらずては、誰かあはれとめではやさむ。まして色も香もなき言の葉を、猥りしたりがほにさへづりたるをや。

佐藤蜂子

北のはてなる陸奥とて、隈なき春もしろしなく、朝の雪、夕の氷と、日に〳〵空といやまさるばかり、身も魂もこゞえむかごと、生ける心地もなし。四方の山々は、ま白なる衣をや着つらむ、遠近の川々は、世にも比なき、鏡の面をや装ふらむ。げに天より下りし六の花の、かくもさま〴〵になれることそ、いといぶかしけれ。今日しも、亦、花ぞと散りくるみ雪の、つもりにつもりて、前栽の松も變らぬ操ぞあらはしける、されば、内外、人のけはひもいたうしづまりて、つれ〴〵なることいふばかりなき。かくては物せらる人もなからむと、いとさう〴〵しきまゝ、一人文机に向ひてくさ〴〵の文どもひもときつゝ、つら〳〵世のさまを思ひめぐらしに、先づ、大君のいとも〳〵深き御惠のほどぞ、思出られて、いみじうかしこし。天地は、古のまゝなれど、日に月に進みゆく世のけはひこそ、山をさへゆしるばかり鳴かざりし、鳥さへさへずりしかは、いかで古の人の夢にだに見ねざるところ、いろ〳〵のしわざや、異くに〴〵の學び草さへ生ひ繁り、枝さへ葉さへ打ちなびき、めづらかなる色にて、うすくもこくも咲き出でぬ。この花とも色さへ香さへいみじくて、みな人にふかきかほりを二

つのたもとに、ふくましむるぞかし。昔の十日もかけし旅路は、一日に往き來うるほどになり、電氣てふ物の力もて、千々のしわざをなしとやら、實に朝露の草木をもらさぬがごとく、北はいぞか島、南はをきなはの地にいたるまで、文明のうつわ、一つとしてそなはらざるなし。これみな大君の惠み給へる、幸多き御なりけらし。あゝ妾ども幸ふ國にあれ出でしをみなよ。おしはかりねざるのみ惠の露の一としづくなりとも、報ひたてまつらでやはあるべき。されば、妾とも手弱きをみなごよ。いかにして、報ひたてまつるべうか、このけつめなき御恩を、あゝ先づ上は、皇室のむたかぎりなく、み榮に榮ねむほどをこそ、み國のたみのぬかつき拜して、願ひはべることぞかし。下は、只々岩根の松に心して、女子の女子たるべきつとめをまつたうし、玉の緒のあらむかぎりは、よろじのことども、誠實に神のみ國の民たるの本分をつくし、以て上に奉ずるになむ。彼の古今集常陸歌に「筑波根のこのもかのもに影はあれど君がみかげにましかげはなしと」あないかにして、國恩の千々の一つだも報ひたてまつることをうべきやな、とふかく感じつゝよろこびのなみだ、むねにみつ〳〵にぞなりにけり。あなやといそぎ窓おしあけて、うち見やれば、思ひきや、いつしかみ雪もなごりなうはれわたり、もゝの鳥さへさへずり、日の光まばゆくはねいでゝ、心地もしか〴〵しくなりぬ。あわれ前栽のみ雪は、いつかとけ初めむ、まどの梅はいつかほゝゑみそめて、鶯をなかしめんか。

湘島伊登子

ふるき書きものにも、新らしき教へ草にも、女子は家にありて、家事を整理し、子女を養育し、よく舅姑につかへ、夫をして内顧の憂なからしむべしとありつれど、己れは未だ、其の期至らず、其の年至らず、僅に學びの業に終へしより、こゝに一年田舍の小

學校に、燈を點じつゝあり。此の業のいとも〱頼母しく、物にあきやすき我れながら、一度もとることなく、終業の鐘は、いつもうらめしく思ほゆるのみ。例なく〱學校に趣く道すがら、出會ひたる生徒共は、うれしげに頭を下げ、後よりしたひ來るもあり、又門前にて、待ちかね顔に出迎ふ。あふれし愛顔に笑みを含みしとやかに腰打かゞむるを見ては、浮き世のちりに、けがれし心も、清らとなりぬべく、教場に入りては、生徒心得の通り、おとなしく譚をはなしかくれば、我れこそ聞きおくれじと、耳をすませ、目まるめて、聞きなせる様愛らしとも愛らし。又一度云ひしことは、よく之を守ることのけなげさ、實に小供程正直なるものはなし。職を同じうせる方により聞きぬれば、日々二里にもあまる山路を、月かげ殘る頃より、家の下婢などに送られて、來るもあるより、實におどろきぬ。さるものどもに限り、風寒き日も、雪の花散る日も、あらかねも解かすてふ夏の日も、欠席てふことのなきぞ、感に堪へがたけれ。我がなす事は、皆よしと考へ居るにや、外面に見ゆる衣つけ方、帯の結び方、歩み方、髪のゆひ方は更なり目つきより話ぶりまで、わづか一年の内に、よくも我れに似よりにければ、子は母の習慣により一なるといふも、實にまことなり〱。あゝ母となりては、夢の間も、心を怠にすべからず。己れは、只一日の内六時間教ふるのみ。子は母の許に二十四時間あるなり。されば、全く母の性質を受けん。あゝ母の責任は大なり。此の愛を過しては悪かるべきか。いよゝ心をかたくもち、身を慎みて、教ふべきは子なり。よく育てゝよく教ふべきは、來世の國民となるべき、我等が子なりと、つれ〱忘られぬまゝをこを筆にとめぬ。

大谷津峰子

徳川の流、やうやく穩ならず、世はかりこもの亂れに亂れしも、

忽ち治りて、吹く風も枝をならさず、我大君の御恵の露にうるほひぬる事、こゝに三十とせあまり三ツの年とはなりぬ。されど、其間十年には西南の役ありしかど、束の間に治まり、二十七八年には、日清の戰ありつれど、すめら御國のますら夫が、君につくす赤心の、いと深く、連戰連勝を得て、みいづを世界に輝しぬ。世はやうやく太平をうたひて、驕奢に流れ行くこそうたてけれ。夫れ奢に長ずる物は久しからずとかや。黄金數多貯るも、日々美食にあき、美衣をまとうて、徒にくらしなば、やがては身をも亡ぼし、家をもたほすに至らむ。唯に一家のみならずこれ數ひて、全國に及ばゞ、實に由々しき事にて、我國の盛衰にもかゝはるとも云ふべきなり。今や人々は戰勝の余澤におぼれ、浮華これ事とし、列國環視の内にありて、之に對する政策も立たず、かくては將來の我が國は、如何ぞと女子に似げなく、はかなき事など、ふと思ひ出でぬ。時に、夜はいよゝ更け渡り、犬の遠吠かすかにて、感いよゝふかし。

平和

德永廣子

國の平和は、民をとゝのへ、政事をあきらかになすにあり。家の平和は、夫婦心をあはせ、妻なるものは、夫の命にしたがひ、家業をはげみ、をなをさめ、舅姑には、産の親の恩にもまさる孝をつくし、夫の姉妹には、まことのはらからよりも親しみ、むつび、召仕の下部にいたるまで、目をかけあはれみなば、これこそ、天下の平和となるべき基礎なれ。

佐々有鄰子

一村民の平和は、同心にあり。一部人の平和は、協力にあり。一

麾下の平和は、首領の心にあり。師團の平和は、士卒の一致にあり。天下の平和は、あやにかしこき大御いつにありて、上和下睦のうるはしき、しは上ほつまの國は、遠原とほき、外國のかけても及ばぬ、平和の臣民なれば、內地雜居の大御世の、いよいよますます、平和の正道をふむべくこそ。

小森田綠子

世の中のたからは、平和にこそありけれ。世界みな、平和ならしめば、萬國和ありて、國富、おのづから心やすくあり。我が國の平和は、兵をいつくしみ、たまふにより、兵きた、君の御惠をかしこみ、家をも身をもわすれて、國をまもれば、やすらけき御代と仰ぎまつるになん。下さまも、おなじことにて、一家の主たる、夫婦、和合して、忠孝をつくし、家業をはげみ、召仕のものまで、憐みいつくしみ、近隣の人にも、親しみ交りなば、これぞ、上なき平和といふべき。

新井と代子

平和は、世に最も樂しく、最も願ふ可きなり。家內和合し、新らしき、年を迎へ、目出度しと喜ぶも平和なり。一朝事起らば、夫は、妻子を顧みず、國家の爲めに、一命を棄てんか、樂しき家庭は、是が爲めに乾燥無味となり、春來れども、花咲けども、見る人だになくば、殘されし妻子の心は、秋のさびしきが如くあらむ。彼の日清戰爭のをりを、回想し給へよ。主上は、朝夕の御食をさへ進み給はぬ程、御心をいためさせ給ひきとぞ。幸ひにも、我が兵は、連戰連勝を得たりき。されども戰死者の遺族は、私に嘆かむ。あまたの、名將兵卒を失ひて、君臣心をいためたることの、大いさに比べては、山をなす償金も、何かあらむしかして、清國の方は、いかに、連戰連敗、そこばくの償金を出し、あまつさへ、多くの生命を失ひ、萬國の笑ひを取り、今に至るまで、老朽國と侮視せらる・如きは、げに悲慘の極にあらずや。それに鑑みるも、平和といふことは、人類生活上、最も必要なるものなり。一家和合せずば、其の家滅亡し、國家の平和破るゝ時は、亡國とならむ。されば、我國婦人平和會といふものを設立せられしも、さる可きことなり。げに望ましきは、平和にこそ。[illegible]願まほしきは、平和にあらずや。

伏脇米子

磨き上げたる鏡の如く、淸らに澄める海も、風吹き荒ければ、恐れる大波岸を嚙み。聳へにそゝり立ちて、動きなき大山も、地震搖り荒びなば、崩るゝ例あり。これら平和てふことを失へばなり。日清刃に血をぬり合ひ、干戈の間、遼東の天地に轟き渡りしも、これなりけり。舅姑に追ひ出され、夫なる人に疎まるゝも、これならでやは。三國の忠言を納れて、遼東の半島を返しやり給ひ、講ふがまゝに、內地雜居を許し給ひしは、平和を保たんの大御心とぞ承る。うからやから親しみ合ひ、睦みかはすも、此の心ならでやは。されば平和を保つては、光長閑けき春の如く、これを失へば吹雪烈しき冬の夜の如けん。あはれ、これを保つも失ふも、人の心に有るぞかし。これを保つは難きに非じ、只他を待たずして、己よりするのみ。人毎に、この心になりなば、卽ち世は春なるべし。自然の平和不平和は、人の與りしるところにあらず、且つやいかにもなし得べからねば、論ふべくもあらじ、況してをこの業なるをや。

齋藤はる子

凡そ、世の中の人と交はりて、相互に樂しく暮には、平和の德こそ大切なれ。若し、此の德を守らざるときは、他人に對するすべての德義は、見るに足らざるものなり。されば、人たるものは、早くより、此の德を養ふことに、心掛くべし。しからば、此の德

な誘ふには、如何にすべきか。これ、他にはあらじ、たゞ不和のもとゐとなるものを、とり除くにあるべし。そのもとゐには、二つあり。即ち人の心を傷ふて、其の人と隔たること、自ら心を傷ふて、相離るゝこと、是なり。而して、人の心を傷ふことは、人の心にもとることゝ、人の言葉に逆ふことの二つにあり。又、自ら心を傷ふことは、心を廣く持たずして、他人をゆるさゞること、己の心より出づる感情を抑へざるとにあり。かくの如く、不和の生ずる原因に心掛けずして、人と交はるときは、決して圓滑なる交際は出來まじ。我々、まだ若きものは、いとつゝしむべきことになん。

村田吉代子

この世の中に、多くある道の中にて、生物間に、いとあらざるべからざるものは平和なり。もしこの平和てふ道あらざれば、禽獣草木の如き社會より、上は人間社會に至る迄、小は、自身朋友の間柄より、大は天下國家に至る迄、一として、この平和なかるべからず。試にこゝに禽獣を同棲せしめんか。もし、其の間に平和てふことの存せざれば。大抵安然に生存せざるや疑なからん。これ禽獣なり。言ふに足らず。萬物の靈たる人間に於ては、一日、否一時もこの平和なくんば、如何にして、社會國家を維持せんや。如何にして、人間相互の關係を保たんや。如何にして父子兄弟姉妹の親密を全うするを得んや。かく平和は社會生物間、特に人間間に於て、一日も欠くべからざるものなり。もし、又これなくんば、親子兄弟朋友君臣の間は如何。言ふに忍びざる夷狄の域と異ならざるに至るべし。人間の樂しみは何なりや。家庭にあらずや。されば、一家内にて、各意を異にし。心を巨れ、相互の平和を保たずんば。永久爭ひの間に、一生を送らざる可らず。人生の不快豈に、之れに過ぐるものあらんや。一事業をなさんとするには。一人一個の成し遂げらるゝものにあらず。必ずや、數多の人々相集ひ。互に心を一にし、力を合せざる可らず。然るに、もし其の間に不和の生じたらん折には。大抵、其の事業を成すこと難かるべし。これらは、皆平和なると否とにあるなり。淸國は如何、君臣の間平和ならざるより、今日の有様に至りしなるべし。かく平和は、人間相互の間、社會國家の間に必要なり。しからば、如何せば平和を保ち得るや。これ、至困難のものあらず。只、不和の生ぜざらんとすれば足れり。然らば、不和は如何にして生ずるか。其の原因は二つありといひつべし。即ち自ら、自己の感情を害して、人より離れ去ることを、自己が、他人の感情を害して、己を遠ざからしむるとにあるなり。この二者をして、吾人の心中に置かざれば、不和てふ者は、決して生ぜざるべし。自ら己の感情を害するは、其の心の寛大ならざるにあり。他人をして、自己を遠らしむるは、己の驕傲を表はし、他人の情に逆ふ故なり。故にこれらの事ども心して、おのがじゝ、務むべき道を踏み忘らずんば、平和てふ無二の寶も、全うするに至らんかし。

吉田政榮子

嗚呼、世の中に、たえて平和てふ事のなかりせば、何によりてかたのしからん。何によりてか學びをねん。あゝ平和よ。平和ほど、世に尊きものはなし。中もいとゞ畏き事ながら、東洋の平和をたもたせられんためには、我が大君も、英の言葉を入させ給ひしためしあり。まして、國の平和は、富國強兵のもとゐなり。家の平和は、子孫繁榮の本となり。一家團欒の樂みをつくる。家の平和をたもたんものは、主婦をおきて、外にはあらじ。春の花、秋の紅葉も、平和ありてこそ、初めて樂しから

ん。我等は幸にして、此の貴き大御代に生れきて、日々家族打ちむれて、樂しく暮すも、君が稜威の、四方に輝やきて、國内平和を保つためぞかし。國平和にして、民榮へ、民豊かにして、國富む。これ、皆、平和の賜ものなり。あゝ平和よ。平和ほど、世に尊きものはあらじかし。

林　壽　子

世の中に、望ましきもの、いと多き中にも、ことにめでたく、うるはしきは、平和にこそ。もし是れなければ、晃きわりを始めとし、たれかは、枕をたかくすることをうべき。一家の平和は、うるはしさかぎりなく、たへて、風波の起こられざれば、福の神は入り來り給ひ、繁榮は今更なり。育つ小兒も夜たゞ點を止め、すや〳〵と母の抱かるゝにまかせ、行末たのもしく、父母のよろこび一方ならず、畜ひ置ける犬さへ猫と、仲むつましく、枕を同じうして食ひ、共に心を協せ、盗人にねづみに、いづれ、家の爲めならぬはなく、春の花、秋の月も嵐なく、雲もなくて、にほひかぐはしく、佐保姫のかすみの衣にさそはれて、津々うら〳〵にうちなびき、いぶせき海士の伏屋もうつりかなつかしく。せきあまる露に宿りし光は、さゝがにの巣くふいほにもてり渡り、平和の香、平和の光は、かぐはしく、まばゆく、國のはてよりはてまでも、至らぬくまもなく、學術にまれ、工藝にまれ、一つとして進まぬはなし。げに空とぶ鳥さへ、羽ならさず、祇常にひゞき渡る入相のかねもさながらなつかしく、行衛さためぬ浮草さへ、心やすらかに、花さくも平和ぞかし。

なつかしきものと羨しからぬものと

徳　永　廣　子

妾はいとけなき時より、いとひたしく生立し友と、長閑なる春の日は、共に手をとりて、山べの花をながめ、ある時は、しづかなる汐干潟して、あそびしが、ひらけゆく大御代のさまなればとて、あかぬわかれをつげて、東京にのぼりゆき侍りし友のなごりおしさは、いはんかたなく、おもひしに、その友の、東京よりかへり來る、車をむかへて、物語などきくに、さすが、繁華の地にすみなれては、すがたかたちも、外國風にて、とつ國の言語をさへ、片言にもの學びせしとて、歸るは、古風をしのぶ、わが身には、すこしもうらやましからぬものを。あなにくや。

小森田輝子

妾は、いとけなき時より、學の窓に生立し、いと親しき友の、二人ありつるに、妾と三人つれたちて、春秋を、たのしくおくりけるに、はやくも、我がさとの學校を卒業し、おの〳〵その家のなりはひを、ことにして、一人の友は、家富むまゝに、都にのぼり、よき學校に入りて、眼ふまゝに、學道にすゝみつれど、心ざまいとつたなく、うはべのみかざり、はら黒きわざの多ければ、たまさかに、休暇をゑて、かへり來つゝも、ものしりがほに、人をおとしめるさま、幼時は、姉妹とむつびゐるに、今はものまなびせし、かひなきと、ひそかにうとましくて、浦山しからぬものと、おもひ侍りき。亦一人の友は家貧しくて、よろづ心にまかせず、所の學校を卒業せし後は、家業をはげみ、裁縫さま〴〵の手藝をなし、父母の世わたりの手たすけもなし、身には麁服をまとひ、髪のやつれだにいとはず、孝行をつくすさま、亦幼時より、今にいたり、かはりなく、親しく文のおとづれさへおこたらぬは、いとなつかしきものにこそあれ。

齋藤てつ子

久しう都にありて、はじめて歸國せるに、昔し遊びける氏神の階

のした通りすぎけるさき、何さなくなつかし。知らぬ國に行きけるに、古里人に出あひたるも、まして、親はらからの消息ごも得たるも、いみじうなつかし。外國に行きける人の、絶ねて音づれもなく、いかに生死はなごゝ、たづね明かしゝに、文に寫眞ごも添へておこせたる、病める折さへる人の心地なつかし。望みたねて、世になげかるゝ時、なぐさめくれし腹心の友。文の中なる古への才女。ゆめに、なき祖母にあひたるゝ、いさなつかし。

つみ人のせて走る馬車、いみじうしたてゝ巡査ごもの、添ひたるも、げにおそろし。やむごさなき家の子あづかる乳母。五つ六つばかりなる童の、さもすればむづかりて、はては、大ごゑに泣きたつるも、己が子ならましかばさこそ覺ゆらめ。宮づかへせる女房。筆たゝぬ文學者。なまがく者の女學生、いさあは〳〵しう職にけおさるゝ心地するよ。巨萬のたからつみながら、子持たぬ人。名利につかはるゝ教育家。世のおぼねめでたからぬ人ながら、高き官位得たる。名望を得ながら、浮薄なる夫持ちたる妻。いさいさう、羨しからぬものぞかし。

永井貞子

なつかしきものは、ふる里の山川、をさなき時によみたる文の中より、はからずさりいだせしつばなすみれ、榊のかげにさくらの咲きさぼひたる、いぶせき草のやのうしろに、桔梗のおほつかなくも咲き出でたる、紅梅にほへるすいがいの奥に、かすかに音するつま琴のねは、いかなる人のひくにやさいさなつかし。春山のかすみがくれに友よぶうぐひすのこゑ、花をひねりてほゝゑむみほさけのすがた、言葉すくなくものごさつゞましげなるひめぎみの、まなびの道にさへすぐれたりさきこねたス、わきて友ごちのうはさに、秀歌よみたる君の日ごろのおこない、いさつき〴〵しきよしきゝつたへたる、花も實もかれそなはりてさ、こよなうなつかしうおもひやられてなん。羨しからぬものは不義の富貴、まことに添はぬほまれ、行ひ正しからぬ人の言葉巧みなる、心よからぬ人のはなはずかしき面影、似合はしからぬ花かざし、衣服調度のはですぎたる、まして自作ならぬ三十一文字の撰ばれたるは、うらやましからぬなご言ふもおろか。

久保もさ子

旅路に在りて、故郷を思ひ、他家に永居して、家なる父母はらからをしたひ、卒業後、己が學び家の友、はた久しく訪はざりし人なごに逢ひたらむには、いかばかり懐しく思ふらむ。されご、古の列婦貞女、はた忠臣義士のことなご數多書き連ねたるも、亦、なか〳〵に懐しき物になむ。扨は梅見れば、鶯もがなさ思ひ、まかきの卯の花の咲きの盛りには、時鳥のやごらぬなかこち、ほたるおひては、其の昔唐人のふる事なご思ひやられ、はたやう〳〵秋立ち初めて、紅葉の木の間の月見てば、琴の音もがなさおもほね、雪の朝にも色かへぬ松を眺めては、女の貞操も、かくてこそさ思ひ出づるも、實に其の世の懐かしきが故ならむかし。されば、世に懐しき子を持ち、親々を見るに、大方はよき子よりも、却て懐しうすめるは、いさ心得難き事になむ。

そも〳〵、世の貧しきは、富めるを見、そゞろにうらやみ、美しく着飾るを見ては、ねたましさ、たへやらぬが常なるに、彼のいまはしき藝娼妓なごの如く、身には如何なるきらを飾るも、こをうらやましさする者はあらしかし。扨は不義の利を貪り、己の榮華に誇るなごは、只にうらやましからぬのみか、聞くだに身のけがれなるものを。

木村登子

世に賢き子もたらぬ人、子もたぬ人、はた己才がりて、人にけ

おされたる。或は已が心得の足らざるより、日毎にたらちねの父母に、心をなやましむる者などは、いかに家富めりとも羨やましからぬのみか、いといとほしくこそ思ほゆれ。又はへば立て、立てば歩めといつくしみ育てられし親ども、老いてはそこばくの用なしとて、あらゆる財を懐にして、氣儘氣隨に年月を送る人、或は同じ學び舍にて、おなじこと學ぶにまれ、いたく友におくれたる、手のあしきなど、たれかはうらやましかるべき。或は松の操の正しからぬ女、年若き乙女のいまだ嫁さずして、標子をおとし、はた臣なるもの一たび私欲のため、主にそむき、賊に組して、已が榮華を計り、あるは人家に忍び入り、得るにまかせて、人しれず取かへり、あくれば、花よ蝶よと茶屋遊びする人々らの、いつしか事のあらはれて、かくはしかりし家名をもけがし、且その身は、辛き地獄に入れらるゝ等は、いかに才すぐれ、いかに容うるはしくとも、羨らやましからぬにこそ。

されど生みの子數多ありて、おのがじゝ學をはげみ、業を勉めたらんには、いかになつかしからぬかは。はた梅を見ば、鶯の聲、すゞ虫の音を聞かば、月琴笛もがななどのみかは。旅路なりせば、中々古郷のなつかしさをそますらめ。あるは暑さ堪えがたき頃、氷賣る聲が聲、夜寒むの頃、埋火などおもふも、皆このかずに入るめり。はた遠國なる友の許より、此の頃はいかにおはする、互に契りし言の葉は、今も忘れじな、等いひおこせる、永き夜のすさびに、そゞろにほぐども取りひろげし中より、なき友の筆のあと見出てたるなどは、昔忍ぶの涙おさへがたく、おつかしさも、一入になむ。

なほいま、昔の忠臣孝子、はた貞女などの、名のみを聞くだになつかしきを、已が知れらん人に、かゝる聞えあるは、なつかしさもいとなつかしうこそ。

五味綾子

世の中に、我がなつかしくしたはしき者は數多かれど、とりわけ、最もなつかしきは、音樂の優美なると、其のしらべの妙なると、梅の花の香りゆかしく、菊たる爽さを發きて、操の色をあらはしほこらざるさま、鶯のはつねゆかしく、木つたふなる人の心、不義不德の事なく、慈仁の心に富み、妄りに、自己の才智にほこらざるとなり。

羨しからぬものとは、りに自己の才智にほこり、我こそはなに知らぬ者なしとほこり顔する人、みめかたちのうるはしきに誇り、心のほどのよし惡しきは問はず、只かほかたちの惡しきをそしり笑ふ者、おのが富貴にある者、行爲の修まらぬ博愛心薄く、みだりに財を蓄ふるものゝ如きは、おこのしれものにこそ。

小野操子

我が故郷につきて懐かしき物の、我幼かりつる頃の睦の垣ぞ言ふなるは、大方、誰もくしかありけん。さるが中にも、女と生れ出では、なべてのならひとて、筒井づゝ、振分髮の丈も、齢も過ぬるばかり、はやも若草の妻とし呼ばれ、やがても、其處の都、彼處の鄙と、已がじゝ、移り住めば、其の初こそ、さすがに、昔懐かしさ、月に花にと、厂の便を、たのむ折もありなめ。やうやう、年古るまゝ、瀬盛の影も疎になりもで行ぞ、世に口措しき人の心也。去る程に、長き夜のすさび物の本などとうでゝ、彼是讀む程ゆくりなく、其の名、其の歌共、見出つるは、言ひしらず、懐かしふ覺えられて、絕えしうらみさへ、打忘れて、あかずも眺めいらるゝ也。久しう、田舍籠りしぬる頃、臘月夜の、いとおかしきに、そこはかとなく、あくあがれりきて、とある門邊にさまよひ出たるが、夜日定かにも、糸櫻の、いみじふ艶に匂ひやかなる。あやしふ、心止まりて、過がてなる折も折、たがすさびなる

人、笛の音の、いとかすかに、ひゞき來ぬるぞ、いよく懐かしくも、哀に覺えて、何かはしらず、涙さへ催されてなん。

男女なわかず、文著く樂すぐれたらんには、未だ見ぬ人ながら、床しう忍ばるゝな。まいて、今は世に亡き人の、形見と殘せし、筆の跡、見じとて言ひて、納めし、文箱中ぞ、殊に〳〵、床しふ懐かしくも思ひやらるゝかな。なべて、身に纏はぬ樣したらんは、いと〳〵つたなかるべし。さるは老人の、若うはなやかなる衣着たらんも、いみじけれど、我から憂身やつして、彼の歌姫や何やと、怪しき手振まねびて、心得顏なる人こそ、わきても淺ましくぞ覺ゆる。中にも女の若きが、其のすがた形めでたきに、心奢り、よろづに差出振舞たるは、中々に片腹痛ふあらずもがなと思ふめり。其の他同じき程の人の、進行くぶり、いたふ品造りて、わらは顏なるぞ、一しほ可笑けれ。かゝるは、あながち賤しき人とも限らざりけりな。おのれ都にありつる頃、一日物へ行とて、揚場あたり過にけるが、よべの雨の名殘りに、道いたくぬかるみて、往來の人々、皆一方に能きを擇ぶ物から、さながら童の遊の、手を取ると云ふ樣にも似たらんかし、我が前なるは、三人ばかりの乙女にて、近きわたりの學舍通にもやあらん、皆同じき程に、袴付たる、いたうろうたう優しきは、おのづから、容添はまほしき心地すなる。かくて下にのみ心つかひて行くゆく程、さきなる乙女のむれと覺へて、さゞめく聲の、あやしとおもひて見れば、こなた、指して來ぬる人の、角なる帽かむりて、そが胸のあたりきら〳〵といかめしきは、大學生にもや、彼の一群と、すれんばかりとなるほど、中なる乙女の、かたへの袖引きて、何かは知らず、むづかしき言いふと見るまゝ、やがて高らかに、打笑ふ、思ふに英語にてもあるにや、あな、あさましとけふさめて、偸見もて行くに、此度は、そびらに、皆ふり〳〵、過ぎ行く人の樣、な

がめては、あられぬ言ごものゝしり合たるは、我さへ顏赤う覺ゆるなるは、あはれ、その師なる君、もし見給ひなば、人事ながらも、いと口惜し思うへりしが。

名取正代子

主知らぬ垣根の内に、梅の花などえもいはれぬ香に匂ひたる、いとなつかしと見る程に、あかぬ餘りとはいへ、心なきものゝ、手ごとに折りて、もて去りたるは、嬉しからず。見も知らぬ人の筆の跡、いと匂ひやかなるは、姿かたちさへ偲ばれて、いとなつかし。やがて、その行正しからずときゝては、いかで嬉しからむ。父母によく事へたる兄弟の、互に睦みて、いつくしみあひたる、いとなつかし。さるを、親子はらから、恒にせめぎて、互に利欲をむさぼり爭ひあひて、跡を得たる、嬉しからず。歌文など、いつも三才の選に當れる少女子、いとなつかしと思ふまゝに、知りあふらん人に問ひて見るに、おのが女子たるの務をも怠りて、これのみ耽りときゝては、又嬉しからず。黄金あまたもたる人の萬にゆたかなる、いとなつかしき心地すれど、つかふべき道を知らず、家の内吝にして、おのれ獨り奢を極めたる、嬉しからず。淸らにしなしたる竹の網戸の内に、やさしきたをやめの、緣によりて、月影打眺めつゝ、獨り箏などかなでたる。あるは物あんじ居たるいとなつかし。さるをやがて人の妻なりときゝては、又嬉しからず。古の巴板額など、其の名ほまれの高きまゝに、其の働きへ推し量られて、いとなつかし。されど、大方の女として、其の武勇の程は、かけても及ばぬ事なれば、嬉しとも覺えず。何も何も正しく淸らかにして、いかでおのれもと思ひ隨べばこそ、萬はなつかしけれ。道にあらぬ事して、富貴榮華を求めたる、何かは嬉しからんや。

兒玉さは子

なつかしきものは、三年四とせがほどに、ちゝ母にあひたる。あれ妹、あるは親しき友どちより、文の來たる。足音を聞きしりて、犬のうれしさうにまち迎へたる。燕の宿とさだめがほに、今年も來たる。衣干す竿のあたりに、ゆくりなくも、梅の一りん咲き匂へる。羨ましからぬものは、なべて世俗のともがらの、うらやましとせるもの事。うらやましきは、浮雲の心なくして、岫を出づる。飛ぶ鳥の倦みて歸るを忘れたる。賤のをだまきくりかへしなば、なほいひつゞくき節なきにしもあられど、大かたは言はずもがな。よし腹ふくるゝわざなりとも。

齋藤はる子

遠方に旅出して、親しき友に逢ふは言ふも更なり。又さなくして、一度も逢ひしことなくとも、古郷の人と云ひば、何となうなつかし。己と職業を同うし、意見のあふ人は、たとへ知らぬ人なりとも、己れにかたもつが如くに見ねて、なつかし。己れが長く住みし家屋、常に用ふる器具物品と云へば、ことになつかし。牛馬犬猫にもせよ。己れが飼ふるものは、又なつかし。これを以て、つらつら考ふるに、凡て人は、己れと位置境遇を同うし、常に目ありふるゝものは、とりわけてなつかしきものなるぞかし。人には、さほど學問藝術にすぐれざるも、よき機會にのり、身分にこゆるほまれを得るものあり。こは全くまぐれあたりの的の如くにて、正しき道をふみしにあらざれば、必ずや、時勢うつるときは、墮落して、元の身となるものなり。かくの如く、一時の名譽をは、露も羨しからず。かほかたちのいと麗しき人なりとも。その心の足らざるときは、きたなきものに、錦繍を着せたるか如くにして、羨しからず。却てうとまし器具物品にもせよ、表はかりうるはしく花やかに飾りなどすとも、其の裏はきたなげに、又其の質つよからざれば、人を一時あざむくのみにてうらやましからず。必ずや誠の價値、正理正道を以て、名と譽れとを得て、世にめでらるゝこそうらやましけれ。

上村まさ子

彼の淸原のおもとのすさびに倣ふとにはあられど、日頃見もし聞きもしけることのなつかしう覺ね、はたこれは羨しくもあらずと思ふふしぶしを書きつけてん。まづなつかしきものは、嫁ほむる姑と、心のひがめる姑に、よく赤心を盡して仕ふる嫁と物知りがほせぬ博士、まゝしき子をかけ日向なく慈む母、琴の音はいつききてもわろからねど、秋の夜にすみわたる月にむかひて、高殿の中にをもしろうかきならしたるはなつかし。朧月夜に花の下に駒とめて、笛をかしうふきすましたる笛のあるじもまた、いつ見ても床には、さるべき人の物せる、書や畫やの時につけたるをかけ、又折々の花どもを態とたらぬさまに活けたるなど、なべて風流の心ある人はなつかし。貧しき少年の志をたてゝ、京に出で、自ら糊口しつゝ學びの道にいそしみて、遂に事成り、錦を着て故鄕に歸り來りたる。財彩多もてる人の、積むをのみ樂しみとせずして、或は公益に、或は慈善に、其の他何くれと、益ある事業の爲には、自ら進みて財を惜まざるなどぞなつかしき。又、尊きに居ても、我は顔せず、よく謙遜するものから、威儀自ら備はりたる人は、ゆかしきものなり。書き流せる水莖のあとにもあやあり。其の言の葉の花にも香ひあるふみおこせたる友は、まだ見ぬ中よりなつかしうて、いかでか一度逢はまほしと思はるゝもことはりなれや。月々の兼題の中には、難しと思はるゝもあるを、七年八年の間、一度の欠くる事もなく、募りに應じ給ひて、常に選りぬきの中に洩れざる。金玉の歌文をつのり給ふ君達よ。彼の一條の帝の御時の、名たゝる才女にもやはか讓り給はんと、嬉しさの極みにこそ。若うして、夫に別れたる寡婦の艱難にあひて、其の操いよいよ固く、

よく孤兒を育みて、中等以上の教育をさへ受けしめ、天晴れ亡父の遺業をつがしめたるは、先立ちける人も、心あらば、いかに嬉しからましなど、いとゆかしう覺ゆ。貧しき家の子と見ゆるが、繼ぎはぎたる衣着たるに、其の縫ひざまのいと巧なれば、誰がぬひ給ひしにやと問へば、母御がと答ふる、言葉つきよりふるまひに至るまで、やさしうしとやかなるに、其の母たる者の人となりのしのばれて、やがては傾きたる家をも起しぬべしと、そゞろに其の心ばせのなつかしうてなん。世の常の人ならましかば、浮世のかゞつらひにあきて、身を安らかに為すこともなく、日を送らんと希ふべき。高き齢を保ち給ふ御身にして、老いてます〳〵壯に靜々として、後進の子女を導きて、倦み玉ふことなき、我師の君の如きは、實になつかしともなつかしう。世の人、皆の欽仰するも宜なりや。羨ましからぬものは、不義にして富める者、財多く積めども、其を出すを好まずして、いたづらに金の番する人。さしたる器もなきに、時めけるゆかりの人の手に縋りて、高位高官に登れる者、常に美はしく飾ひて、貴顯紳紳の盛宴にも侍りて、寵遇をうけ、歌舞管絃にふけりて、笑ひさゞめきつゝ、樂しげに日を送るうたひめ。又出づるには馬車あり、入れば侍女に圍まれて、願ふことの叶はざるなく、よろづ滿ち足りたる貴婦人も、良人無情にして、袖に時雨の晴るゝ間無しときゝては、其の境遇も羨しからず。德なく才なく、敎育もあらず、はた身分卑しき女のみめのみ美はしきが爲に、玉の輿に乘せられたるに。それに似て、學識德望才能のありや無しやをも顧ずして、只管に黄金の多きを喜びて、嫁ぎたる婦人にはまねびたくもなし。他人の物せし文や歌など、いさゝか加へつ削りつして、我が物がほに出せるが選びに當りたりとて、羨ましとも思はぬものぞかし。

岩波はま子

修業にと、都へなど上りたる時、すみなれしふるさとと、古郷人の、ひごろは、さしてしたしからざりしまでも、なつかしうて、學のみちわくるいそがしながら、束の間もわすられず。業を終へて、古郷かへりし、一とせ二とせの間、いにしへの師と君、はた友垣など、されどこは、年ふるまゝにうとましうなりゆくぞうたてき。書の上にて見たる、人よりきゝたる、古のや今の高き志もてる、潔き行したる人々、なつかしともなつかし。不相應に高き官位得たるすぐならずして、金多く儲けたるを。ふさはしからずよそほひかざらして、われはがほに、人のまへにいでたると、藝を賣るものなどのすべきいやしき技にすぐれたると、價たかく尊き品ながら、實用に遠き、人の持ちたると、まけをしみならず、みな羨しからぬものとおもはる。

税所敦子刀自には早くよりわが淺類婦人會の總裁となり給ひ何くれと御敎へをたれたまひしが過し二月四日みまかりしをいたみまゐらせて

淺谷いく子

白玉と見ねし昨日はゆめのまに
消ぬむつゆとも思はざりしを
たれにかは世の道とはんしるべせし
君はかへらぬたびにいにけり

菊池[illegible]子

新年

新しき年をむかへてほくとしを
をしみしこともわすれぬるかな

浪の面

春草

春雨のふる野な見れは雪消にて
　みさりの小草萌い出にけり

籬梅

やゝ近きほさりの梅は咲き初めて
　匂ひへたてぬ花の中垣

濱べのそゞろ言

山崎らへ子

颶風あらき越の海に、
貝さりあつめ遊びつゝ、
思へば昨日ちぎりてし、
そばに寄りそひ手をさりて、
小女が足邊に打ちよする、
若しも君が身の幸に、
足邊によりて涙をば、
思ひ回らし磯馴松、
つくづく思へば双眼に、

そでひろがへしおもふさち
ものいふ口もいさやさし、
言葉の耳にのこれども、
語ふ事もなぎさなる、
漣さへもうらめしや、
水にてあらば波さなり、
洗はむすべもあるべきに、
茂る根もにさ腰かけて、
落つる涙のおびたゞし、

新體詩

木村菊子

數へてみればはやむかし
　光さやけき月の夜に
三保の松原小まつ根に
　腰打かけて露ばかり
隔つこさなく 琉涙や
　風のつきそふ世の中を

忘れそめにし事もなく
　なほ思ひいづそがかげな
見る折々にはるかなる
　みやこの住居いかならん
文の便りも風のれも
　いさのどやかに渡るらむ

渡りて末は小島など
　住める林なしげらして
緑の色なまさじやさ
　誓ひちぎりしおほかたの
昔の葉もみも一ひだに
今しは出來ぬ〆からだ
　さくまなけれど一昨日に
彼の松原やうつしさり
　友さまもりて朝な夕な
みるだに昔しのばれて

其にひきかへここ許は
　おなじ心にかたるへき
友もなければひたすらに
　思ひはみすもます鏡
身をつくしても逢ふこさの
落つる涙は淵さなる
　なりにし淵さ一枚な
君にさゝげて睹さもに
　名高き三保を目の前に
昔語りなわすれしそ
　昔語りなわすれしそ

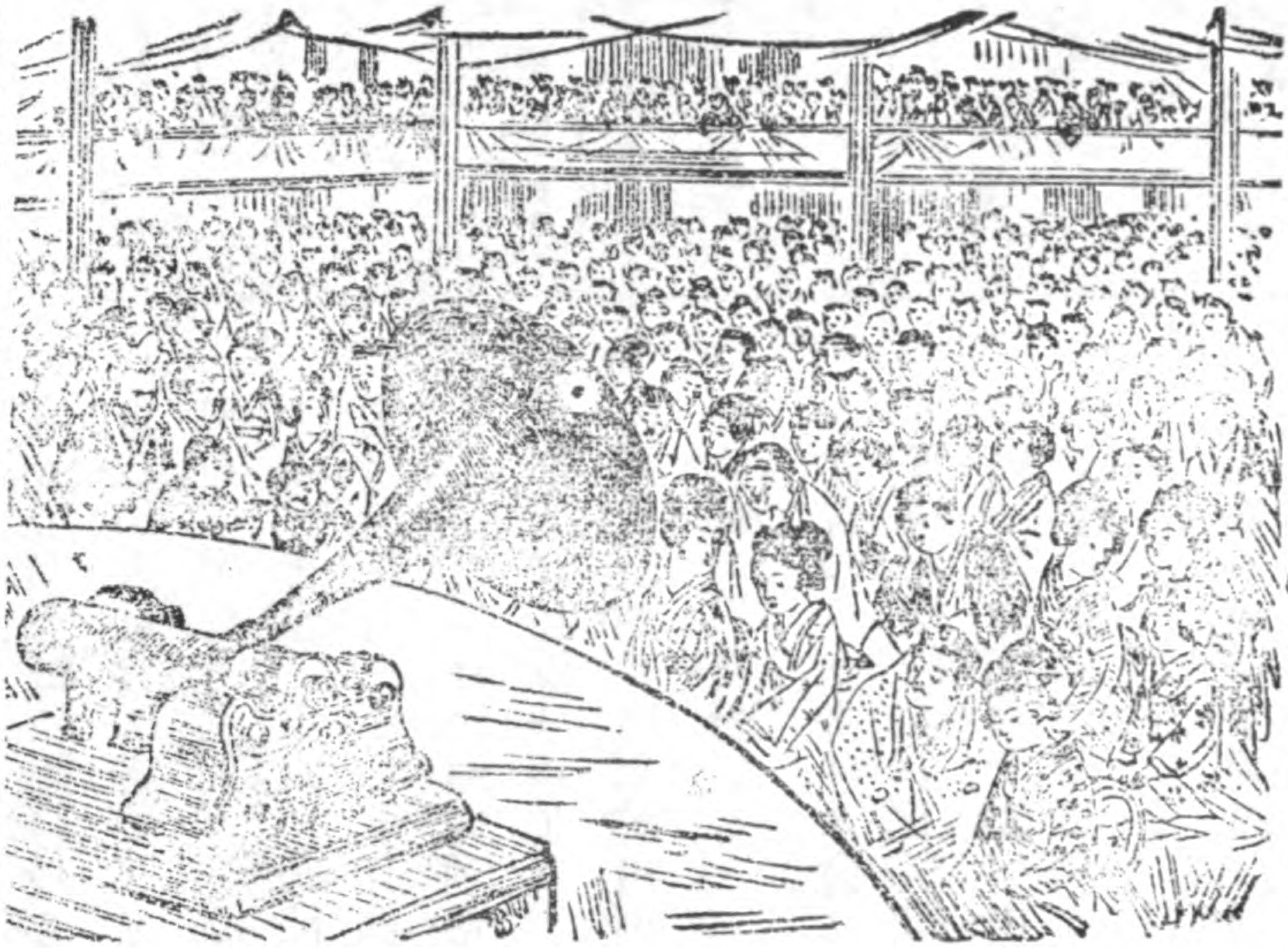
明治三十三年三月十一日印刷
明治三十三年三月十二日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼編輯人　川崎直衛
東京市京橋區南八丁堀二丁目十二番地
印刷人　並木良雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號新橋八八）國光社

（本號ニ限リ定價金廿錢）

蓄音器新工夫一大進歩の至急廣告

蓄音器は更に新工夫を加へて一大進歩を爲し目下其品漸く本堂に着荷したり●從來の蓄音器に比ぶれば其**特色**の要點は左の如し



●音聲非常に高朗にして從前の如き低聲にあらず●喇叭はニッケル鍍なれば少しも音聲を紊す事なし●器械の要部に塵除を附けたれば塵埃の入る憂なし●蠟管の製造は從前に比ぶれば堅硬にして肉厚し故に如何なる炎暑にても熔解する事なくしかも永遠に保存して變調する事なし

價格は

甲種　金六拾圓
乙種　金四拾八圓
丙種　金三拾八圓

但市外遞送料金五十錢

此新工夫一大進歩の蓄音器第一着荷は員數に限りあるを以て御望の紳士閨秀早く御來需あそばされよ後れては入手に難かるべく候早々頓首

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
(電話番號新橋三百三十三)
(長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三)

時計及寶玉類貴金屬美術品商
天賞堂



妙技一等賞牌

東京神田小川町(電話本局二六〇) 天賞堂小川町出張所
橫濱尾上町五丁目(電話八七六) 天賞堂橫濱出張所
大坂心齋橋北詰(電話東七三三) 天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所
熊本市上紺冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所
長崎市鍛冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所
福岡市橋口町樂屋方 臨時 天賞堂福岡出張所
北海道小樽色內町越中屋方 臨時 天賞堂小樽出張所

女子英和講習會規則改正

○本會は從來此塾に設け置かれたる講習會を擴張せる者にして鞏固なる智育と嚴正なる德育をと授け師弟の交誼を厚くし高雅優美なる淑女を養成し他日整然善良なる家政を司らんとする女子に適當なる學科を授くるを以て目的とす

○本會の教科を別ちて本科、別科、專修科とす本科は本會正則の學科を履習せしむるもの別科は正則中の一二科目を修學するもの或は一家の主婦にして勉學の志あるもの丶爲めに設けたるものにして正科時間外に於て教授するものとす專修科は本科卒業生にして高尚なる學科を專修せんとするもの丶爲めに設けられたり

但し專修科は當人の志望に應じて文部省教員檢定試驗等の豫備教授するとあり

○本科は修身、國文、漢文、數學、習字、地理、歷史、家政、女禮式、英語、專修科は英語、國文、漢文、家政等なり但し英語科には米國文學博士某婦人の女禮式等あり

○本會は特に諸公立高等女學校入學志願者の爲め補習科を設け各自志願の學科程度に應じて豫備教授し每年每期入學せしもの少なからず

○本會は當三月十五日を以て各科とも卒業し更に三月一日より會員生徒を募集す望みの人は當時神田區猿樂町三丁目三番地假事務所に申込むべし

神田區猿樂町三丁目三番地

女子英和講習會

近衞公爵題辭
故勝伯爵題辭
東久世伯爵題辭
副島伯爵題字
黑田子爵題詠
高崎男爵題詠
島津久寶氏題詠
寺師宗德氏序文

國光社編纂
松本楓湖氏挿畫

照國公感舊錄

全一册
定價金五十錢
郵税金八錢
郵劵代用一割增

晩近維新史の攻究闡明に力を盡すの人多く隨て此間に於ける偉人傑士の傳記評論續々として梓刻に上るあるも獨り島津齊彬公の詳傳に至ては世未だ好適の著あるなく信憑すべき記なきは識者の常に遺憾となる所なり夫れ王政維新の原動力は薩に在り而して薩の原動力は實に齊彬公其人に在るを知らむ公が詳傳の維新史に欠くべからざるや又言を俟たざる也本書は公が生涯を詳述したるものにして、傳記尊王外交經濟文事民政撫恤の七大綱に分ち巻中の事蹟は一々周密なる調査を遂げ編者が經營慘澹の餘に成りたるものにして事を記する極めて精細筆を遣る極めて謹嚴明窓の下之を繙かむ公が一生の閱歷、歷々として掌を指すが如く又以て維新鴻業の由來を知るに足らん製本亦清麗にして巻中挿む處の楓湖畫伯の圖畫と卷末に付する處の明治諸名家が追懷の和歌は錦上更に花を添ふるもの也

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所 靜思館

副島蒼海老伯講話

精神教育

紙數二百五十頁
洋裝
金六拾錢
郵稅八錢
和製金五拾五錢
郵稅六錢

近時教育倫理の著書世に出つること日に愈多しと雖も**國民**の**特性**を發揮し人心の本然を闡明し**傳神感化**の妙用を説示せるものは實に絶無に屬せり是識者の夙に慨歎せる所たり此の書收むる所**教導**、**感化**、**日本**の**教育**、**日本**の**歴史**より以て老伯獨得の**哲理**に及び簡明平易すべて講話のまゝを記すされど此書は當今**唯一**なる**倫理**教育書なるのみならず亦た**心學**の**明鑑**なり附錄**詩文**は大に世道人心に關し**適清概畧**は、伯が昔日使命を清國に奉して**滿廷**を**懾服**し**英**、**露**、**獨**、**佛**、**米**、**蘭**の公使をして**下風**に**拜**せしめたる快事蹟より**征韓論**、**臺灣征討**等の實話に及び一讀人をして**奮起踊躍**せしむるものあり今や**東邦**の**危機**日に切迫し我が國民の**士氣**は愈孱息に歸せんとす此の時に當りて此の書の出つる豈偶然ならむや

國光社發兌
專賣所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 **靜思館**

男爵高崎正風序
本居豊穎序
故富士谷御杖述

土佐日記燈

菊版大和綴優美全三冊
自一巻至八巻紙數壹千百頁

定價　金壹圓五十錢

郵送料（四種郵便三十錢〇小包十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外廿四錢）

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書おほかるが中に燈といふものの古事記燈萬葉集燈は翁か在世の頃にすり卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたび我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらず、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分

金銀摺彩色表紙大和綴優美

定價金二十五錢
郵税金六錢
郵劵代用一割増

曩に三輪田刀自我邦女子道德の頽敗に赴く日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し六版七版猶需用を充たすに足らず賣盡せり女子敎育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や改正條約實施外人雜居の曉に際し益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切なり、今回同女史の訂正を請ひ茲に新に八版成るを告ぐ冀くは世の婦女達の一讀を望で已まざるなり

目錄

生田目經德編

標註 雅文消息集

菊判 全一冊
美本

定價金廿五錢　郵稅金四錢

郵券代用一割增

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學び日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

從六位內藤耻叟序
故正五位文學博士栗田寬著

天朝正學

菊版
美本
全壹冊

定價金參拾五錢　郵稅金四錢　郵券代用一割增

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て嘗て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇內無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戸の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らしめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

肝付海軍大佐題辭
小笠原海軍大尉序文及作歌
伊東海軍中將手翰
木村海軍大尉校閲
西主一
野本衛佐美 合著

訂正三版

新案 海軍遊戲法

菊版美本
詳圖入 全一册

定價金貳拾錢 郵稅金四錢

(一) 日本は海國なり故に兒童の時より先海軍思想を發成せさる可らす
(二) 兒童ば身体發達の旺盛なる時期なり故に最体育に重きを措かさる可らす
(三) 兒童は興味を添する事甚しきものなり故に機に應して其快楽を正情に導かさる可らす

本書は右三者の目的を達する一助として著者か多年或は兵書に徴し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて裘葛を費し漸編成したるものなり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神乍ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に駕し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かさる刮目企足して俟つべきなり、世の教育家父兄諸士の猛省を促す、

孝明天皇御遺徳

菊版　全一冊
美本

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　定價金貳拾五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尚湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絶倫なるを概説し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社禝を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は禁裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖德を頌し奉る

國光社譯述

獨逸讀本抄譯

定價金貳拾錢
郵税金四錢
郵劵代用一割

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、玉を琢くの好資料となすへき者多からんとて、熱心忠實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任する者なり、豈他山の石たるを期せざらん、寸毫たも國家を裨補せん事、轉輾忘るゝ能はさる所憂勞敢て辭する所にあらず、されは、本書は、獨逸最近の讀本を渉獵し、粹を拔き、精を撰び、勉めて原文の眞議を發揮するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て座右の好參考に供すべく、學生諸君之を得て朝夕の好良友となすべく、彼の國教育の實質を窺知するに於て百千部の教育説心理論に優れること萬々なり、若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年文書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつ、

品川彌二郎
平田東助 合著

信用組合提要

全一冊

●一部定價金五錢
●郵送費金貳錢
●郵券代用一割増

商業家の道徳を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖産興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を收むること甚難し是兩氏が此書を著されたる主旨なり我が社曩に本書を刊行して同志間に頒ちたりしも部數に限ありしを以て悉希望を滿すこと能はざりき爾來我が社に向て之が發行を望まるゝ諸彥日として踵を躡せざるなし今回我が社は大に之が普及を計り同志の希望に應せんために更に刊行するととなせり冀はくは是より四方同志諸彥にまた遺憾なからしむる事を得んか

臨時發刊

國光

二月十一日發行

人心の頽廢風俗の淫靡殆底止する所を知らず邦家の將來洵に痛憂に堪へざるものあり冀くは此の册子をして惰民社會に於ける半夜の警鐘のたらしめむ。

◎世界に於ける日本の地位及其現勢　英露獨佛伊米列國の海外政策を詳論し、その内面に於ける强弱長短の秘密を發露して、東亞の天地、累卵の狀勢に及び、我が日本國の地位現勢燎然として、掌に指すが如く、一讀悚然、蝸牛角上の小紛爭、小利慾心を蟬脫して、猛然省察、邦家のために奮起するに至らしむる大文章なり

◎日本敎育の大本　我が國、今日の敎育は、諸國流行の寄せ集めにして、國家本來の特相に基きたる根本的主義精神の、未確立せざることを切論して、歴史上、地理上、倫理上、國家の天職上より、日本敎育の基礎たるべき要目を列擧し、以て、世の熱誠なる敎育家に質さむことを期せるものなり

◎此の風俗の頽廢を奈何　風俗矯正は、爲政の本源なることを論じ、當今の人心頽廢世風壞亂の原因する所を抉出して、その責の歸する所を痛言し、閣臣、元勳、文武官吏等、在上者の大反省を促し、憂世慨時の識者は此の際大に世道維持に盡瘁せられむことを企望せる苦言なり。

〔劍光〕拜金主義と道德（東久世通禧）矯世危言（渡邊國武）憲政完美の要訣（今井恒郎）師弟の情誼と現行法律（矢島浦太郎）古今敎育主義の難點（黑川邦彥）獨逸海外政策に感あり（宮島申夫）日本の國富と人民の負擔（寺師宗德）農家の有志者に告く（樋田魯一）以上何れも皆沈痛剴切なる濟世の忠言

紀元節發行

國光

臨時發行

（瓊徳）勅語要義（東久世伯）蒼海先生偶話 仁と智ともに金玉の教訓

忠本論（大川涉）八世禍福の岐路（樋田魯一）倫理（尙古庵）機言（函三閣主人）

養心論（川崎重陽）以上、何れも、皆、日本思想の本源に溯り、君子國人の本領を發揮せむことを主旨とせるものなり

（鏡影）徳川齊昭傳 邦人の元氣日に愈銷沈せんとする現今の頽勢を挽回せむため特にこの巨人の遺影を映出す

（硯海）孝明天皇御逸事（記者）朝倉の大宮柱（三橋要也）太古史の研究につきて（庭井尋）琉球語研究資料（田島利三郎）何れも皆國史上の一新光彩

和歌、詩、文、精を抜き粋を蒐め 書簏は珍絶の佳句を以て充たし

八瀨の炭竈（堀内飛泉）日本武士の大節操眞面目を描出せる麗妙の小説

昔時の塾舍と今日の寄宿舍 教育者の最有益なる參考、學生の最趣味ある讀みもの

此の他人傳 名勝誌、佳話 一束

■本誌定價郵稅共一冊金拾錢 臨時發刊に限り金參拾錢（紙數一百五十餘頁）

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社（電話番號新橋八八）

稟　告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本可致候
一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京京橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必御拂込可被下候
一郵便切手を以て代金換用せらるゝ時は一割增に申受候
一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らされば返信不仕候
一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候
一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らされば往々行違を生じ相互の不便免れ難く候
一未納稅の來書は一切受取不申候

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日逓信省認可）